

東山梨教育研究

第 6 3 号

東山梨教育研究編集実行委員会

東 山 梨 教 育 協 議 会

も く じ

◎あ い さ つ	東山梨教育研究編集実行委員会		
	会 長	嶋 崎 修	 3
◎あ い さ つ	東山梨教育協議会		
	会 長	久保田 英樹	 4
◎学 校 研 究			
○小 学 校			 5
○中 学 校			 47
◎教育協議会研究			
○令和4年度 東山梨教育協議会研究の概要			
	研究推進委員長	若 月 敬 二 郎	 61
○教 育 研 究 会			 65
○ブ ロ ッ ク 交 流 研 究 会			 119
○特 別 委 員 会			
・児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会			 126
◎学 校 経 営 研 究			
○小学校経営研究会 組織運営部会			 129
○小学校経営研究会 健全育成部会			 131
○小学校経営研究会 国際理解教育部会			 133
○中学校経営研究会			 135
◎学 校 運 営 研 究			
○山梨市学校運営			 137
○甲州市学校運営			 139
○全国教頭研究大会			 141
○関東甲信越地区教頭研究大会			 142
◎報 告			
○内地留学研修報告			 143
◎あ と が き			 144

以下 特別委員会報告

あいさつ

東山梨教育協議会会長 久保田 英樹

東山梨教育協議会の研究の成果を収めた「東山梨教育研究」第63号がここに発刊の運びとなりました。長かった新型コロナウイルスの猛威が過ぎ去り、以前のように活気ある研究活動が戻ってきたことに喜びを禁じ得ません。まずは、第63号の発刊に当たり、理論研究や実践研究を意欲的に積み上げてこられた全ての教協会員の皆様方と、研究収録の企画、執筆、編集にご尽力いただいた各担当の先生方、及び、峡東教育事務所の皆様方に心より感謝申し上げます。

今年度は、東山梨教育協議会が設立されてから60年の節目の年を迎えました。今から60年前の昭和39年。太平洋戦争後の混乱期から、高度経済成長を遂げつつある激動期の中で、東山梨教育協議会は産声を上げました。当時発刊された東山梨教育研究をひもとくと、草創期の東山梨教育協議会について、当時の先達がどのような願いと意を持って活動を形作っていったかが垣間見えます。

設立前後の様子については、以下のように記されています。「校長も教頭も一般教師も、『がっちり手を握って東山梨の教育を考えなければ。』そんな気持ちが多くの人たちの中に動き始め、これがこの会を発足する大きな動機となり、東山梨教育協議会は設立を迎えた。」と述べられています。また、研究活動については、「授業を通して勝負するという厳しい態度が確認された。子どもの可能性を引き出し、自主性豊かな人格形成を目標に、一時間一時間の授業を大切に、単に知識の切り売りでなく、教師と児童生徒の魂の触れ合う場において、真の人間性を尊重する教育がなされるべきである。」と記されています。

東山梨教育協議会設立当時の先達の願いと思いは、60年を経過した現在も、東山梨教育協議会を支えている教職員の、子どもたちへ寄せる「切なる願い」として、また、教育に対する「熱き思い」として、色あせることなく息づいていることを改めて感じます。

さて、現在の教育界の流れは、2020年代を通じて実現すべき学校教育を「令和の日本型学校教育」として、「すべての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」として描かれ、ICTの活用も含めた具体的な変革も進んでいるところです。このような中で、学校現場の先生方が果たす役割はますます重要で難しいものになってきています。与えられたことをそのまま受け入れるのではなく、自己研鑽を重ね、しっかりとした教師力を身に付けていくことなしには、課題の解決はありえないであろうと考えます。

今後も保護者・地域・行政・関係機関との連携を深めながら、研究活動を継続、充実させていくことにより、東山梨教育協議会に流れる「切なる願い」と「熱い思い」を具現化し、困難な教育課題を解決していくことが求められています。発足当初の東山梨教育研究に記された「文化は東より、教育は東山梨から」という言葉の志をもって、今後も教育研究活動に、会員一人ひとりが臨んでいただけることを期待しています。

結びに、本年度も東山梨教育協議会の様々な研究活動に対し、ご指導・ご支援をいただいた多くの関係者の皆様に衷心より感謝申し上げ、あいさつといたします。

「東山梨教育研究第63号」の発刊によせて

山梨市教育委員会 教育長 嶋崎 修

今年度の峡東三市（山梨・甲州・笛吹）教育委員会臨地研修の事務局に山梨市教委が当たり、視察先を選ぶ過程で、「文部科学省」の名が挙がりました。「確かに、教育行政の本丸というか、一般企業では本社ともいえる場所だから、視察する価値はあるかも！」「テレビのニュースで、レンガ造りの建物がよく映るけど、その印象しかないよね」というような話も出て、視察地は意外とあっさり「文部科学省（と根津美術館）」に決定しました。

しかも、研修日の直前に文部科学省の官僚が高校教師として学校に赴任するドラマ「御上先生」が始まったばかりだったので、「いいタイミングだね！」「アニメファンの“聖地巡礼”ではありませんよ！」などの笑い声に包まれ、バスは中央道を東に進みました。

「飛び出せ青春」「中学生日記」「熱中時代」「3年B組金八先生」「教師びんびん物語」「ごくせん」…etc 私たちの世代の教員は、いわゆる「学園ドラマ」とともに小・中・高を過ごし、やがて教職に就き、管理職になるなど、ドラマと並走した人生を歩んできた感があります。その時々で触発され、励まされ、また時にはドラマと現実のギャップに悩まされることや、教師としての自分の力不足に落ち込むこともありました。しかし、多くの仲間が、「ああいう教師になりたい！」「教職は魅力もやりがいもある素晴らしい仕事だ！」という強い信念と誇りをもって、教職の道に飛び込みました。

しかし、新たに始まったドラマ「御上先生」では、こんな言葉（セリフ）がありました。

「とある有名な学園ドラマ（おそらく「3年B組金八先生」？）の新シリーズが始まる度に、日本中の学校が荒れて学級崩壊を起こすという事実を知っていますか？」「（あのドラマの影響で）生徒のために奔走するスーパー熱血教師以外は教師にあらずという空気を作ってしまった。保護者たちの教師への要求はエスカレート。教育の理想を描いた学園ドラマが、驚くなかれ、モンスターペアレンツ製造マシーンになるんです。」

驚きとショックとともに、言われてみれば…という感もあり。更に、ドラマの中では、御上先生が、「僕もこのドラマの先生にあこがれていました。」と言いつつも、「以来40年以上、よい教師像はそのテレビドラマに支配され続けています。」

今年の干支は「巳年」ということで、蛇が脱皮を繰り返して成長し、変化していくことになぞらえて「変化と成長の一年」とも言われています。人間は脱皮しないものの、昔から「一皮むける」「一回り大きくなる」「殻を破る」というような言葉は、変容や成長を意味しています。

あの頃にはなかった「アフターコロナ」「DX」、更には「働き方改革」や「部活の地域移行（展開）」等が話題となり、学校が「ブラック企業」と言われる今、改めて「教育の本質」そして「不易と流行」について考えてみてはいかがでしょうか。

学 校 研 究

小 学 校

加納岩小		5	神金小		29
日下部小		7	玉宮小		31
後屋敷小		9	松里小		33
日川小		11	井尻小		35
山梨小		13	勝沼小		37
八幡小		15	祝 小		39
岩手小		17	東雲小		41
笛川小		19	菱山小		43
塩山南小		21	大和小		45
塩山北小		23			
奥野田小		25			
大藤小		27			

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実におけた授業づくり

—自ら課題を見つけ、自ら解決しようとする児童の育成—

I 研究内容

1 研究目標

探求プロセスを活用した授業改善と、個別最適な学び・協働的な学びを支える環境づくりを通して、自ら考え自ら課題を解決しようとする児童を育成する。

2 研究方法及びその実際

①問題解決能力を高める探求プロセスを活用して授業改善を図る。

- ・「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ」→「発表」(高橋 2021)を意識した学習過程を設定する。
- ・一人一台端末とクラウド環境を活用し、児童に本時の学習活動の見通しを持たせる。
- ・「個の取り組み」「他者参照」「話し合い」など、それぞれの学び方を児童が選択できる「複線型」の場面をつくる。
- ・授業の終末で、本時の振り返りを個々で行わせる。

②個別最適な学び・協働的な学びを支える環境づくり

- ・学級力向上プロジェクトの実施、「きずなの日」の充実した活動により、親和的な学級集団づくりを目指す。
- ・協働的な学びを実現するため、ファシリテーターとしての教師の役割や発問や問い返しを意識した授業を行う。
- ・学びの個別化・個性化を支えるため AI ドリルを導入する。
- ・家庭学習の取り組み状況を教師が把握し、授業に活かす。
- ・今年度から始まった「かのスタ」のよりよい実施方法を探る。

③全体会・分科会（授業づくり部会・環境整備部会）で研究を進める。

II まとめ

研究目標「探求プロセスを活用した授業改善と、個別最適な学び・協働的な学びを支える環境づくりを通して、自ら考え自ら課題を解決しようとする児童を育成する」について、今年度のアンケート結果（図1，図2）をふまえると、特に、個別最適な学び・協働的な学びを支える環境づくりは、汎用的クラウドツール等の活用により果たされ、結果として児童が主体的に学習に向かうようになったことが明らかになった。一方で、探求プロセスを活用した授業については、まだ課題や難しさを感じていることも分かった。今年度

は、事例研究に時間を十分に当てられなかったこともその理由として挙げられる。ただ、様々な研修を通して、複線型の授業や探求サイクルに沿った授業を体験することができ、有意義だったといえる。探求プロセスを活用するとは、学びをより児童に委ねるということ、つまり「子どもを主語にした授業を行う」ということである。そのためには、子どもたちが安心して学べる環境、親和的な学級風土は欠かすことができない。本校では、学級力向上プロジェクトを学級づくりの中心に据え、子どもたち自身の手でよりよいクラスをつくるために話し合う場を設けてきた。学校行事やクラスの状況と関連づけながら、定期的に学級力向上プロジェクトを実施し、自分たちの手でよりよい学級・学年をつくるという意識を児童に持たせていきたい。

今年度取り組みが始まった「かのスタ」の内容について職員全体で共有したり、話し合ったりすることができなかったことを反省として挙げたい。来年度は、かのスタの充実に向けて、校内研でも取り組み内容を検討していく時間を設けていきたい。

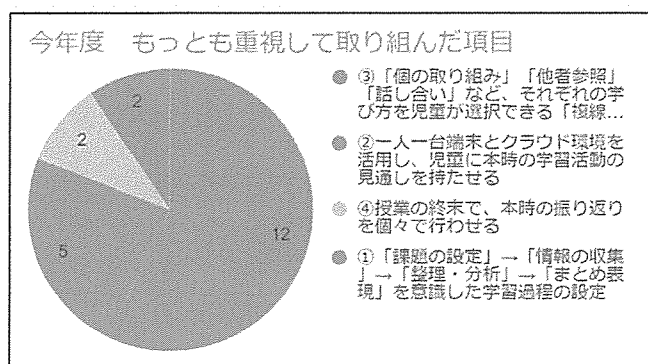


図 1 今年度最も重視して取り組んだ項目

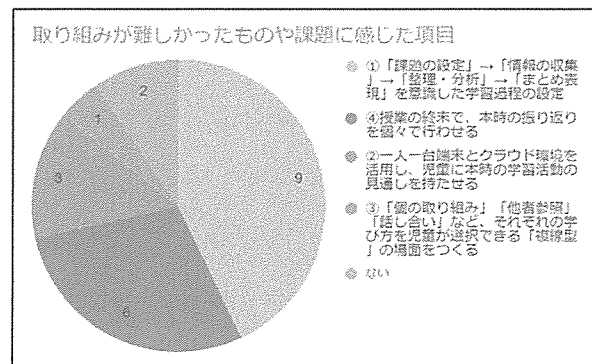


図 2 取り組みが難しかったものや課題に感じた項目

Ⅲ 成果物

本校では、今年度の研究の成果を HP に公開している。以下に示しているような授業での取り組みの様子をはじめ、校務 DX についても紹介している。

単元	振り返りのシート	振り返りのシート	振り返りのシート
1	単元を通しての振り返りをスプシにまとめていく。簡単な評価をプルダウンで、細かい振り返りや授業内における成果は文章で振り返り、蓄積していく。		
2	毎回のめあても一緒に書いておくことで、めあてに対する振り返りを意識させる。		
3			
4			
5			
6			

単元を通しての振り返りをスプシにまとめていく。簡単な評価をプルダウンで、細かい振り返りや授業内における成果は文章で振り返り、蓄積していく。

毎回のめあても一緒に書いておくことで、めあてに対する振り返りを意識させる。

ルール募集中 ▾ ルールのかくにん ▾ お助けシート ▾

振り返りのスプシの中に、それ以外のシートを用意し、全員でルールを決めていくための募集シートや、ルールの再確認シート、技のコツなど参考動画のリンクシートなど、一つのファイルに集約しておく。



(研究主任 藤木真里佳 ・ 研究副主任 五十嵐祐太)

研究主題

学び続ける児童の育成 ～主体的・対話的に学ぶ授業を目指して～

I 研究の内容

1 研究の方法

今年度は授業改善を中心とした研究を進め、「学び続ける児童の育成」するための手立てについて考えていく。まず、各ブロックで学び続ける児童の姿を具体的に考えたうえで、それぞれのブロックの課題を明らかにしていく。その課題を踏まえたうえで、主体的・対話的に学ぶ授業となるように、どのような場面でどのような手立てを行うことで児童が学び続ける児童になっていくか考える。実際に考えた手立てについて実践をすることで有効な手立てを見つけたり、改善の必要があることを確認したりする。日常的に、児童が主体的・対話的に学ぶような授業を続けることで、学び続ける児童の育成につながると考えた。

具体的な研究の取組みとして以下のことを行う

- (1) 学び続ける児童の育成に向けた授業づくり
- (2) 今日の課題に向き合う機会
- (3) スタートカリキュラム検討会

2 実践内容

(1) 学び続ける児童の育成に向けた授業づくり

・低、中、高の3部会に分かれて、学び続ける子どもの育成に向けた実践や教材研究などを行う。

○低学年ブロック研究テーマ「感じ、考え、試し続ける授業づくり」

学び続ける児童の姿 感じ、考え、試し続け、学びを生かす子ども

研究実践 ・1年生 生活科「きせつとなかよし ～あき～」

・2年生 算数科「かけ算(2) 九九をつくろう」

○中学年ブロック研究テーマ「子どもの興味をかきたてる 楽しい授業づくり」

学び続ける児童の姿 学習した内容を、自分の生活と結びつけることができる子ども

授業の内容に留まらず、興味関心をもった内容に

自主的に取り組むことができる子ども

研究実践 ・3年生 国語科「すがたをかえる大豆」

・4年生 算数科「変わり方に注目して調べよう」

○高学年ブロック研究テーマ「学びのサイクルを生かした授業づくり」

学び続ける児童の姿 自ら学びのサイクルを実行する子ども

研究実践 ・5, 6年生 国語科, 算数科, 社会科, 英語科, 音楽科, 学活など

(2) 今日の課題に向き合う機会

学習会1「主体的・対話的に学ぶ授業を目指すための教師の役割について」

講師 山梨県総合教育センター 渡邊 信也 副主査・指導主事

学習会2「図画工作科の授業改善学習会」

講 師 山梨市立日下部小学校 三枝 清美 教諭

学習会3「理科の授業改善学習会」

講 師 山梨市立日下部小学校 非常勤講師 板山 圭介 教諭

(3) スタートカリキュラム検討会

- ・令和6年度のスタートカリキュラムの実施状況の報告を行い、成果と課題を明らかにする。令和7年度スタートカリキュラム作成にむけて全職員で検討する。

Ⅱ 成果と課題

1 成果

- 低学年では、ペアやグループでの話し合い活動を取り入れた。自分の考えをまとめようという意識も見られ、主体的な活動へとつながった。また、友達とのやり取りの中で、感じ考え確認することができており、他者との関わりが学び続ける児童の育成に必要なと感じた。中学年では、できるだけ実物に触れる機会を多く設けることで五感が刺激され、学習に対する意欲を高めることが分かった。高学年では、「つかむ・見通す・取りくむ・つなげる・広げる」の学びのサイクルを1時間の中で活用したり、単元を通して活用したり、教科や単元によって変更した。このサイクルを使うことで、見通しが持てることが児童にも教師にも有効であった。
- 学び続けるとはどういうことか、ブロックごとに共通理解をもったうえで、研究に取り組むことができた。各ブロックで実践して検証するという形をとったことが、一人一人の研究の意識を高めることができた。各学年やブロックの発達段階に応じた授業づくりを考えることができ有効だった。
- 学習会では、実際に活動をしたり、授業で使える知識を学ぶことができたり、とても有意義な時間になった。他教科の指導法は、なかなか体験できないもので、教材教具づくりや授業の流し方など、受講することで新しい視点を得られ学びが多かった。
- スタートカリキュラムの中で、クラスの枠を超えて様々なグループ形態で遊んだり歌ったりと活動したことにより、新しい友達とふれあうことのできる機会が多くとれた。様々な形態を多用することにより、児童は安心できる環境の中で学校生活にスムーズに慣れていくことができた。

2 課題

- 学ぶ意欲のある児童を「学び続ける児童」へ、という手立ては考えられても、そもそも学ぶ意欲がない児童への手立てが難しいと感じた。
- 学習会は、実際に役立つ実践やコツなどを学ぶことができるので、技能教科を中心に今後も様々な教科で実施できるとよい。
- 本年度仮クラスを編成し、その後本クラスを編成した。児童の特性や人間関係などの様子のある程度把握したうえで本クラスの編成を行うことによりその後の円滑な学級経営にはつながったが、新しい環境に慣れにくい児童もあり、本クラス編成後に登校をしづる児童も見られた。また、本クラスが決まるまで、公務支援関係の入力ができず、様々な面で大変だった。

(研究主任 岩下 亜希子)

主体的に学ぶ子の育成
～学びを支える学級づくり，授業づくり～

I 主題設定の理由

今年度の研究内容を探る中で、現在の本校の実態に合わせた、研究テーマを話し合った。学習の基盤となる「学級づくり」の研究を行いたいという意見がほとんどであった。本校の児童・保護者は、年々考え方が多様化していると痛感している。その多様化した考えを持った児童をまとめ、学習を進める事への困難さを感じる教員が多い。授業を行う上で「学級づくり」はきわめて重要な要件となる。良い授業が行われる場合は、その前提として良い学級づくりが必要と言える。教員の経験年数、児童の実態がそれぞれ違う中ではあるが、「学級づくり」というテーマで研究をしたいという思いは、共通していた。

また、山梨県学校教育指導指針において、学級経営の充実が示されている。具体的には、「教師と児童との信頼関係及び児童生徒相互のよりよい人間関係を育てる土台となる学級・学年等の集団づくりに取り組む。」「児童生徒が所属感、自己肯定感、自己有用感を持つことができるよう、集団・個人として課題解決に向けた目標や方法・内容等をまとめたり、決定したりする活動を行い、一人ひとりのよさや可能性を生かすよう取り組む。」とある。

「主体的・対話的で深い学び」という高度な学びを実現するためには、子どもたちの主体的で自治的な取り組みが不可欠である。本校の実態に合わせ、まずは、学級づくりを研究し、学級経営が充実することが、主体的に学ぶ児童の育成へとつながると考え、主題・副題を設定した。

II 研究内容

- 1 一人一人がテーマを決め自主研修を行う
- 2 WEBQU を学級づくりに生かす
- 3 ICT 端末の活用を促進する
- 4 特別支援教育に関する学習会
- 5 全国学力調査の結果分析
- 6 教育課程説明会の環流報告

III 研究の具体的な取り組み

- 1 一人一人がテーマを決め自主研修を行う
 - ・各人のテーマに合わせて、研修を受けたり、書籍から学んだりした
 - ・各人の研修の報告・交流を行った
- 2 WEBQU を学級づくりに生かす
 - ・WEBQU を2回実施した。

- ・都留文科大学の品田笑子先生を講師に、WEBQU の活用について講義をうけた。
- ・講義の中で各クラスについて指導のアドバイスを受け、それぞれの学級づくりに生かした。

3 ICT 端末の活用を促進する

- ・ICT 端末の活用実践について一人一人が発表し、互いに学び合った。

4 特別支援教育に関する学習会

- ・校内の特別支援コーディネーターが中心となり、支援を必要な児童への対応についての学習会を行った。

4 全国学力調査の結果分析

- ・今年度正解が低かった問題を分析し、どのような内容を定着させる必要があるのかを確認した。

5 教育課程説明会の環流報告

- ・環流報告により、全職員で共通理解を計った。

IV 成果と課題

1 成果

- 学級の実態も、教員の興味関心もそれぞれ違う。今年度のように一人一人がテーマをもって研究を行う方法は、研究に対する意欲を高めることができたのではないと思う。テーマにあった研修を自主的に受けた教員が多かった。
- WEBQUの学習会では、基本的なシートの見方を学んだ。シートから見える学級の実態や、気になる児童への具体的なアプローチの仕方を学べた。2学期の学級づくりに活かすことができた。
- 特別支援教育について学習会があったことで、個別対応が必要な児童に対して、配慮すべきことが理解できた。
- それぞれの校務がある中、毎週水曜日を基本の研修日としたが、その時間に限定するのではなく、柔軟にそれぞれの研修に臨む時間をつくれた。内容も、実態に合わせて進めることができた。研修内容を、すぐに実践に活かせることが多かった。

2 課題

- 全体での学習会や交流の回数が少なかった。そのため、個々の研究は進んだが、全体での研究が深まらなかった。自己研修の報告を行う回数や時間を増やすことで、個々の研究実践と、学校全体で取り組んでいることの方向性がそろい、校内研としてさらに深まっていけるのではないかな。

(研究主任 三澤 美穂)

「自主的・協働的に学び，豊かに表現する児童の育成」 ～ I C T を活用した学びを深める授業づくりを通して～

I 研究の内容

1 理論研究

- (1) 本校の課題，今年度の研究について
- (2) これからの授業づくりについて
- (3) ファシリテーターについて
- (4) D X 化について
- (5) 協働的な学びに不可欠な4つのサポートについて
- (6) 思考スキルについて

2 授業研究

第1学年 行田 玲子教諭
国語カタカナを見つけた，図工や生活科作品（写真），家庭学習（eライブラリ）等
第2学年 廣瀬 哲也教諭
生活科野菜づくり発表（動画撮影），授業の流れ（大型モニター提示），NHK（視聴）等
第3学年 吉澤 成南教諭
国語本紹介（Canva）を活用した（スライド），算数（デジタル教科書）等
第4学年 鈴木 陸人教諭
国語慣用句調べ，道徳（学びポケット），学活お礼状づくり（Canva）等
第5学年 窪田真由美教諭
社会「日本の工業生産」（スプレッドシート），図工作品票（学びポケット）等
第6学年 望月 泰祐教諭
算数「円の面積」，社会科「江戸時代」複線型（Canva），（学びポケット）等
はぐくみ 三枝 剛 教諭
3年国語「三年とおげ」（パワーポイント），3，5，6年算数（学びポケット）等
かがやき 望月 清美教諭
2年国語「おもちゃ作り方」（Canva），4，5年国語（指導用デジタル教科書）等
音楽 高野恵美子教諭
2年音楽「おまつりの音楽」「がっきでおはなし」（学びポケット）等

3 学びを支える学級集団づくり

- (1) 学級力向上プロジェクトへの取り組み（フォームで回答，スプレッドシートで集計，グラフ掲示）
- (2) W E B Q U（3，4，5，6年生）の実施と分析，職員共有
- (3) 授業と家庭学習の有機的な結びつけ，学習意欲の喚起

4 今日的教育課題関連の学習会

- (1) D X 研究推進協力校（山梨市教育委員会）として多数
- (2) 「支援を要する児童への対応について」講師：三枝 剛教諭

Ⅱ 成果と課題

Ⅰ 成果

- I C Tの使用が目的にならず、学びを深めるための手段として活用することができていた。共同編集機能を活用することで、他者参照・他者理解に繋がった。
- 児童は実践を積むことで I C Tの使い方やアプリの使用に慣れてきた。
- 児童及び教師の視点をもち、本校独自の方法で情報を共有したり端末操作（アプリ等含め）のスキルアップ、学習者主体、複線型の授業を実践したり、研修の機会にスキルアップにつなげていたので、D Xの推進が図れた。
- 学習者主体の授業、課題解決・探究型の授業等、複線型の授業へと授業観の転換となった。
- 授業改善のツールの一つとして I C Tの利活用があり、授業力の向上に南中ブロックでの研修会、協力校としての参加、県下における研修会にオンラインや参集で参加することで、自分が実践していく上で参考となった。試行錯誤しながら教材研究をすることができた。
- 研究テーマである「主体的・協働的に学び、豊かに表現する児童の育成」を念頭に置き、特に協働的な作業がスムーズにできるよう実践を積むことができた。

Ⅱ 課題

- ▲ 複線型の授業展開の中で、I C Tと紙媒体の使い分けが難しく、それに伴う職員の準備が大変だったので、使い分けについて研究をしたい。
- ▲ 授業の中で他者参照の場面を多く取り入れ設定したが、時間が取れないことがあったので、授業計画等を工夫したい。
- ▲ 各学年 I C T系統表に沿った学習を進めていることが前提になるので、もっと日常的に使用していきたい。
- ▲ I C Tの利活用の進み方が早く、研修しても自分の理解が追いつかないので、研修の機会や参考資料を何度も視聴しながら自分自身の技術力を高めたい。どの場面で I C Tが有効なのかを見極めて活用していきたい。
- ▲ I C Tを使って授業を進めていくのに、準備時間がかかってしまうので、自分の技術力を高めたい。
- ▲ 特別に配慮・支援が必要な児童には、実態に沿った個別の I C T教材や工夫が必要なので、さらに研修を重ねていきたい。

Ⅲ 成果物

- Ⅰ 授業実践レポート 9 点
- Ⅱ 学級力向上アンケート結果（各学年 2 ～ 3 回実施）
- Ⅲ W E B Q Uの結果（3 年生以上）
- Ⅳ 校内研資料（クラウド化）
- Ⅴ 家庭学習の実態把握（スプレッドシート）
- Ⅵ 連絡事項の I C T利用（学びポケット）
- Ⅶ 児童の活動時間の確保のため（プラットフォーム作成）
- Ⅷ H P（ホームページ）学校行事写真，学年だより等 D X 化

（研究主任 廣瀬哲也）

自ら課題を見つけ、自ら解決し、学び合う児童の育成

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた学習実践を通して～

I 研究の内容

1 研究目標

これまでの研究や実践、学習の基盤となる学習環境づくりを重んじつつも、現実的で持続可能な実践やクラウドを活用した具体的な実践を参考にし、教師が「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた学習実践を通して、「自ら課題を見つけ、自ら解決し、学び合う」児童の育成を目指す。

2 研究活動

(1) 授業づくりの研究・・・学習者主体の授業の実現

ア 教師の学習観、支援や環境、学習過程、情報活用能力について

- ・学習会(講師を招聘等)・・・山梨大学 三井一希 先生
- ・文部科学省 LDX スクール事業 協力校

イ 課題解決に向けた取り組み

- ・先行事例の実践
- ・一人一実践授業

第1学年	算数科	「どんなけいさんになるのかな？」	岡村	理恵教諭
第1学年	音楽科	「せんりつで よびかけあおう」	西川	朱里教諭
第2学年	国語科	「みきのたからもの」	山下	陽子教諭
第3学年	算数科	「重さを数で表そう」	高野	裕平教諭
第4学年	国語科	「未来につなぐ工芸品」	雨宮	菜月教諭
第5学年	算数科	「面積の求め方を考えよう」	中山	貴彰教諭
第6学年	算数科	「およその面積の求め方を考えよう」	佐野	理恵教諭
第6学年	理科	「電気と私たちの暮らし」	向山	潤 教諭
なかよし①	算数科	「分数をくわしく調べよう」	金子	佐由美教諭
なかよし②	国語科	「季節の言葉 冬のおとずれ」	梶原	裕子教諭

- ・仮説検証型から自己研修向上型へ(スキルアップ研修)

Figjam や Canva を活用しての課題解決の実践

低学年高学年のブロックに分かれての課題解決の実践

(2) 学級力向上プロジェクト

- ア 学級力アンケートの実施、スマイルアクションの実施
- イ 教師間での実践共有

(3) 積み上げてきた研究・学習環境づくりの継続

- ア 学習のきまり

イ 話型指導

ウ 家庭学習と連動した授業の工夫・・・学習者主体の学習に向けて

- ・ AIドリルの活用に向けて、講師を招聘しての実践
- ・ 「自学ノート」、「クラウドを活用した家庭学習記録」の共有

Ⅱ 成果と課題

成果としては、各自が研究主題を意識しながら授業づくりを行うことができた。山梨市学力向上・ICT利活用推進委員会からも提案のある「授業づくりの具体」を実践し、児童に本時の学習活動の見通しを持たせるようにした。また常に一斉の「単線型」ではなく、「個の取り組み」「他者参照」「話し合い」などの学び方を、児童が選択できる「複線型」の場面設定の実践も行った。授業の終末で、「振り返りシート」等を活用し、本時の振り返りを行うことで学習者主体となる学びの場面を実践した。一人一実践ではそれらのことを取り入れながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた学習実践を共有することができ、昨今の教育課題に迫った研究が行えた。

研究方法については、これまでの仮説検証型の研究方法から自己研修向上型の研究方法（スキルアップ研修）への転換として、校内研では実践や課題共有を中心に研究を進めた。また、授業の中での課題について、各自で様々なツールを活用し、探求する時間を設定した。そこで得た学びや新たな課題を教師間で共有することで、より深い学びを目指した。教師自身が「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実感することにはつながった。

課題としては、主題である「自ら課題を見つけ、自ら解決し、学び合う児童の育成」についてはいまだ課題があると確認された。自主学習の取り組みについてもAIドリル等の活用を推進してきたが、より児童が自分で学習を進めるためには、クラウドの活用の仕方についても考える必要がある。また、児童の実態が多様化する現在、いかに一人も取り残さず、自走できる学習者の育成のためにはどういった手立てが有効かの具体に迫りたいとの意見もあった。今回、先進校の実践や近隣校の実践など、やはり実際に授業を参観し、直に学ぶことが多くあったので、引き続き「自ら課題を見つけ、自ら解決し、学び合う児童の育成」のためには、どういった授業や場面設定が有効であるかを実際に探求できる機会を設定する必要がある。

スキルアップ研修の実施については、課題がそれぞれであるがゆえに話題が多岐に渡ることから、話に広がりがあったが、より深い課題解決には至らない部分があった。また、自己研鑽において、やはり多くの授業実践を実際に参観する必要性についても指摘があった。今後は自己研鑽の機会と、授業を参観する機会をバランスよく設定する必要がある。

Ⅳ 成果物

- 1 一人一実践授業 指導案
- 2 「学級力向上プロジェクト」に関する資料
- 3 「振り返りシート」「道徳学習シート」（スプレッドシート）

（研究主任 雨宮 菜月）

八幡小学校

「生きる力を支える確かな学力の育成」

～ICT 端末の有効活用を含めた、主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくり～

I 研究の内容

1 授業づくり

(1) 「やまなしスタンダード」の中の5つの視点に基づいた授業改善

- ② 話し合い、討論、発表などの言語活動を効果的に取り入れている。
- ③ 児童生徒は、他の人の話や発表に耳を傾けている。
- ④ 児童生徒は、ノートをとっている。
- ⑤ 活用・探究など、学んだことを別の場所で使うようにしている。
- ⑦ 家庭学習(宿題や課題)と授業が、有機的に結びついている。

《特別支援教育版》

- ② 障害の状態に応じて自ら考え、判断し、表現する活動を具体的に取り入れている。
- ③ 自主的・自発的な学習を促す教材・教具等を用意している。
- ④ 達成感や自己肯定感が高められる指導を工夫している。
- ⑤ 学んだことが活用できる場を設定している。
- ⑥ 学んだことと実際の生活との関係を示し、学ぶ意欲を育てている。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現

一人一実践授業を実施(11月～1月)

- ・ ICTを効果的に活用した授業づくりを行う。
- ・ 発問や問い返しを工夫する。
- ・ 板書やノート等と、ICT端末の作業バランスを考える。
- ・ お互いに授業を参観し合い、意見交換をする。

第1学年 生活科 「かぞくにここに大きくせん」

第2学年 国語科 「冬がいっぱい」

第3学年 算数科 「分数を使った表し方を調べよう」

第5学年 社会科 「日本の工業生産と貿易運輸」

第6学年 算数科 「並べ方と組み合わせ方」

2 学級づくり

(1) 学級力向上プロジェクト

学級力向上プロジェクト 全学年実施

学級力向上プロジェクト学習会(講師: 高野 栄子 教諭)

(2) Q-Uの分析や学級経営の生かし方など、情報交換会の実施

Q-Uの結果を基に、各学年「Q-U学級支援シート」を作成し、学級集団のタイプ・個別支援が必要な児童の様子・今後の取り組み方針などを確認した。

3 教育環境づくり

(1) アウトメディアの取り組み

- ・ 2学期に全校で実施
- ・ メディアが身体に及ぼす影響を、養護教諭が作成した動画を視聴して、確認した。

(2) 読書推進活動の取り組み

- ・児童・教職員のおすすめの本の紹介
- ・図書委員による読み聞かせ
- ・読書ボランティアによる読み聞かせ
- ・ペア読書（高学年が低学年に読み聞かせ）
- ・家読（親子読書）
- ・読書ガチャ

(3) 家庭学習の充実

- ・日課の中に、家庭学習スタンバイの時間を設定し、各学年の発達段階に応じて家庭学習の習慣化を図った。
- ・家庭学習の主旨について理解を深めてもらえるように、おたよりや学級懇談会を通じて保護者に説明をしたり、子どものノートを学年だよりに掲載したりして家庭との連携を強化した。

4 ICT モラル学習会（講師：株式会社ジインズ様）

5 個別研究の様子（教育活動全般）

マンダラートを使って、個々で研究・研修を進めた。

II 成果と課題

- 児童の一人一台端末を含めた ICT 端末の利活用は、今のところ必須の事項となっている。いかに有効な場面でどのように使うかだけではなく、しっかりとした教材研究や準備があつてこそ、ICTの利活用が生きてくることを今年度の実践からも実感した。
- 家庭学習をホームページにアップロードしたことで、児童はやる気が高まり、他者のノートを参考に学習するなどの効果が見られた。保護者には、児童の努力が見え、褒めることにつながるなどの効果が見られた。
- アウトメディアの取り組みは、今後も教育界の重要な視点になっていくと考える。本校にとって重要な研究であり、今後も継続したい。
- 学級力向上プロジェクトの基本的な考え方や、具体的な取組などを学び合い、全校で取り組めることができた。今後も情報を共有しながら学習会を継続していきたい。
- 個人研究の手法として、マンダラートを利用したが、授業づくりやICT、学級集団づくり、教育環境づくりなど、それぞれの分野において、各自が目標を明確化し「今の自分」を振り返り、次の目標を再設定するPDCAサイクルを形成する一助となったと思う。さらに、それぞれのマンダラートについて、組織的に検討することができるシステムを構築したことも成果と言える。
- 全国学力・学習状況調査の結果の分析を行い、明らかになった本校の課題に対してどのように取り組むかを職員全体で話し合い、共通認識をもって授業改善に取り組むことができた。
- △自分のスマホや一人一台端末の使い方など、道德の授業だけではなく、講演会として児童に説明や解説があつた方がよい。
- △家庭学習についてレベルの高いことではあるが、子どもたちがやらされる感覚ではなく、主体的・自主的にやるような意識をもてるようになるとよい。

III 成果物

- 1 一人一実践の授業実践報告書
- 2 アウトメディアに関する動画
- 3 マンダラートの取り組みと成果・課題 など

（研究主任 向山 有紀）

I 研究の内容

1 研究主題

学校課題を解決し、『主体的・対話的で深い学び』をめざした授業改善の実践

2 主題設定の理由

前年度まで、校内研究の主題として『自ら考えをもち、幅を広げ、深めるための指導の工夫～「学び」にICT機器の活用を取り入れた授業づくりをとおして～』を設定し、研究を積み重ねてきた。これまでの研究から、主体的に学ぶための論理的思考の有用性を改めて実感するとともに、コミュニケーションをはじめとした互いの関わり合いの必要性も感じられていた。そのため、主体的な学びや自他の考えを比較して考えを広げる対話的な学び、学んだことを問題解決に生かす深い学びを展開していくための一つのツールとしてICT機器の活用を取り入れてきた。そして、「言語能力」と「情報活用能力」のさらなる育成をしていくことに焦点をあててきた。そこで今年度も、過去3年間の研究をふまえ、児童がより論理的に思考し、互いの考えを交流させながら創造的に問題解決していくことができるよう、1人1台端末などのICT環境をより効果的に取り入れた授業づくりを中心に研究を進めていきたい。また、児童一人一人の可能性を最大限に引き出せるよう、学校課題を解決する方策を考え、実践しながら、ICT環境を活用した個別最適な学びと、協働的な学びの充実を図り、子どもが主体となる授業づくりを通して、児童が多様な他者と協働したり、自ら自己調整したりして学習を進めていく姿を目指すことで、主体的・対話的で深い学びを充実させていきたいと考え、本研究主題を設定した。

3 研究の内容と方法

児童の実態をふまえ、自己研究をし、日々の実践を積み重ね、授業改善をする。

校内における共通財産として研修の場を設ける。

(1) WGによる取組

- ①家庭学習WG…自学発表会の企画・運営 岩手っ子チャレンジカードの取組 等
- ②キャリア教育WG…岩手っ子成果発表会の企画・運営 等
- ③読書活動WG…ビブリオチャレンジの企画・運営 読書活動の充実 等
- ④授業改善WG

(2) 一人一実践による授業改善

(3) 講師を招聘しての学習会

- ・e ライブラリオンライン研修 AIドリルの活用法について
- ・ICT 端末の基礎的な操作などの体験型研修
- ・市教委主催の Canva, Figjam, Google サイトオンライン研修

(4) OJTの取組 日常的に教員間の相談・共有から、教員としての資質・能力を高めるOJTに発展させる。

II 成果と課題

OWG ごと、本校の課題解決に向け効果的で充実した取り組み行うことができた。

○学校全体が ICT の活用に積極的になり、学習のいろいろな場面で ICT 端末を使い、まとめたり発表したりするなど、子ども達のスキルも向上している。また、ICT を活用した様々な教材を作成することができた。

○高学年を中心に、教科や単元によって、児童が選択できる「複線型」の場面をつくる授業を実施することができた。

●WG の取り組みについて、具体的なゴールが示されていなかったため、同じ目標に向かって取り組むという感じではなく、学年によって取り組み方が違うという感じが歪めない。模範的な発表の仕方や一般的に認知されているやり方を職員全体で共通認識を図るなどして、同じ足並みで活動を進めていければよかった。

●学習者主体（児童が一番忙しい）の授業づくり、学習形態には課題がある。市の DX 事業の取り組み等を参考にして、授業改善をしていく必要がある。

●1人一台端末とクラウド環境を活用した授業を実践できるように、教師の ICT 端末活用のスキル向上を図る。

III 成果物

1 授業実践指導案及び記録

第2学年	国語「秋がいっぱい」	加々美教子教諭
第3学年	国語「ポスターを読もう」	関口 若子教諭
第4学年	学級活動「クラスでみんなでわくわくできるレクを考えよう」	廣瀬 美樹教諭
第5学年	算数「比べ方を考えよう」	今澤比呂樹教諭
第6学年	算数「並べ方と組み合わせ方」	桐山 祐希教諭
第5・6学年	図工「形に命をふきこんで」	廣瀬 明子教諭
第3学年わかばと学級	算数「数の表し方やしくみを調べよう」	岩崎 利香教諭

2 岩手っ子成果発表会 各学年の作成資料等

第2学年	生活科「町たんけん」「生きものしらべ」「やさいづくり」から
第3学年	社会・総合的な学習の時間での調べ学習
第4学年	社会「国際交流がさかんなまちづくり」 理科「空気の体積と温度」
第5学年	総合的な時間「お米について調べよう」
第6学年	国語「おすすめパンフレットを作ろう」

3 家庭学習チャレンジカード

4 ビブリオチャレンジ シート

5 WGで作成した資料

(研究主任 加々美 教子)

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る授業づくり」 ～ICTの活用を通して～

I 研究内容

1 研究について

本校は、日本学校歯科医会より令和5・6年度「生きる力を育む歯・口の健康づくり推進事業」の研究指定を受け、「生涯を通して自分の体の健康管理(生きる力)ができる児童の育成」をめざして保健教育に取り組んでいる。すべての子どもたちが健康で豊かな生活を送るため、その重要性や順序性を論理的に考え、実践につなげることができるように指導内容の工夫と学習環境の整備に取り組んできた。今年度は、これまでの取組を精査するとともに、日常化を図る取組を行っている。

また、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る授業を行うことにより、自ら考え、行動する児童の育成をめざして研究主題を設定した。「歯・口の健康づくり」の2年間の研究のまとめとして研究授業を行うとともに、研究主題に基づきながらICTの活用推進に取り組んでいる。

2 研究の具体的内容と方法

(1) 講師を招聘しての学習会の実施

「個別最適な学び」と「協働的な学び」、ICTの活用

講師：山梨県総合教育センター主幹・指導主事 中村 忠廣先生

(2) ICT端末を活用した授業研究及び一人一実践

ア 研究授業 (6月19日)

第4学年 学級活動「かむことの大切さを調べ、生活にいかそう」 相澤 拓実教諭

丸山 沙緒里養護教諭

指導助言：山梨県教育庁 保健体育課 主幹・指導主事 原 ゆほ先生

山梨県教育庁 保健体育課 課長補佐 山本 晃司先生

峡東教育事務所 指導主事 岩下 和子先生

イ 一人一実践

第1学年	国語科「どんなおはなしができるかな」	柳澤 晴子教諭
第2学年	国語科「おもちゃの作り方をせつめいしよう」	平山 沙織教諭
第3学年	総合「乙女高原を世界に発信しよう!!」	向山 澄教諭
第5学年	社会科「未来とつながる情報」	鶴田 望教諭
第6学年	社会科「戦争と人々の暮らし」	古谷奈都美教諭
第6学年	理科「てこのはたらきとしくみ」	檜垣 貴子教諭
こだま学級	自立活動 「いろいろな気持ち～怒りって何だろう～」	清水 恵教諭
つつみ学級	国語科「冬がいっぱい」	奥山悠衣香教諭
ことのね1学級	国語科「主語と述語に気をつけよう」	小林 宏美教諭
ことのね2学級	自立活動「校外学習の計画を立てよう」	橘田 栄教諭
かがやき学級	国語科「ごんぎつね」	遊免阿史沙教諭

(3) WEBQU アンケートを活用した学級集団づくり

WEBQU アンケートの2回の実施と分析、対応策を活用した学級集団づくりの取組

II 成果と課題 (○成果 ●課題)

(1) 講師を招聘しての学習会の実施

- 今、求められる学校教育やその背景や根拠、また、具体的に実践事例の提供など、様々な学びを得ることができた。
- 研究の始めの時期に学習会を設定することにより、共通理解を図った上でスタートすることができた。

(2) ICTを活用した授業研究及び一人一実践

- 昨年度の研究内容を踏まえ、さらに今年度の研究テーマを加味した授業研究になった。課題解決に向けて、児童が情報を集めたり表現したりする方法を選択しながら取り組み、また、友達や先生と協働的に学ぶ授業を実際に参観する中で、具体的なイメージを持つことができ、一人一実践につなげることができた。
- 研究授業を通して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を支えるために、教師の指導・支援の在り方、ICTの活用、職員の連携等、様々な視点で学びを深めることができた。
- 指導案検討を全体で行い、授業を参観することで児童の学ぶ姿を観察する視点が明らかになった。
- 学習形態や多様な学び方の経験を積むことにより、児童の主体性や学習に対する取組方に変容が見られた。
- 探究のプロセスにおける課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の学習サイクルを取り入れた授業の展開をめざしているが、定着まで至らなかった。循環的な学びになるように、今後も継続して取り組む必要がある。
- 一人一実践については、お互いに授業を見合う中で多くの学びがあるが、参加体制や実施方法に課題が見られた。今後も検討して取り組みたい。

(3) WEBQU アンケートを活用した学級集団づくり

- WEBQU アンケートの結果分析から、個々の児童や学級の様子を客観的に見ることができ、状況や課題把握につながった。
- 職員間で情報共有を行い、共通理解を深めることにより、日々の学級経営の手立てが生まれ、参考になった。

III 成果物

1 研究授業指導案・一人一実践指導案

2 「歯・口の健康づくり」にかかわる児童のアンケート・取組・掲示物など

(研究主任 平山 沙織)

「自ら課題を見つけ、自ら解決しようとする児童の育成(2年次)
－個別最適な学びと協働的な学びの一体化を通して－」

I 研究内容

1 研究内容

(1) 子供主体の授業づくりについて

① 探究的なサイクルで、知識を構造化し深い学びへつなぐ

- 「探究サイクル」×「南小思考スキル及び見方・考え方(適切な観点を決めて考える)」
(活動の道筋をつける力)(思考の道筋を編み出す力)
- 「整理・分析」の学習過程において、知識を関連付けたり、情報を精査したりして自分の考えを形成していくための手立て(自分らしい整理・分析,知識の構造化)
- 見方・考え方を働かせるための手立て
- クラウド環境の積極的活用(他者参照と自己のモニタリングなど)

② 子ども自ら学びをデザインしていくための課題設定と単元設計

- 子どもたちが学習の見通しをもつことができる授業・単元設計(単元を核とした授業づくり)
- 追究しがたいのある課題設定 ○ 学びを自己選択・自己決定していくための取組(仕掛けづくり)
- 子ども主体の学びを支える教師の役割

(2) 「個別最適な学び」を支える「協働的な学び」を実現させるための環境づくり

- 協働的な学びの土台である非認知能力の育成のため,WEBQU 調査を実施し,教職員全体で具体的な解決策や対応策などを検討・実施し,親和的な学級集団づくり
- 子どもが学びやすい学習環境づくり(いつでも、どこでも、だれとでも学べる場所づくり)
- 情報活用能力向上の取組

2 具体的な研究活動

(1) 学校DX戦略アドバイザー(山梨大学准教授 三井一希先生)を招聘しての学習会及び授業観察を通しての授業改善

- ・ 5月22日「「個別最適な学びと協働的な学びについて」の学習会
- ・ 学校 DX 戦略アドバイザーによる授業参観と指導助言(6月と9月に2回実施)

(2) 研究授業及び一人一実践

ア 公開研究会(10月30日)

- 第1学年 国語科「せいつめいする文しょうをかこう」 内田 由布 教諭
- 第3学年 算数科「数の表し方やしくみを調べよう(小数)」 後藤 美樹 教諭
- 第6学年 社会科「明治の新しい国づくり」 上矢 元気 教諭

イ 一人一実践(研究成果物の「塩山南小校内研究サイト」)



公開研究会資料一覧

(3) 協働的な学びを支える親和的な学級集団作りに関する取組

- ・ 甲州市全体の取組でもあるWEBQUの実施し、教職員全体で具体的な解決策や対応策を検討・実施した。
- ・ 朝学習に週1回の「みなみっこタイム」(Simpleプログラム)の実施

(4) ICT端末活用のスキルや情報モラルの向上に関する取組

- ・ 週1回の朝学習のチャレンジタイムの活用(タイピング練習等)
- ・ GIGAワークブックの活用 等

II 成果と課題

(1) 子供主体の授業づくりについて

- 探究サイクルや「南小思考スキル」「思考ツール」の学び方に関する継続的な取り組みによって、子どもたちが主体的に学ぶ姿勢が育ち、授業改善につながった。
- 思考ツールやICTを活用することで、児童の情報収集・整理分析能力が高まった。
- クラウド環境を活用することで、学びが深まり、協働的な学びが促進された。
- 単元全体を見通した学習計画を立て、学習の流れとゴールを共有することで、児童の主体的な学習を促し、授業改善につながった。また、児童が見通しを持ち、自己選択・自己決定できる機会を増やすことで、授業に意欲的に参加する姿が増えた。児童が「教えてもらう」という姿勢から「自ら学ぶ」という姿勢へと変化してきた。
- 一斉授業と個別指導のバランス、教師のファシリテーターとしての役割が重要であることを実感した。教師は児童一人ひとりの学習が最適となるように調整していく役割を担っていくよう努めた。
- 学習環境を工夫することで、児童が安心して学習に取り組めるようになった。
- 教材研究をより丁寧に行い、児童に各教科の「見方・考え方」を働かせる手立てを充実させる必要がある。また、児童が「見方・考え方」を意識的に使えるように、日々の授業の中で繰り返し指導していきたい。
- 授業全体を見通し、教師が介入する部分と児童に委ねる部分のバランスを適切に授業設計し、教科の本質に迫る学習ができるように授業改善していきたい。また、「孤立した学び」にならないような手立てを講ずる必要がある。
- 児童が個々の探究サイクルを意識した学習や児童の理解度や進度に応じた学習が実現できるように、個に応じた指導や支援について研究をしていくことが課題である。

(2) 個別最適な学びを支える「協働的な学び」を実現させるための環境づくりについて

- WEBQUの分析を迅速に行い、その結果を学級経営に生かすことができた。様々な視点から児童をアセスメントすることで、クラスの実態や個々の児童理解を深め、学びの土台作りとなる学級経営に役立てることができた。
- 一人一台端末を活用していく中で生じた課題を学びの機会と捉え、情報モラルや情報管理能力を授業の中で育てることができた。
- 他者参照やアップデートタイムなど対話的に学ぶ場面を設けることで、他者と協働する力が身につけてきた。他者との交流などの協働的な学びの後で、自分の学びを見つめ直すことで自分の学びを自覚できるようになってきている。
- どこでも、だれとでも学べるという安心感があることで、孤立することなく教え合い、学び合う姿が見られた。
- 他者とのコミュニケーションの取り方、学習に向かう意欲付けなどの個人差の課題がある。多様な仲間と協働できるよう促し、学びを深められるような指導、支援方法を追究していく必要がある。
- 学習場所の自己選択を可能にするため、各学年に学習スペースを確保できるよう検討するなど、学習環境をさらに工夫していきたい。図書室や会議室など、内にある場だけでなく、他校や関係機関などとオンラインで情報を收拾したり、論議をしたりすることも視野に入れて学習の場を柔軟に検討していきたい。

III 成果物

- ・ 「南小思考スキル」及び「探究サイクル」の掲示物
- ・ Googleサイトによる校内研究紀要のまとめ
- ・ 低学年・中学年・高学年別 考えるための技法「南小思考スキル17条」
- ・ 全国学力状況調査結果の課題の各学年の系統性と具体的取組資料



(研究主任 池田 理恵子)

「深く学び、考える児童の育成」

～国語科・外国語科における見方・考え方を働かせる授業づくり～

I 研究内容

1 研究について

今年度も昨年度に引き続き「英語教育改善プラン推進事業」の指定を受け、「深く学び、考える児童の育成」を主題として、国語科・外国語科における見方・考え方を働かせる授業づくりについて研究を行った。見方・考え方を働かせる授業づくりを通して、深く学び、考える児童の育成をめざして研究を進めてきた。

部会研究では、国語科・外国語科の2部会での研究を継続した。国語科部会では、学年の系統性を意識した読むこと(説明文)・書くことの複合単元における見方・考え方を働かせるための手立てと言語活動の設定について研究を進めてきた。また外国語科部会では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせるような目的・場面・状況が的確に設定された言語活動を通して、児童の英語表現力や思考の質の向上を目指し、理論研究と授業実践の両面から研究を進めてきた。さらに英語教育改善プラン推進事業の研究指定校として、小学校の外国語における授業改善に貢献し、児童が英語を楽しみながら思考力や表現力を高めることができるように、一人一人が自分の学習状況に合ったかたちで学習を進める個別最適な学びの時間をどのように充実させていくかについて研究することも並行して行ってきた。

2 研究の具体的内容と方法

(1) 授業研究及び研究会

○第2学年 国語科 せつめいのしかたに気をつけて読み、それをいかして書こう

「紙コップ花火の作り方」「おもちゃの作り方をせつめいしよう」(11月8日)

倉田 和美 教諭

指導・助言: 峡東教育事務所 主幹・指導主事

岩下 和子 先生

○第5学年 外国語科「My hero is my brother.

～マイベストキャラクターをALTに紹介しよう～」(10月29日 公開研究会)

山口 大弥 教諭

指導助言: 山梨大学 教授 田中 武夫 先生

(2) 一人一実践

第1学年 国語科「じどう車ずかんをつくろう」

中根 絵里 教諭

第3学年 国語科「食べ物のひみつ 教えます」

保坂 彩夏 教諭

第4学年 国語科「工芸品のみりよくを伝えよう」

古屋 ゆか 教諭

第5学年 外国語科「Where is the library?」

畑 佑弥 教諭

第6学年 外国語科「This is my town.」

三枝 英太郎 教諭

たんぽぽ学級 国語科「じどう車ずかんをつくろう」

渡辺 良太 教諭

ひまわり学級 国語科「自然環境を守るために」

筒井 ひさ美 教諭

(3) 協働的な学びを支える親和的な学級集団づくりに関する取組

ア WEBQU調査の実施・その後事例検討会を行い、対応策を検討及び実施

イ 特別支援教育学習会

Ⅱ 成果と課題（○成果 ●課題）

（1）授業研究及び研究会・一人一実践

- 昨年度までの研究の上に立って部会ごとに教科の見方・考え方を整理し、研究授業への取り組みや一人一実践を行った。その中で見方・考え方を働かせる授業づくりに焦点を絞って研究を進めることができた。
- 教科の見方・考え方を働かせることが、コンピテンシーベースの学びを展開する上で重要である思考力・判断力・表現力等の育成に役立っていることから、教科の目標を達成するために必要な研究ができた。
- 国語科は校内、外国語科は甲州市の外国語教育推進委員をはじめ多くの先生方に参加していただき、研究授業及び研究会を開催した。その中で以下のような成果が見られた。

国語科

読むこと(説明文)・書くことの複合単元に絞って見方・考え方を働かせるための手立てと言語活動の設定について研究を進めることができた。領域を絞って研究をしたことにより学年の系統性を理解することができ、発達段階に合わせた見方・考え方を働かせるための具体的な手立てを研究することができた。また、Google クラスルームを通して目指す児童の姿について教師と児童で共通理解を図り、深く学ぶ姿を見取ることができた。

外国語科

質の高い言語活動、目的場面状況を明確にした単元計画を通して、校内研のテーマである見方・考え方も働かせる授業づくりについて考えることができた。また校外の先生方からも数多く指導や助言をいただき、推進校としての役割を果たすことができた。

- 協働的な学びを進めていく上で、教師がどの場面でのどの程度(中間)指導を入れていくか難しさを感じた。その時々の子どもの姿を見極めることの必要性を感じた。
- 深く学び考える児童の育成のためには、児童が自ら考えたいと思う魅力的な課題の設定が欠かせない。魅力的な課題とはどのようなものなのか、それをどのように設定していくのか、今後研究が必要である。

（2）協働的な学びを支える親和的な学級集団づくりに関する取組

- 協働的な学びを支える親和的な学級集団づくりには、児童同士の関わり方が大きく関係してくる。その児童同士の関わりを把握・改善するために、WEBQU の調査・分析は有効であった。
- WEBQU の調査・分析を通して、学年の枠を越えた多くの職員の間でクラス全体や一人一人の児童の様子を把握し、具体的取組を考えて実践することができた。
- 特別支援についての学習会を行い、在籍学級と通級指導の果たす役割について研修した。多様な教育的ニーズをもつ子供たちへの支援や多様な学びを支える学級づくりについて職員間で共通理解を図ることができ、クラスでの取組を進めることができた。
- 「障害の特性を学び、どのように通常クラスで配慮を実現していくか」について等視点を絞って研修を行い、気になる児童や配慮が必要な児童への関わりについて具体的な関わりや支援の方法がより明確にわかる研修を行っていききたい。

Ⅲ 成果物

1 研究授業指導案・一人一実践指導案

2 授業の概要

3 Google クラスルームによる校内研究会の資料の蓄積

（研究主任 中根 絵里）

「主体的に表現する児童」の育成に関する研究

—ICTを活用した対話的な学びをつくる授業(1年次)—

I 研究の内容

1 授業研究

(1) 研究授業

第6学年 国語科 「やまなし」

小泉 匡之教諭

甲州市教育委員会 那須 栄樹 指導主事

(2) 一実践授業

第1学年 算数科 「かたちあそび」

堀内 美紀教諭

第2学年 算数科 「新しい計算を考えよう かけ算」

向山 紀子教諭

第3学年 国語科 「すがたをかえる大豆」

古谷 由佳教諭

第4学年 道徳科 「友達だからできることを考える」

村松 夏帆教諭

第5学年 社会科 「未来を作り出す工業生産(自動車の生産にはげむ人々)」

竹川 憲任教諭

知的[すみれ]学級 自閉症・情緒[つくし]学級

自立活動 「クリスマスかべかざりを作ろう」

高石 圭子教諭 奥山 美恵教諭

第4学年 理科 「雨水のゆくえと地面のようす」

雨宮 正 教諭

(3) 算数の基礎学力定着に向けての取組

『算数オリンピック』・・・「数と計算」領域の学年相当の基礎学力定着を目指して

2 学級集団づくり

WEBQU 検査(全学年)実施とアタックシートの作成・活用の充実

3 ICT 機器の活用

(1) ICT 端末に関わる技術向上のための研修

(2) 「ICT 端末活用の記録」作成

(3) ICT 端末活用時の「やくそく」の検討

Ⅱ 成果と課題

Ⅰ 成果

- ・本研究テーマ一年目のスタートの年であったが、「表現力」というキーワードを核に、教科にとらわれずに研究できる主題であった。さらに「個別最適な学び」や「協働的な学び」の在り方について理解と実践を全職員で一丸となって取り組むことができた。また、「ICTの活用が目的ではなく、目的を達成するためのICTの活用法を研究する」という共通認識のもと、「児童の思考・判断・表現力を伸ばすためのICTの活用法」について多角的な視点で研究することができた。
- ・「主体的に表現する児童」の育成に向けて、練り上げられた研究授業となった。研究授業では児童が主体的に交流する姿が多く見られた。児童が自分の考えを表現する方法も様々で、日常的に自分で選択し、表現する活動を繰り返し行っていることを感じた。ICTを活用した授業づくりにおいて、先生方の授業力の向上に大きくつながった。研究会においても、ICTを活用して会の効率化をはかり、充実した話し合いができた。
- ・一実践は、研究主題を意識し、児童の発達段階や教科の特性に合わせた、様々な取組がなされた。学年相応にICT端末を工夫して使った授業であり、問い返しの発問を意識した授業実践が多く見られた。また参観者が記入する「参観シート」により、自分自身の実践を客観的に振り返る機会にもなった。
- ・今年度も、算数の基礎学力定着に向けた取組として、「計算力」に焦点を絞った「算数オリンピック」(学期1回)を実施した。子ども達が楽しく意欲的に取り組めるよう工夫を重ね、算数の学習に自信を持って取り組むための基盤作りとして有効な取組であった。
- ・ICTの活用については、常に情報交換をしながら、必要に応じて技術を学べる職場環境であった。

Ⅱ 課題

- ・「算数オリンピック」実施の方法を工夫してきたが、まだ意欲や学習の理解度に大きな差が見られる。活動として成功しただけではなく、真に学力を向上させられるような出題問題であるか問題の精選というところまで迫った取組にしていきたい。合格点に満たない子への支援や今後の取組についても改善を重ね、CRTなどの結果についてもしっかり分析・検証をしていきたい。
- ・実践を通して、指導の成果や課題が明らかになり、より指導力の向上に努めることができた。さらに低学年でどのような積み上げをしていくと効果的なのかを明らかにしていきたい。より児童の発達段階に合わせた授業づくりについて、取組を進めたい。

Ⅲ 成果物

- 1 研究授業・一人一実践授業の指導案、使用した教具、ワークシート
- 2 「算数オリンピック」に関する資料・問題等
- 3 ICT端末活用の記録

(研究主任 向山 紀子)

「主体的に表現する児童の育成」

～学習者主体の授業をつくる指導方法の工夫～

I 研究の内容

1 教員の ICT を活用した指導力の育成

- (1)講師を招聘。「学習者主体の授業」の指導方法について研修。
- (2)校内での実践研修

2 授業づくり

- (1)CRT 調査, 全国学力・学習状況調査の分析。
学習の成果を把握し, 課題を明確にして授業の改善を図る。
- (2)先進校の事例に倣い, 児童の課題を改善するための効果的な学習方法を実践する。
- (3)少人数や小集団, 個を生かした「学習者主体の授業」実現のための授業実践と検証。
- (4)甲州市 Teacher's Note の活用
- (5)研究授業と一人一実践
- (6)ICT 端末の効果的な活用

3 児童の実態把握と集団づくり

- (1)WEBQU を生かした児童理解と集団づくり。PDCA サイクルを活用。
- (2)WEBQU の結果分析とアタックシートを活用した集団づくりを行う。

4 学びを促す環境づくり

- (1)学年に応じた「大藤スタンダード」の徹底。
- (2)5つの合言葉の具体的な場面での取組を実践。
 - 〈わくわくべんきょう〉・・・勉強のスタートは, 驚きや疑問, 楽しく学ぶ。
 - 〈のびのびとうこう〉・・・何事も夢中とする。徹底してする。
 - 〈みんななかよし〉・・・いじめや仲間外れを生まない集団でいよう。
 - 〈にこにこあいさつ〉・・・あいさつ, 返事をしっかりする。
 - 〈いきいきかつどう〉・・・自ら考えて行動する。自分で決めて, 自分で守る。

(3)家庭学習定着を図る環境整備

- ①「家庭学習」を年間通して実施をする。
 - ・ノートだけにこだわらない学び 参照「はじめよう! これからの家庭学習」
 - ・自己決定と自己調整 スプレッドシートやカレンダーの活用

- ②家庭学習スタンバイの時間を帰りの会の前にとる。
- ③家庭学習と授業を有機的に結びつけ、知識探求や学習の復習をする。
- ④ノート等が終わったら、校長先生にも見てもらう。
- ⑤みんなに見せたい自学はクラスルームに掲示する。
- (4)月・水・金の朝学習の時間は、各学年学習の時間とし、児童の学習の進度に合わせてタイピングや学習を選ぶ。学習ではAIドリルを活用。
- (5)「大藤スタンダード」に基づき、生活面や学習規律の統一を行う。
- (6)大藤・神金・玉宮小の各学年のクラスルームを作成。行事の打ち合わせ、学習発表会などに活用。

5. 研究実践

①研究授業

第5学年 算数 授業者 深澤 侑太

②一人一実践

第1学年 国語 授業者 中村 千春

第2学年 算数 授業者 三森 明美

第6学年 家庭科 授業者 堀口 藍花

なかよし学級 自立活動 授業者 近藤 祐未

II 成果と課題

成果

児童の主体的な表現力が育成された。授業、行事、児童会活動など様々な場面で、児童が主体的に発言し、行動する機会を設けることができた。

- ①ICTを活用することで、表現が苦手な児童も意思表示がしやすくなった。
- ②学習者主体の授業を取り入れ、他者参照を進めていったことで、苦手意識から学習に対して消極的だった児童も、安心して自分の考えを書いたり、話したりできるようになり、学習・表現への抵抗感が軽減された。
- ③デジタルだけでなく、話すこと・書くこと・身体表現を広げる大切さも議論され、外部講師や地域の方との関わりなども積極的に取り入れた。

課題

- ①他校の実践を参考に、子どもが自己調整しながら学ぶ授業づくりの更なる推進が求められる。
- ②少人数学級の特性を生かした指導方法を深め、個別最適な学びと協働的な学びをより効果的に両立させるための、具体的な指導方法の研究が必要である。

III 成果物

①学習会資料 ②WEBQU 対応策シート ③授業実践指導案 ④全国学力・学習状況調査分析結果

(研究主任 中村 千春)

「少人数学級における思考力・判断力・表現力の育成」 ～問題解決における情報の活用を通して～

I 研究の内容

1 研究目標

探究のプロセスにおいて、情報の活用の工夫と改善を図っていくことで、子どもたちの主体的な学びと思考力・判断力・表現力を育むことを目指す。

2 具体的内容と方法

(1) 授業づくり

ア 児童の実態把握

- ・Q-Uの分析
- ・全国学力テストの分析

イ 一人一実践と研究授業の実施

- ・情報の活用を意識した授業の工夫と改善
- ・ICT環境を活用した実践(日常の授業の中での活用を図る)
- ・学校間ネットワークの交流実践の継続

ウ 「ふるさと学習」の取り組み

- ・地域人材の活用
- ・地域との連携と情報発信
- ・「ふるさと学習」の発表会

(2) 学習基盤づくり(甲州プロジェクトと関わって)

ア Q-U調査の実施(2回)と分析

イ 互いに認め合い、高めあえる集団づくりを目指した学級活動の取組

ウ 家庭学習や学習規律の確立の取組

エ 生活環境向上の取組(GIGAワークブックの活用)

3 具体的な取組

(1) 一人一実践

第1学年国語科「本はともだち」

第4学年理科「物のあたたまり方」

第5学年社会科「情報を伝える人々とわたしたち」

第6学年社会科「近代国家を目指して」

第5・6学年体育科保健領域「病気の予防」

川崎 幸江教諭

前島 国学教諭

亀山 昂太郎教諭

小河 真由美教諭

河村 莉子養護教諭

小河 真由美教諭

(2) ふるさと学習発表会

- 第1学年 「ふるさと かみかね」
- 第2・3学年 「やさいをそだてよう」 「ふるさと探検隊」
- 第4・5学年 「私たちにできる SDGs」
- 第6学年 「神金の鍛冶と金山の歴史」

II 成果と課題

1 成果

- ・探究のサイクルを活かした授業づくりや ICT の活用が、児童の学びを深める上で有効であることが実感できた。
- ・思考力・判断力・表現力の育成に有効な手段である ICT について、授業での活用の仕方を学び、先進校の事例に触れることで自身の指導力向上に繋がった。
- ・一人一実践の授業観察により、ICTの活用場面・活用方法の幅が広がり、実際にICTを使った授業を実践する参考になった。
- ・ふるさと学習は、内容・取り組み方など得ることが多く、学校の特色としてやはり地域は大切にしていきたい。
- ・心身の健康が、学習への姿勢や意欲にも関わってくる。学級力を高めること、他者を認めることで授業や行事に効果があると感じるので、QUに限らず今後も全職員で全校児童を育てていくことを大切にしていきたい。

2 課題

- ・ICT の活用についてはまだ課題も多く、ICT を単に導入するのではなく、どのような学習効果を期待して ICT を活用するのかを明確にする必要がある。また、ICT を活用した授業だけでなく、従来の学習方法も取り入れた多様な授業デザインの可能性を見極めていきたい。
- ・限られた授業時間数の中で、効果的にまとまっている教科書、個別最適を意識した ICT 活用、さらに ICT の発展的活用など、それぞれの良さを最大限に生かした授業の進め方をこれからさらに試行錯誤していく必要がある。
- ・少人数学級の実態を踏まえ、その良さを生かしながらも、いずれ大集団の中で学ぶことを想定した取組も必要である。
- ・家庭学習の習慣については、個人差が大きく、学年が下がるほど家庭の協力も必要になってくる。主体的に学ぶ態度を身につけさせていくための方法を今後も模索していきたい。

III 成果物

- ・一人一実践授業案
- ・ふるさと学習実践資料
- ・神小スタンダード
- ・アウトメディアチャレンジ

(研究主任 小河 真由美)

主体的に学ぶ児童の育成

～リアルな体験とデジタルツールの活用を通して～

I 研究の内容

1. 子供主体の授業づくり

(1) 学習会

「夢をかなえる学びのプロジェクト」子供主体の授業と ICT の活用

講師：甲州市教育委員会教育総務課 那須 栄樹 指導主事

(2) 一人一実践授業及び振り返り

- | | | | |
|-------------------------|-----|-------|----|
| ・第1学年生活科「きせつとなかよし あき」 | 授業者 | 青木 恵 | 教諭 |
| ・第2学年生活科「あそび名人になろう」 | 授業者 | 中村 潤子 | 教諭 |
| ・第4学年社会科「昔から今へと続くまちづくり」 | 授業者 | 山本 諭 | 教諭 |
| ・第6学年国語科「発見、日本文化のみりょく」 | 授業者 | 梶原美奈子 | 教諭 |

(3) 児童の ICT 活用スキルの向上に向けた取組

現状把握と対策（「めざせ!!タイピング名人!!」「キーボー島」「らっこたん」等）

2. みんなが安心して学べる学級づくり・集団づくり

(1) WEBQU 調査の分析と対策

- ・全職員による WEBQU の分析と対策

(2) 人間関係の向上を目指した取組

- ・なかよしスキルタイム（構成的エンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング）

(3) 学習規律の確立

- ・「玉宮小学習スタンダード」の定着

3. 保護者・地域家庭と連携した取組

(1) 社会に開かれた教育課程の編成・充実

- ・臨地研修
- ・地域学習年間計画の見直し

(2) 家庭学習の充実

- ・自主学習メニューの提示「自主学習の進め方」
- ・自主学習ノートの紹介（自主学習掲示コーナー、学年便り等）

II 成果と課題

1. 授業づくりに関わって

年度始めの学習会では、甲州市指導主事 那須栄樹先生を招聘し、「甲州市夢をかな

える学びのプロジェクト」についてご教授いただき、子供主体の授業づくりのイメージを具体化することができた。

授業実践では、各教科でのリアルな体験をもとに、ICT 端末を活用し、探究のサイクルや各教科の見方・考え方を取り入れながら、日々の実践を積み重ねた。児童が課題や学習方法、まとめ方を選択できる学習過程を設定したり、単元全体の見通しを可視化したりすることで、児童が主体性を発揮することができた。今後も、児童の興味関心を引き出し、主体的な学びを促すための多様な学習活動を、授業実践を共有する中で探っていきたい。

2. 学級づくり・集団づくりに関わって

WEBQU 調査を活用した集団づくりでは、全職員で学級の状況を客観的に把握し、対応策を考え、改善を図ることができた。本校は少人数学級であるため、WEBQU 調査から学級集団全体の状況を捉えることは難しいが、全職員で児童一人一人を丁寧に見取り、学校全体で児童の思いや悩みを共有できる、という小規模校のメリットを最大限に活かし、今後も児童理解・支援につなげていきたい。

「なかよしスキルタイム」では、月に1回程度、構成的エンカウンターとソーシャルスキルトレーニングを行ってきた。学年の枠を超えた人間関係づくりや友達との関わりを学ぶことができていた。次年度に向けて、より効果的な「なかよしスキルタイム」の内容や方法を検討し、児童のコミュニケーション能力をさらに高めていきたい。

学習規律の定着に向けた取り組みでは、「玉宮小学習スタンダード」を年度始めに全職員で確認し、学習のきまりや学習用具の持ち物、話し方名人・聞き方名人、話し方の例等、共通理解を持って指導を重ねてきた。全体的に、児童は落ち着いて学習に向かうことができていたが、緩みが出てしまう場面も見られた。意識を継続させるために、振り返りの時間を設け、さらなる定着を図っていきたい。

3. 保護者・地域住民との連携に関わって

社会に開かれた教育課程の編成・充実に向けて、臨地研修会を実施した。地域の方々を講師として、教職員が実際に玉宮の地域を歩き、地域素材について深く学ぶことができた。また、地域でのリアルな体験と、各教科での探究学習の最適な組み合わせについて考え、地域学習年間計画の見直し、作成を行うことができた。

家庭学習の充実に向けた取組では、継続した取組により、自主学習は定着しているが、ICT 端末を活用した効果的な自主学習の方法、家庭との連携について、今後考えていく必要がある。

Ⅲ 成果物

- ・子供主体の授業づくりに向けた実践授業の授業案
- ・地域学習年間計画

(研究主任 青木 恵)

「主体的・対話的で深い学び」を実現する児童の育成

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を取り入れた授業づくりを通して～

I 研究内容と方法

1 具体的な研究内容

(1) 授業改善に関わって

○「個別最適な学び」と「協働的な学び」を取り入れた授業実践

- ・児童の「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践
- ・「個別最適な学び」や「協働的な学び」に向けた取り組み
- ・ICTの活用方法に関する学習会
- ・「甲州市ティーチャーズノート」についての学習会

(2) 甲州市夢をかなえる学びのプロジェクトに関わって

○確かな学力を育成するための取り組みの継続

- ・WEBQ-Uの分析や親和的な学級集団づくりについて
- ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化に向けた授業改善
- ・家庭学習やメディアコントロールへの取り組み

2 研究の方法

(1) 「個別最適な学び」や「協働的な学び」についての研修

(2) 講師を招いての学習会

(3) ICTの活用方法に関する学習会

(4) 一人一実践

3 具体的な取り組み

(1) 学習会

ア 甲州市ティーチャーズノート2024について

甲州市教育総務課指導主事 那須 栄樹先生

イ 安定と活性化を両立した学級づくり

～WEBQUと学習指導を中心に組織で実現する～

元道志村立道志中学校校長 杉本 賢二先生

ウ 特別支援教育について

山梨大学大学院総合研究部准教授 永田 真吾先生

(2) 研究授業

第6学年 望月 啓介教諭 算数科「およその面積と体積を求めよう」
※山梨県総合教育センター 副主査・指導主事 小林 裕直先生を招いての
研究会を実施

(3) 一人一実践

- ・第1学年 遠藤 香織教諭 生活科「きせつとなかよしーあきー」
- ・第2学年 石場明日香教諭 算数科「九九をつくろう」
- ・第3学年 土屋 愛佳教諭 道徳科「ぽかぽか言葉」
- ・第4学年 黒瀬 貴広教諭 算数科「計算のやくそくを調べよう」
- ・第5学年 雨宮 由香教諭 国語科「よりよい学校生活のために」
- ・第6学年 菰原 美海教諭 音楽科「音楽で思いを伝えよう」
- ・コスモス 相葉 堅斗教諭 自立活動「冬野菜を育てよう」

Ⅱ 成果と課題

1 成果

- ・昨年度までの研究を受けて、今年度から新たな研究主題を設定したことで、先生方の授業への意識をさらに前に進めることができた。特に「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点から、これまでの学習活動や教師の支援のあり方について捉え直し、児童が自ら学び方を選択し、「自立した学び手」になることを目指した授業を心がけて実践したことは、大きな成果となった。
- ・講師を招聘しての学習会については、3名の先生方から専門的なお話をお聞きすることができ、自分の授業や学級の実態と照らし合わせて聞き、考えることができた。
- ・探求のサイクルを意識した授業を行いながら、「個別最適な学び」の場面と「協働的な学び」の場面を意図的に仕組み、児童がゴールも学び方も自らが設定、選択し、自分のやり方でまとめ、他の児童との関わりの中で深めていくという一連の姿を学ぶことができた。

2 課題

- ・親和的な学級集団づくりについては、ブロックや個人の研究にお願いする部分が多くなってしまい、学校全体での研究という部分が弱かったと感じる。子ども達の特性が多様化する中、「児童理解」と「親和的な学級集団づくり」は研究を進める上でも、極めて重要になってくる。今後は、学級づくりについて、実態や発達段階に合わせた具体的な取り組みについてもフォーカスすることが必要である。
- ・若い先生方が、経験豊富な先生方から学ぶことができるような場を提供できなかった。1～6年までの児童の様子や授業について見通した上で、自分の学年の授業づくりかができるような仕組みをつくることも考えていかなければならない。

(研究主任 遠藤香織)

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

～個別最適な学びと協働的な学びの日常化～(2年目)

I 研究の内容

1 研究の目標

○ICTを基盤として、単元を通して学習者主体の授業を目指し、児童が学習内容や学習形態を自己決定・自己選択をする姿を目指すことで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善をする。

2 研究の具体的内容

(1) 学級づくり・集団づくり

ア WEBQ-U・学校生活アンケートを参考にした学級、集団づくり、児童理解

イ 各学年の「今後の対応策」の共有化、不満足群の児童の確認

(2) 授業づくり・授業改善

ア 授業改善への強い意識と学ぶ楽しさ・考える楽しさを実感できる授業づくり

イ ICT端末の効果的活用の日常化、「甲州市 Teacher's Note」を活用した授業づくり

ウ 各教科・行事・特別活動・総合的な学習の時間と関連するユニバーサルデザインを意識した授業づくり

エ 一人一実践

- | | |
|----------------|--------------------|
| ・第1学年 興石 晴美教諭 | 音楽科 「どれみとなかよくなろう」 |
| ・第2学年 山下 史江教諭 | 算数科 「長方形と正方形」 |
| ・第2学年 杉本 真知子教諭 | 国語科 「なかまのことばとかん字」 |
| ・第2学年 高野 育愛教諭 | 図工科 「ことばのかたち」 |
| ・第3学年 中村 美優教諭 | 社会科 「事故や事件から町を守る」 |
| ・第3学年 水上 由人教諭 | 国語科 「すがたをかえる大豆」 |
| ・第4学年 佐野 誠一教諭 | 体育科 「マット運動」 |
| ・第5学年 天野 ねいろ教諭 | 社会科 「未来をつくり出す工業生産」 |
| ・第5学年 中嶋 康雅教諭 | 理科科 「台風の動きと天気の変化」 |
| ・第6学年 中村 悦子教諭 | 道徳科 「手品師」 |

オ 各教科の特質等に応じた見方・考え方の活用

カ 言語力の基礎を育む日常的な取組(音読・発表・書く活動・語彙を増やす活動・読書等)の工夫

キ 全国学力・学習状況調査の分析

(3) 保護者との連携

- ア 「井尻小 家庭学習の手引き」の見直しと家庭学習ノート(いじりの子ノート)と端末を活用した自主学習の支援・周知
- イ 各学年の取り組みの情報交換・系統的な支援の共通理解

II 成果と課題

1 成果

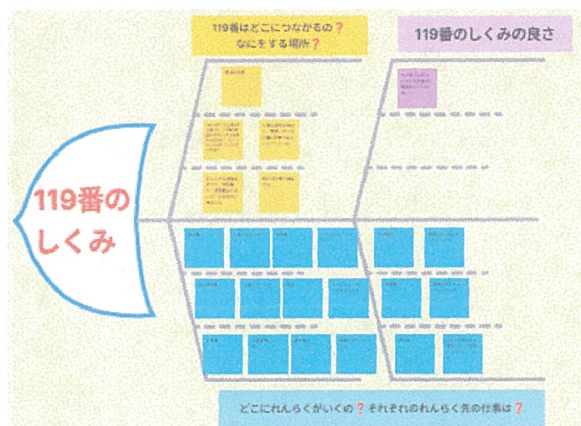
- ・一人一実践を通して、それぞれが学び合い、自分たちのスキルアップに繋がり、力量を高めるよい機会だった。また、共有することによって、授業者が気づかない児童の学びや変容など交流することもできた。授業者が様々なことを考えながら準備・実践を行うことが、授業者自身の力になっていくことを大切にしていきたい。
- ・さまざまな教科で、ICT端末を日常的に活用し、「主・対・深」を目指した授業づくりを行い、分からないことは職員間で教え合ったりすることもできた。
- ・校内研の中で、学習会のように実践研究として体験的に学んだり、各教科の体験的な研修や指導法などの伝授をしたりなど、自分たちの「得意」「強み」「経験」を教え合い、共有することでスキルアップを目指していきたいことを確認できた。

2 課題

- ・一人一実践その後の振り返りや意見交換など、時間があまり取れなかった。実践後の次の校内研で振り返りの時間を確保したい。その際、授業内容の振り返りよりも、その学習を通して児童がどの場面でどのように変貌したか、どんな学びの瞬間があったかなどを、みんなで共有できるといい。
- ・教員が「家庭学習」をなぜさせたいのか、どんな成果を望んでいるのか、家庭学習の在り方についてもう一度職員間で確認し、保護者と連携した取り組みを充実させていき、児童が家庭学習の良さを実感し、継続していけるような指導をしていきたい。

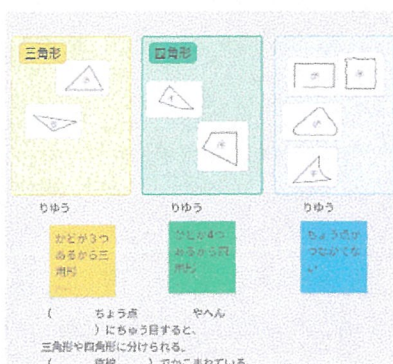
III 成果物

- 1 一人一実践授業案及び実践のまとめ
- 2 各教科の見方・考え方の教室掲示



思考ツールの活用

児童が学習形態を自己決定・自己選択



(研究主任 山下史江)

学習者主体の授業改善をととした、児童の資質・能力の育成
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図りながら～

I 研究内容

1 研究内容と方法

(1) 研究内容

- ア 児童の実態把握と分析、改善策の検討。
- イ 甲州市「夢をかなえる学びのプロジェクト」と連携した研究。
- ウ 「子供主体の授業」についての理論研究や学習会。
- エ 「子供主体の授業」に向けた授業研究。

(2) 研究方法

- ア 全体研究会と部会研究会（企画運営部会・授業づくり部会・環境づくり部会）を取り入れた研究体制で研究を進める。
- イ WEBQU・研究テーマに関わる学習アンケートを行い、児童の実態を把握・分析共有化し、具体的な改善策を検討する。
- ウ 甲州市「夢をかなえる学びのプロジェクト」講演会に積極的に参加したり、3部会の取組や『Teacher's Note』から学んだりして、日々の実践に活かす。
- エ 講師を招いての学習会開催や公開研究会への参加、校内での ICT 活用研修、書籍などから理論研究を進める。
- オ 研究授業の指導案検討を行う。講師を招聘して授業研究会を行う。
- カ 一人一実践の授業公開を行う。参観者の意見を授業改善に活かす。

2 具体的な取り組み

(1) WEBQU・学習アンケートの結果分析・改善策の検討。

- ア WEBQU の結果及び分析から改善策を検討し・共通理解を図る。また長期休業中に改善策を見直し、ミスマッチのものは新たに対策を考え、実践に活かす。
- イ Forms 版学習アンケートの結果から課題点を1つ挙げ、授業改善策を検討する。職員間で共有し、実践に活かす。

(2) 「学習者主体の授業改善をととした、児童の資質・能力の育成」を意識した授業の実践。

- ア ICT 端末を積極的に活用し、子供主体の授業を目指す。
- イ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指し、探究のサイクルを意識した、複線型の授業を展開する。

3 具体的実践

(1) 理論研究（学習会の実施）

- ア 「子供主体の授業づくりにおける ICT 端末の利活用について」
講師 都留文科大学 野中 潤 教授
- イ 「社会科における『子供主体の授業づくり』について」
講師 義務教育課 古屋 達朗 指導主事

(2) 実態調査

- ア WEBQU（第1回 5月、第2回 10月）
- イ Forms 版学習アンケート（第1回 7月、第2回 2月）

(3) 授業実践

ア 研究授業

第3学年	望月 海彩教諭	社会科「火事からまちを守る」
第4学年	高橋 里恵教諭	社会科「昔から今へと続く町づくり」
第5学年	保坂 洋仁教諭	社会科「米づくりのさかんな地域」
第6学年	中根 淳教諭	社会科「明治の新しい国づくり」

イ 授業公開（一人一実践）

第1学年	辻 みなみ教諭	生活科「かぞくにここにこ 大きくせん」
第2学年	前田 文 教諭	生活科「めざせ虫はかせ」
こすもす	荻原 幸菜教諭	第6学年音楽科「曲想の変化を楽しもう」
たんぽぽ	塚田志小美教諭	第5学年・6学年自立活動 「場面にあった声かけを考えよう」
第6学年	志村 克人教諭	理科「変わり続ける大地」
第5学年	木下里江子教諭	外国語科 「Where is the library? ～欲しい施設を考えて、案内しよう～」

II 成果と課題

1 成果

- (1) ICT環境を活用し、自分のペースで授業をすすめることができています。ツールを用いた他者参照をする中で、協働的に学ぶ姿も見られた。
- (2) さまざまな教科で Google Chat™を活用し、情報共有をすることができた。意見交流の場でも活用し、効率化を図ることができた。また、学年ごとに1つの Google サイト™を作成し、リンク集や学習ログとしても活用することができた。
- (3) 進捗シートを活用することで、児童の学習状況を把握することができた。また、単元計画を示すことにより、見とおしをもって学習したり、学習方法を調整したりする姿が見られた。
- (4) 「学びのスケール」を基準とし、「子供に委ねる」部分を意識することで、子供主体の授業に近づくことができた。また、単元計画を子供と共有することで、見とおしをもちながら主体的に学習をすすめることができた。

2 課題

- (1) ICT端末の活用スキルに差が出ている場面が見られた。また、学年ごとにどこまでのスキルを獲得していくべきか、精査していく必要がある。
- (2) 子供たちにとって使いやすいもの、教師側が把握しやすいシートなど、よりよいものを今後も考えていきたい。また学年に応じたシートなど、中学年以降に使えるシートを考えていきたい。
- (3) 社会科の「見方・考え方」を働かせるような課題の設定や教師の声掛けについて、さらに研究を深め、児童の資質・能力の育成につなげていきたい。また、子供たちに「委ねる」部分をさらに精査したり、広げたりしていきたい。

III 成果物

- 1 研究授業及び公開授業の指導案10点
- 2 Forms版学習アンケート結果（2回実施）およびWEBQUの結果（2回実施）
- 3 「探究のサイクル」「教科の見方・考え方」の掲示物
- 4 学年の実態に応じた進捗シート（4・5・6年）
- 5 勝沼小学びのスケール

研究主任 保坂洋仁

「主体的・対話的で深い学び」を実現する児童の育成 —ICTの活用を通して—

I 研究の内容

1 授業研究

(1) 授業研究及び研究会

第4学年 国語「みらいにつなぐ工芸品 工芸品のみりよくを伝えよう」

(2) 実践授業

第1学年 国語「じどう車くらべ」

第2学年 算数「ひっ算のしかたを考えよう」

第3学年 国語「ちいちゃんのかげおくり」

第3学年 理科「風やゴムのはたらき」

ひまわり学級 国語「絵や写真を見て話そう」

第5学年 音楽「詩と音楽の関わりを味わおう」

第6学年 家庭科「クリーン大作戦」

2 各種調査結果の分析・課題把握・活用

(1) 全国学力学習状況調査・C R Tの結果分析・課題把握・活用

(2) WEBQUについての分析・情報共有・活用

(3) 教育課程説明会の還流報告

3 研修

I C T端末活用についての学習会

4 甲州市「夢をかなえる学び」のプロジェクトとの連携

(1) 教育講演会をうけた授業改善

(2) WEBQUの実施と分析・活用の充実

II 成果と課題

1 授業研究

ICTを学習ツールの一つとして、子供の可能性を広げる「個別最適な学び」や「協働的な学び」の実現に重点を置き、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授

づくり・授業実践を中心にして研究に取り組んだ。研究授業では、学び合いにおける効果的な活用の仕方について意見を出し合い、講師を招聘してさらに学びを深めることができた。実践後も交流のある茨城県牛久市の小学校へ、作成したスライドを共有しオンライン上で感想をもらうなど、必然性のある学びへとつなげることができた。また、実践授業では、幅広い活用の仕方を互いに学び合うとで、効果的な手立てについて研究を進めることができた。各学年で実態に応じた利用を試行錯誤する中で、ICT 活用が学習にいきる適切な場面や教材について情報を共有したり、考えを出し合ったりすることができた。

2 各種調査結果の分析・課題把握・活用

各種調査結果では、意見交流をする中で課題把握を行い、授業改善に向けて取り組むべき課題を明らかにすることができた。全職員で確認することで、系統的な指導を意識して取り組むことができた。

WEBQU の活用については、学級や個人の傾向を細かく分析し、実態を把握することができた。前期・後期での分析を普段から意識して取り組むようにしたことで、後期の結果に生かすことができた。ブロック毎に対策を考えることで、多くの職員で各学級の課題について考えることができた。

3 研修

ICT 端末利活用の実践を積み重ねるため、校内研究会で情報の共有化を図り、共通理解の下、研究を進めることができた。また、各学校での公開授業に、学校体制を整え全職員で参加したことも、具体的な実践方法の学びにつなげることができた。甲州市教育委員会や甲州市内の小学校の情報を得ながら、研究を進めていきたい。

4 甲州市「夢をかなえる学び」のプロジェクトとの連携

教育講演会や甲州市ティーチャーズノートの内容を普段の授業から意識して取り入れ、プロジェクトと連携しながら取り組むことができた。ICT を学びの目標へ向かうための一つの学習ツールとして、児童が効果的に活用していけるよう、甲州市教育委員会や甲州市内の小学校の情報を得ながら、今後もさらに研修を進めていく。

WEBQU の活用については、学校全体の結果をすぐ共有できるため、素早い対応をすることができた。情報交換を行い全児童の様子を共有したり、気になる児童に全職員でアプローチしたりと、活用の充実を図り、親和的な学級集団作りに生かすことができた。

(研究主任 赤荻 美弥)

「自ら考え、よりよく生きようとする心豊かな児童の育成」
～対話を通して、自己の考えを深める道德の授業づくりを通して～

研究仮説

道德の時間において、対話を通して自己の考えを深める授業（A）を行うことで、
自己を見つめる児童（B）を育むことができるであろう。

【(A) について】

対話を通して自己の考えを深める授業（A）

◎他者との対話を通して考えを深める工夫と手立て → 柱①

◎自己の考えを振り返る終末の工夫と手立て → 柱②

【(B) について】

自己を見つめる児童（B）

道德的価値について自分との関わりで考え、自分のよさや課題などに気づき、自己のあるいは人間としての生き方についての考えを深めていく子供の姿を、「自己を見つめる」姿として捉える。

柱① 他者と関わる工夫と手立て

柱② 自己の考えをまとめる終末の工夫と手立て

I 研究の内容

1 道德科における「対話」を意識した授業づくり

(1) 学習会

「対話を通して、自己の考えを深める道德の授業づくりについて」

山梨県教育庁義務教育課 指導主事 平尾 和樹 先生

(2) 公開研究授業（道德教育推進教師研修会）

令和6年11月22日（金）

・第3学年 道德科「友だちならどうする」絵葉書と切手 授業者 志村 和哉 教諭

指導助言 峡東教育事務所 主幹・指導主事 河野 紳一 先生

・第5学年 道德科「誠実な生き方」手品師 授業者 岡村 澄人 教諭

指導助言 山梨県教育庁義務教育課 指導主事 平尾 和樹 先生

2 児童の実態把握 親和的な学級集団づくり

(1) 道德意識調査（6月，12月 年2回実施）

(2) WEBQU の取組

3 学校教育全体における道德教育の推進

- (1) 児童会との連携（あいさつ，整理整頓，縦割り活動等）
- (2) 自然の杜の活用（自然愛護）

4 「甲州市『夢をかなえる学び』のプロジェクト」との関り

- (1) WEBQU 検査，学級集団づくりアセスメント・対応策シート
- (2) 「甲州市ティーチャーズノート」の活用
- (3) 家庭学習の充実

5 家庭，地域，中学校ブロックとの連携，交流

- (1) 授業参観（年 1 回は道德の授業参観実施）
- (2) 学校，学年だよりの活用
- (3) 中学校ブロックでの連携，交流

II 成果と課題

道德科の目標である「よりよく生きるための基盤となる道德性を養う」ことに準拠した主題を 3 年間揺らぐことなく継続し，日々の道德の授業を行う中での課題や子供たちの実態から副主題を毎年バージョンアップして研究を深められたことは，とても大きな成果であった。「対話」を中心としてみんなが同じ方向で研究を進められたことで，東雲小が目指す子供像を追求できたのではないかと考える。

今年度のキーワードでもある「問い返し」を大切にすることで，子供たちの考えをより深めることができた。「問い返し」の内容やタイミングについては，子供たちの実態，授業の流れ，「めあて」に立ち戻り終末の振り返りにつなげる等，様々な視点で考えることが必要であると分かった。

課題としては，対話する内容，対話する相手について教師が主体となることが多く，子供たち自身から学習課題についてもっと積極的に活動的になる学習者主体の授業を目指していきたい。

III 成果物

- ・研究授業指導案
 - ・道德意識調査
 - ・一枚ポートフォリオ
 - ・心のものさし
- （研究主任 菱澤 里美）

主体的に学表現する児童の育成

～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して～

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことで、「主体的に学び、表現する児童」が育つのではないかと考える。自分の思いや考えを目的意識をもって表現するために必要な資質・能力を育てていきたいと考える。

I 研究の具体的な内容と方法

1 学級集団づくりについての学習会

森崎スクールカウンセラーによる「共に考える、より良い児童支援」

2 児童の実態調査

言語活動に対する意識についてのアンケートを1学期と2学期の2回実施し、実態と変容を把握することで指導に生かした。

3 授業実践

(1) ICT実践報告(各学年スライド1枚)

(2) 一人一実践

第1学年	国語科	「どんなおはなしができるかな」	教諭	大島めぐみ
第3学年	道徳	「見つからないリコーダー」	教諭	名取智枝子
第3学年	理科	「音のせいしつ」	教諭	金井 京子
第3・4学年	体育科	「目指せ！一流忍者！」	教諭	三森 美礼
第4学年	国語科	「パンフレットを読もう」	教諭	内田絵里奈
第4学年	理科	「水のすがたと温度」	教諭	内田 俊彦
第6学年	国語科	「おすすめパンフレットを作ろう」	教諭	武井 尚輝
特別支援学級	自立活動	「ぼくノートを作ろう」	教諭	大村ひとみ

(3) 学習会

○AI活用研修会(第1回・第2回)

教頭 神宮司 剛

○インクルーシブ教育に関わる研修

教諭 大村ひとみ

4 基礎基本の定着に関わる取組

(1) 計算3分間チャレンジ

(2) かけ算九九チェック表（教務中心）

5 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携

(1) 学級集団づくり

WEBQ U調査を生かした児童理解と学級集団づくりへの取り組み

(2) あいさつ、学習規律

登下校時の職員室へのあいさつ、児童会を中心とした「あいさつ運動」

(3) 授業づくり

ティーチャーズノートの活用

(4) 家庭との連携

「家庭教育/子育てQ & A」「家庭学習の手引き」の活用

G I G Aワークブックの活用

II 成果と課題

I 成果

- ・児童の実態を把握するための重要な手段として、アンケートが有効であった。
- ・AI研修は、教員のICTスキル向上や教育への活用において有益な研修機会となった。特別支援に関する研修はインクルーシブ教育の推進において重要な学びとなった。
- ・授業実践やICT活用事例の共有は、教員の学び合いを促進する上で効果的だった。
- ・児童の主体的な学びや、ICTを活用した授業展開など、多くの成果が見られた。ICT活用は、学習の進捗状況や情報共有を視覚的に捉えることができ効果的であった。学びの個別化や個に応じた支援を通して、児童が学習の自己選択、自己調整能力を伸ばすことができた。

2 課題

- ・今後さらに教員間のICTスキル向上を目指していく。
- ・ICT活用が自己の意見や主体的な学びに繋がっていない側面も見られる。模倣に終わってしまうのではなく、自分の考えとして理解を深められるように導いていく
- ・基礎学力（読解力、計算力、表現力）に課題が見られる。日々の継続的練習が必要と感じる。
- ・児童の読書離れが心配される。児童の読書習慣を身に付けさせるための取組を来年度は活性化させていきたい。

III 成果物

- 1 ICT実践報告
- 2 一人一実践の指導案
- 3 児童の学習活動に対する意識調査

（研究主任 内田 絵里奈）

大和小学校

「主体的に学ぶ児童の育成」

～個別最適な学びと協働的な学びを取り入れた授業づくりを通して～

I 研究の内容

1 個別最適な学びと協働的な学びを取り入れた授業づくり

(1) 実践授業及び振り返り

- 第1学年 国語「ものの名まえ」
- 第2学年 国語「お話のさくしゃになろう」
- 第4学年 国語「慣用句」
- 第5学年 算数「四角形と三角形の面積」
- さくら学級 国語「お手紙」
- ひまわり学級 生活単元学習「買い物ごっこをしよう」

(2) 講師を招聘しての学習会

子ども主体の授業づくり学習会

「少人数のよさを活かして個別最適な学びをもっと振り切る」

講師 甲州市教育委員会 指導主事 那須 栄樹先生

(3) 先進校の視察と学習会

塩山南小学校6年2組の授業参観

「学習者主体の学びについて」

講師 塩山南小学校 研究主任 池田 理恵子先生

(4) 子ども主体の授業に向けての授業改善についての実践報告会・学習会

- 第1学年 国語科において、Class room を活用して単元目標、各時間の目標、課題提示などを行った。Fig jam を活用して、情報の整理分析、まとめなどを行った。
- 第2・3学年 国語科、道徳科において、クラスの Chat room を設け、気づいたことや授業の振り返りを打ち込んだり、ノートに書いたことを写真に撮り、貼り付けるなどの活用をした。
- 第4学年 国語科、総合的な学習の時間において、Fig jam やスライドを活用した。また、スプレッドシートに振り返りの入力を行った。
- 第5・6学年 総合的な学習の時間において、思考ツールを活用して情報の整理分析を行ったり、スライドを活用して調べたことをまとめたりした。また、スプレッドシートも積極的に活用した。

2 意欲的に学ぶ学習集団づくり

(1) WEBQU の分析と対策

- ・年2回 WEBQU 調査の実施
- ・WEBQU 分析会議による対応策の全体確認

3 家庭と連携した学習環境づくり

(1) 家庭学習習慣化の取組

- ・自主学習の内容見直し（ノートとタブレット端末）
- ・タブレット端末の日常的な持ち帰りによる学習
- ・自主学習掲示板による自主学習ノートの紹介やスライドやドキュメントを活用しての調べ学習の成果物の紹介

II 成果と課題

1 授業づくりに関わって

一人一実践では、ICT 端末を活用して、学習者主体の学びを実現できるような授業実践を行った。1 学期に那須栄樹先生からご指導いただいた個別最適な学びのポイントなどを参考に、子どもが自ら課題解決の方法を選択し、自分で得た情報を整理、分析し、解決を図る授業スタイルへの転換を目指し、授業を実施した。どの学年も実施可能な教科、単元を洗い出し、個別最適な学びと協働的な学びを取り入れるという視点で授業を行った。各学年の発達段階に応じた活用を行っており、子どもたちが主体となって自ら学ぶ姿や考える姿、友だちの意見を聞いて、共感や納得、新たな発見を得る姿を見ることができた。全員が授業を公開し、お互いの授業を見合うことで、指導の工夫や手立てについて学び合うことができた。また、授業後には、参観者の意見や感想を授業観察シートにまとめ、互いに成果や課題を共有した。紙面で確認をすることにより、授業者や参観者以外の職員にも、授業内容や児童の様子を知らせることができた。今年度は一人一実践に加え、各学年が授業改善に向けて日々行ってみたことを成功例や失敗例も含めて共有していくという方法をとったので、全体で研究授業を行わなかったが、やはり、指導主事を招聘して研究授業を行い、全員が最初から最後まで1つの授業を観て、研修を深めるということに大きな意義があると改めて実感した。

2 学習集団づくりに関わって

WEBQU 検査を2回行い、結果の分析会議を全職員で行ったことで全学年の実態を知り、問題点に対して様々な視点から対応策を考えることができた。全職員が必ず発言し、意見を言うことで小規模校のよさを活かし、全職員が共通理解したうえで、指導にあたることができた。

3 学習環境づくりに関わって

自分の学習したい内容に合わせて、ノートでやるかタブレットでやるかを子どもたちが自ら選択して学習する方法を推進した。

III 成果物

実践授業の授業案（ワークシート、ICT 教材等も含む）

授業観察シート（一人一実践共有まとめシート）

WEBQU の分析結果、対応策シート

（研究主任 塩澤 美希）

学 校 研 究

中 学 校

山梨南中学校 47

山梨北中学校 49

笛川中学校 51

塩山中学校 53

塩山北中学校 55

松里中学校 57

勝沼中学校 59

「 場所を問わない学び、デジタルによる新たな学びの追求 」
～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実につながるクラウド活用～

I 研究の内容

1 本年度の研究の重点

これまで「確かな学力の定着と向上」を基本テーマとし、特に学力向上のために「やまなしスタンダード」をベースとした構造的な授業づくりと家庭学習の定着について研究を行い、多くの成果を挙げてきた。そして昨年度は、前年度までの研究を継続し、更なる定着と質的向上を目指すと同時に、GIGA スクール構想に伴う ICT 活用を積極的に実践することで、学習活動の一層の充実と主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に取り組んだ。今年度は、リーディング DX の研修会を通し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実や校務 DX の推進に向けて研究を進めた。

2 研究部会

(1) 教科別研究会

- ・「やまなしスタンダード」を取り入れた授業づくり・授業改善
- ・ICT の利活用，一人一台端末をどのように使っていくか情報交換
- ・新しい教科書（学習内容含む）の進め方
- ・3 観点に伴う評価のつけ方

(2) 学年別研究会

- ・Q・U 検査の分析→個への対応，集団づくり
- ・学びの質的向上を目指した学級・学年集団づくり
- ・GU ノート（自主学習ノート）の取り組みから，授業改善の工夫につなげる。

(3) リーディング DX

- ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びを実現する観点から、1 人 1 台端末とクラウド環境を高い頻度で活用し、日常授業の改善を図る。

教育課程全体を通じた情報活用能力の育成に特に留意し実施する。

- ・インターネット上の動画教材の活用
- ・端末の日常的な持ち帰りによる家庭学習の充実
- ・校務の徹底的な効率化や対話的・協働的な研修

1 人 1 台端末、グループウェア及びクラウド環境を活用した校務の効率化や対話的・協働的な職員会議・教員研修の実施等に取り組む。

- ・実践内容を動画・写真、研修のオンライン公開。

- ◇英語 授業者 飯島 健太 教諭
3年2組 令和6年6月28日（金）実施
- ◇国語 授業者 杉岡 佑月 教諭
2年4組 令和6年10月18日（金）実施
- ◇道徳 リーディング DX 公開研究会 授業者 小島 萌絵 教諭
1年2組 令和6年11月22日（金）実施

（4）学習会

- ◇DX アドバイザーによる学習会 令和6年5月15日（水）実施
講師 西田 光昭 氏 （文部科学省学校 DX 戦略アドバイザー）
- ◇DX アドバイザーによる学習会 令和6年7月3日（水）実施
講師 西田 光昭 氏 （文部科学省学校 DX 戦略アドバイザー）
- ◇DX アドバイザーによる学習会 令和6年8月8日（木）実施
講師 小川 晋 氏 （春日井市立高森台中学校教頭）
- ◇DX アドバイザーによる学習会 令和6年8月19日（月）実施
講師 三井 一希 氏 （山梨大学准教授）
- ◇DX アドバイザーによる学習会 令和6年11月22日（金）実施
講師 西田 光昭 氏 （文部科学省学校 DX 戦略アドバイザー）
- ◇DX アドバイザーによる学習会 令和6年12月4日（水）実施
講師 西田 光昭 氏 （文部科学省学校 DX 戦略アドバイザー）

II 成果と課題

1 成果

- ・リーディング DX の研修で学んだことを授業で実践することで、どの場面で端末を活用していけばいいのか、どう活用することが有効的なのかが分かった。
- ・授業研究では、ファシリテーターを中心とした小グループの話し合いにすることにより、多くの意見が出され、授業案検討、授業後の研究会も活発な意見交換が行われた。また、Canva、ドキュメントを研究会で活用することで、効率的な話し合いをもつことができた。

2 課題

- ・ICT 活用、個別最適な学習、協働的学習など、学習法が多様化する中で、それらを統合的な視点で学ぶ必要がある。一方で、研究内容が多岐にわたるので（教科授業研究・QU 分析・ICT 関係など）精選したほうがよいのではないかな。
- ・端末を使うことが目的ではなく、端末を活用して授業のねらいを達成することが目的だということを意識して活用していかなければならない。

III 成果物

- ・学習指導案（1年道徳・2年国語・3年英語）

（研究主任 内田 晴奈）

I 研究主題

自ら学ぶ力をつける学習指導に関する研究

～個別最適な学びの実現に向けた ICT 活用の在り方～

II 主題設定の理由

現行の中学校学習指導要領(平成 29 年告示)において、生徒に身につけさせたい資質・能力は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱となっている。それぞれの資質・能力の育成のためには、さらなる学びの質の向上に向けて「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を推進していく必要があることが述べられている(文部科学省, 2018)。

本校では, 昨年度を1年目としてとして, 「自ら学ぶ力をつける学習指導に関する研究～個別最適な学びの実現に向けた ICT 活用の在り方～」と研究主題を設定し, 継続研究に取り組んでいる。その中で, ①「思考・判断・表現力を高める取組(山北スタイルづくり)」②「基礎学力定着の取組」③「教材教具の開発・工夫と ICT 活用」といった3つの観点から主題に迫るべく研究を進めてきた。

文部科学省から「Society 5.0 時代を生きる全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びを実現するためには, 学校現場における ICT の積極的な活用が不可欠」であることが示され, 「GIGA スクール構想」において1人1台端末が整備され, 積極的な活用が求められている。また本市においても, 令和3年度(2021 年)にタブレットが1人に1台貸与されている。

本校は, これまでに蓄積された教育実践を通して, 「話し合いの手順や方法, 発表のルールの確立」, 「生徒が思考するときの視点や方向性のもとになる「問い」づくり」, 「まとめと振り返りでの工夫」に取り組む, 確実に成果を上げてきた。また, 令和元年度から3年度には山梨県道徳教育推進事業の指定を受け「特別の教科 道徳」の研究に取り組む, 「発問の工夫」「振り返りシートを活用した評価文」について議論を重ねた。そして, 授業の中で生徒一人ひとりの考えが可視化されることにより, 他者の考えから多くの気づきを得て, 自己の考えを深めることができるように ICT を活用した授業づくりが活発になった。様々な工夫を取り入れ, 3年間に及ぶ研究を継続して行う中で, 生徒たちが「答えが一つではない道徳的な課題」に向き合い, 自己の在り方を問いなおす指導方法を検討することができた。

そこで AI(人工知能)が発展し, 生徒一人ひとりを取り巻く環境も価値観も多様化している現状を鑑み, 多様な子供たちに個別最適化の学びの環境を整えていく必要性があると考え。このような時代背景とともに, 本校においても ICT 活用のニーズが高まったことにより, ICT を効果的に取り入れた「主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善」を通して資質・能力の育成を目指していきたいと考え, 主題を設定した。

Ⅲ 研究内容

2 研究内容(具体的取組) ※令和6年度は(3)に重点をおいた

(1)自ら学ぶ力をつける取組(思考力,判断力,表現力等を高める取組)

○授業過程の工夫

課題提示→自立解決→相互解決→まとめ(山北スタイル)

授業の中のどこかでICTを活用する。

(2)基礎学力定着の取組

① 学力を向上させるための学習ノートの活用

学習アプリを活用した家庭学習の実施

② 朝読書→読書活動の定着

③ 山北サポートタイム

(3)教材教具の開発・工夫と1人1台タブレットの活用

- ・主体的・対話的で深い学びに向けたICT活用の在り方に関わる事例研究
- ・各教科における,個別最適な学びに関する教材研究
- ・各教科の実践事例の共有化(研究授業・1人1実践)
- ・1人1台タブレット活用に向けた全校統一の取り組みに関する研究

(4)その他の取り組み

- ・「特別の教科 道徳」は今後も道徳推進教師を中心に研究を深めていく
- ・QUアンケートを活用した,集団づくりに関する研究。
- ・特別支援教育,通級指導教室に関する研究
- ・初任者研修を中心とした研究授業の実施
- ・ECHOES学習について

Ⅳ 成果と課題

〈成果〉

- ・どの授業でもこのスタイルが定着して,生徒も授業スタイルを把握しやすく学習理解も深まった。
- ・タブレットの活用は,徐々にどの授業でもできてきている。様々な実践例もできてきている。今後,個別最適な学びに向けて,生徒一人ひとりが使い方を工夫できるとよい。
- ・初任者研修として,教科・学年で授業案を検討し,初任者以外の教員にも学習できる良い機会となった。授業をみんなで参観して,研究会を持つことは全職員にとってもとても勉強になるのでよかった。
- ・通級教室の考え方や支援が必要な生徒への対応など,適切な手立てがわかり,すぐに実践につなげる研修となった。

〈課題〉

- ・ICTの効果的な活用については,継続の必要性を感じる。各教科の特色を生かして,活用場面の焦点化や効果についてはさらに研究が必要だと感じる。
- ・自主学習(家庭学習)については,AIドリルの効果的な活用と自主学習ノートとの併用について,さらに検討し,有効な活用につなげたい。

(研究主任 丹澤基予子)

主体的に学習に取り組む生徒の育成

～「見方・考え方」を働かせた深い学びを促す指導の在り方～

I 研究の内容

1 研究内容

今年度の校内研は実践研究とし、教師が、生徒の自分事になり得る単元を貫く学習課題や本時の課題設定をした上で、「見方・考え方」そのものや「見方・考え方」を働かせて問題解決することの良さを自覚させるための授業づくりを目指して研究を進めた。また、今年度は山梨市のDX協力校として研修会等に参加し、得た知識をもとに授業の中にICTを取り入れ、「個別最適な学び」や「学びのユニバーサルデザイン」を実現することで、すべての生徒に学びやすい環境を提供できるよう情報共有を行った。

授業の基盤となる学習環境づくり、生徒が取り組みやすい授業の構造化・学習方法、学習内容の定着させる家庭学習に焦点をあてて研究を行った。

(1) 見方・考え方を働かせた授業づくりの工夫

ア 生徒が授業の中で働かせた「見方・考え方」を言語化できる、キーワードを使った振り返りの工夫

イ やまなしスタンダードを活用した授業の構造化

ウ 生徒が「見方・考え方」を共有できる言語活動の工夫

(2) 生徒が学びに向かう環境の設定

ア Q-Uの分析から介入方法の検討・実践

イ ICTを活用した学習活動の充実

(3) 保護者や地域・小学校との連携（家庭学習等）

ア 自主学習ノートの有効活用

イ 家庭学習について、家庭への協力を依頼

ウ 学習規律や板書方法について小学校との共有

エ 地域の方々に協力してもらった実習体験を通じた学習

（協働的な学び・山梨市 ECHOES 学習）

2 具体的実践

(1) 2学期に一人一実践を行った。

●英語科 Unit6 Work Experience【2学年】

学習課題を達成するために、ICTを活用する。授業開始時に Classroom にて授業目標とループリックを共有し、個人の目標設定を行う。授業終了時には振り返りを行い、スプレッドシートにキーワード等を記入する。

●数学科 図形の移動【1学年】

図形を移動させる方法を、図形の特徴を使った見方・考え方で自分なりにまとめ、それを相手に伝える活動を行うことで、主体的な学びと協働的な学びを促す。また、ICTを用いて生徒の理解を促し、効果的な授業の実践を行う。

●国語科 平家物語【2学年】

登場人物の言動に着目して気持ちを読み取ることで、国語科の見方や考え方を働かせることにつなげていく。また、交流に google スライドを取り入れることでお互いの意見を参照しやすくし、交流を促進させる。

●体育科 バドミントン【1学年】

バドミントンの強いラケット操作を習得するうえで、シャトルのどの部分を、どのように打てば鋭い打球になるのかについて研究する。その際に、クロームブックのカメラを用いて視点を変えながら技能の習得に取り組む。また、ポイントを個人が「見方・考え方」をはたらかせて習得する。

(2) 指導主事を招いての研究授業を行った。

●社会科 公民分野(個人を尊重する日本国憲法・基本的人権)

3年1組 10月16日(水)実施

助言者 東山梨教育事務所 主幹・指導主事 立川慶樹先生

授業者 大村 公紀教諭

「個人の尊重とはどういうことか」と「それはどのような方法で実現できるか」を考える際に、政治にかかわる視点を用いたり、法律の関わる視点を用いたりする。それらの概念や理論を用いて、「見方・考え方」を働かせて目標に迫らせる。

(3) 6月と11月にweb Q Uを実施し、分析結果を共有した。

(4) 山梨市のDX推進事業の一環として、春日井市の視察を行ったり、研修に参加したりした。

(5) 放課後に10分間の「スタンバイ」の時間を設け、授業の振り返りを行う中で、家庭学習につなげた。

(6) 義務教育学校設置に向け、小学校との情報共有を行った。

(7) 山梨市 ECHOES 学習の一環で地域の方を講師として、1年生が農業体験・味噌づくりを行い、2年生でほうとうづくりを行った。

(8) 毎週学年で一人ずつ担当を決め、N I Eの取り組みを行った。

II 成果と課題

1 成果

- ・各教科で「見方・考え方」を働かせて問題解決するための教材研究ができた。
- ・身近なテーマを題材にすることで学ぶ意欲を高め、明確なゴールを意識することができた。また、そのゴールに到達するまでのスモールステップとして見方・考え方を研究していくことが大切である。
- ・I C Tを活用して目標設定や振り返りを行い、キーワードを記録するなど、授業の構造化を図ることができ、生徒にも定着してきた。
- ・ループリックを用いて、それぞれが目指す課題レベルの選択をしたり、課題の取り組み方法を自己選択、自己決定する場面を設定したりできた。

2 課題

- ・各教科の見方・考え方を働かせるような発問や授業展開を具体的にするために、各教科がどんなことに取り組んでいるのかなどの中間情報共有をする機会を設ける必要がある。
- ・「見方・考え方」が抽象的であったり、教科について異なる部分があったりするため、全体で理想の生徒像を共有する必要がある。
- ・すべての教科で思考ツールを生徒が活用できるよう、学校全体で取り組めると効果的だったと考える。
- ・I C Tの操作方法に時間をとられてしまうことがあったため、効率的な授業という目的からはそれてしまう場面も見られた。

III 成果物

研究授業指導案、一人一実践学習指導案、Q U分析・クラスごとの介入方法、笹川ノート活用事例、学習評価規準

(研究主任 中島 直美)

「主体的に学ぶ心豊かな生徒の育成」

～集団づくりを基盤とした学力向上への取り組み～

I 研究の内容

甲州市では国や県の施策を受けて、地域に根差した教育を進めていくための取り組み（平成23年10月に「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト委員会」が発足）が今年度より「甲州市 夢をかなえる学びのプロジェクト委員会」と名称を変更し、継続して行われている。プロジェクトの柱として挙げられている「クラウド環境を前向きに活かす」「子ども一人一人が主語」の実現に向けた取り組みを継続し、生徒が自ら学びを調整する「複線型」の授業づくりを目指している。これまでの授業観から大きく転換していかなければならないことに難しさを感じつつ、試行錯誤しながら実践を行う1年間だった。

本校の現状を見てみると、市のプロジェクトの基盤となる「集団づくり」という点において、生徒相互のあいさつや支え合い、学び合い、様々な活動を通して、さわやかで充実した学校生活を送っている様子がうかがえる。WEBQUの分析において、「満足度群」の割合が全国平均を上回っていることから、落ち着いた学校であると客観的に見ることもできる。しかし、不登校生徒の数を見てみると、長期欠席者の人数がここ数年増加傾向にある。生活習慣の乱れが主な原因となっているが、友人関係の問題や集団生活への不適応が原因となっていることも多い。

学力面においては、全国学力・学習状況調査や県学力把握調査において2教科ともに平均点を上回り、生徒の学力向上に対する取り組みの成果が現れてきている。また、リーディングDXスクール事業の指定2年目となり、ICT端末を活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業研究に取り組んできた。また、今年度は甲州市が「学校情報化先進地域」の認定を受け、本校が効果的なICT端末の活用について研究し、地域へ発信していく立場となっている。

以上のことを踏まえ、今年度も「集団づくり」というこれまでの方針を受け継ぎつつ、それを基盤とした学力の向上を目指した研究を進めてきた。

*研究の柱となる具体的内容と方法

「SUN（ステップアップノート：自主学習ノート）」、「SUT（ステップアップテスト：五教科の小テスト）」、「一人一実践」、「WEBQUの活用」、「ICT端末の活用」の取り組み

- 1 SUNとSUTの効果的な活用を検討する。
 - (1) 「スタンバイの時間」における課題設定の方法の研究を行う。
- 2 市のプロジェクトと連携した授業の構造化を目指す。
 - (1) 市のプロジェクトで作成された「Teachers note」を全職員が確認して、学力向上に向けた授業実践を行う。
- 3 「一人一実践（ステップアップ授業）」を行い、全員が授業を公開することで各教科の授業力を高める。
- 4 WEBQU調査の分析を行い、生徒の実態を把握する。
 - (1) 市のプロジェクトにおける「各校の取り組み内容」を参考にして、各校の実践で効果のあったものを共有し、対応策シートの作成・実践を行う。
- 5 ICT端末を活用し、「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業を行う。
 - (1) 「めあて」や「ループリック」「本時の流れ」を端末上（Google classroom）に提示しておき、生徒が学習内容を把握した上で学習に取り組む流れを定着させる。
 - (2) 「振り返り」と「自己評価」の時間を確保し、学習を振り返えさせる。
 - (3) 「振り返り」では、クラウドを活用して生徒が互いの考えを共有できる状況を作り、文字数をカウントしてアウトプットの量を増やしていく。

Ⅱ 成果と課題

1 ICT端末を活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業について

今年度はリーディングDXスクール事業の指定2年目となり、昨年度からの取り組みを継続と更なる前進を目指した。昨年度から取り組んでいるGoogle classroomを活用して、「めあて」「ループリック（評価基準）」「本時の流れ」を事前に提示すること。「振り返り」の場面では、クラウドを活用して、他者の考えについて触れられるようにしたこと。これらの取り組みは教員・生徒共に定着し、授業づくりの基盤をつくることができた。また、昨年度と同様に学校DXアドバイザーである山梨大学准教授の三井一希先生を講師にお迎えし、5回にわたる学習会を行うことができた。三井先生からの助言をいただく中で、今年度は全教科共通で振り返りシートの「文字数カウント」と「振り返りの時間の確保（目標5分間）」に取り組み、各教科では教科の特性を意識した取組を検討し、挑戦した。

成果としては、「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業を最先端で行っている様々な学校を視察させていただき、そこで学んできた効果的なICTの活用方法を校内で共有したことにより、授業力の向上につながることができた。また、「文字数カウント」をすることで、確実にアウトプット量の増加につながった。さらに、本校においてブロック交流研と併せて行った授業公開等に、全職員が一体となって取り組み、これまでの研究の成果として、「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業を校内外へ発信することもできた。

課題としては、「文字数カウント」によるアウトプット量の増加が見られた一方で、内容について整理されていない生徒も多い。それと同様に、授業内でも「整理・分析」の場面でポイントを押さえたまとめがうまくできない生徒が多かった。また、教員がどうファシリテートして授業を進めていくか、各教科で検討し、それぞれが研究を重ねていくことが大切である。そして、学習の基盤である学級づくりにおいては、WEBQ Uの調査結果をもとに、教室に適應できない生徒やコミュニケーションをとることを苦手とする生徒、グループに入れない生徒などへの対応がさらに必要である。

2 「SUN(ステップアップノート)」「SUT(ステップアップテスト)」の取り組み

学力向上を目指して、市のプロジェクトと連携して上記の取り組みを通年で実施した。「ステップアップノート」の取り組みを通して、学習習慣の定着に繋がっている。しかし、生徒が取り組んでいる内容については個人差があり、すべての生徒の効果的な学習に繋がっていないのではないかとこの反省があった。また、「ステップアップテスト」の取り組みでは、基礎・基本の定着の一助とはなっているが、個々のレベルに合わせた内容になっていないという反省があった。今後も「個に応じた学力向上」に向けて実施内容や方法を改善する必要性があるので、引き続き研究していきたい。

3 研究のまとめと来年度に向けて

甲州市の「夢をかなえる学びのプロジェクト」を校内研究の基盤とし、それを深化・発展させるべく1年間の研究を進めてきた。WEBQ Uの分析により、普段はそのような素振りを見せない生徒も集団の中で悩みを抱えていることが発見できた。学校全体で分析結果を共有することで、支援が必要な生徒にそれぞれの立場で接することができたので、来年度も継続して取り組んでいきたい。

本校研究の主題にある「主体的に学ぶ」生徒の育成について、この1年でICT端末を活用しながら学習者主体の授業づくりに取り組んできたが、元々学習意欲の高い生徒については、主体的に学習に取り組めるようになってきている一方で、学習に苦手意識を持っている生徒をいかに主体的に学習に向かえるように支援していくか、といった課題が見えてきた。この課題については、授業における「課題設定」が大切であるといえるので、各教科で更なる研究を進めていく。

来年度も、今年度と同様に「学力の向上」や「授業改善」をさらに進めていくために教師の資質向上に努め、生徒の資質・能力を育成していくために、全職員が一体となって校内研究を進めていきたい。

(研究主任 中村健太)

「生き生きと学びつづける生徒の育成」

～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～

I 研究の内容

1 主題設定の理由

近年、情報化や科学技術の高度化、国際化など、社会はめまぐるしい変化を遂げ、生徒を取り巻く環境も大きく変わりつつある。特に、新型コロナウイルスの感染拡大により、ここ数年で、リモート授業の普及や一人一台端末の活用、授業でのICT教材の活用など、加速度的に学校現場にも大きな変化が起きている。そのような社会情勢や教育の現状を踏まえ、今後の教育課題について考えてみたとき、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要だといえる。

本校では一昨年度、県総合教育センター情報研究部の研究協力校として、指導助言をいただきながら1年間研究を進めてきた。授業内での一人一台端末の利用をはじめとするICT機器・教材の運用だけでなく、家庭学習におけるデジタル教材の有効活用についても学び、生徒自らが課題を選択し取り組む「個別最適な学び」についての研究を深めることができた。

これまで研究を進めてきた「主体的・対話的で深い学び」と「ICTの効果的運用」をさらに深化させ、「令和の日本型学校教育」が示す個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるような研究を行っていくことで、さらに発展的な研究が行えると考える。以上のような理由で、研究主題を設定した。

2 研究の主な具体的取組内容

(1) 基礎学習

ア 研究についての基礎学習

○「令和の日本型学校教育」について

イ 研究のための環境づくりとしての研究

○Web-QUを取り入れた支援法の研究と実践

○塩北ライフの実践と改善

○スタンバイノートのさらなる活用（ICTを含めて）

(2) 授業実践に向けた研究

ア 「個別最適な学びと、協働的な学びの実現」をめざすための工夫についての研究
※学校教育の質の向上に向けたICTの効果的な活用について

イ 「個別最適な学びと、協働的な学びの実現」をめざすための研究
※「指導と評価の一体化」を意識した授業改善

ウ 生成AIについての学習とその活用法についての研究

※校務の効率化，現在の生成 AI を取り巻く諸問題について

エ 甲州市夢をかなえる学びのプロジェクトとの連携

○各部会の成果物の生徒への還元

○甲州市の統一取組の実践

II 成果と課題

1 成果

- ・研究授業では発問や授業展開など，複線型を意識して授業検討ができ，違う教科であっても，勉強になった。
- ・一人教科担任ということもあり，全員で一つの研究授業に関われることで，とても勉強になった。自分の教科に生かせることは何なのか，どう利活用していくことができるのかを，今後もしっかりと学ぶ場としていきたい。
- ・複線型授業について学ぶ機会があったことで，「できるところから始めてみよう」など前向きな気持ちをもつことができた。
- ・少人数での端末を活用した複線型授業の実践だったので，子どもたちが直接交流したときと比べてどの程度効果があったのかはわからないが，今年度全員で研究したことがきっかけとなり，今後複線型授業に前向きに取り組もうと思えるようになった。
- ・自分自身が複線型授業を行おうと思ったとき，どう取り組み始めるべきかを学ぶことができた。ここからどう発展させ，継続研究していくべきかが重要だと感じている。

2 課題

- ・個別の学びから協働的な学びにどのように発展させていくかについてもっと学びたいと感じた。
- ・どのように授業を進めることができるのか，どのように授業を行うことが良いのかを，公開授業等でより学ぶことができたなら，と思う。また還流報告についてもこれまで以上に生かしていきたいと感じる。
- ・QU 分析は，集団作りを行う上で，とても大切であると感じている。人数に関わらず，QU の考え方や分析の仕方をもう一度基礎研究として捉えていくべきかと思う。QU について改めて研究していくことも必要であると感じた。
- ・個別最適・協働的な学びについて，さまざまな授業をモデルとして見ることでできたなら，私たちの行き詰っているところが少しでも前に進むのかと思った。
- ・生成 AI についてももう少し一緒に学ぶ機会があればと思った。使えるものは積極的に使っていく姿勢が大切だと感じることはできたのは成果である。

(研究主任 三枝洋介)

自ら求め、学ぶ生徒の育成

～学習者主体の授業づくり・自己調整力の育成を目指して～

I 主題設定の理由

学習指導要領では、令和の日本型教育(「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実・「一人一人が主語」である「学習者主体の授業」の日常化)を目指した6点の柱を挙げている。「全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するために、教師が支援の必要な子供に、より重点的な指導を行うことで効果的な指導を実現すること」を求めている。生徒一人ひとりの特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定し、生徒は学習内容や学び方を選択し、基礎基本となる知識や学び方を身につける「指導の個別化」が必要である。

また、基礎的・基本的な知識・技能等や、基盤となる資質・能力等を土台として、様々な場面を通じた体験活動から得た生徒の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行うことが求められている。教師が生徒一人ひとりの興味・関心に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、生徒自身、学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。「指導の個別化」と「学習の個性化」という二つの側面を踏まえるとともに、ICTの活用も含め、「学習者主体の授業」に向けて、生徒が自分にふさわしい学習方法を模索し、自己調整していく態度を育成することを目指して、主題を設定した。

II 研究の具体的な内容と方法

1 甲州市「夢をかなえる学び」のプロジェクトとタイアップした教育研究

(1) 好奇心を伸ばす探究学習の充実

昨年度まで、テスト前や長期休みに学習会として「Nobiruba」、家庭学習として「松中ノート」により、個別最適な学びに取り組んできた。今年度、生徒が自分らしく前向きに取り組む、興味のあるものに対して「夢をかなえる」ための「好奇心を伸ばす場」として「Nobasuba」の取り組みを加え、「学びのつながり」「学びの広がり」「学びの深まり」を目指した。

(2) WEBQU の実施と結果分析

学級・集団づくりの質の向上のため、WEBQU を実施した。人やものを大切にする心を育て、仲間とのつながりを意識した学級経営を模索し、感謝の気持ちを伝え合える安心感や信頼感のある人間関係(相互依存)の構築を図った。

(3) 授業の構造化への追究

授業前の「めあて」の確認や、授業後の振り返りを通して、「やったこと」「わかったこと」「次にやること」を明確にさせることで、自己調整力を高めるとともに、学力の定着を目指した。さらに、学びを深めるためのツールとしてICT端末を活用し、授業の構造化をさらに進めた。

2 本校独自の研究

(1) 教師と生徒のウェルビーイングを実現するための1人1プロジェクト

松中で大切にしたい【5C】の視点を意識して取り組んだ。教師がウェルビーイングを実現するため、1プロジェクトを成し遂げる中で、問題発見・解決能力を育み、自己肯定感ひいては自己効力感を高めていくことを目指した。

(2) ICT 端末を効果的に活用し、「複線化」を意識した1人1実践

複線化(「課題」×「活動」×「協働」)を意識した1人1実践を行った。生徒一人ひとりが問題解決にむけての目的意識をもち、問題発見・解決能力を伸ばし、「見方・考え方」を働かせることで言語能力・思考能力を高め、それぞれの教科等の目標を実現するとともに、情報活用能力の向上を図った。

(3) 学びの基盤づくり

学びの基盤づくりとして「Nobiruba(伸びる場)」「Nobasuba(伸ばす場)」「学習集団づくり」「授業づくり」に取り組み、生徒の学校生活の土台をしっかりと築く中で、個別学習や協働学習に取り組んだ。また、学年や教科のつながりを意識して、指導と評価の一体化の充実を図った。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

今年度の校内研究について、年間を通して実践を深めながら、1人1実践を通して他教科からも学びを得ることができたという意見が多かった。そして、ICT活用や学習者主体の授業への理解を深め、学習者主体の授業を意識して積極的に取り組むことにより、生徒たちが生き生きと学習する場面が増えた。また、研究方法としては、「指導案への資料のリンク挿入」「研究の柱」ごとにチャットのスレッド機能による意見共有」「1人1実践のまとめ」を新しい形にすることができた。お互いに刺激し合いながら、着実にスキルアップすることができた一年であった。

2 課題

「学習者主体」の活動となるよう、生徒自身が気付き、考え、実践していけるような手立てを考え、自己調整力を育成していく必要がある。教師がそれらを意識して、「資質・能力」の育成についての研究を進め、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力」「豊かな人間性」をはぐくむことを大切にしていきたい。そして、教師が学び続け、変化(変容)につなげていけるよう、これからも研究を推進していきたい。

(研究主任 竹川佳那)

5C

研究の柱

授業実践例

Nobasuba について

Nobasuba 実践例

1人1プロ実践例



「学びを振り返り、生徒と共に創る学びの実現」

～個別最適と協働的な学びのためのICTの活用を通して～

I 主題設定の理由

勝沼中学校の学校教育目標と甲州市で進める夢をかなえる学びのプロジェクトをもとに、確かな学力を育成する集団づくり、授業づくりを推進し、併せて豊かな心を育む取り組みを実践することをねらいとする。主体的・対話的で深い学びの実現には、質の高い授業を教師が行うことが求められている。さらに学ぶ側の生徒の学級づくりを進めることが不可欠である。しかし、生徒を取り巻く社会も大きく様変わりし、貧困をはじめとするさまざまな困難を抱えている家庭や生徒も多く、特別な支援を必要とする生徒も多く存在する。QU 分析、授業評価シート等を活用し、生徒の土壌づくりに生かしていくことが大切である。校歌の歌詞の中にある「学舎は常に愉しく」という言葉は、勝沼中のキーワードであり、生徒が学ぶことが愉しくなるように教師集団がひとつのチームとなって授業づくりと学級づくりに主体的に挑戦し励んでいくことを表している。誰一人取り残さない教育の実現に子供たちにとって「明日また行きたい学校」となる魅力ある学び舎を創造していくためには、学校生活の中で大半を占める授業が分かる授業であることが不可欠である。そのために、生徒の声に耳を傾け、困りやつまずきの様相を把握し、それを授業改善に生かすことが必要である。また、生徒が授業に集中し、主体的・協働的に学ぶためには、落ち着いて安心して学べる学習集団であることが不可欠である。学びに向かう学習集団をつくるには、教師の確かな教科経営力・学級経営力はもちろん、生徒が望ましい学習集団づくりに主体的に参画することが重要である。

そこで、本年度は、振り返りをすれば「次の学びにつながる」ということを、生徒自身が体感していくことで目的意識をもって振り返りに取り組み、自分にとって、この経験はどんな意味があったのかを言語化していったときのすっきりとした感覚を味わうことができたならば、それが振り返りを行なう目的となる。あとで見返したときにその授業内容が鮮やかに思い出せるような授業の振り返りの習慣化が当たり前になったとき、授業に対して見通しや目的意識を持って生徒と教師が共につくる学びが実現できると考えた。さらに、リフレクションは「反射」「反映」「内省」という意味があり、自分の行動や考え方を振り返り、見つめ直すことを意味する。今、行っている自分の学びがさらにより良いものになるためには、効率化や改善点を見つけるために振り返りにリフレクションの視点を取り入れることが重要になる。生徒自身がリフレクションを取り入れた振り返りを通じて、「自分はどのよう成長したのか」「何が上手くできなかったのか」等を表現できるようにすることで、「次はこうしてみよう」「これについて、もっと深く学びたい」など、子どもを主語にした、次のより深い探究への主体的な取り組みにつながるような活動を本年度は仕組んでいきたい。さらに、深い学びのための「ツール」となるICTを最大限活用しながら、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実を図ることで生徒と共に創る学びの実現を目指す。そのために、日常的な職員間での学び合い、講師を招聘しての校内研修の充実等の取り組みを行い、教師のICT活用や指導力向上をも図っていきたい。

II 研究の具体的内容と方法

生徒主体の授業づくり

・ICT活用

・ICTを活用した振り返り活動の実践

- ・振り返りの方法・・・リフレクションの視点を取り入れる
- ・振り返りの実践・・・振り返り結果から授業改善

- ・ラインズ等の ICT を活用した家庭学習の実践
 - ・実践データ（回数・頻度）
 - ・実践の成果
- ・ Fig jam の活用実践
- ・ Figjam についての研修
- ・ ICT を活用した複線型授業（研究授業）
- ・指導案検討
- ・研究授業
- ・生成 A I 活用に向けての学習会
- ・個別最適な学び、協動的な学び
 - ・単元テストや「朝学習」（定期テスト前 1 週間）、「学舎タイム」の設定
 - ・朝学習・学舎タイムの実践※
 - ・生徒アンケート
 - ・C R T 検査や全国学力学習状況調査、県学力把握調査の分析及び指導の改善・分析・指導の改善
 - ・指導の改善前と後の変化（似た問題で正答率の変化を調べる）
- 学級づくり・集団づくり
 - ・ソーシャルスキルトレーニング（アドジャン等）で居心地の良い居場所づくり
 - ・その他甲州市の共同取り組み
 - ・甲州市「ティーチャーズノート」の活用
 - ・平和教育の実施（わだつみ平和文庫講演会、授業実践）
 - ・1 人 1 台端末を活用した「心の健康観察」
 - ・授業の構造化（めあて（学習課題）、まとめ、見通し、振り返り等の提示）
- ・継続実践
 - ・ユニバーサルデザインを意識した学習環境づくり（掲示物やチョークの色等）
 - ・読書活動の充実（朝読書の実施）
 - ・キャリアパスポートづくり
 - ・授業評価シートを活用し、授業規律の確立（時を守り、場を清め、礼をただす）
 - ・「hyper-QU」の実施と K-13 法での分析及び活用
 - ・授業後の少しの宿題や自主学習への取り組み

※本年度の学び舎タイムは、定期テスト前に設定し、①教科の先生が特別教室に居て、質問のある生徒が特別教室に移動し、質問を行う、②自身でワーク等勉強を進めたい生徒や仲間に質問したい生徒は、自分の教室で学習を進める、③学習進度の差の状況に応じて、補習が必要なクラスは、授業を行う。

Ⅲ 成果と課題

生徒主体の複線型授業づくりに向けて、甲州市 Teacher's Note と ICT を最大限に活用しながら、研究副題である「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実をはかることとし、リフレクションの視点を取り入れた学びの振り返りを実施することで、生徒と共に創る学びの実現に向けた授業改善につなげる手立てとした。教科部会と学年部会に分け、研究主題に迫る「生徒主体の授業づくり」「学級づくり・集団づくり」「家庭学習の習慣化」の具体的な取り組みを行った。

「授業を見なければ、授業は変わらない」「授業を見せなければ、授業は変わらない」「授業研究でしか、授業は変わらない」と言われる。ブロック交流研究での授業公開や一人一実践での授業公開を行うことができた。授業公開では積極的に ICT を活用した校内研究のテーマに沿った授業を計画し、授業参観を計画的に行い、学校内でお互いに参観し学び合い高め合う時間を確保することができた。

学級づくりにおいては、「hyper-QU アンケート」を実施し、学年毎に分析を行い、職員全体で共通理解を図りながら改善策を考えることで「チーム」として学級・集団づくりに取り組んだ。

家庭学習の習慣化においては、教師が授業の終わりにその時間の振り返りができる問題を数問出題し、基礎学力の定着を図った。さらに、もっと学習したい生徒用に自主学習ノートや AI ドリル（ラインズ、MEXCBT、e ボード）の活用を促した。A I ドリルの活用については温度差があるので、さらに充実した取り組みを進めていきたい。

（研究主任 奥山万寿美）

教育協議会研究

○2024 年度 東山梨教育協議会研究の概要 ……61

【教育研究会研究】

国語科 小学校	……65	生活科	……93
中学校	……67	自治的諸活動と生活指導	……95
外国語	……69	特別支援教育	……97
社会科	……71	福祉教育	……99
算数数学 算数	……73	食教育	……101
数学	……75	平和・人権教育と国際連帯	…103
理科	……77	環境教育	……105
音楽科	……79	情報化社会と教育・文化活動	…107
図工・美術科	……81	進路教育	……109
技術科	……83	保護者・地域住民との提携	…111
家庭科	……85	教育条件整備	……113
保健体育科小学校	……87	カリキュラムづくりと総合学習	…115
保健体育科中学校	……89	教育評価	……117
保健教育	…… 91		

2024年度 東山梨教育協議会研究の概要

研究推進委員長 若月 敬二郎

I はじめに

東山梨教育協議会は、東山梨地域全体の教育振興を願って、1964年（昭和39年）に校長会・教頭会・教連の三者が一体となり、県教委、各地教委の協力により設立された。これまでの活動の中で、私たちは「人間性豊かな子どもの育成とその学習を保障する教育活動の探究」を目標に、今日的な課題の解決に向けてとりくんできた。また、管理職・教諭・専門職員が協働して組織研究を進め、東山梨地域の学校教育の向上、教職員個人の資質の向上、教職員相互の強固なネットワークの構築を図り今に至っている。

一方で、子どもたちや学校教育をとりまく状況をみると、多くの課題が山積している。2022年度、文部科学省調査によると、不登校の子ども数は、小中学校、高等学校ともに前年度に比べて増加傾向にあり、小中学校で29万9048人となっている。とりわけ小中学校の増加率は前年度比から22.1%増となっており、過去最多となっている。山梨県内でも過去最多の2,054人となった。また、不登校の子どものうち、38.2%が学校内外の機関で相談を受けることができない現状がある。

2022年に15歳の子どもたちを対象にOECD（経済協力開発機構）が行った「PISA」と呼ばれる国際学力調査において、日本は課題とされていた「読解力」が大幅に改善し、前回の2018年と比べ「読解力」「数学的リテラシー（応用力）」「科学的リテラシー（応用力）」の3分野すべてで平均得点や順位が上昇し、世界トップレベルとなった。また、「PISA」の質問調査の結果を見ると、授業における教師の支援に関する項目や、生徒の学校への所属感に関する項目では、肯定的な回答の割合が高い結果となった。ところが、課題解決に対する自己効力感に関する項目では、日本はOECD平均を下回っており、自信がない生徒が多い結果となった。たとえ学力が高く、教職員や学校に対して肯定的に捉えていても、子どもたちが自分自身を肯定的に捉えていなければ、主体的な学びに繋がってはいかないと考える。子どもたちの自己効力感を高めていくために、私たちは何をすべきかを考えていく必要がある。

本協議会では、2020年度より新しい形の研究体制の構築、発展的再編を行い、課題改善へと歩みをすすめてきた。昨年度はアフターコロナの教育研究活動として、発展的再編を検証する一年となり、それを受け、今年度の教育研究をすすめてきた。教育活動は時代とともに変化していくことが必要だが、ただ時代の変遷に流されるのではなく、我々は、教育の不易と流行をしっかりと捉えた教育研究を行っていかねばならないと考える。子どもたちを中心に据え、学校・家庭・地域に根ざした「心豊かなふれあいのある教育」、「誰一人とり残さない」というSDGsの理念を踏まえたインクルーシブな学校づくり、組織研究の体制を東山梨の教職員が一丸となってすすめていきたい。

II 研究の推進について

1 研究の目標

「人間性豊かな子どもの育成とその学習を保障する教育活動の探究」

2 研究推進の基本的方針

- (1) 1964年発足より半世紀以上が経過した歴史的な重みや意義を重視し、東山梨の抱える今日的な教育課題解決のための研究を推進する。
- (2) 教育課程（カリキュラム）の自主創造的な編成にとりくむ。
- (3) 各学校の校内研究と教協研究との有機的結び付きとその充実を図る。
- (4) 保護者・地域住民との連携を強化する。
- (5) 組織研究の意義を理解し充実発展させるために、積極的な参加意識の高揚と組織的参加体制の確立を図る。

(6)平和・人権・環境教育を積極的に推進し、生命の尊さや平和の大切さの意識高揚を図る。

(7)教協会員数減少への対応、働き方改革の視点から行った教協改革を確実に進め、教協研究の更なる充実をめざした新たな教協体制を確立させる。

3 研究の組織づくり

研究の基底は校内研究にあるとの認識に立ち、課題の本質に迫り、解決の方法・内容を考えたり、専門的力量を高めたりする教育研究会と、同じ地域に勤めるものが課題を共有し、連携を図りながらその解決策を探るブロック交流研究会、さらに特別委員会を設け教協研究の推進を図った。以下、具体的に掲げる。

(1) 教育研究会

共通テーマ：「人間性豊かな子どもの育成と教科教育課程の自主創造的な編成をめざし、教育の本質を実践的に追究する。」

	研究会名		部長	学校名	テーマ
1	国語科教育	小学校	後藤美樹	塩山南小	思考力・判断力・表現力を育む国語科の指導 ～「指導と評価の一体化」を目指して～
		中学校	中島直美	笛川中	主体的・対話的で深い学び実現する国語科の指導 ～言語活動の充実を通して～
2	外国語教育		飯島健太	山梨南中	主体的に英語学習に取り組む児童・生徒の育成 ～伝える力を育む～
3	社会科教育	小学校	山本諭	玉宮小	市民を育てるための「主体的・対話的で深い学びを」を どのように実現するか
		中学校	小島萌絵	山梨南中	市民を育てるための「主体的・対話的で深い学びを」を どのように実現するか
4	算数・ 数学科教育	算 数	菅野雄太	八幡小	つくり、いかす算数授業の創造
		数 学	小高鉄平	山梨南中	わかる授業の工夫と授業実践 ～基礎学力の定着と考える力の育成～
5	理科教育	小学校	青木恵	玉宮小	わかる理科授業の創造 ～楽しく学び、自然を豊かにとらえる理科授業をどのようにすすめるのか～
		中学校	佐藤政幸	塩山中	わかる理科授業の創造 ～考える力の育成と教材教具の工夫～
6	音楽科教育		竹川佳那	松里中	確かな学び 広がる音楽 ～知覚・感受をもとにした音楽的思考力・判断力・表現力等の育成～
7	美術・図工科教育		三枝清美	日下部小	一人ひとりの力を引き出す題材をどうつくっていくか ～感動と発見のある授業づくり～
8	技術科教育		嶋津英斗	山梨北中	「つながり」を深め、資質・能力を育む技術家庭科教育 ～「つながり」を生かした教材開発～
9	家庭科教育		石田周子	山梨北中	「つながり」を深め、資質・能力を育む 技術家庭科教育
10	保健体育科教育 (小学校)		三森美礼	菱山小	教材の本質をふまえた体育指導のあり方 ～体づくり運動(遊び)を通して～
11	保健体育科教育 (中学校)		大澤祐子	山梨南中	生きる力を育てる保健体育学習を目指して
12	保健教育		蘆原歩実	奥野田小	自らの健康づくりに意欲的に取り組む子どもを どう育てるか

13	生活科教育	奥山美恵	奥野田小	子どもが生き生きと学ぶ生活科 ～主体的・対話的・深い学びを引き出すための手立てを通して～
14	自治的諸活動と生活指導	柳澤晴子	笛川小	一人ひとりを大切にした学級づくり
15	特別支援教育	塚田志小美	勝沼小	自立をふまえて（どの子ども共に生き、共に育つ） ～一人ひとりの実態をふまえた支援と指導のあり方～
16	福祉教育	中村咲	塩山南小	学校教育における福祉教育のあり方を探る
17	食教育	五味秋津	東雲小	食生活を考える ～子どもたちのより良い食習慣づくり～
18	平和・人権教育と国際連帯	三枝洋介	塩山北中	平和・人権教育と国際連帯の広がりをめざして
19	環境教育	坂本由香	後屋敷小	「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方 ～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～
20	情報化社会と教育・文化活動	有賀慶史	後屋敷小	情報活用能力の育成
21	進路教育	古屋沙矢佳	松里中	一人ひとりにあった生きる力をつけるための進路指導キャリア教育はどうあるべきか ～小・中学校の実践を通して～
22	保護者・地域住民との提携	新海小緒里	日下部小	地域とともにある学校づくりをめざして
23	教育条件整備	雨宮美沙	八幡小	豊かな教育を子どもたちに
24	カリキュラムづくりと総合学習	藤木真里佳	加納岩小	豊かな学びを創造するゆとりある教育課程の 編成と実践
25	教育評価	小林淳子	東雲小	「生きる力」をはぐくむ評価のあり方

（２）ブロック交流研究会

共通テーマ：「地域が抱える教育課題を共有し、解決に向けた交流を行い、同一地域の小中連携や小中の系統的な教育のあり方を追究する。」

ブロック名		ブロック長	ブロックテーマ
山梨支会	山梨南ブロック	雨宮菜月 (山梨小)	個別最適な学びと協働的な学びの一体化の充実 ～ICTの活用と小中連携～
	山梨北ブロック	向山有紀 (八幡小)	小中の連携を深め、山梨北ブロックの児童・生徒の指導に生かす
	笛川ブロック	平山沙織 (笛川小)	小中の連携とICT活用推進を図る
甲州支会	塩山ブロック	向山紀子 (奥野田小)	小中の連携を深める中で、系統性をつかみ授業に生かす
	塩山北ブロック	青木恵 (玉宮小)	小中の連携をはかり、塩山北中学区の子供たちを育てていこう
	松里ブロック	遠藤香織 (松里小)	同じ地域に学ぶ子どもたちの教育のために、 小、中、地域の交流と連携を深めよう
	勝沼ブロック	塩澤美希 (大和小)	甲州市「夢をかなえる学びのプロジェクト」との連携を図りながら、 同じ地域に生活する児童・生徒に対する系統的な教育の在り方を考える

(3) 特別委員会

ア 教育環境研究特別委員会（委員長 清水誠治 委員…校長会・教頭会・教連・事務職）

イ 児童生徒連絡協議会（会長 勝沼中学校生徒会会長 柳場湊斗 顧問教員 丹治 群）

4 研究会運営

本年度は、25 の教育研究会、7 のブロック交流研究会を設定した。教育研究会は年間8回、ブロック交流研究会は年間2回設定し研究活動を行った。年間計画等しっかりと見通しの上になつての研究活動を更に推進していくことが重要である。

5 研究日と研究集会

毎週水曜日を研究日とし、地区教協研究日以外は校内研究にあてる。厳に校内行事等を入れずに研究時間を確保するようにしたい。春季・秋季・冬季教育研究会は28校の教職員が一堂に会し開催された。

6 研究推進地区

山梨支会を研究推進地区とし、山梨南中学校を会場に各種教研活動を行ってきた。

7 教育講演会

8月6日（火）山梨市民会館

講師：教育評論家 親野智可等 氏

演題：「激動の時代に生きる子どもたちに今何が必要か？ ～先生と保護者にできること～」

III 今後の課題

加速する時代の変化に伴い、時代のニーズに合った教育活動をすすめていく必要に迫られている。その中で、教職員の多忙化改善の視点に立った新しい形の研究体制や教育研究のDX化推進にとりくみ、様々な教育課題解決に向けて、私たちはさらに質の高い研究活動をすすめていく必要がある。そのためにも、トップダウンの教育実践ではなく、目の前の子どもたちの実態を的確に捉えた上で、本当に必要な教育とは何かをもう一度見つめ直す必要がある。目の前の子どもたちが、夢と希望をもち、瞳を輝かせて学び合うような教育活動をめざして、仲間とともに教職員としての専門的な力量を高める組織研究をすすめていきたい。東山梨教育の長い歴史の中で、先輩方が積み上げてくださった私たちの組織研究に誇りをもち、一人ひとりがその意義を自覚する中で、東山教育がさらに充実・発展するよう努めていきたい。

〈東山梨教育協議会役員〉

役職名	氏 名		
会 長	久保田英樹（塩山南小）		
副会長	藤波 貴（日川小）	前田 大輔（山梨南中）	
事務局	若月敬二郎〈研究推進委員長・事務局長〉（後屋敷小） 日野原和貴〈事務局次長〉（加納岩小・教育会館）		
委 員	久保田英樹（塩山南小）	倉田 憲一（山梨北中）	日原 英二（山梨小）
	廣瀬 敦子（松里小）	伊藤 淳司（塩山北小）	
	藤波 貴（日川小）	金井 巖（祝小）	堀井 勝彦（八幡小）
	橋本 尚一（笛川小）	坂本 伸也（山梨南中）	
	前田 大輔（山梨南中）	広瀬 竜太（笛川中）	若月敬二郎（後屋敷小）
	保坂 洋仁（勝沼小）	日野原和貴（加納岩小・教育会館）	
会 計	保坂 洋仁（勝沼小）		
会計監査	清水 岳人（日川小）	田邊 秀樹（勝沼中）	中村 大介（塩山中）

思考力・判断力・表現力を育む国語科の指導 ～「指導と評価の一体化」を目指して～

I 研究テーマについて

学習指導要領（平成 29 年告示）の中で、「カリキュラム・マネジメント」の充実について示されており、「教育課程を編成・実施し、学習評価を行い、学習評価を基に教育課程の改善・充実を図るという PDCA サイクルを確立することが重要」と示されている。また、私たちの日々の授業を振り返っても、計画、実践、評価、改善という一連の流れを繰り返しながら行い、児童のよりよい成長を目指した指導を行っている。児童の成長を見取り、その成果に応じて次の指導を行う「指導と評価の一体化」は非常に重要である。また、学習指導要領「総則」には、「児童のよい点や進歩の状況を積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること」「学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」と書かれている。評価は、教師の授業改善の観点のみではなく、児童自らが学習改善を行っていくためにも重要なものである。昨年度の研究では、表現力や語彙力を高めることについて考えを深め、日常的な取り組みの積み重ねが子どもたちの表現する力・言葉を大切にしようとする気持ちを高めることに繋がっているということが明らかになった。今年度も、昨年度の研究を引き継ぎながら、評価が教師の指導改善につながるものとなっていたのか、より議論の中に柱立てをしながら研究を進めていく。「見取りの視点」「児童の変容」「教師の振り返り」「その後どのような改善を行ったか」の視点をより意識しながら研究を進めていく。

II 研究の内容について

1 研究方法

- ・授業研究 …児童の実態に即した(発達段階に応じた)授業研究の取り組みを行い、
検証する。→教材・話題の発掘
- ・実践交流 …国語科の学習で思考力・判断力・表現力を育むための指導をどのよう
に行ったか実践を発表し合い、交流する。

2 授業研究

(1) 単元名 書くときに使おう

(2) 教材名「言葉から連想を広げて」(光村図書 4 年下)

甲州市立東雲小学校 第 4 学年 水上 千春 教諭

(3) 単元の目標

- ◎自分の考えとそれを支える理由と事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫
することができる。【思B(1)ウ】

○必要な語句などの書き留め方を理解し使うことができる。【知(2)イ】

(4) 成果と課題

○授業者の「自分がおもしろいと思う詩をつくってほしい。」という思いがよく伝わっており、子どもたちから「詩をつくるのが楽しい。」「つくった詩をみんなに紹介したい。」という気持ちが伝わってきた。

○友だちとの交流の中で、イメージマップを広げ、詩を完成させる子がいた。友だちとの関わりが学びを豊かにし、その積み重ねが成長につながっている。

○クイズをしながら「どうしてこれにしたの？」と友だちに問いかけたり、説明を聞いて「そういうことか。」と納得したりする子どもの様子が見られた。

●「別の何かにたとえる」「その物になりきって考える」ということが難しい子もいたため、授業の途中で子どもたちの詩をいくつか紹介するとイメージがしやすく、意欲づけになったかもしれない。

●完成の前段階の詩がおもしろい子がいたため、なぜそちらを選んだのか聞いてみるのもよかったかもしれない。大人は、ギャップのあるものや意外な組み合わせの詩を良いと感じるが、子どもはわかりやすいものを選ぶ。そのため、おもしろさを子どもたちにも伝えていくことが大切である。

●一言詩であるが、長く説明的な文になってしまう子もいた。完成した詩を肯定しながら「もう少し短くするならどうする？」と修正させると良い。

Ⅲ 成果と課題

○テーマに基づいて実践交流をしたり、授業案検討をしたりしたことが、子どもたちの表現を楽しむ姿につながっていた。子どもたちの見方を豊かにしてあげることが表現力の向上につながったと思う。

○実践交流を行い、発問の仕方や授業の展開の仕方を学ぶことで、各自がスキルアップすることができた。思考力・判断力・表現力を養うヒントを学ぶことができた。

●子どもの表現をどう評価するか、具体的に共有できるとよい。

●学習内容について系統性を意識した研究ができれば更に研究が深まっていく。

●子どもたちの実態からどんな力を身に付けていく必要があるのか、現状とゴールを見据え、今後も国語科の研究を進めていく必要がある。

(部長 後藤 美樹)

主体的・対話的で深い学びを実現する国語科の指導 ～言語活動の充実を通して～

I 研究の内容

本部会では生徒の実態を踏まえ、上記のようなテーマで研究に取り組んできている。コミュニケーションツールの変化や人間関係の希薄化、情報があふれている現代社会において、自己の学びを調整しながら主体的に学びに向かうこと、また教材との対話や生徒同士、教員との対話を通して学びを習得していく力が、今まで以上に必要となってくる。適切な言語活動の充実を通して国語力をつけるために、本研究テーマを設定した。

本年度は、評論文「君は『最後の晩餐』を知っているか」と解説文「『最後の晩餐』の新しさ」を比較させることで筆者の意図による文章表現の工夫に気づき、自分の表現や今後の文章の読みに役立てていくことをねらいとした。

II 成果と課題

指導案検討を通して、お互いの実践事例を報告しあったりアイディアを共有したりする中で、生徒が主体的に学ぶ工夫やわかる授業について考えた。また、授業実践を通して、「生徒にどのような力をつけさせるか」という目的を明確にすることが大切だということを確認できた。そのためには、学んだことを他の領域でも活用できるような、系統性を意識した指導に努めることが必要である。また、授業の中で学習したことを生徒に問い返す時間をとるような計画が、考えを深化させる授業を支える。生徒が主役の授業となるよう、来年度以降も検討を続けていく必要がある。

今回はICTの活用としてCANVAを利用し、文章を視覚的に整理する活動を行った。生徒の思考が整理されて理解につながったことやグループ・クラスでの共有が主体的・対話的なものとなったことなど、有効性を感じることができた。しかし、国語科として「ICTの活用」と「書くこと」「話すこと」の実践の必要性など、今後もバランスを考えて検討していく必要があると確認した。

III 成果物 指導案

指導者 中島 直美

1 単元名・目指す言語能力

価値を語る

君は「最後の晩餐を知っているか」／「最後の晩餐」の新しさ

～二つの文章を比較して自分の意図が伝わる表現の工夫を考える～

2 教材名 君は「最後の晩餐を知っているか」／「最後の晩餐」の新しさ（光村図書）

3 展開

目 標 二つの文章を比較し、文章の表現の効果について考えよう。

授業の展開

過程	学習内容と学習活動	◆指導上の留意点 ☆評価規準 ○言語活動
導入 5分	1 本時のめあてと学習の流れを確認する。 2 前時の振り返りをする。	◆大型モニターに流れを映し見通しをもたせる。 ◆「君は『最後の晚餐』を知っているか」と『最後の晚餐』の新しさを書いた目的について確認する。
展開 40分	3 二つの文章の表現の特徴について考え、選択肢を移動させる。(canva) 各文章の特徴を選択肢から選んで移動させ、どの表現を根拠に選んだのかを、メモ欄に書く。 選択肢 主観的 客観的 事実 比喩 比較 問いかけ 4 二つの文の違いから、「君は『最後の晚餐』を知っているか」の表現の効果を考えてまとめる。 5 次時、どのようなことをテーマに文章を書きたいか考える。	◆文章のどの表現を根拠に選択肢を選んだのか、根拠となる表現をメモ欄に記入させる。 ◆班で作業を行い、全体で発表させる。 1 班を指名して大型モニターに映し、根拠を挙げながら全体で確認する。 ☆二つの文章の特徴を整理できているか確認する。〔知識・技能②〕 ◆ひとつひとつの特徴に着目させ、特徴を根拠として、どのような効果があるかを考えさせるようにする。 ◆個人で考えた後、考えを班で共有させる。 ☆観点ごとに二つの文章を比較し、それぞれの特徴を考えているか確認する。〔思考・判断・表現②〕 ○説明や評論などの文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること。
まとめ 5分	6 振り返りシートに本日の振り返りを記入する。	

4 本時の評価

Aと判断する状況

文章を比較して評論文の表現の効果について考え、効果的な使用場面を考えることができている。

Bと判断する状況

文章を比較して評論文の表現の効果について考えることができている。

Cへの手立て

評論文が読み手にどのような伝わり方をするか助言したり、グループワークで仲間の意見に触れさせたりすることで、評論文の特徴に気づけるよう支援を行う。

(部長 中島 直美)

主体的に英語学習に取り組む児童生徒の育成

～伝える力を育む～

I 研究の内容

1. 主題設定の経緯と理由

本研究会では毎年、研究会で学んだことを授業で活かせるように、部会員による具体的な実践報告、およびその検討を主とした研究を行っている。

本年度は「主体的に英語学習に取り組む児童・生徒の育成～伝える力を育む～」を研究テーマとして、小中連携という視点も踏まえ、これまでと同様、小学校教員と中学校教員とで同じテーマのもと研究を進めていく。

本年度の研究では、昨年度まで3年計画で研究を行ってきた「表現」というところから離れ、「伝える力を育む」とし、いかに児童生徒が英語に親しみ、英語学習へ主体的に取り組む態度を育成するか、英語学習の基盤である語彙指導などを研究していきたい。それにあたり、ICT機器の利用や、協同学習・個別最適な学びの視点も考慮しながら、児童生徒が英語を学ぶ中で達成感が得られ、次の学習へとつながるように指導するために何が必要か考えていきたい。

研究を進める中で、昨年度まで学年別で1つの題材について共同で教材を作成していたが、本年度はそれぞれの研究会の際に、普段使用している教材を持ち寄り、全体やグループごと共有していきたいと考えている。そうすることで、互いの実践を知ることができるだけでなく、次の日の実践に結びつけられる材料が増え、児童生徒に還元できるのではないかと。また、教師同士の指導力向上へもつながるだろう。

英語学習においては、小・中学校の連携を軸に、児童・生徒達が「楽しい」と感じ、「わかった」と思う授業を創造することで、学習者がより主体的に取り組むことができる。また英語を使って理解できた、意思疎通ができたという達成感が大切になる。そのためには、英語学習の基本に立ち返り、多様な指導法を研究していくことが必要と考え、本研究テーマを設定した。

2. 研究の内容

- ・研究主題に迫るための指導案作成と授業実践（統一授業研を含む）
- ・教科書題材を活用した、教材作成や指導法の共有
- ・日々の実践共有と意見交換

（1）授業実践研究

第1回統一授業研究会 山梨南中学校 安富 あすか先生

第2回統一授業研究会 塩山北小学校 山口 大弥 先生

（２）実践共有等

各学校の部員が、日々実践していることを持ち寄り、議論を行った。その中で多く上がっていたのが、「目的・場面・状況にあった言語活動のテーマ設定」「中間指導」「ICT 機器の効果的な活用」だ。それらについて部員全員でアイデアをし、それぞれの日々の実践へとつなげることができた

Ⅲ 成果と課題

Ⅰ，成果

小学校・中学校が１本ずつ研究授業を行い、それについて全員で参観し意見交換等を行うことができた。また、各校で実践している内容をそれぞれ共有することで、ICT や個別最適な学習等課題が多い中で、次の日からの実践につなげることができた。小中合同という点も系統的に研究することができよい。言語活動や目的・場面・状況など喫緊の課題について、方向性をもって研究を進めることができた。

Ⅱ，課題

限られた研究会の中ではあるが、外部の方からの指導助言や講師を招聘しての講演などを行うことができればよかった。小中それぞれ１本授業提案を行っているが、小学校専科が配置されている現状から、小学校としては苦しさがある。外国語科としての課題が多い中で、小グループでの研究も行っていってもよいのではないかな。

Ⅲ，授業実践を通じて

「伝える」ことがテーマの１つとして挙げられている。その中で、児童生徒がアウトプットするためにはどのような指導が必要なのかや、それに伴う言語活動の課題設定が妥当かなどを研究会の中で話し合うことができた。２本の研究授業を共有できたからこそ、学習を深めることができた。言語活動，中間指導，目的・場面・状況とは何か，そこを明らかにしながら実践へつなげることができたことも研究を深めることができた要因だろう。

Ⅲ 成果物

- ・ 第１回統一授業研究会 指導案
- ・ 第２回統一授業研究会 資料
- ・ 日々の実践に使用している教材等（一部抜粋）

いずれも右の QR コードよりご覧いただけます。



市民を育てるための「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するか

I 主題設定に関わって

1 「市民を育てる」について

- ・現代の課題に迫る SDGs の視点や、平和・人権、公共心や多様性の尊重等に焦点を当て、現在の社会の現況や課題を認識し、未来の社会を担う市民としての在り方を判断する子供の育成を目指す。

2 「主体的・対話的で深い学び」について

- ・子供たちが、社会の問題点を主体的に捉え、自ら考え、行動する意欲を持てるよう、学習課題や地域素材について研究を深める。
- ・上記の研究を進める中で、授業の中でどのように「主体的・対話的で深い学び」を実践していくのか追究する。
- ・問題解決的な単元構成で、子供たちが社会的な問題や課題に対して、主体的に探究し、解決策を見出す力を育むことを目指す。

3 「市民」としての資質・能力とは、

- ①社会の様々な事象や課題を自分事として受け止めて理解すること。
 - ②社会の課題を解決するにはどうしたらよいかを考え、他者と対話をする中で、解決案を出すこと。
 - ③より良い社会づくりのために主体的に行動することである。
- これらの基礎を養うことが、社会科としての学びである。研究会の中でそのための手立てと有効性を共有し、これからの社会科教育の発展につなげたい。

II 部会研究について

1 研究の内容

- (1) 社会的事象の教材化
- (2) 教師の効果的な指導や支援（発問、板書、資料の活用方法、ICT 機器の活用等）
- (3) 社会認識の深まりの見取り（学習の評価）
- (4) 授業の振り返り（授業の評価）
- (5) 言語活動の充実（位置付け、内容）

2 研究の方法

- (1) 授業実践研究（日下部小 6年1組 三澤 瞬 教諭 1月）
「歴史を学ぶ意味を考え、未来につなげよう」

III 成果と課題

1 成果

- (1) 市民としての資質・能力を育むために、個別最適な学びや協働的な学びを取り入れた実践を行った。
- (2) 小中合同で研究を進めることにより、それぞれの発達段階や学び方、系統性などを確かめることができ、系統的な学習指導を進めるための参考となった。
- (3) テーマに焦点を絞った学習会・研究授業が実施できた。

2 課題

- (1) 授業実践を通し、児童がテーマに沿った姿に育っているのかどうか、継続して指導を進めていく必要がある。
- (2) 社会科における効果的な ICT 機器の活用法（課題の出し方、まとめ方等）について、今後も研究を重ねていく必要がある。

（小学校部長 山本 諭）

市民を育てるための「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するか

I 主題設定の理由

昨年度同様、市民を育てる「主体的・対話的で深い学び」を得るために、必要な手段及び方法を研究することとした。研究会の回数も少ない中ではあったが、小中合同の研究授業、指導案検討、臨地研修等を行い、次のような生徒の育成に繋がるものとして進めた。

- ①学習課題に対し、主体的な学びに向かうことのできる生徒
- ②追究すべき課題を明確にとらえることのできる生徒
- ③他者と協働し対話的な学びから考えを深めることのできる生徒
- ④導き出した結論を、様々な資料や他者の意見を参考にしながら検証することのできる生徒

昨年度に続き、ICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」の実践や単元を貫く課題を設定し、単元を通して深い学びが達成できる授業づくりに力を入れた。「主体的・対話的で深い学び」を実現するための手段や方法を研究し、予測困難な時代であっても自ら課題解決ができる市民として、生徒を育成していくことが重要であると考え、研究を進めた。

II 研究内容

1 授業研究の実施（小中合同）

9月 秋山 友奈 教諭（勝沼中）

中学1年生 地理的分野 題材：「アジア州の経済発展」

1月 三澤 瞬 教諭（日下部小）

小学6年生 題材：「歴史を学ぶ意味を考え、未来につなげよう お札の人物を考える」

2 臨地研修

7月：「根津記念館見学と根津嘉一郎について」（講師 根津記念館館長 佐野 正氏）

III 成果と課題（「統一授業研の反省」より）

○ICTを活用し、自由進度学習の授業を行った。自由進度での学習は課題の設定や仕組みが大切。「会社をつくるならどんな会社をつくりたいか」という今回のパフォーマンス課題を今後のヨーロッパ州や北アメリカ州等、他の州の学習でも継続するとさらに面白くなる。

○授業のまとめで「持続化可能な発展のために何が必要か」という言葉があったが、「持続可能」というキーワードを抑えるなど、自由進度での学習では押さえておくべきことを明確にし、生徒に伝えていく工夫も必要である。

○自由進度学習に秋山先生が挑戦してくれたおかげで、社会科としての今後の課題も見えてきたので良かった。

○小中合同で研究できることを生かした研究を、今後はより一層考えて取り組んでいきたい。

（中学校部長 小島 萌絵 山梨南中学校）

つくり，いかす算数授業の創造

○子どもたちが主体となり，数学的表現を通して関わり合う授業づくり

○算数を活用する意識や実践力を育てる「生活・社会とつながる教材」の研究と実践

I 研究テーマについて

小学校学習指導要領では，算数的な活動の充実や数学的思考力・表現力を生活のなかで活用しようとする態度の育成が示されている。それを踏まえ，算数科教育研究会では，算数を学ぶ意欲を高め，学んだことの意義や有用性を実感できる授業の研究・実践を行うこととした。具体的には，数学的な表現（言葉・式・絵・図・記号・操作）を用いて考え，説明することで，児童同士のコミュニケーションを図る。そこで表現されたものをもとに，児童の言葉でまとめることで，学習や生活で活用できる力が育まれる。こうして，コンテンツベース（内容中心）からコンピテンシーベース（資質能力中心）への授業改善をすすめ，児童の考えがどのように変容したかが見取れるように研究をすすめてきた。

II 研究の内容

1 授業実践研究

日 時：令和6年9月11日（水）

場 所：塩山南小学校2年2組教室

授業者：峯田 大智 教諭

題 材：第2学年「たし算とひき算のひっ算」

～日常生活につながる算数の学習～

2 研究会より

- Google クラスルームを用い，事前に学習目標や学習内容を示した。これにより，見通しを持って学習に臨むことができていた。
- 児童自身で学習形態（一人で・友達と・先生と）を選択し，探究的に課題に取り組む姿が見られた。
- 児童自身で使う道具（数カード・ノート・ホワイトボード・ICT 端末）を選択し，考えをまとめた後，異なる考えを持つ児童と積極的に交流する姿が見られた。
- Google チャットを用い，筆算の方法を説明した画像や動画を共有したことで，自分の学習の進度に合わせて，友達の考えをいつでも何回でも見ることができた。
- Google スプレッドシートを用い，継続的に学習感想を入力したことで，めあてを意識した学習ができるようになってきた。

- 導入において、前時の学習感想を共有しなかった。導入で取り上げることで、振り返りを行えることはもちろん、本時の学習感想をよりよいものにしようとする児童が増えたのではないかと考えられる。
- 日常生活での活用につなげるために、切実で必然性のある問題を提示し、自分事として考えることができるようにするべきであった。
- 導入に10分弱を要した。それにより、全体検討やまとめの時間が減ってしまった。
- わかりやすい説明がどのようなものかを、事前に全体で確認すべきであった。
- それぞれの考えの相違点について、全体検討をする時間があると、児童の考えをより深めることができたと考えられる。

Ⅲ 成果と課題

- 研究授業において、児童が自分自身で学習方法や説明方法を選択する場面が多く見られた。その個別最適な学びをもとにして全体で協議し、協働的な学びへとつなげることで、より理解を深めることができた。実際に児童からも、答えの理由が分かったり、いろいろな説明を聞いたりできて、理解が深まったという声があがった。
- ICTの効果的な活用方法について、研究を進める土台ができてきた。
- 小中連携の重要性を再確認し、系統性を意識した指導について協議を行うことができた。
- 基礎基本の定着と、課題解決能力の育成が求められるため、その両方を達成できる算数授業について研究していく必要がある。
- 学習した内容を日常生活に活かそうとする態度を育てるために、課題や教材を工夫した算数の授業を行っていくことが求められる。
- ICTを使う場面を精査し、明確な意図を持って授業に取り入れる必要がある。
- 毎年度、算数科教育・数学科教育1回ずつの研究授業を行い、小学校と中学校の授業を相互に参観していきたい。

Ⅳ 理論研究にもとづいた授業実践

- ICTを活用した他者参照により、算数に苦手意識を持つ児童が学びやすくなる姿が見られた。
- 学習感想から、児童の考えがどのように変容したかを見取り、次時の授業に反映することができた。
- ICTとアナログ（ノートなど）の両方を活用した授業実践を進めることができた。
- 学年の発達段階を踏まえ、ICTをどのように活用できるか、今後もさらに検証しながら実践を続けていく必要がある。

（部長 菅野 雄太）

わかる授業の工夫と授業実践 ～基礎学力の定着と考える力の育成～

I 研究の内容

数学科教育研究会では、研究テーマの中の「考える力の育成」に焦点を当て研究を進めてきた。具体的には、①生徒が興味を持って取り組める教材や教具の提示、②考える力や思考の深まりを引き出させるような授業形態や発問設定、③生徒の興味をひく上で効果的な操作活動や、動的なものを捉えるのに有効な ICT の活用を取り入れた授業展開等を踏まえ、各校で実践した指導案や生徒がまとめたワークシートなどを持ち寄りながら研究を深めてきた。検討したことが授業にどのように現れ、生徒たちの思考にどう影響を及ぼしたのかを考えられる経験となった。統一授業研では小学校の研究授業を参観するなかで、児童への支援の仕方、きめ細かい指導法や教材の活用について考えることができた。中学校の研究授業でも、それぞれの視点で参観することができた。また、研究会における意見交換を通して授業観を広げることができた。生徒一人ひとりが「わかる授業」を通して考える力を身につけることができるよう、研究会員全員で積極的に研究活動に取り組むことができた1年だった。

II 成果と課題

1 成果

- ・先生方との協議をする中で、自分にはない視点に気づくことができた。
- ・統一授業研や研究会の活動を通して、ICT の活用について深めることができた。
- ・各校一実践の発表を聞くことができ、知識が広がったと同時に、自分が今までやってきた実践と比べ良いところを取り入れることができた。
- ・多くの先生方が参集のもと、研究授業を行うことができた。
- ・研究授業の指導案も検討することができ、よりよい授業実践となった。
- ・先生方の実践から学ぶことができた。特に複線型授業の提案や ICT の活用については、chat や FigJam, GeoGebra を活用した実践が興味深かった。
- ・授業を受ける生徒の人数によっても評価の仕方に違いが生まれるなど、目の前の生徒を的確に見とり、授業構成や評価方法を考えていく必要を確認できた。

2 課題

- ・来年度は、各校の先生方の実践を今年度以上に共有して、意見交換できる場があると良い。
- ・実践発表だけでなく、1つの単元や題材について全員で研究を進めていくこともしていきたい。

- ・実践の持ち寄りという形で研究してきたが、箱ひげ図を研究していた時のように、1つの実践を深めていくことも有意義だと感じた。
- ・複線型授業を行う際に、生徒の評価をどうするか。また変容をみとる方法など研究が必要な部分があれば、授業実践の発表や研究会で深めていくことも大切だと感じた。

Ⅲ 授業実践（成果物）

1 統一授業研

（1） 授業内容

6月の研究会で授業者と単元を検討し、第1学年の「空間図形」の単元で研究成果となる授業を行うことを決定し、8月から1月までの研究会で指導案検討を行った。冬の統一授業研で研究授業と研究会を行うことができた。具体物を操作することでイメージが付きやすく、生徒が意欲的に取り組める授業となった。机間指導の際の教諭の関わり方やICTを活用した共有方法など、生徒にとって数学的な見方や論理的な思考の深まりへつながる方法の研究にもつながった。

授業者：小河 寛人教諭（松里中学校）

単元名：1学年 6章 空間図形 「正多面体は全部で何種類あるか考えよう」

ねらい：思・正多面体が5種類しかない理由を、面の1つの角の大きさや1つの頂点に集まる面の数に注目して説明することができる。

（2） 研究会より

- ・具体物を操作することで、実感を伴って作業することができた。その結果、生徒も意欲的に授業に取り組んでいた。
- ・ICTの活用において、作成した立体を写真で残し、記録を残すことで生徒が見返すことができた。今回の授業で、作業中に他者参照する手立てとして活用すると更に深い学びに繋がると感じた。
- ・単元を通して1つのFigJamに生徒の学びを記録することで、学びが繋がる。
- ・作業中の机間指導の際に、生徒のつぶやきや疑問を丁寧に聞き、問い返しをすることで生徒の思考が深まった。教諭として、生徒を動かす力と生徒を理解する力が求められる。
- ・生徒がまとめた表やFigJamを利用し、作業活動を仕組む際に役割分担をすることで、さらに論理的な思考や数学的な見方につながると感じた。
- ・正多面体を作る際にグループ毎、面の形や辺の数、頂点に集まる図形の数などの視点を与えると理解が深まる場面が見えた。
- ・5種類目の正多面体が前時に出なかったことで、生徒は「5種類目を作成すること」と、「6種類目がないことを説明する」2つの作業になった。FigJamにまとめたある生徒の記述をみると説明できている生徒もいるので、次の時間に全体で共有し、ねらいにせまってほしい。

（部長 小高 鉄平）

わかる理科授業の創造

～楽しく学び、自然を豊かにとらえる理科授業をどのように進めるか～

I 研究の内容

1 具体的内容

- 子ども中心の授業づくり ○理科教育で何を学ばせるか
- 地域に根ざした理科教育 ○臨地研修や実験工作演習

2 授業実践（小中参観）

第4学年「とじこめた空気と水」

授業者 井尻小学校 中嶋 康雅 教諭 佐野 誠一 教諭

3 学習会

・「実験講習会」

講師：八幡小 飯沼 久裕 校長 井尻小 鈴木 学 校長
 神金小 萩原 修 教頭 玉宮小 佐久間 覚 教頭
 塩山南小 中村 裕司 教諭

・「最新の実験教材」ナリカ株式会社 様

II 成果と課題

1 成果

- ・研究授業では、「わかる授業」を目指し、児童の実態を基盤に、題材に対する児童の興味関心を高め、各自の疑問を明確にし、その解決方法を探り、実際に実験を実施して、その結果から疑問を解決する展開を実施することができた。また、ICT端末を有効に活用することで、短時間でより多くの意見交換が可能となり、児童が主体となる授業を実現することができた。昨年度の研究内容を精査し、ブラッシュアップすることで、より深い理解につながった。
- ・指導助言の先生方による実験講習では、実演や体験を通し、児童目線に立った授業づくりについて考えることができた。また、知識やスキルを習得することができ、理科教員にとって非常に有益で、理科の楽しさを実感できる機会となった。
- ・教材会社の方から、最新の教材などの情報を得ることができ、各校の理科教育の充実につながる有意義な時間となった。

2 課題

- ・各自の日常の実践や、実践上の悩みを共有するなど、部員が主体的に参加できるような工夫が必要である。また、優れた実践、教材研究の成果などを、全学校にフィードバックすることで、実践を広げていきたい。
- ・自然を豊かにとらえる理科教育、地域に根ざした理科教育について、深く学ぶことができるとうい。
- ・理科授業担当者が減少している。研究授業のタイミングや内容についても、今後、考えていきたい。

（小学校部長 青木 恵）

「わかる理科授業の創造」

中学校研究会テーマ

～ 考える力の育成と教材教具の工夫 ～

I 研究の内容

1 理科の学びを支える，教材・教具の発表と検証

各校から授業で実践した教材教具を持ち寄り，研究討議を行った。

2 統一授業研究会の実施と指導案検討

冬の統一授業研究会

指導者：池田 大誠 教諭（甲州市立勝沼中学校）

指導：第1学年 火山（単元4 大地の変化）

「雲仙普賢岳と伊豆大島を比較し，違いについてさらに深く学習する」

→ICT 端末を活用した，個別最適な学びかつ協働的な学び

3 夏季学習会

懶ケニスより，講師を招聘し，授業実践のため実験器具等の紹介や体験を行った。

→最新の実験機器から手軽な実験方法の紹介をして頂き，今後の授業の参考になった。

4 理科自由研究の審査（支部）

各校から自由研究の代表作品（各校学級数分）を持ち寄り，県下児童生徒理科自由研究の代表作品2点を選考した。

II 成果と課題

本研究では，ICT端末や汎用ソフトの活用実践が多くなされ，新たな活用方法について共有をしながら各校に還流することができた。統一授業研では，ICT端末を活用した個別最適な学びと協働的な学びに基づいた研究授業が行われた。指導案検討から議論がなされ，「学習者主体」の授業づくりを考えるいい事例となった。

今後，ICT端末の普及に伴い，学習者主体の授業が求められていく。今年度を振り返ってみても，本研究テーマにもある「わかる授業づくり」から新しい時代に適合したテーマ設定が必要であると考えられる。しかし，実物で生徒自身に興味関心を持たせ，目で見て触れて考えさせる理科の実践は必要である。理科では，事物現象を体験的に学び，思考することが何よりも大切だということは変わらない。このことから観察・実験を用いた指導法を学ぶ機会を，今後も本研究会で共有をする必要がある。その中で，ICT活用とのバランスをとることも必要である。生徒が主体的に学び，生徒自身の資質・能力が育まれるような授業を展開していきたい。今後も，生徒の学びを第一に考え，研究を進めていく。

（中学校部長 塩山中学校 佐藤政幸）

「確かな学び 広がる音楽」

～知覚・感受をもとにした音楽的思考力，判断力，表現力等の育成～

I 主題設定や研究のテーマについて

本研究会では，仲間とともに音楽を表現したり味わったりするために，一人一人がどのような音楽を表したいのかといった，思いや意図が出発点となって，仲間とともに共有し，音楽の世界を広げていけるようにすることが重要であることと捉え，授業実践においては，感性を高め，思考・判断し表現する「一連のプロセス」を重視してきた。そして，音楽のよさが，どのような要因から生まれてくるのかを探るために思考し，表現したり鑑賞したりする学習を実現することで，児童生徒の感性が高まり，より深く音楽を表現し味わうことへとつなげるよう，学習を展開してきた。また，児童生徒が取り組みやすさを感じられるようにスモールステップの設定や，教材や提示資料の工夫をする他，個別最適な学習環境を作るための ICT の活用にも取り組み，成果をあげてきた。

これからの研究では，「音楽を知覚したり感受したりしながら音楽に対する感性を働かせる学習」については，これまで同様，重要な学習と捉える。そして，児童生徒が感性を働かせ，他者と協働しながら音楽表現したり味わったりする活動において，「そのよさや価値等を考えるなどして，創造的に表現したり鑑賞したりする力を育成」することができるよう，さらに研究を推進していく。

また，義務教育 9 年間の積み重ねを意識する中で身に付けた音楽の学力は，その後の人生において生きて働くものとなり，生涯において生活の中で豊かな関わりを続けていくことが重要となる。これは，「学びに向かう力，人間性等」に関わることであり，生活の中に音楽を生かしたり，我が国や諸外国の音楽に親しんだりする態度を養うこととなる。授業においては，生活や社会における音や音楽の働き，そして音楽文化についての観点及び理解を深めることによって実現できるものと考ええる。

これまでの本研究会の研究実践の成果を基に，児童生徒が豊かで多様な音楽と出会い，音楽的な見方・考え方を働かせて学習することによって，「知識及び技能」の習得，「思考力，判断力，表現力等」の育成，「学びに向かう力，人間性等」の涵養が図られ，生活や社会の音や音楽と豊かに関わる資質・能力が育成され，生涯にわたって生きて働くものへとつながることを目指して，本研究を進めていきたいと考えた。以上のことから研究主題を設定した。

また，今年度，本研究会には，音楽科の指導に苦手意識をもつ小学校教諭が指導法を得るために参加している。そこで，「だれでも・いつでも・どこでもできる音楽科の授業づくり」を目指し，研究を行ってきた。

学習会での学びや互いの情報交換を大事にしながら，研究授業に向けた指導案検討を行い，児童生徒の思考判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を具体的に示

すことなど、授業の構成等を工夫した。また、それぞれが行っている実践をもとに、悩みやそれに対しての知恵を出し合って解決の方向へもっていった。

【研究の視点】

- ① 知識・技能を活用し、一人一人に主体的な学びを促す活動の工夫
- ② 一人一人が明確な思いや意図をもち、伝え合う中で学びが広がる活動の工夫
- ③ 仲間と協働する喜びを感じながら音楽を表現したり味わったりする活動の工夫

Ⅱ 研究の内容

1. 研究の具体的内容

(1) 学習会

「心と体をほぐし、楽しく音楽の力をつける常時活動の実践」

講師：山梨南中学校 平井 祥子 先生

「音楽の授業づくりにおける ICT 活用研修会」

講師：所沢市立中央小学校 松長 誠 先生

(2) 実践報告

研究授業 題材名 「せんりつの特徴を感じ取ろう」

加納岩小学校 中坪 大貴 先生

一人一実践発表

常時活動



研究授業



Ⅲ 成果と課題

県のテーマに沿った研究を進めると共に、今年度は東山独自のテーマとして「みんなができる」「だれでもできる」「いつでもどこでもできる」「みんなで知恵を出し、チームで学び合う授業研究」を目指し、音楽科の指導に困っている教師が積極的に研究会に参加してともに知見を深めることができた。具体的には、日々の授業実践の情報共有を通し、常時活動、知覚・感受を関連付けたワークシートの作成、ピアノ伴奏がなくでもできる授業のための ICT の有効的活用等について、全員で研究を深め、成果を上げることができた。

2 回行った学習会では、常時活動に関することと ICT を活用した授業づくりに関するについて学ぶことができた。常時活動に関する学習会では、音楽科の授業において「心の開放」につながる重要な活動であるということを再確認することができ、明日の授業から活かせることをたくさん学ぶことができた。また、ICT 活用に関する学習会では、デジタルとアナログを融合させた質の高い音楽教育が求められている、現在の私たちの課題に向かって、ヒントとなるものがたくさんちりばめられていた。どちらも、非常に有意義なものとなった。来年度以降も継続して様々な学習会の場を設け、東山の音楽教育を更に発展させていきたい。

(部長 竹川佳那)

一人ひとりの力を引き出す題材と授業をどうつくっていくか
～発見と感動のある授業づくり～

I 研究の内容

1 研究の柱

- (1) 子どもの課題や実態にあった題材と授業づくり
 - (ア) 目の前の子どもの課題や実態をつかみ、ねらいを明確にして、より造形的な資質や能力が発揮できる題材の研究をすすめる。
 - (イ) 様々な場面で、子ども一人ひとりに表現する喜びやよさを感じとらせ、見方感じ方を深めさせるとともに、子ども自身が主体となるような授業の組み立て方を工夫する。
- (2) 子どもの創造活動によりそう支援のあり方
 - (ア) 子どもの思いによりそい、その実態に合った支援のあり方を考える。
 - (イ) 子どもが何に悩み、考え、試行錯誤した末、どのような表現や鑑賞につながったのか、観察や対話、スケッチ、記録など、様々な方法でみとる研究をする。
- (3) つながりと広がり、先を見通した実践の積み重ね
 - (ア) 子どもどうしがかかわり合い話し合うなど、互いに学び合うことのできる場の設定を試みる。
 - (イ) 題材と題材の関連や小・中連携、他教科との関連を図ったりすることで子どもや学校の実態に応じた、系統的・発展的なカリキュラムの工夫をする。
 - (ウ) 子どもの生活を取り巻く地域や社会、それにかかわる人々とのつながりをもった美術教育を通して、自分自身や社会を見つめていけるようにする。

2 研究の内容

- (ア) 授業研究を実施し、感動と発見のある授業づくりについて考える。
- (イ) 学習会や実技研修を実施し、評価や授業づくりに生かす。
- (ウ) 研究会場を持ち回り、各校の展示環境などを参考にする。

3 研究の方法

- (ア) 授業案の提案，検討，実践，検証
- (イ) 一人一実践による作品研究
- (ウ) 学習会や実技研修など

II 成果と課題

1 成果として

- ・ 「一人ひとりの力を引き出す題材と授業をどうつくっていくか～発見と感動のある授業づくり～」のテーマに基づいた全員による研究実践を行い、ねらいを明確にした題材への理解を深めることができた。また、「発見と感動」に着目することで、授業をつくる視点が明確になり、子どもたちに身に付けさせたい力や題材の特徴、系統性、小中学校の発達の段階を考慮した指導や支援など、皆で多面的に学び合うことができた。
- ・ 研究授業では、「発見と感動」という視点で授業について研究協議し、子どもたちの様子を動画に撮りながら授業観察を行ったことで、子どもたちの学びの姿から授業を分析することができた。

- ・ 描画材や材料についての実技研修や学習会を行ったことにより、描画材や新しい材料についての理解を深めることができた。今後の授業開発や改善に生かすことのできる内容であった。
- ・ 県外研修では、国立西洋美術館の教育普及担当学芸員より鑑賞の仕方や ICT の活用について学ぶことができた。

2 課題として

- ・ 研究の内容・方法・参加体制については概ねよかったが、「子どもたちに身に付けさせたい力」を明確にした視点での教材研究や指導・支援の仕方が難しいという声が多かった。ねらいを明確にした上での授業づくりについての研究を更に詳しくしていく必要がある。
- ・ 図画工作科における「ICT の活用」と「個別最適な学び」の関連について、また、ICT の利活用についても引き続き検討していく。
- ・ 昨年度、課題として挙げられた「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」についての理論研究も進める必要がある。
- ・ 部会の中で得た学びを、部会の外へも発信していく術についても考えていきたい。

III 統一授業研及び県教研の実践報告

1 統一授業研実践報告 小4 「ギコギコからワクワク～木でお家をもっと楽しく！～」

〈A 表現(1)イ(2)イ B 鑑賞(1)ア 共通事項(1)アイ〉

授業者：市川安紀（塩山南小）

切った木材の形からイメージを広げ、形や色、それらの組み合わせによる感じなどを通して、家で使って生活をより楽しくするものをつくる、という工作の題材である。のこぎりの扱いについてゲストティーチャーを招聘したことにより、技術的な面の支援のみならず、子どもたちが意欲をもって真剣にとりくむことができた。子どもたちは、ゲストティーチャーが実際に木を切る姿を見て、「自分もやってみたい」という思いをもち、どうやったら自分の思い通りに木を切ることができるか考えながら切っていた。そして、思い通りに切ることができたときには、「やった！」と、感動する姿が見られた。授業の中に子どもたちの「発見と感動」が詰まった授業であった。授業後の研究会でも、多くの意見交流があり、研究を深めることができた。

2 県教研実践報告 小2 「みて、さわって、〇〇になりそう！」

〈A 表現(1)イ(2)イ B 鑑賞(1)ア 共通事項(1)アイ〉

授業者：古屋ゆか（塩山北小）

コルクやモールなど、色や形、質感が違った様々な材料を基に、つくりたいものを発想して試しながら作品をつくっていく題材である。様々な質感の材料を用意した上で、巧みな導入の工夫を行っていた。そのような手立てにより、子どもたちの「やりたい」という意欲が引き出され、それぞれが自分の思いをもって材料に向かっていく姿が見られた。東山の研究会では、材料の選定と材料と触れ合う時間設定が話題となった。県教研では「絵や工作で表す活動」と「造形遊び」との境目にあるような題材であり、半立体での表現か立体での表現かが議論された。共同研究者の先生からは、この題材は、材料の幅を広げつつ平面での構成を意図している題材ではないかとの指摘があった。今回の実践では、材料の経験という意味では様々な材料と触れ合うことができたが、表現の系統性についての研究が課題となった。

（部長 三枝 清美）

「つながり」を深め、資質・能力を育む技術・家庭科教育

～「つながり」を生かした教材開発～

I 研究の内容

本研究会では、継続して地域教材の開発について研究している。これまでに「小水力発電」や「太陽光発電と農業」「6次産業としてのワイン醸造」などについて取り上げた。授業では小水力発電や甲斐サーモンレッド、太陽光パネルと農業などについて取り上げ、実践を積み重ねてきた。東山梨地区は、通学路にも果樹園が多くあることや、勝沼中学校では農業体験学習が行われるなど、生物育成の技術に関して身近に「つながり」を感じることができる環境にある。このように学習内容と自分の生活とをつなげることができることは大きな利点である。研究においても、これまでの実践から地域教材を活用することで、生徒が興味を抱き、学習効果を向上させる手応えを感じることができた。

今年度は、昨年度から継続して「水産生物の栽培技術」を中心に研究を行ってきた。山梨県の養殖技術に目を向けることで、水産生物の栽培技術が自分たちの生活との関わりを意識させるとともに、自分たちの地域とのつながりも考えられるような教材開発を目標としている。山梨県の水産技術の現状を学習するため、山梨県水産技術センターを視察し、漁業と養殖業について詳しく学ぶことができた。また、授業研究として甲斐サーモンレッドを取り上げ、養殖魚のブランド化の視点から管理技術を学習する授業を行った。継続して研究を行い、内容をブラッシュアップしてきた教材の中に、さらに一人一台端末を組み込み、ICTを利用した個別最適な学びを意識してつくり上げた授業であった。

II 具体的な研究内容

1 継続研究 地域教材の開発について

本研究会では、山梨県及び東山梨地区の特性を生かし、「ブドウ栽培等の果樹の栽培に関わる栽培技術」と「豊かな水資源を生かした水産生物の栽培技術」の2本を柱に地域教材の発掘を継続的に研究してきた。以下の表にこれまでの研究の経緯である。

ブドウ栽培等の果樹の栽培に関わる栽培技術	豊かな水資源を生かした水産生物の栽培技術
2020 年 ○JA フルーツ山梨のドローン活用実証を活用した「ドローンを利用したスマート農業に関わる教材」の開発	2020 年 ○山梨県水産技術センター忍野支所を視察し、甲斐サーモンレッドや富士の介の養殖技術について学習を生かした教材の開発
2021 年 ○木材チップの有効活用に関わる教材の開発	2021 年 ○地域教材「養殖魚のブランド化」の授業実践

2022 年 ○地域で設置されているブドウ畑の上に設置された太陽光発電パネルを生かした教材の開発 ○地域のワイン醸造所を視察し学習したことをもとにした、6次産業化に関わる教材の開発 2023 年 ○開発した教材の継続した教材研究 2024 年 ○開発した教材の継続した教材研究	2022 年 ○開発した教材の継続した授業研究 2023 年 ○東山梨地域における淡水魚の養殖場の視察を通して学習し、栽培業者の仕事の実態を生かした「地域の産業としての養殖技術に関わる教材」の開発 2024 年 ○山梨県水産技術センターの視察を通して、山梨県内における水産業の実態に関して学習し、それを生かした「山梨県の産業としての水産生物の栽培技術に関わる教材」の開発
--	--

この2本の研究の柱は、それぞれ独立して研究したのではなく、随所でつながりを持たせるように工夫している。例えば、「甲斐サーモンレッド」はワインに使われる「ブドウの果皮」を餌として与えていることや、ドローン等を活用したスマート技術などである。

2 地域との「つながり」を生かした生物育成の技術の教材開発

勝沼中学校の2年生で「生物育成の技術」の内容で「養殖魚のブランド化」の題材を用いて授業実践を行った。これは、2021年に実践を報告してから、継続して研究を行ってきた教材である。本授業は、臨地研修を含めた様々な研究を生かした上で、今求められているICTを活用した授業も目指してブラッシュアップされた内容であった。具体的には、臨地研修で学んだ生きた知識をもとにした授業展開や、資料提示、ブドウとのつながりを気付かせる展開の工夫など、地域とのつながりをより意識したものとなっていた。また、タブレットを活用したクラウド上での情報共有や協働活動の場面を設定し、つながりを持って効果的な学習が行える授業となるよう工夫されていた。

III 成果と課題

本研究会では、地域教材の開発を目標に研究を継続してきている。地域とのつながりを主軸としているため、目標がぶれることなく研究を展開することができている。今年度の授業実践では、その研究理念が見取れるものであったと思う。今現在も実践された授業をもとに、さらに深め、最適化していき、県全体のテーマともつなげながら研究を継続している。今後の研究では、生物育成の技術の学習のなかで、系統的に地域とのつながりを意識した学習が行えるように、農業や畜産の学習内容とつなげていく中で、教育課程全体まで視点を広げて研究を深めていきたい。また、県の技術家庭科研究会で研究されている「サンドイッチ型授業」の視点から、単元や題材、各授業の効果的な構造を研究していくことも必要であると考えられる。これらを受けて、これからも研究をブラッシュアップさせながら、継続して行っていくことが研究会でも確認された。

(部長 嶋津 英斗)

「つながり」を深め、資質・能力を育む技術・家庭科教育

I. 研究の内容

1. はじめに

現行の学習指導要領では、育成を目指す資質・能力として、（１）「知識及び技能」（２）「思考力・判断力・表現力等」（３）「学びに向かう力・人間性等」の３つの観点が示され、その中でも学習した知識・技能を実生活で活用するために、家庭や地域社会などと連携を図った「生活の課題と実践」の充実が求められている。また、「小学校と中学校の系統性を図り、幼児や高齢者の家庭内事故を防ぎ、自然災害に備えるための住空間の整え方を重点的に扱い、安全な住まい方の学習の充実を図ること」と明記されている。

本研究会では、令和２年度より住生活について研究を進めている。中学生にとって住まいは、心の安定を図る大切なものであるが、自分が積極的に働きかけなくても生活が成り立っているため、住まいについて主体的に考えようとする生徒は少ない。また、食生活の学習などと比べ比較的生徒の興味・関心が低く、適切な課題の設定や指導の工夫がより必要な領域であると考えられる。学習に向かう気持ちや興味・関心を授業でどのようにもたせるのか、生活の主体者として中学生でもできることに気づかせ、実践する態度を養うことをねらいとして研究を進めてきた。

2. 今年度の研究概要

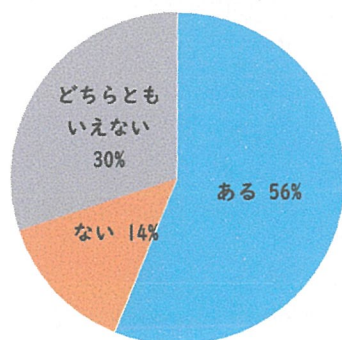
- （１）生徒の実態把握
- （２）生徒の実態を受けた授業実践

3. 具体的な研究の内容

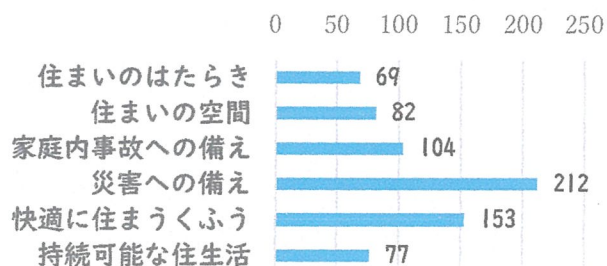
- （１）生徒の実態把握のためのアンケート作成・結果の考察

令和６年９月、東山梨地区中学校１年生 286 名（３校）を対象にアンケートによる調査を行った。以下にアンケート結果の一部抜粋を載せる。

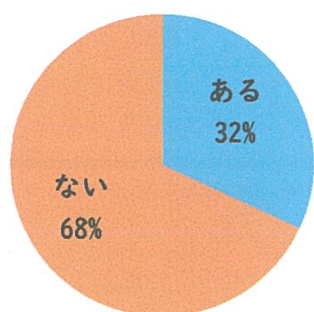
2. 住まいの学習に興味がありますか。



3. どんな学習に興味がありますか。 (複数回答可)



9. 暮らしの中で困ったことがありますか。



「ない」と回答した生徒が 68%と多かった。設問 2とも関連しているが、住まいについて生徒達は自分事として捉えることがなかなかなく、気がつかないのではないかと考える。また、「ある」と回答した生徒は「部屋の広さ」や「自分の部屋」、「整理整頓に関すること」が多かった。中には、自分のことではなく家族の生活のしづらさに気づき、「スロープをつけてあげたい」や防災への意識の高まりから「非常食などを備蓄しておく場所の設置」などを挙げた生徒もいた。

(2) 生徒の実態を踏まえた授業実践（勝沼中学校 松明舞子教諭）

家族の健康・快適・安全を考えた住空間の実現－住生活における「生活の課題と実践」－（1年生）という題材において、生徒が家族とともに行った課題解決のための実践を発表し合った。

生徒は、収納や片付け、怪我のない快適空間、災害・防犯対策等、各自で課題を設定、実践し、スライドでわかりやすくまとめていた。グループごとの発表や、他者参照する中で、友達からヒントをもらい、もう一度自分の実践を振り返ることができていた。

個別最適という点でふさわしい題材だったこと、ICTを活用しながら協同的な深い学びにつなげることができたことで、家庭科における「子供主体」の授業を具現化したものであったと言える。生徒はスプレッドシートから友だちの実践を容易に見ることができ、今後更により良い住まい方について、工夫していくであろう。ねらいとした実践的な態度の育成にも迫る授業であった。

Ⅱ. 成果と課題

1. 成果

- (1) 令和6年度版のアンケートを作成、実施することによって、生徒の実態把握をすることができ、授業作りへの参考となった。
- (2) 小学校の先生方にも参観していただき、さまざまな意見をいただくことで、小学校の学習とのつながりを考えることができた。

2. 課題

- (1) 小学校での学習や現代社会における課題であるSDGsやユニバーサルデザインなどの語句については年々認知度が高くなっている。住まいについての学習領域が幅広く、家庭科としての学習目標の設定の仕方を検討していく必要がある。

Ⅲ. 成果物

- ・ 生徒の住生活における実態アンケート
- ・ 生徒の実態を踏まえた授業実践

（部長 石田 周子）

教材の本質をふまえた体育指導のあり方

～体づくり運動(遊び)を通して～

【はじめに】

スポーツ庁が実施している「体力・運動能力調査」によると、子どもたちの体力については概ね低下傾向に歯止めがかかってきているものの、体力水準が高かった昭和 60 年頃と比較すると、基礎的運動能力は依然として低い状況にある。またコロナ禍を経て、休み時間・放課後の遊びや体育の授業以外に思い切り体を動かすことがない子どもも見られるようになっている。それにより子どもたちの体力低下や運動経験の乏しさが加速しているとも捉えられる。だからこそ、運動の楽しさや心地よさ、喜びを味わうことができる授業を展開していくことが重要であると考えた。

そこで、小学校体育科教育研究会として「体づくり運動遊び」「体づくり運動」を研究領域とし、子どもたちの基礎体力の向上や進んで運動に親しむ姿勢を育てたいと考えた。運動がもつ本質的な面白さを味わうことができる体育授業づくりについて研究をしてきた。

I 研究の内容

1 研究の具体的内容

- (1) 「体づくり運動(遊び)」について理論研究と実技研修を行い、授業づくりを行う。
- (2) ICT を用いたワークシートなど体育の授業の中での ICT の有効的な活用方法について研究を深めていく。
- (3) 各校での健康・体力づくり一校一実践の取組を共有し、日常的な取組や各校の体育的活動の様子の情報交換をする。

2 具体的な取り組み

- (1) 「体づくり運動(遊び)」実技講習会・理論研修会

「体づくり運動(遊び)」

講師 岩田 純一先生(文京区立誠之小学校 指導教諭)

- (2) 4学年「作ってチャレンジ!体づくりマスター」(体づくり運動)授業研究

授業者 関口 哲也 教諭(日下部小学校)

指導助言 山梨県教育庁 学校体育 指導主事 小沢健司先生

3 授業研究

- (1) 本時の目標

○動きの組み合わせ方を考え、それを言葉や動きで表現することができるようにする。

(思考力,判断力,表現力等)

(2) ICT 端末利用の工夫

○振り返りシート・ワークシートのデジタル化

○運動の様子を撮影&共有

(ア) 授業実践から学んだこと

- ・体ほぐしの運動では、「3歩鬼」や「人工衛星」といったゲームを通じて、自分たちでルールを作り、安全に楽しむことができた。
- ・用具のバリエーションを複数用意したことで、一人一人が自分に合ったものを選ぶことができ、子どもたちの自主性を育む機会となった。
- ・振り返りの時間を設けることで、次回への意欲を高めることができた。

(イ) 授業実践から、今後さらに研究を深めたいこと

- ・児童の運動の偏りが見られた。
- ・活動の停滞が見られた児童もいたので、教師の介入や一度全体指導を通して工夫するポイントの確認をすることも必要であったのではないかな。

II 成果と課題

I 成果

- ・体育という教科の特性を活かし、夏期実技講習会や授業案検討会など、多様な活動を通じて理論と実践を結びつけることができた。
- ・教師自身が体を動かす楽しさやおもしろさを感じることで、子どもたちへの指導に活かすことができた。
- ・3年間、組み合わせの動画を作成・活用することで、教材の蓄積ができた。また継続テーマによる研究であったため、これまでの研究成果の上に立ち、教材の本質に気づくことができた。
- ・授業内での子どもの考え・姿を可視化、共有可能とする ICT の活用の仕方を工夫することができた。
- ・健康・体力つくり一校一実践の情報交流も、他校の体育的な活動を知る良い機会となった。

2 課題

- ・部会研究の還元方法（各校での取組に活かしてもらうための方法）
- ・授業実践における児童自身の難易度設定や目標設定に関する課題
- ・他の領域への展開や、新たな視点を取り入れた研究の検討

III 成果物

- ・挑戦状動画
- ・デジタル化された振り返りシートやワークシート

（部長 三森 美礼）

生きる力を育てる保健体育学習を目指して
～基礎的・基本的な知識・技能の習得のための学習指導の在り方～

I 研究の内容

1 研究のねらい

- (1) 基礎基本の定着を目指した学習形態の在り方
- (2) 主体的・対話的で深い学びが実現するための学習形態・場面設定の工夫
- (3) 課題解決に向けた、協働的な活動（学習カード、ICT 機器の活用）の工夫

2 研究概要

- (1) 研究授業を通して、研究のねらいに迫る。

1月29日（水）「サッカー（2年生）」 山梨南中学校 米倉 秀 教諭

- (2) 各校、テーマにそって授業の改善・工夫について取り組み、授業実践の共有や情報交換、先進校の文献や資料を参考に指導案・振り返りシートの研究を深める。

3 理論研究に基づいた授業実践について

研究授業では、生徒が自ら率先して学習し、運動量の確保がしっかりとされていた。単元の特性を活かした、教材・場面設定の工夫があり、生徒たちは技能を高めながら楽しそうに授業を受けていた。さらに、「できた・できなかったか」という技能の視点を重視した指導だけではなく、「個やチームが成長していくプロセス」を大事にした授業展開であった。研究会を通し情報交換を行うこともでき、先生方との学習の中で得られた知識や研究内容を、自校の実態に合わせ実践を深めていきたい。

II 成果と課題

(1) 成果

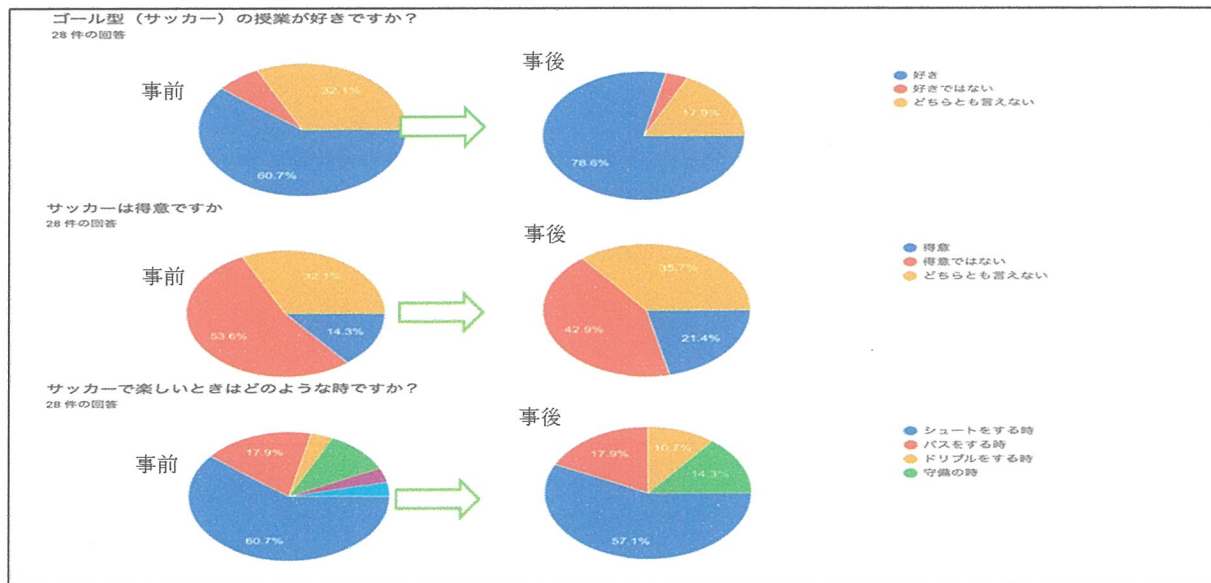
研究テーマを達成するために、「基礎的・基本的な知識・技能の習得のための学習であるか」という観点で授業の工夫・改善を行ってきた。授業の事前アンケートの結果から、経験の差を考慮する中で互いに教え合い、学び合いながら学習を進めることができた。授業実践では、生徒に単元のゴールを示すことで、見通しをもって授業に臨むことができた。単元の半ばでこれまでの活動を自己・他者評価することで、単元後半も技能向上に向けて意欲をもって主体的に活動することができた。研究会では、授業実践から見えた成果と課題を共有することができた。

(2) 課題

今年度の課題は、基礎的・基本的な技能の定着に向けたドリル練習のさらなる工夫、課題解決に向けた協働的な活動として、生徒達の運動技能の特徴を活かすことのできる、学習形態の工夫が挙げられた。また、「習得」した知識を技能につなげ、どのような場面でのように「活用」するか、仲間との実践を基に、自ら感じたことをどう考え伝えていくか、さらなる基礎・基本の定着と、より深い気づきを目指して、今後も多面的な見方・考え方を働かせ、研究テーマに沿って、授業展開と授業改善に努めていく。

Ⅲ 研究授業のまとめ・感想

生徒アンケート（結果）より



本授業では、基礎的・基本的の習得を目指しながら、サッカーの本質でもある「ゴールを目指す楽しさ」を全員が味わえるように、場の工夫や用具の工夫、タスクゲームの工夫を実践した。

事後アンケートで、サッカーの授業が好きかという質問に対して、17.9%の生徒が好きと回答し増加した。また、サッカーを得意だと回答する生徒も7.1%増加した。これらの要因として、サッカーで楽しい時はという質問で、ドリブルが楽しいという生徒が増加した。基礎・基本の技術であるドリブルを習得して、その技能をゲームで活かすことができた点が増加傾向につながったと考えられる。

サッカーの授業は、基礎的・基本的な技能（パス・ドリブル・シュート・トラップなど）を身につけても、仲間にパスをつなげる時や連携しながら攻撃をするときに難しさを感じる生徒が多い。その中でも、技能習得において、授業を通して効果的だったことは、授業を体育館で行ったことにより、冬の時期のグラウンドの環境面におけるマイナスな部分は改善され、生徒は、基本的な技能習得に専念できた。また、ボールも2人1組に1個用意でき、運動時間の確保ができた。ボールに触っている時間が長ければ長いほど技術の習得につながる。

また、タスクゲームでは、最低3人のグループでのゲームから始め、その中でゴールを奪うために、技術的な部分、連携の部分でのトライ＆エラーが繰り返し起こる場面設定が必要によってサッカーとしての思考も高まっていくと感じた。サッカーの特性で、ボールを持っていない時にどのように関わるかというところがとても難しい。だからこそ、人数が増えるタスクゲームになればなるほど、技術的な部分の安定と空間に走り込む動きの質が高まっていくことが必要な部分である。

一方で、グループで審判や映像撮影などの役割を振り分けることで、プレーしていない生徒の関わり方も増える。それによって、仲間同士での声かけが生まれる。このように外側から俯瞰的にサッカーを観ることによって自らの思考が高まり、コート内での動きにもつながってくる。ICT 機器の活用によって映像での振り返りも効果的であったと考える。女子でお団子状態になってしまう原因を映像から話し合いに繋げることもできた。

サッカーはメジャースポーツでもあるとともに、生涯スポーツにつながる種目である。「する」関わりだけでなく「観る」という視点でも関われるスポーツの一つである。そのためにも、体育の授業を通して、サッカーの魅力を伝えることができる授業をこれからも研究していきたい。

自らの健康づくりに意欲的に取り組む子どもをどう育てるか

【甲州支会】心身ともに健康な生活を送る子どもをどう育てるか ～健康な生活習慣への取り組み～

現代ではSNSの普及により、健康に関する様々な情報があふれ、容易に健康に関する情報を獲得できるようになった。また、近年の子どもたちの健康課題は、就寝時刻の遅延や体力の低下、食生活の多様化、メンタルヘルスなど、複雑化かつ多様化している。さらに、新型コロナウイルス感染症が5類へ移行し、従来の学校生活に戻ったことやメディア機器の普及など社会状況の変化は、子どもたちの心身の健康に大きな影響を与えている。

そこで、心身ともに健康な子どもの育成と健康な生活習慣の確立を目指し、今年度も引き続き「生活習慣」と「心の健康」に焦点を当て研究を進めている。科学的根拠に基づいた内容で子どもたちが健康の大切さを実感できるような指導の工夫、また、よりよい健康生活を意識し自分事として考え、行動・習慣化できるような支援や指導、環境づくりをしていきたいと考え、取り組んでいる。

I 研究内容と方法

- 1 生活習慣グループ：ICT端末の使用と目の健康について
実態把握と保健教育の実践
- 2 心の健康グループ：心の健康を保持するための効果的な健康教育のあり方について
実態把握と保健教育の実践

II 成果と課題

生活習慣グループでは昨年度に引き続き、各校の実態把握と指導教材等の見直しを図りながら、各校の実態に応じて実践を積み重ねてきた。児童や教職員が目の健康に関する意識を高められるよう、掲示物や資料の作成をし、活用することができた。目の健康やメディアについて来年度以降、知識の定着や意識の向上、行動変容が持続できるように、より効果的な指導方法や保護者への啓発について検討していきたい。

心の健康グループでは、ICT端末を活用した「心の健康観察」の実施時期を統一し、長期休業明けの心の状態の傾向を明らかにすることができた。また、5学年の学級においては、心の健康に関する授業実践を行った。授業実践前後での児童の心の変化や指導の効果について検討し、継続的な指導や支援が抑うつ傾向の改善につながるとわかった。来年度以降も、「心の健康観察」を活用し、児童生徒の心の状態を把握していくとともに、抑うつ状態の改善に向けて、大学や甲州市の保健師と連携しながら保健教育を進めていきたい。

III 成果物

- 1 生活習慣 保健教育資料（指導案、配付資料等）、Google Formsでのメディアについての（事前・事後）アンケート、チャレンジカード
- 2 心の健康 保健教育資料（パワポ、配付資料等）、Google Formsでの心の健康観察

【山梨支会】 心の健康への自己管理能力を身に付けるために

山梨支会では、一昨年度から子どもたちのポジティブな心の状態に着目するポジティブ心理学的視点等を取り入れた心の健康教育を行っている。

年々変化する子ども達を取り巻く環境は、子どもたちの心の健康に大きな影響を及ぼしていることが考えられ、保健室から見える子どもたちの姿からも心の健康状態が懸念される場面が多く、子どもたちに心の健康の保持増進のための自己管理能力を身に付けさせることは喫緊の課題だと考える。

そこで、本支会では心の諸問題を未然に防止する予防的援助として心の健康を支える土台づくりに着目し、やる気や感謝、強みといった心のポジティブな側面に注目する心の健康習慣を身に付けさせ、主観的幸福感を高めることが心の免疫力を上げ、心身の不調を遠ざけることにつながるのではないかと考え、今年度は、「主観的幸福感を高めるための心の健康習慣づくり」をテーマに、研究をさらに深めた。

I 研究内容の方法

- (1) 各校においてポジティブ心理学等を取り入れた健康教育の実施
- (2) 実践内容の共有

II 成果と課題

本研究が始まり3年目にあたる今年度は、各校でポジティブ心理学的視点等を取り入れた保健教育を行い、実践の共有を行った。心の健康教育という広い概念がテーマだったため、気持ちの役割、自他の強み、レジリエンス、リフレーミング、幸福感など心の健康に関する様々な内容について各校の実態に合わせた指導を行うことができた。

また、ミニ保健指導や授業等の一斉指導を充実させるための手段として、スライドや大型モニター、タブレット等のICTを活用するだけでなく、合わせてワークシートも使用するといった、デジタルとアナログの双方を取り入れている学校が多くみられた。今回、実践を共有し、協議する中でそれぞれを活用することの良さに、改めて気づくことができた。

今年度は、各校で実態に応じた様々な保健教育を実践し共有することにより、来年度に向けて実践意欲を高めることができた。来年度は、今年度の実践共有で得られた学びを活かして各校でさらに実践を重ね、児童生徒の心の健康への自己管理能力を身に着けるための効果的な健康教育の方法を探っていきたい。

III 成果物

- ・幸福学やポジティブ心理学等を取り入れた指導教材

(部長 蘆原歩実)

「子どもが生き生きと学ぶ生活科」

～主体的・対話的で深い学びを引き出すための手立てを通して～

生活科において、子どもたちが身近な人々、社会及び自然と関わり合う中で、価値ある経験をしていき、交流や関わりを深めていくことでより豊かな学びへと繋がっていく。友達や物と関わり、言葉や活動でやりとりをしたり、指導者との言葉のやりとりをしたりする中で体験による学びがより深まっていく。また、評価の視点や基準を明らかにしていくこと、そして見取ったことを生かして、その子どもなりの前進を見い出していくことで、適切かつ子どもの気持ちの動く学習へと繋がっていく。

そこで、子どもたちが主体的に学び、物や人や自然との関わりの中でより深い学びをしていくための「具体的な手立て」「学びの深まる交流」「適切な評価のための評価カードや見取りの方法」、「学びを深めるための教師の関わり方」についての研究をすることで生き生きと学ぶことができるのではないかと考え、このテーマを設定した。

I 研究の内容

1 研究の内容

- ・日々の授業について情報交換を行い、授業実践に生かしていく。
- ・フィールドワークを取り入れ地域の自然について学び、授業に役立てる。
- ・授業研究を通して「子どもが生き生きと学ぶ生活科」について研究を深める。

2 研究の内容・方法

(1) 全会員の実践紹介と意見交流による学び合い

- ◇1学年 「きせつとあそぼうーあきー」 向山有紀(八幡小)
「スタートカリキュラム・保幼小連携について」 米倉佑季(日下部小)
「わくわく どきどき しょうがっこう」 矢崎さつき(塩山南小)
「スタートカリキュラム・チーム学年プロジェクトについて」 柏原有衣
「他校との交流・保幼小連携・季節の遊び」 岡村理恵(山梨小)
- ◇1,2学年 「気づきを意識した指導ー学習会に参加してー」 山下史江(井尻小)
「自然を教室にー学習会に参加してー」 奥山美恵(奥野田小)
- ◇2学年 「町たんけん」 精進利恵(八幡小)
「生きものはかせになろう」 中村真麻(日下部小)
- ◇5学年総合「ころ柿探検隊 広がれ ころ柿」 天野ねいろ(井尻小)
- ◇指導助言 古屋雅章校長先生(加納岩小)

(2) 夏季学習会の設定

中村正樹さん(峡東地域世界農業遺産推進協議会)、國友義博さん(県総合農業技術センター)を講師に迎え、「世界遺産の生物多様性」について学習会を行った。豊かな自然を守り、様々な視点から見ることや感触を味合わせる体験の大事さを学ぶことができた。また、

当日は雨のため外でのフィールドワークを行うことはできなかったが、室内で自然観察の仕方と生きものの採取道具の紹介等をしていただきながら自然観察をするときのポイントを教えてもらうことができた。採取した虫をルーペで観察しながら、どのような生きものがどこで生息し、自然の中でどのように影響しているのかについて詳しく聞くことができた。

(3) 研究授業

第1学年「もうすぐ2年生」 指導者 大島 めぐみ(菱山小)

本時は「自分の成長や、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどに気付くことができる。」を目標に授業を行った。児童は ICT を使って写真や言葉でスライドにまとめ、自分の成長を振り返った。日頃から安心できる環境づくりがなされ、自分の考えを話しやすい雰囲気が感じられた。5名という少人数学級の良さを十分に生かした授業実践を見ることができた。めあてを達成させるために何が有効なのか、子どもたちの思考を止めない方法、子どもの具体的な姿をイメージしながら評価するときの視点を明確にしておくことの必要性について学び合うことができた。

II 成果と課題

I 成果

- 研究テーマに基づいた授業案検討を行い、児童が主体的・対話的で深い学びに向かうことができるよう授業の流れや教材を工夫できた。
- 実践報告では、子どもたちとの関わり方や地域の人材活用等、自分にはない視点に気付くことができた。
- 学校や地域により特色のある実践をたくさん知ることができ、自分たちの授業力向上につながった。
- 教科書が変わったことで新たな研究が行われ、深めることができた。また、他教科との関連についても考えることができた。
- 講師を招いて行った夏季学習会を通して、豊かな自然を守ることや色々な視点から見ること、感触を味わわせる体験の大事さを学ぶことができた。

2 課題

- 教科書が変わったことや家庭の在り方が多様化していることをふまえ、生活科の実践の方法も過渡期になってきているように感じる。地域によって違いがあるかと思うが、家庭との連携について考えられるとよい。
- 生活科の授業において、めあてを達成させるための有効な方法を見極めていくことが大切である。また、具体的な評価の方法に関しても更に検討していく必要性を感じた。
- チャットなどを活用して、データでワークシートや指導案などが共有できるとよい。

(部長 奥山美恵)

一人ひとりを大切にした学級づくり

I 主題設定の理由

現在、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予想が困難な時代となっている。今の子どもたちが成人して社会で活躍するところには、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。また、子どもたちを取り巻く環境の変化により学校が抱える課題も複雑化・困難化している。

しかし、学校が抱える課題が複雑化・困難化しても、学校での「学び」の基本は、学級集団にあるといえる。一人ひとりの子どもが集団の一員として互いに認められ、楽しく生活し、学ぶための空間が確保できるような学級集団づくりが求められる。そしてさらに、自分たちの思いによって自治的な活動を創り出し、そこから学び合える学習集団にまで高めていく必要があると考える。

そこで、本部会では、一人ひとりを大切にした学級づくりをめざして、「一人ひとりの子どもが居心地の良い集団づくり」、「人間関係の絆を強め、人との付き合い方を学んでいく場面づくり」について研究を進めてきた。人権教育の推進についての学習を位置づけ、「一人ひとりの児童生徒がその発達段階に応じ、人権の意義・内容や重要性について理解し、自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができるようになる」という人権教育の視点も大切にしながら、「子ども自らがよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるための手だて」を明らかにするための研究を行っていくこととし、本主題を設定した。

II 研究の内容

1 研究の方法

- (1) 学級づくりのための手だての学習・演習に取り組み、学んだことを日々の実践に生かしていく。
- (2) 講師を招き「学級づくり」についての学習会を行う。
- (3) 授業研究を通して「子ども自らがよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるための手だて」についての学習を深める。

2 研究の具体的内容

- (1) 第1回研究会 今年度の研究の方向性の確認
- (2) 第2回研究会 年間計画についての検討・確認
学習会① 「学級づくりのための手だて」
講師：藤原 祐喜 教頭先生（山梨市立笛川中学校）
- (3) 第3回研究会
学習会② 「自覚的な学びについて～架け橋期にすべきことを考える～」
講師：角田 大輔先生（山梨大学准教授）
- (4) 第4回研究会
活動報告 藤本 優美先生（山梨市立加納岩小学校）
学習会③ 「学級づくりのための手だて」
講師：藤原 祐喜 教頭先生（山梨市立笛川中学校）

(5) 第5回研究会

実践報告 全員

- ・学習会①②③で学んだことを実践や資料などを持ちより、「一人ひとりを大切に
にした学級づくり」について、学びを深めた。

学習会④ 「学級づくりのための手だて」

講師：藤原 祐喜 教頭先生（山梨市立笛川中学校）

(6) 第6回研究会 秋季教育研究山梨集会の還流報告

統一授業研究会に向けた指導案検討

(7) 第7回研究会 研究授業 第5学年学級活動

「ハートアップチャレンジ～最高な6年生になろう～」

＜学級活動（3）ア＞

指導者：竹川 憲任 教諭（甲州市立奥野田小学校）

(8) 第8回研究会

研究のまとめ（本年度の成果と課題について、来年度の研究の方向性について）

Ⅲ 成果と課題

1 成果

- ・毎回活発な研究討議ができた。丁寧なご指導ご助言をいただき、学びが深まった。
- ・藤原教頭先生による学習会は、日々の実践にすぐ生かすことができ、充実した学び
となった。実践することで、さらに自身の学びにつながり、学級をつくっていく上
で参考にすることができた。
- ・山梨大学の角田准教授による学習会では、保幼小の連携について考える機会となっ
た。また主体的・対話的で深い学びに向けて、どのように授業づくりをしていった
らよいのかを部会員で交流し、自身の授業力の向上につなげることができた。
- ・実践報告では、学習会⇔実践のつながりがありよかった。実践者の学級集団づくり
への熱い思いが伝わってくるものばかりで、たくさんのことを学ぶことができた。
- ・部会員皆で指導案を検討し、意見を交流することによって、「一人ひとりを大切に
する」ことについて改めて考え、全員が研究を深めることができた。
- ・小学校でも中学校でも実践できる内容を、小中学校の先生たちが一緒に学び、理解
を深めることができた。理論研究や部会員の実践発表、そして研究授業という流れ
で研究を進め、研究テーマに迫ることができた。
- ・教科における授業や総合的な学習の時間、学校行事について考える活動などで研究
していくことも可能である。今後も、一人ひとりを大切にし、クラスの成長、また
子どもの個の成長や変容を実感できる研究をしていきたい。

2 課題

- ・実践報告では、2グループに分かれて行ったため、全員の報告が聞けず残念であっ
た。貴重な機会であるので、部会員全員で交流できるようにしていきたい。
- ・子どもたちの主体性とは何か、子どもたちの主体性を伸ばしていくためには9年間
という視点でどのように進めていくのか、などをもっと多くの中学校の先生たちと
一緒に考え、さらなる小中連携につなげていきたい。
- ・今後も学級づくりや人間関係づくりのための理論や手法を体験しながら学び、それ
らを実践していくという実践研究を大切にしていきたい。

（部長 柳澤 晴子）

「自立をふまえて（どの子ども共に生き，共に育つ）」

～一人ひとりの実態をふまえた支援と指導のあり方～

I 主題設定の理由

特別支援学級においては，それぞれの児童生徒の障害種別は多様で，一人一人の実態に応じた指導が求められている。また，通常学級においても支援や配慮を必要とする子どもが多くおり，支援学級・通級指導教室・通常学級の担任・担当が抱える課題は山積している。児童生徒，一人一人の障害の状況や発達段階，その特性に合わせた支援・指導を充実させることは，共通した研究課題である。

今年度の第74次春季教育研究集会において，本県の研究テーマは「どの子ども共に生き，共に育つ」～多様性を認め，つながり，共に学ぶインクルーシブ教育を目指して～に決定した。

具体的な研究内容として

◎各地区において，一人一実践等の主体的な研究とともに，授業研究や学習会等の組織的な研究を推し進める。

◎レポート作成においては，子どもを中心とした実践により，子どもたちの変容をみとり，成果と課題を明らかにすることが確認された。

そこで，本研究会でも，授業実践・学習会・情報交換等を通して，これまでの研究の蓄積や成果を踏まえた継続的な研究を基にしつつ，児童生徒一人一人の実態に合わせ，自立をめざした支援の方法を探るべく本主題を設定した。

II 研究の内容

1 講師を招いて学習会を行った。

8月 6日 特別支援養育基礎講座

① 障害者の一生を知る

② 様々な障害・事象への支援の基本を知る

講師 山梨大学教育学部附属特別支援学校

金谷 裕司先生

2 小グループに分かれ，情報交換を行った。

9月11日 障害種ごとのグループに分かれて情報交換

18日 障害種ごとのグループに分かれて情報交換

1月15日 テーマごとのグループに分かれて情報交換

3 研究テーマに基づいて，研究授業を行った。

9月11日・18日及び

1月15日 指導案検討 日川小学校 望月 清美教諭
1月29日 研究授業 知的障害特別支援学級 自立活動
題材「インタビュー名人になろう」
授業者 望月 清美教諭 (日川小)
指導・助言者 岡 輝彦 校長先生(笛川小)

4 成果と課題について話し合い、次年度に向けて見通しをもった。

2月12日 今年度の成果と課題 来年度へ向けて

Ⅲ 成果と課題

1 成果

(1) 研究授業について

- ・授業研究を通して、今年度のテーマに沿った研究を行うことができた。
- ・授業案検討を何度も行い、VTRの視聴による提案をうけ、有意義な話し合いができた。様々な資料やカード類等も提示され、今後の支援に生かすことができるものになった。

(2) 学習会について

- ・学習会では、障害者の一生や様々な障害や事象への支援の基本を学んだり再確認したりすることができる内容であった。

(3) 情報交換

- ・情報交換を行うことで、悩みや課題を共有し、支援内容や方法を協議することができ、有意義だった。

(4) 全体を通して

- ・多様な実態の子どもたちと担任のかかわりについて、深く考えることができた。
- ・小学校と中学校の両方の先生が所属する中で、それぞれの校種における特別支援教育の様子やそこから見える課題を明らかにすることができた。小中学校間が連携し支援を行っていききたい。

2 課題

- ・研究授業はとても意義あるものであった。授業者の過度な負担とならないように工夫していきたい。
- ・情報交換について、障害種やテーマに応じたグループ分けを工夫したい。様々なグループに入れるようにと考えると、情報交換の場がもう少しほしい。
- ・特別支援教育に関わる立場がいろいろとあり、個々がもつ課題や悩みは様々であった。研究会の内容や方法についてできるだけ、要望を踏まえた内容にしていきたい。

(部長 塚田 志小美)

学校教育における福祉教育のあり方を探る

I 研究の内容

- 1 各校の福祉教育の実践や様々な実践例から学び合う。
- 2 福祉教育のあり方を探りながら、研究授業に向けて研究会員全員で授業づくりを行う。
- 3 理論研究などを通して、福祉について理解を深める。

II 実践・研究授業

1 研究授業

第6学年 道徳科 井尻小学校 中村 悦子

(1) 主題名 思いを形に B (7) 親切、思いやり

(2) 教材名 温かい行為が生まれるとき (出典：学研「みんなの道徳6」)

(3) ねらい

相手の状況を想像して温かい思いと行為の関係を多様に考え、誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にしようとする心情を育てる。

(4) 本時の学習内容

- ①詩「行為の意味」を読み、「温かい行為」について考える。
- ②〈こころ〉や〈思い〉は、どうすれば相手に伝えられるのか考える。4つの事例から考える。
- ③ACジャパンの「見える気持ちに」という動画を見て、高校生の行為について考える。
- ④身の回りのことについて考える。
- ⑤〈こころ〉や〈思い〉は、どうすれば相手に伝えられるのかまとめる。

(5) 研究会より (話し合いの内容と助言)

- ・授業のまとめで、全員が「こころ」や「おもい」を相手に伝えるためには、行動や言葉を表すこと、移すことが大切であることを記述することができていた。
- ・福祉教育研究会として、近年、様々な教科でアプローチができています。教材を作っていく上での成果として、FigJamを使った意見交換の方法は効果的であった。甲州市は特に、1クラスあたりの人数が少なくなっている。意見交流という場面でも、他校と繋がる等の利点からもICTの活用は積極的に行いたい。
- ・児童から「手話翻訳アプリ」という言葉が上がった。教師側が想像しているより、子どもたちの福祉への興味は高いことも考えられる。

2 各校の実践報告会

各校の福祉教育の実践報告から、互いに学び合い、自己の実践に生かした。

加納岩小：児童会での取り組み・外国語、英語での福祉教育実践

松里小：ユニバーサルデザインについて考える

菱山小：異年齢・たてわり活動を中心にした福祉教育

奥野田小：学級づくりと福祉教育 特別支援教育と福祉教育

大藤小：ICTを活用した福祉教育 福祉講話、ふれあい集会について

神金小：SDGsと福祉教育 児童会での取り組み

祝小：児童会活動と福祉教育 各学年の福祉教育の取り組み

井尻小：保健室から福祉教育 児童会としての取り組み

塩山南小：手話でうたおう 給食の時間に福祉教育

このように、学級づくりをベースにしながら、各教科で幅広い実践が行えた。

3 実技講習会

甲州市社会福祉協議会が作成した YouTube の動画を参考に「手話学習会」を行った。この動画は、毎年行われている小中学生対象にした「手話学習会」のために作られた動画である。自己紹介の仕方や、挨拶など日常的に使える手話を動画で分かりやすく教えてもらった。

- ・難聴の児童と一緒にやってみることで、教育活動に有効に活用できた。
- ・甲州市社会福祉協議会という身近なところが出しているということが分かり、今後生かしたい。
- ・子どもたちの学びのためにまずは自分たちがやってみることができてよかった。
- ・動画の視聴ということで、講師とのスケジュール調整が省けた。業務改善にもつながった。



使用した動画

III 成果と課題

1 成果

- ・今年度は、甲州市の先生の割合が高く、研究会の連絡ツールとしての ICT 活用が進んだ。指導案や資料等の印刷業務の削減やコスト軽減にもつながった。
- ・年々、子どもたちの様子が変化する中で「福祉教育」が普段の「学級経営」「学校教育全般」につながっていることがわかった。
- ・各校の実践報告が年々、取り組む教科等も増え幅が広がっている。
- ・普段の学校生活の中で福祉教育を意識して取り組むことができた。いろいろな学校規模や学年が違う中でも、どの学年や教科であっても実践できることが分かった。
- ・「手話」の学習会を行えた。動画の視聴にしたことで、やむを得ず欠席してしまった先生も見ることができた。講師の先生とのスケジュール調整の手間が省け、有意義な学習会になった。
- ・福祉教育を含む「人権教育」は、「自分の居場所がある」ということをとても大切にしている。毎年、この研究会では、「研究会に来るのが楽しい。」「温かい雰囲気です。」「という意見が出されている。学級づくりと同じく研究会がそういった雰囲気の中に取り組めたことは、大きな成果だった。

2 課題

- ・コロナ禍で難しくなってしまった臨地研修が少しずつ復活できるといい。
(支援学校・放課後等デイサービス・フリースクール・作業所等の見学を検討したい。)
(時期的な問題もあるので、今年度のような動画や体験での学習会でもよいかもしれない。)
- ・総合的な学習に福祉が位置づけられていない学校も複数ある。いざ取り組もうとするとその中で、時間的・計画的見通しが難しい。
- ・福祉教育研究会として、東山梨の福祉教育のリードする取り組みができたらいと思う。
- ・甲州市に比べ山梨市の部員数が少ない。人数のバランスがよくなるとよい。
- ・小学校の先生だけでなく、中学校の先生とも研究を深めていきたい。

3 成果物

- ・統一授業研の授業案
- ・実践報告学習会で報告された実践

(部長 中村 咲)

食生活を考える
～子どもたちのより良い食習慣づくり～

I 主題設定の理由

本研究会では、学校教育の様々な場面で食に関する指導の実践を広げ、子どもたちがより良い食習慣を身につけ、健やかに成長していくことを目指している。そのために、学級担任と栄養教職員によるティームティーチングでの授業の進め方、教材教具や ICT の活用方法、給食時間における食に関する指導や指導資料を用いた実践の工夫などの研究を進めている。

授業実践や給食時間における食に関する指導を学校教育の一環として計画的に進めていくことは、子どもたちのより良い食習慣づくりにつながると考え、本主題を設定した。

II 研究内容

1 授業実践

小学校第 6 学年家庭科

授業者：奥野田小学校 栄養教諭 宮島 ゆき

題 材：こんだてを工夫して

内 容： 5 年生からの家庭科や食教育の学習で学んだことを生かし、栄養バランスを考えた 1 食分の献立を立てることに取り組む授業を学級担任と栄養教諭の T・T でおこなった。

栄養教諭が給食を教材として提示したり、自分たちで考えた献立が実際に希望献立として給食に登場するという目標を設定したりすることで、児童が献立作成を身近に捉え、バランスの良い食事を考えてみようという意欲につながった。また、授業では主に、1 人 1 台端末を使用して学習を進め、多くの機能を活用することで、何度も試行錯誤できる活動を取り入れ、個人の思考する時間を十分にとったり、クラス全体でお互いの考えを共有し、考えを深めたりすることができるようにした。

2 夏季学習会

臨地研修：ワインきのこ株式会社 工場見学

情報交換：給食センターで作成している食育動画を視聴し、各学校での活用の仕方や改善点などを出し合うなど、情報交換をおこなった。

3 実践発表

内容：各学校での食にかかわる実践や今までの取り組みなどを交流し合った。

○実践発表 I 東雲小（五味），日下部小（小宮山）

○実践発表 II 塩山南小（鈴木・芹沢）

- 実践発表Ⅲ 日下部小（島田・河西・萩原），東雲小（菱澤）
○実践発表Ⅳ 山梨北中（碓井），山梨南中（深澤）

Ⅲ 成果と課題

1 成果

（１）授業実践

- ・研究授業において、日頃から甲州市では ICT を取り入れた授業が定着していることが分かり、家庭科の授業における活用方法を学ぶことができた。
- ・ICT を取り入れることで学びの方法を選ぶことができ、子どもたち一人一人が献立作りに取り組むことで食への意識が高まっていた。
- ・とても丁寧な計画されていて参考になった。担任と協力しながら進めていたことが子どもたちにとっても緊張せずに臨めたのだと思う。普段通りの様子で進められたことが大きな成果であったと感じる。
- ・動画で参観することで、何度も見直せる点は良かった。

（２）夏季学習会

- ・東山梨地域の施設を見学でき、身近にこのような施設がある事を学ぶことができた。
- ・生産者の声を生で聞き、給食に使用する食材について学ぶ良い機会にもなり充実した学習会になった。
- ・給食センターを会場にしたことで施設の様子を知ることができ勉強になった。

（３）実践発表

- ・一実践において、食教育について色々な教科や視点で情報を共有することができて大変勉強になった。各校の実態に合わせた実践を通して、具体的な指導方法や取り組みを学ぶことができた。
- ・中学校での通級指導の中で、給食を苦手とする子どもへの支援の仕方を改めて考えることができた。
- ・中学校では給食指導はどちらかというと準備片付けの速さに目が行きがちだが、給食をとおして命や食べ物について学ぶことの大切さや感謝の気持ちををはぐくむことの大切さを改めて痛感した。

2 課題

- ・実際に授業を見ることができれば、子どもたちの学びの様子をより詳しく知ることができた。できるなら、授業の参観をしたい。
- ・部会の人数が少ないため、声をかけていくことが必要。実践の取り組みなどを自校に持ち帰り、伝えることを通して、学校全体で食教育に取り組んでいくことが大切。
- ・小学校で学んだことを中学校でも生かしていくことが必要。

（部長 五味 秋津）

研究テーマ「平和・人権教育と国際連帯の広がりをめざして」

I 研究の内容

- 1 テーマに沿った各自の実践の積み重ね
- 2 実践の共有
- 3 授業づくり及び検証

II 研究の方法

- 1 テーマに沿った各自の実践の積み重ね

日々の授業において、平和・人権を意識した実践を行う。行った実践を実践例として記録する。

- 2 実践の共有

各自が行った実践例を持ち寄り、実践報告会を行う。報告された実践について意見交換を行い、情報の共有を図る。

- 3 授業づくり及び検証

統一授業研究会に向けて、指導案検討を部員全員で行いながら、より良い授業に向けての手立てを考えるとともに、授業を参観する視点を共有する。授業後に研究会を行い、検証を行う。

III 研究の経過

5月 8日	春季教研 研究組織・研究テーマ・研究内容方向性の確認
6月 12日	研究計画確認 研究授業授業者・一実践発表予定確定
8月 6日	学習会
9月 11日	実践報告
9月 18日	秋季教研 指導案検討 実践報告
1月 15日	指導案検討 県教研還流報告 実践報告
1月 29日	統一授業研 研究授業
2月 12日	冬季教研 実践報告 研究の反省

IV 成果と課題

1 成 果

- ・一実践の内容が多様なものだったので勉強になった。また、提案された実践について、先生方が持っている知識でさらに学習が深められたので毎回広がりや深まりがあった。
- ・夏季休業中の人権に関する学習会には刺激を受けた。
- ・多くの実践から平和や人権について学びを深めることができた。学級でも実際にやってみたい実践を知ることができた。
- ・授業研究をさせていただき、改めて甲府空襲について調べたり、考えさせられたりで、いつになっても学ぶことができると実感した。まだ、継続した実践の機会が与えられ良かった。すべての学校で取り組むことは難しいが、学校体制や部会の先生方のご理解やご協力の上で成り立っていると気づかされた。
- ・保坂教諭が提供してくださった研究授業、その後の研究会から「戦争」や「紛争」から「平和」へ

と展開する実践について確認できた。“昔の”“遠いところの”ことではなく、人を大切に思うことへつなげられることも本研究会の核になるものだと思えた。

- ・この部会のテーマである平和や人権を意識して授業実践をすることができた。大切なことだが日常のあわただしさでなかなか触れることができないトピックについて、生徒に考えさせることができた。

2 課 題

- ・部会員が少なく、より多くの先生方がこの部会に参加し、実践を共有することで研究が広がっていくと思う。この研究会の持つ面白さ、奥深さを他の先生方にも伝えていけたらと思う。
- ・今後、戦争体験について語っていただける方々が減ってくるので、何らかの形で残す取り組みを東山梨でもできるとよいと思う。(アーカイブとか、写真資料の収集など)
- ・多様化する社会で課題も増えてくるので、それに対応できる指導内容も考えていきたい。
- ・平和・人権・国際理解に関するテーマで研究を行っているため、一つ一つの内容の深まりが希薄になってしまう部分があった。
- ・夏季学習会では、講師の依頼に毎年苦勞しているように感じる。互いの人脈を駆使して探していけると良い。

V 成果物

1 指導案

第5学年 語り部になろう

保坂千恵子（八幡小学校）

◇ねらい：甲府空襲について知り、戦争や平和について伝えていく方法を考える。

◇資料：『甲府くうしゅうのはなし かみず』 作 藤巻愛子 絵 山梨県内の小学生

2 実践報告資料

小学校 「らしさ」について考えよう

佐野理恵（山梨小学校）

権利の熱気球～権利のランキング～

雨宮 綾（後屋敷小学校）

中学校 差別を乗り越える ～ビキニ事件・被団協にふれながら～

中村大介（塩山中学校）

東日本大震災支援ボランティアに参加して

依田久幸（塩山中学校）

垣根をこえて「六千人の命のビザ」

川崎真理子（塩山中学校）

子どもの権利条約について知り、生徒エージェンシーとして

自分たちの学校で主体的に生きる子どもたちの育成をめざして

広瀬竜太（笛川中学校）

3 関連資料

① 「伝えたいことがある」

新刊 新しい道徳3 東京書籍

② 「六千人の命のビザ」

新刊 新しい道徳2 東京書籍

③ 神奈川県人権教育学習教材

小学校高学年用「らしさってなんだろう？」

小学校低学年用「自分が好きなもの」

④ 動画「いろいろな性ってなんだろう」小学校高学年版 認定 NPO 法人 ReBit

⑤ 「こども基本法とは？」

こども家庭庁

（部長 三枝 洋介）

「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方 ～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～

I 研究テーマにかかわって

自然環境は全ての生き物の生活基盤であるが、人間はこれまで自然を破壊し、あたかも人間だけが特別な存在であるかのように自然に対して大きな負荷を与え、再生不可能ではないかと思われるような開発を行ってきた。その結果、地球は、大気汚染、海洋汚染、オゾン層の破壊、地球温暖化、酸性雨、水質汚濁、食糧問題、人口問題、エネルギー問題、絶滅が危惧される動植物の数々…。実に様々な環境問題を抱えるようになった。

これらの問題を解決するためには、私たちの生活と自然とのかかわりにどのような問題があるのかという実態を正しく把握し、その原因を追求することが大切である。また、環境問題を引き起こしている社会経済の仕組みも理解し、環境に配慮した仕組みに変革していく努力も大切である。私たち一人一人が、問題解決のために何をしなくてはならないかを考え、実行していくことが必要とされている。

本研究会では、まず、私たちが科学的な知識に裏付けられた環境に対する現状認識を深めるとともに、環境問題を自分の課題としてとらえ、主体的に取り組んでいけるような子どもの育成をめざしていきたい。そのためにも、子どもたちが自然に親しみ、自然の素晴らしさや不思議さに気付くことができるような環境学習の機会を重視して、環境に対する豊かな感受性を育んでいきたい。

II 研究内容

1 授業研究

第5学年 総合的な学習の時間 「環境問題を考えよう」

授業者 向山 潤 教諭（山梨小）

単元目標

- ・自分が作成した図工の作品をもとに、自然との関わりを見つめ直し、自然の面白さや不思議さを感じて親しみを持たせる。

2 一人一実践

- ・部員一人一人が環境教育に関わる実践を報告し、意見交換をする。

3 学習会

（1）講師：蘆原 桂 先生 場所：玉宮小

内容：「オルビスの森」を題材とした、森に関する学習

（2）場所：米倉山次世代エネルギーPR 施設「きらっと」

内容：脱炭素社会実現に向けたエネルギーについての学習

Ⅲ 成果と課題

1 授業研究

9月の統一授業研は、第5学年総合的な学習の時間の授業を実施した。授業では、図工の学習で取り組んだコマ撮り作品を紹介した後、友達同士でアドバイスを伝え合う活動を行った。子どもたちの作品は自然の良さを伝える内容や、ものの気持ちを表現したものが多く見られた。研究会では、友達からはアドバイスだけではなく良い点を伝えた方がよいことや、個々の価値観の相違から良さや面白さがずれてしまうことの難しさが部員から挙げられた。授業の最後では、児童から「僕もやってみよう」「楽しそう」という感想が出たことから、身近な場所にも自然の面白さや発見があることに気付けたようである。子どもたちの主体的に学んでいる過程を見取ることができ、大変有意義な研究となった。また、ICTを効果的に活用し、子どもたちにねらいとする様々な気付きや考えを持たせるために、授業者の向山先生が労を惜しまず熱心に作成した教材は、本研究会の財産となった。研究会においても、授業がいかに子どもたちの心に残る素晴らしいものであったかを感じ取ることができた。

2 一人一実践

本年度は、生活科や図画工作科、総合的な学習、クラブ活動などの様々な実践が報告された。工夫を凝らして身近な環境や自然に対してのアプローチを試みたことは意義が大きかった。環境教育にも様々な切り口があることを部員相互に理解し、視野を広げることができた。その中で、環境教育は長期的で継続的に行われる必要があることから、次年度につながる系統的な視点をもって指導を行っていくことが効果的であることがわかった。また、SDGsの考え方やICTの活用などを重視した実践がいくつも挙げられ、系統性を意識したSDGsの取り組みやICTを効果的に活用する方法、実体験の大切さについて、部員同士で共有することができた。

本研究会が環境教育へのより深い理解や知識を学ぶ場となるよう、今後も研究を進めていきたい。

3 学習会

第1回は玉宮小において、講師に菰原桂先生をお迎えし、「オルビスの森」を題材とした森に関する学習を行った。当日は荒天のため玉宮小を会場として室内での開催となった。菰原先生が事前に葉や木の枝を採集しておいてくださり、実際に手に取りながら葉や幹などの特徴を知ることができた。また、五感を使ったレクリエーションも多数紹介してくださった。日頃、何となく眺めているだけでは気づかない自然の魅力を再認識することができ、今後の実践に生かしていきたいと強く思った。

第2回は、米倉山次世代エネルギーPR施設「きらっと」の見学を行った。大型モニターや模型、施設の方からの説明によって、水素エネルギーの「つくる・ためる・つかう」システムを学ぶなど脱炭素社会実現に向けたエネルギーの知識を深めることができた。地球温暖化に関わる問題、次世代エネルギー転換への課題や期待など、地球環境やエネルギーについて考える良い機会となった。

(部長 坂本 由香)

情報活用能力の育成

I 研究の内容

1 研究主題に関わって

社会の情報化が急速に進み、今や情報機器は生活に溶け込んでいる。今後も情報化社会をめぐる状況はめまぐるしく変化していくことが予想される。このような社会を生きていかなければならない子どもたちは、「情報活用能力」を身に付け、情報社会に対応できる力を得ていくことが求められている。

学習指導においては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実や「対話的で深い学び」を具体化するために、複線型の授業の取り組みが進められている。複線型の授業ではクラウド環境と1人1台端末が大きな力を発揮する。他者の考え方を参照して学ぶことや共同編集機能を活用して協働することなど、「新しい授業の形」も生み出され続けている。子どもたちが自分で学び方を選択し、学習を進めていく複線型の授業においても、情報活用能力は欠かせない。端末をはじめとするICTの効果的な活用を考えていく必要がある。また、学校のICT環境整備とICTを活用した学習活動の充実に配慮することも求められている。

本研究会では、複線型の授業におけるICTの効果的な活用に関する研究、児童の情報活用能力を高めるための研究、端末の活用に関する教師の指導力の向上を図るための研究を、昨年度までの研究の成果と課題を生かして深めてきた。

効果的なICTの活用例

- ・スプレッドシートの活用。各教科でのふりかえりシート。ループリックを作成し、児童に評価基準を示す。各自の学習進度と困り感を可視化。教師が把握できるだけでなく、子ども達の学び合いのきっかけとなっている。
- ・Google for Education, FigJam, Canvaなどを利用した考えの構築や交流。授業や生活の中で児童が活用し、自他の考えを瞬時に共有することに慣れ、議論やまとめ学習などに時間を取ることができる。今年度から導入されたFigJamやCanvaを用いた実践も共有された。テンプレートを共有することで実践に役立てている。

2 研究の具体的内容

(1) 授業研究 (1月29日)

小学校 第5学年 社会科「森林とともに生きる」

(2) ICT機器を活用した指導の工夫

- ・スプレッドシートを活用し、単元の学習シートを作成した。単元や本時の見通し、ループリックなどを提示することで、児童の活動が明確にな

るようにした。

- ・自分の考えを構造化し、交流によって考えを深めるために、FigJamやスプレッドシートを活用し、既習事項を振り返ったり、他者参照をしたりすることができるようにした。
- ・児童間で意見交流ができるよう、アナログやデジタルに拘らず自由にコミュニケーションが取れるようにした。

(3) 検証方法

ア 児童のまとめ、振り返り

イ 教師の見取り（児童の活動や話し合いの様子、発言）

ウ 授業の検証・分析（児童が学習課題に取り組む様子の録画動画の分析）

II 成果と課題

1 成果

- ・研究授業を中心に研究会として成果があった。ICT 機器の効果的な活用を通じて、「対話的で深い学び」の実現と児童の主体性の育成が進んだ。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実へ向けて、先生方が協力し合い同じ方向を向いて研究できたことが良かった。また、複線型の授業と ICT の効果的な活用について研究授業の検討会で活発な議論と検証があり、非常に参考になった。
- ・夏季学習会では、今年度山梨市と甲州市で導入されたグラフィックデザインツール「Canva」を活用した実践について学んだ。講師の先生の説明が分かりやすく、収穫があった。
- ・チャットスペースを活用し、市をまたいで研究を進めることができた。各校の実践や ICT を使った授業の交流があり、学びがあった。即座に取り入れられるアイデアも多く、実践に取り入れることができて良かった。

2 課題

- ・ICT を活用した授業においても、児童への手立てが必要である。特に児童同士の交流が上手にできていないときに、教師がどのタイミングでどんな指導や支援をするのか、考えていく必要がある。
- ・ICT を活用した学びが進んでいる反面、ツールの使い方やタイピング技能の習得が課題となることもある。ノートやプリントなどの方法でできることもあるため、思考を整理するために適切なものを選択できるようにしていきたい。
- ・研究会の人数が適正となり、多様な意見が出るようになった。これからさらに研究を進めていくためには、小グループでのディスカッションや、オープンな環境で議論を行うなど、研究会の運営についても工夫をしながら、今後も研究を進めていく必要がある。

III 研究の成果物

- ・第5学年 社会科 学習指導案「森林とともに生きる」
- ・ICT端末の教科・校務における効果的な活用方法の実践例

（部長 有賀 慶史）

一人ひとりにあった生きる力をつけるための進路指導・キャリア教育はどうあるべきか
～小・中学校の実践を通して～

I 研究の方法

- ・各教科の授業をキャリア教育の視点で実践し、資料を持ち寄り、情報交換および相互的に学習する。
- ・地域との連携、また職場体験について各校独自の実践を学び合う。
- ・キャリア教育について小中連携をしながら研究する。

II 研究の具体的内容

1 授業実践

松里中学校 第3学年 総合的な学習の時間 (雨宮 友久 教諭)

「就職活動について考えよう ～私を採用してみませんか～」

【目 標】

職業や自己の将来に関する探究活動を通して、中学校卒業後の自己の生き方についての理解を深めるとともに、これまでの探究活動を振り返って自分自身を見つめ、自己の将来の生き方を考えることができるようにする。

2 実践・資料発表

奥野田小	キャリア教育の全体計画・各学年での実践紹介
後屋敷小	小学校におけるキャリア教育の実践紹介
東雲小	小学校におけるキャリア教育の実践紹介
山梨南中	職場体験や中学校3年生でのキャリア教育の実践紹介
山梨北中	高校調べ・職業講話などの実践紹介・地域人材の活用について
塩山北中	職場体験・教科における教育の実践紹介
松里中	宿泊学習におけるキャリア教育の実践紹介
塩山中	総合的な学習の時間におけるキャリア教育の実践紹介
勝沼中	総合的な学習の時間におけるキャリア教育の実践紹介

III 成果と課題

成果

- ・総合、特活、教科の授業でキャリア教育を実践し、大きな成果があった。児童生徒が自分自身を見つめ、将来を考えることは、長期的な視点に立ったキャリア形成において重要であることを実感した。
- ・小学校、中学校それぞれ多様な立場からの意見交換は、学校の意義、教師の役割、教育の根幹について改めて考える良い機会となった。
- ・研究授業や協議を通して、地域の実情を踏まえ、視野を広げ、多様な考え方を共有することができた。
- ・今年度のように、各校の実践を持ち寄る形式が良い。率直な意見交換により、議論が深まった。

課題

- ・研究会の性質上、1 単位時間の授業のみでは成果が見えづらいと感じた。授業とその前後の学びや体験活動について研究していく方がよいと思う。
- ・継続して研究していくうえで様々な視点からのアプローチが必要である。
- ・今後、小学校と中学校それぞれの立場から、子どもたちが将来を生き抜く力を育むために、学校として何ができるのかをさらに深めていく必要がある。
- ・事前に資料を共有したり、各学校での取組を発信できたりするツールを活用していきたい。

理論研究に基づいた実践について

- ・研究授業では、子どもたちが仲間と協働しながら自己分析を深め、自分の考えを表現する様子が見られた。子どもたちが主体的に選択し、自己決定する学習活動を取り入れることの重要性を改めて認識した。
- ・キャリア教育の視点が共有でき、教科でのキャリア教育の実践を学ぶことができた。
- ・研究授業については、ねらいを明確にした授業づくりにより、生徒が自分自身の今後の進路や職業について具体的にイメージすることができる内容だった。
- ・授業者からの提案を基に、研究会全員で考察を深められることが良い点である。
- ・各校の特色を活かしつつ、東山梨の小中学校全体で系統性のある学習研究と実践に取り組むことも検討すべきである。
- ・共通の課題意識を持ちながらも、各校種・学年ならではの特色あるキャリア教育の取り組みが重要である。

IV 成果物

- ・中学校 3 年生学活レポート
- ・各校実践レポート

(部長 古屋沙矢佳)

地域とともにある学校づくりをめざして

I 研究の内容

1 研究の方法

(1) 研究の柱

- ・学校と保護者、地域との関わり方・提携の方策について
- ・学校・子どもたちが地域の人々や保護者とのつながりを生み出す実践
- ・研究成果の共有（情報発信も視野に入れる。）

(2) 部員は各校の実践を通して、子どもたちの変容、問題点、悩みなどを提案しそれについて討議し研究を深める。

常任講師の先生方に、常時ご指導・ご助言をいただく。

(3) 保護者・地域との提携について、授業実践を通し研究を深める。

2 実践発表と授業実践の紹介

〔実践発表…各校での保護者・地域住民と提携した教育活動や行事の実践〕

(1) 大和小学校

- ・保護者・地域と連携した取り組み：地域教育の推進，学校支援地域ボランティア
校外学習・学習成果発表会・勝頼太鼓・座禅教室・神社清掃等

(2) 塩山南小学校

- ・保護者、地域との連携：サザンクロス会の活動・PTA ベルマーク活動

(3) 松里小学校

- ・保護者と地域住民との連携：有価物回収，松里小縁日等

(4) 日下部小学校

- ・保護者・地域との連携：日下部小スタートカリキュラムの取り組み

(5) 山梨北中学校

- ・CS にかかわる連携：山梨市 ECHOES 学習 圃場の取り組み
合唱指導，芸術鑑賞会，職業講話・職業体験

(6) 笛川小学校

- ・保護者・地域と連携した取組：山梨市 ECHOES 学習 5 年 米作り，こども祭り

(7) 岩手小学校

- ・保護者・地域と連携した取組：安全活動支援，農業体験活動，地域伝統継承活動，
学校行事支援
- ・世代間ふれあい活動：工作教室（年 2 回），グランドゴルフ，昔遊び

(8) 勝沼小学校

- ・保護者・地域住民との連携：3 年社会・5 年総合ぶどう作業体験，1 年生活科自然体験・昔遊び体験，PTA 奉仕作業等

(9) 加納岩小学校

- ・保護者・地域と連携した取組：有価物回収，1 年生活科昔の遊び集会

〔授業研究〕

小4学級活動（山梨小学校 雨宮 菜月先生）

議題：「ふれあい交流会を作り上げよう」

授業の概要：聾学校の児童との交流会において、前回の活動の反省と聾学校の先生からのアドバイスをもとに、みんなが楽しめる活動にするにはどのような工夫が必要かグループごとに話し合い、全体でより良い方向性を考える活動を行った。

〔夏季学習会〕

○統一授業研の授業案検討

○大和小学校の実践発表「地域に支えられまっすぐ育つ子どもたち」

大和小学校 有泉昌和校長を講師に、小規模校の良さを生かした地域との連携について学習会を行った。

Ⅱ 成果と課題

1 成果として

- 各学校の実践発表を行い、情報交換ができた。保護者や地域との連携には様々なものがあり、学校規模や環境など特色を生かした実践が行われている。学校活動には多くの方の支えがあることがわかり、教育活動の参考となった。
- 学校の特性を生かした地域との連携と、こどもの主体的に活動する力をはぐくむ授業提案であった。児童が明確に相手意識を持ち主体的に学ぶことができる課題設定であった。聾学校との連携という地域との連携について新たな視点となる提案だった。

2 課題として

- 新型コロナが5類に移行され、学校での活動の制限も緩和された中で、今後学校が保護者、地域、各機関とどのように関わり、学校での取組を持続可能なものにしていくのか考えていく必要がある。
- 教員の働き方改革につながる、保護者と地域住民、各機関との連携について研究を進めていきたい。（コーディネーターなど）
- 保幼小だけではなく中学校とのつながりも持てると研究の幅が広がると考えられるので、多くの中学校の先生にも加入していただき研究していきたい。

Ⅲ 成果物

- 各校の実践レポート
- 小4学級活動授業案
- 小1生活科授業実践の教研レポート

（部長 新海 小緒里）

「豊かな教育を子どもたちに」

I 研究の内容

1 研究内容の具体的内容と方法

(1) 甲州支会と山梨支会に分かれ、それぞれの課題について研究をすすめた。

ア 甲州支会…「豊かな教育を子どもたちに～私たちの意識改革～」

○予算分析のとりくみ

○不用額調査のとりくみ

○教育環境実態調査

○中学校統合に向けたとりくみ

イ 山梨支会…「豊かな教育を子どもたちに」

○働き方改革と業務改善…働き方改革調査、ICT活用等調査、学習会

○教育条件整備と予算要望…教材費・私費・燃料費調査、予算分析

○学校事務と事務職員のあり方…共同学校事務室との連携、学習会

(2) 『東山梨教育研究63号』内の「教育行財政及び教育環境の実態」を担当し、調査を実施。

調査前には留意事項を全体で確認し継続調査を実施した。教育環境の実態把握と改善点を探り、調査の活用を考える。

II 成果と課題

1 成果

(1) 甲州支会

今年度からは新たな3年サイクルの1年目が始まり、中学校統合に向けたとりくみをおこなった。今年度末に控える中学校統合に向けて、統合される学校で必要となる作業を洗い出し、継続的なサポートをおこなった。継続してとりくんでいる予算分析については、今年度は校種で分かれず全体でおこなうことにより、小学校・中学校で共通した課題点を明らかにできた。他校の成果と課題を共有することができ、事務職員の意識改革につながり、研究を深めることができた。

(2) 山梨支会

春季教研で決定した3つの研究の柱に沿って研究をおこなった。毎年おこなっている予算分析に加え、私費負担調査もおこない、保護者負担軽減に向けて研究をすすめることができた。働き方改革調査については、各校の実践事例を共有することにより、働き方改革への意識を高めることができた。ICT活用等調査については、業務改善につながる各校のとりくみを共有することができた。学校徴収金の集金方法等については、今後の課題であるため、様々な選択肢を共有することにより、研究を深めることができた。

(3) 全体として

分散会形式で支会ごと研究をおこない、各市における課題を明確にし、それぞれ継続している研究をさらに深めることができた。両市ともに予算に関わる継続的な研究等において共同学校事務室との連携も機能していた。採用年数や年齢に関わらず、全研究会

員の共通理解のもと、事務職員の専門性を高めあうことができた。教育環境実態調査については、調査前に留意事項を全体で確認し、継続調査を実施した。両市の教育環境の実態把握と課題を明らかにすることができ、研究を深めることができた。

2 課 題

(1) 甲州支会

予算分析については今後も継続した研究を重ね、校務のD X化推進による消耗品費減額をすすめていきたい。小学校・中学校共通の課題があるか洗い出しをおこない、共同学校事務室と連携しながら、予算要求に向けて教育委員会へ要望していく必要がある。また、公費と私費を「見える化」し情報共有できるよう、学校徴収金についても研究していきたい。予算分析については意識次第でより充実したものになるため、次年度以降も継続してとりくみ、今後も共同学校事務室と連携しながら様々な課題等を検討していきたい。

(2) 山梨支会

前年度決算・当初予算推移の結果分析については今後も継続した研究を重ね、効果的な予算執行へつなげたい。共同学校事務室とも連携しながら、予算要求に向けて市当局へ働きかけていく必要がある。また、私費負担調査については、保護者負担軽減に向けて継続してとりくみ、今後は学校徴収金の集金方法等についても検討していく必要がある。I C Tの活用については、事務職員の視点から気づいたことや意見を発信してD Xの推進をすすめ、働き方改革にもつなげていきたい。

(3) 全体として

継続して予算分析をする中で、両市とも厳しい財政が続いていることが明らかである。調査等を活用し、予算要求や保護者負担軽減へのとりくみに結び付けたい。教育環境実態調査については、両市の教育環境の実態を明らかにすることができるため、継続してとりくむ必要がある。教育環境を整備するためには、配当予算の充実や配当予算の有効活用は欠かせないため、今後は調査結果を予算要求等に活用していきたい。

各市が抱える課題に対して支会ごと研究をすすめ、両支会の研究発表や情報交換を通じて共通理解を図りながら、研究をすすめていく必要がある。今後も子どもたちの豊かな教育環境の整備に向けて、持続可能な研究をすすめていきたい。

Ⅲ 成果物

1 甲州支会

- 予算分析表
- 寄贈物品一覧表

2 山梨支会

- 学校配当予算分析表、学校配当予算一覧表、学校配当予算・決算一覧表
- 「働き方改革」分析
- 「私費調査」分析
- 「I C T活用等」分析

(部長 雨宮美沙)

豊かな学びを創造するゆとりある教育課程の編成と実践

I 研究の内容

1 研究の方向性

新学習指導要領が全面実施され、子どもたちの学力向上に対する期待が高まっている。私たちは、「何を学ぶか」ではなく、「どのように学ぶか」を改めて問い直し、自主創造的な教育実践を積み重ねることによって、これらの声に対する結果を出していかなければならない。子どもたちに「ゆたかな学び」を保障していくために、質の高いカリキュラムや実践を創造していくことは、私たち教職員の使命である。子どもの実態をふまえ、教材の活用や授業の展開を徹底的に検討することに加え、カリキュラムや授業プランを工夫して、その内容や方法を創り変えていく必要がある。すべての子どもたちに、学び合いの中で「学びの意欲」を喚起させる「わかる授業」「楽しい授業」を創造するために、日々目の前にいる子どもたちの実状に合わせたカリキュラムを追究し続けていかなければならない。

本研究会ではこれまでに、主にカリキュラム編成の工夫について総合的な学習の時間を中心に研究を進めてきた。会員全員がそれぞれの実践を持ち寄って意見交換を行い、総合的な学習の時間における指導の工夫や可能性について討議を重ねてきた。新学習指導要領においては、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「知識・技能を活用して自ら課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」によって学力向上を図ることが示されている。しかし、時間数の削減や運用の仕方が工夫されるなか、各教科で学んだ知識や能力を教科横断的な視点で見直し、発展させていくことによって、その成果を高めることが期待されている。そこで本研究会においては、総合的な学習の時間だけにこだわらず、他の教科での実践も視野に入れ、自主編成によるカリキュラムの工夫について研究を進め、検証結果を日常実践に還元していくことを目指している。

授業実践においては、多角的な視点をもって教材や単元を分析しながら「どのように教えたらよいか。」「どういう授業を展開したら効果的か。」を模索していくことを基本とし、定められた指導計画によるものではなく、「教科書“で”教える。」という意識を大切にしながら、自主創造的な学習プランを策定して実践を進めていく。

そのために、次の3つの視点を重視して、成果の検証にあたる。

(1) 授業(単元)における、「子どもにつけさせたい力」は何かを明らかにする。

(2) 授業(単元)において、授業者が「自主編成した部分はどこか。」「工夫したところや作りなおした点はどこか。」を明らかにする。

(3) 授業(単元)のふり返しや分析を丁寧に行い、成果と課題を明らかにする。

授業の分析においては、授業の様子を撮影した画像・映像の効果的な活用と、子どもの記述などを多角的に分析していくことによって、子どもの変容をみとり成果と課題を明らかにしたい。本部会としては、すべての子どもたちの「学びたい」という意欲を引き出す工夫と、すべての子どもに「豊かな学び」を保障していくことによって、結果として子どもの学力の向上にもつながるように、内容や方法を捉え直す努力を積み重ねていきたい。

2 研究授業と各教科などにおける個人実践発表

○総合	やってみよう！My SDGsプロジェクト	加納岩小：藤木真里佳	教諭
○総合	祝博士になろう！～日本ワインの歴史～	祝小：小宮山公仁	教諭
○理科	実技テストにおけるICTの活用と評価	山梨北中：飯島 聖華	教諭
○社会科	世界の諸地域 アジア州	塩山北中：金森 淳	教諭
○数学科	三平方の定理	山梨南中：前田 大輔	教諭
○家庭科	生活を支える物やお金	加納岩小：神宮司香織	教諭
○スタートカリキュラム		日下部小：岩下亜希子	教諭
○総合	『わたしたち』と『山梨市』の未来について考え、話し合おう		
		山梨北中：前島 香織	教諭
○理科	電気と私たちの暮らし	後屋敷小：山田 勝博	教諭
○英語科	Unit5 Plastic Waste	山梨北中：秋山 悦子	教諭
○総合	日下部の人々の願いを知ろう	日下部小：鶴田真紀子	教諭

研究授業

○総合的な学習の時間

小学校3年生 生物ふしぎ発見 ～乙女高原大好きプロジェクト～

笛川小：向山 澄 教諭

※ 指導助言

勝沼小：小椋 規雄 教頭

II 成果と課題

1 成果

- 小学校・中学校の実践を、それぞれの発達段階や学習状況に応じた多くの工夫を共有することができたため、学びの多い研究組織となった。またそれぞれの立場からの質問や意見が出されたため、自分自身の授業を再考することのできる有意義な研究を行うことができた。
- 総合的な学習の時間に限らず、さまざまな教科、またスタートカリキュラムのような先進的な実践等の報告があった。そのため幅広い実践に加え、多岐にわたる内容を学び得ることができた。教科は異なっているが、ICTを効果的に活用することで、児童生徒がより主体的・協働的に学ぶことのできる環境作りを研究することができた。
- 地域素材を生かした実践では、地域連携の重要性とともに、指導者の展開工夫や単元構成の工夫によって、多くの可能性を見出すことができた。

2 課題

- ・児童生徒が自ら課題を解決する力をつけさせるための仕掛けづくりの工夫は、十分にできていたと感じた。そこから解決するための方法を児童生徒にどう委ねることができるのかを、さらに研究することが大切であると感じた。
- ・実践後の継続した取組や活動について、児童生徒の考えや授業展開の変容を共有することで、各自の実践へ深まりや広がりが見られると感じる。各自の実践を継続して研究し交流していくことも必要であると感じる。

(部長 藤木真里佳)

「生きる力」をはぐくむ評価のあり方

I 主題設定の理由

本部会ではこれまで、子ども達に『生きる力』をはぐくむため、子どもの学ぶ意欲や学びの過程、学びあう人間関係づくりを大切にし、社会に出て生きる力につながる『ゆたかな学び』を保障していくことに焦点を当て教育研究活動を進めてきた。子ども一人ひとりの『ゆたかな学び』を保障するためには、各学校における児童・生徒や地域の実態に応じた教育課程の編成・実施や、それに伴う指導法の工夫、指導の振り返りと改善、適切な評価と支援など、様々な重要な要素が考えられるが、本年度も日常行っている評価を見直し、児童の学び・変容を丁寧に見取り、具体的・積極的な評価を行うことで次の学習活動への意欲を高め、確かな学力の定着をいっそう図りながら『ゆたかな学び』を保障していきたいという考えにたち研究を進めてきている。

II 研究の内容

1 研究の方向性

1枚ポートフォリオ評価、ICT活用、またポートフォリオを使った指導と評価の一体化を目指した研究を進めていきたいと考えた。部会員の先生方の授業実践の報告・検討を中心にして、評価方法を検証し確認することができた。

2 研究授業

令和7年1月29日（水）に中根 淳先生（勝沼小）の社会科「平和で豊かな暮らしを目指して」の研究授業を行った。

3 理論研究

学習会で1枚ポートフォリオ評価とICT活用の関わりについて学び、その学びを元に多教科に関わったOPPの実践を出し合い、研修を深めた。

III 成果と課題

1 成果

- ・一枚ポートフォリオ（紙面）とICTを活用したポートフォリオの両方の実践について学ぶことができた。また、それぞれのよいところを話し合うことで日ごろの実践に活かすことができた。
- ・生きる力を育む、という大きなテーマをどのように解釈するかについて、多面的に捉え

られた研究になった。教師のフィードバックのもと児童に視点を与えたり、学び方における評価基準を載せたりと、様々な面から児童の学ぶ力＝生きる力を身に付けさせるための教職員の働きかけができた。

- ・指導につながる評価について、各自の実践や資料をもとに協議することで、具体的な内容（ループリックや一枚ポートフォリオの具体的な構成など）を学ぶことができた。
- ・夏季研究会にて、理論研究を深めることができた。具体的な実践を多く知ることができ、有意義なものとなった。
- ・研究授業では、OPP シートのデジタル化を図ることができた。デジタル基盤の学習者主体のスタイルになりつつある現在に、振り返りからデジタル化を図る良い研究となった。また、研究授業で使われたシートは、個人の振り返りメインでまとめられており、大変貴重である。そこへ、教師のフィードバックがあることでさらに自己調整が図られる学習へと進展していくと期待できる。
- ・研究授業では、ループリックを設定して、子ども達のポートフォリオの記述から評価する具体的な道筋を見ることができた。また、新しい形の授業者が使いやすい指導案を提案してもらい、可能性が広がった。

2 課題

- ・一枚ポートフォリオ（紙面）と ICT を活用したポートフォリオの両方のよいところをより明確にし、効果的に授業と結びつけるよう、来年度も研究をしていくことができるとよい。
- ・蓄積されていくデータの十分な活用が課題だと思う。子ども達が残した（膨大な）記述を次の授業に生かすにはどのようにしたらよいのかを考えていくことも有意義だった。
- ・1枚ポートフォリオを活用した「評価」についての研究をもっと深めていく必要がある。毎時間の自己評価も大切であるが、やはり単元を通した児童の変容からの評価についてももっと学びたい。
- ・一人一実践で使用した教材や作成した振り返りシート、デジタルポートフォリオのもとなどを2市で共有できると、より交流が活発になるのではないだろうか。普段から会員同士でつながることができ、対面での研修により深まりが出ると考えられるので、共有できるクラウドがあるとよい。

3 今年度も研究で確認できた評価の実績

- ・ICT 端末の活用とポートフォリオ評価を活用した児童の実態把握に基づいて、授業づくりを組織的に行うことができた。

（部長 小林 淳子）

教育協議会研究

【ブロック交流研究会研究】

山梨南ブロック …… 119

山梨北ブロック …… 120

笛川ブロック …… 121

塩山ブロック …… 122

塩山北ブロック …… 123

松里ブロック …… 124

勝沼ブロック …… 125

【特別委員会研究】

児童会・生徒会活動の活性化にむけた研究会 …… 126

個別最適な学びと協働的な学びの一体化の充実

～ I C T の活用と小中連携～

I 主題設定の理由

同じ地域に学ぶ子どもの教育に携わるという立場で、個別最適な学びと協働的な学びの一体化の充実を目指し、講演会・授業参観を通して系統的によりよい指導が行えるよう本主題を設定した。GIGA スクール構想の推進も視野に入れ、ICT の活用にも重点を置いた。

II 研究の内容

1 第1回交流研究会（山梨市 LDX 事業からの授業〈加納岩小〉・講義提供）

（1）日時 令和6年5月15日（水）15：30～

（2）目的 GIGA スクール構想における学びの充実

（3）内容 講義（オンライン）

演題 「ICT の活用と小中連携～道具としてのスキルや学びとしてのスキル～」

講師 学校 DX 戦略アドバイザー 西田光昭 先生

2 第2回交流研究会（加納岩小学校授業参観と情報交換会）

（1）日時 令和6年11月27日（水）14：10～

（2）目的 個別最適な学びと協働的な学びの一体化を目指した授業を参観し、小中の連携の視点から意見を交換し合い、今後の教育活動に生かしていく。

（3）内容 ア 授業参観 加納岩小学校第2～6学年

イ 情報交換会

II 成果と課題

1 成果

- ・第1回ブロック交流研では、「令和の日本型学校教育」を実現するためには子供たちの学びの転換とともに、教師自身の学び(研修観)の転換を図る必要があるといった共通理解が図れた。
- ・第2回ブロック交流研では、加納岩小学校の児童の様々な学習場面を参観することができた。複線型の授業も展開される中で、ICT も有効活用されており、児童の活動量が多い授業を実際に見て学ぶことができた。

2 課題

- ・今後も小中の連携を通して、個別最適な学びと協働的な学びの一体化の充実を図るための方策を検討していく必要がある。

（ブロック長 雨宮 菜月）

山梨北中ブロック交流研究

研究主題 「小中の連携を深め、山梨北ブロックの児童・生徒の指導に生かす」

I 主題設定の理由

山梨北中ブロックの児童・生徒を健全に育てるためには、普段交流の機会の少ない小・中の教職員が共有の活動や話し合いを持ち、教育上の課題を見つけ、より良い解決の方法を探り、連携を深めることが必要だと考える。

本ブロックでは、これまでも同じ地域で学ぶ子どもたちを共に教育するという立場から、共通の教育課題に対して講師を招き、学び合いを行ってきた。その取組を通して、目の前の児童・生徒の指導に生かせる有意義な内容であったと成果を確認し合うことができた。また、小・中の授業参観や研究会についても継続して行ってきたが、児童・生徒の実態の理解が深まると共に、発達段階による特性や各校の特色、学力向上の取組などを交流し合うことができ、その意義を実感できたところである。

今年度も、学習会と授業参観・研究会という交流研究により、本ブロックの児童・生徒理解と小・中連携を深め、各校の指導に活かしていきたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の具体的内容

1 第1回交流研究会

- (1) 目的 学習会や情報交換を通して小中の連携を強化し今後の教育活動に生かしていく。
- (2) 日時 令和6年5月15日(水) 午後3時30分から
- (3) 内容 学習講演会と情報交換会
- (4) 演題 「子どものSOSサインと教育相談」
- (5) 講師 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター 准教授 渡部 雪子 先生

2 第2回交流研究会

- (1) 目的 情報交換を通して、小中の連携を強化し今後の教育活動に生かしていく。
- (2) 日時 令和6年11月27日(水) 午後2時から
- (3) 場所 山梨北中学校
- (4) 内容 授業公開と情報交換会

III 成果と課題

1 成果

- ・学習会を通して、子供たちの普段の様子の変化やSOSのサインに気づくことへの大切さを理解した。
- ・小中の先生方が、一緒に同じ講演会で学べたことは有意義だった。
- ・それぞれの授業を見る機会は貴重である。また、情報交換をすることで、それぞれの実情や様子を知らることができ、有意義だった。

2 課題

- ・小中連携について、何に力を入れて連携を図っていくのか、第1回目に確認ができると、研究がさらに深まる。
- ・情報交換会の持ち方について、内容など考えるとより有意義なものになると感じた。個人的な情報交換は、この時に行わないようにする。

(ブロック長 向山 有紀)

笛川ブロック交流研究会

研究主題

小中の連携と ICT 活用推進を図る

I 主題設定の理由

同じ地区で学ぶ児童・生徒とともに教育していくという立場から、小・中それぞれの課題や今日的な教育課題を共有し、共通理解を図りながら、よりよい解決の方法を探ることが必要であると考えます。学習会や授業参観、交流会を通して教員間の連携を深め、義務教育9年間の系統性を見据えた上で地域の児童・生徒を理解し、今後の教育活動にいかしていきたい。

また、今年度は、山梨市リーディング DX 事業の協力校として ICT の活用推進を図りたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の内容

1 第1回ブロック交流研究会

(1) 日時 令和6年5月15日(水) 15:10～

(2) 場所 各校 会議室等(オンライン)

(3) 内容 山梨市 LDX 事業からの講義提供

学校 DX 戦略アドバイザー西田光昭先生による「クラウドを活用した授業づくりの考え方や実践例、GIGA 端末の普段づかいの実践例」について、指定校の加納岩小学校の校内研究会にオンラインで参加。

2 第2回ブロック交流研究会

(1) 日時 令和6年11月22日(金) 14:00～

(2) 場所 笛川中学校

(3) 内容 ア 笛川中学校における授業提供及び授業参観

イ 情報交換会

ウ 小中連携部会研究会

①学校運営部 ②学力向上検討部 ③特別支援・生徒指導部 ④自治的活動部

III 成果と課題

1 成果

- ・「令和の日本型学校教育」を実現するためには、子どもの学びとともに、教員の学びの転換を図る必要がある。講演会を通して、ICT の利活用の具体について学び、一人一人の子どもを主語とした授業観が必要なことを参加者全員で確認することができた。
- ・ 笛川中学校の授業参観での、日常的に ICT を活用している場面や、生徒が協働的に学習に取り組む姿を実際に見ることにより、9年間を見通した学習指導の在り方について学ぶ機会になった。
- ・ 少人数での部会研究会を行い、今年度までの各校の状況や取組、課題について共有することができた。

2 課題

- ・ 今後も、授業や教室環境の工夫、家庭学習の取組などの情報を共有し、9年間を見通した教育活動を行うための連携を図る必要がある。
- ・ 校務についても、可能なところからクラウド上での小・中の連携、共有化を進めていきたい。

(ブロック長 平山 沙織)

「小・中の連携を深める中で、系統性をつかみ授業に生かす」

I 主題設定の理由

小・中の連携では、義務教育9年間の教育活動を理解した上でその指導の系統性をつかみ、授業改善を行っていくことが必要である。また、塩山中学校区の生徒指導上の諸問題に対して、協力しながら対応していく目的も担っている。塩山ブロックにおいても、小・中の教職員が共通理解を深め、同一の課題意識のもと、子供たちの育成にあたることが必要となる。そのため、地域が抱える教育課題を共有し、教育課程の系統性も確認しつつ、今後の教育活動に生かしていけるよう、本主題を設定した。

II 研究の具体的内容

1 第1回ブロック交流研究会「塩山南小学校授業公開及び情報交換会」

(1) 日時 令和6年5月15日(水)14:00~16:00

(2) 内容 ア 塩山北小学校の授業を参観する。

イ 教科を軸とした分科会に分かれ、話し合いの柱について情報交換・意見交流を行う中で、小・中が連携した教育実践が進められるようにする。

2 第2回ブロック交流研究会「塩山中学校授業公開及び情報交換会」

(1) 日時 令和6年11月27日(水)14:00~16:00

(2) 内容 ア 塩山中学校の授業を参観する。

イ 8つの分科会(国語, 社会, 算数, 数学, 理科, 外国語, 英語, 保健体育, 技術, 家庭科, 道徳)に分かれて、一人一台端末を活用した本時の授業や塩山中のDX事業について意見交換を行う。

ウ 学習会では、山梨大学教育学部・准教授三井一希先生より「新たな学びの姿に向けた授業改善の考え方」という演題でお話を伺う。

III 成果と課題

1 成果

- ・小・中学校で授業を参観することができ、子供たちの実態について理解を深めることができた。
- ・授業参観, 分科会後に、山梨大学教育学部・准教授三井一希先生による学習会を行うことにより、ICT端末を使った学習の意義や効果など、更に理解が深まった。

2 課題

- ・8つの教科別分科会に分かれて、塩山中学校生徒のICT端末を使った授業について意見交換を行ったが、中学校は小学校よりさらに高度な活用をしていて発達段階に応じて使い方が違うことを実感した。ICT端末の使い方についても、小中で連携してつなげていきたいと感じた。

(ブロック長 向山 紀子)

塩山北中ブロック交流研究会

「小中の連携をはかり、塩山北中学校区の子どもたちを育てていこう」

I 主題設定の理由

塩山北中ブロックでは、これまで、地域で子どもを育てていこうと、教職員同士の連携を進めてきた。児童から生徒への成長や、既習の学習内容・授業規律などを小中が互いに知り、児童生徒及び教職員の交流を図ることが、より高い教育活動を行うために効果的であると考え。学校・地域・保護者の連携の必要性が求められている中で、中学校区全体で塩山北中ブロックの児童・生徒を育てていくために、本主題を設定した。

II 研究の具体的内容

1 第1回ブロック交流研究会

- (1) 日時 令和6年5月15日(水)
- (2) 目的 児童生徒の実態把握と小中連携について理解を深める。
- (3) 場所 塩山北中学校
- (4) 内容
 - ア 授業参観(全学年)
 - イ 情報交換(中学校の様子、小中連携、小小連携)
 - ウ 部活動見学

2 第2回ブロック交流研究会

- (1) 日時 令和6年11月27日(水)
- (2) 目的 児童生徒、教職員による交流から、小中連携を図る。
- (3) 場所 塩山北中学校
- (4) 内容
 - ア 児童生徒による交流(合唱交流会)
 - イ 情報交換(小学生の様子、小中連携、小小連携)

III 成果と課題

1 成果

- ・中学校での授業を参観したり、情報交換会において話し合ったりする中で、小中の教育実践を共有したり、小学校で身につけておきたいことを確認したりすることができた。また、スムーズな中学進学への手立て、統合に向けての取り組みなどについて共通理解を図ることができた。
- ・小学校3校での合同行事の打ち合わせをしたり、合同授業に向けて計画を立てたりすることができ、小小連携を進めることができた。
- ・閉校する塩山北中学校に学区内3校の小学生が集い、中学生の合唱を生で聴くことができたこと、中学生の普段の練習方法を体験し、全員で合唱できたことは有意義であった。発表の場面だけでなく、日頃からどのような努力をしているのかを知ることができ、小学生にとって毎日の努力の大切さを感じる機会となった。また、地域はじめ様々な方への感謝そして文化教育活動を継承する機会となった。

2 課題

- ・来年度、塩山中学区と統合し大人数のブロックとなるので、どのように運営していくのが課題である。子供、教職員の負担のないように内容を検討していければよい。
- ・来年度は、塩山中ブロックとなるが、旧塩山北中ブロックの交流も大切にしていきたい。

(ブロック長 青木 恵)

「同じ地域に学ぶ子どもたちの教育のために、
小・中・地域の交流と連携を深めよう」

- 同じ地域に学ぶ子どもたちを教育する立場で、地域が抱える教育課題を共有し、その解決に向けた指導に結び付ける。
- 地域との連携を強化し、「地域の子供は、地域で教育する」という視点で地域の教育力向上を図る。
- 小学校・中学校の連携を強化し、小・中の系統的な教育の在り方を研究する。

I 研究の内容

1 目的

- ・松里ブロック教職員が、小中学校の授業の様子を参観し、児童生徒の様子を把握し、情報共有する。
- ・学習や生活の様子を情報交換することで、地域の教育的課題を明らかにし、小中連携して児童生徒の健全な育成を図る。

2 日時・内容

第1回ブロック交流研究会 令和6年 5月15日(水)

- (1) 松里中学校の授業参観 (2) 全体会(授業参観の質疑・意見交換, 各校の児童生徒の情報交換)

第2回ブロック交流研究会 令和6年 11月27日(水)

- (1) 多田孝志先生の講演会

II 成果と課題

成果

- ・松里中学校の授業参観では、卒業生が元気に活動している様子を見ることができよかった。また、授業後の情報交換の場では、ICT 端末を活用した学習者主体の授業づくりについて、小中の連携を図る前向きな発言がたくさんあった。
- ・多田孝志先生の講演会では、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、まず子ども達が小さいころから自然に触れたり、思いっきり遊んだりする中で知的好奇心を育てることが大切だということを学ぶことができた。また、同じブロックの小中の先生方で聞くことで、それぞれの立場で、今後どんなことをしていく必要があるのかを考えることができた。

課題

- ・小学校中学校ともに協働的な学習における形態や活動のあり方について、さらに意識する必要があると感じた。
- ・ICT の活用のしかたについては、小中の連携として今後も引き続き意見交換をしていく必要がある。

(ブロック長 遠藤 香織)

勝沼ブロック交流研究会

甲州市「夢をかなえる学びのプロジェクト」との連携を図りながら、同じ地域に生活する児童・生徒に対する系統的な教育の在り方を考える。

I 主題設定の理由

「地域の子どもは、地域で教育する」という基本理念のもと、同地域の子どもの育成に携わる教職員が、甲州市の「夢をかなえる学びのプロジェクト」との連携のもと、小中の系統的な教育の在り方を研究するために本主題を設定した。

II 研究の内容

1 第1回ブロック研究会（会場：大和ふるさと会館）

（1）日時 5月15日 15：30～16：45

（2）内容

- ア 甲州市教育委員会的那須栄樹指導主事を講師に招いた学習会
- イ 校内研究の概要，各校の特色，子どもたちの様子，ICTの活用状況等についての情報交換会

2 第2回ブロック研究会（会場：勝沼中学校）

（1）日時 11月27日 14：00～16：10

（2）内容

- ア 勝沼中学校の全学年の授業参観
- イ 5つの分科会に分かれて，各校の実践発表と議論テーマを設けての討議

III 成果と課題

- ・学習会で「夢をかなえる学びのプロジェクト」の概要や甲州市教育の方向性について全教職員で確認することができてよかった。
- ・各校の子どもたちの様子や校内研，ICT端末の活用状況について情報交換ができてよかった。また，小中連携も図れた。
- ・中学校の授業公開では，いろいろな教科の学習形態を参観することで，教科や発達段階に応じたICT端末の活用方法を学ぶことができてよかった。
- ・情報交換の方法については，どんなやり方で実施すれば有意義な意見交換の場になるか検討していく必要がある。（ホールや体育館などの広い場所を使い，全教職員で行うと質問や意見を出しにくい傾向にあるが，いくつかの分科会に分かれると，人数の割り振りや発表者の負担，各分科会の運営などに課題がある。）
- ・小規模校では複式学級もあるので，授業公開をするのが難しい。

（ブロック長 塩澤 美希）

児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究

児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会の活動

I 研究の内容

1 活動目標

ア 助け合い・ボランティア活動・環境問題・平和を守ることなどに対する活動を活発にします。

- ・社会奉仕活動を推進します。
- ・共生社会の実現に向けて、ジェンダー平等をはじめとする様々な取り組みを推進します。
- ・身体の不自由な人への関心を高め、積極的に協力します。
- ・平和と環境を守る活動に関心を高めていきます。

イ 地区「子ども・保護者・教職員の会」を成功させます。

ウ 私たちの声を、県や市町村に強く要望していきます。

以上の目標を立て、本年度取り組んでいきました。そして、代表者会、子ども・保護者・教職員の会の開催、古切手やベルマーク集めなど県の児生連活動にも参加協力していきました。

2 経過報告

- | | |
|-----------|--|
| 6月18日(木) | 東山梨地区 児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会
(東山梨地区 第1回顧問の会(勝沼中学校)) |
| 7月 3日(水) | 第1回県代表委員会(県立図書館) |
| 7月 9日(火) | 東山梨地区 児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会
(東山梨地区代表者会(甲州市民文化会館)) |
| 11月12日(火) | 東山梨地区「子ども・保護者・教職員の会」(勝沼中学校) |
| 11月14日(木) | アフリカ飢餓救援活動(お米・募金)しめ切り |
| 1月31日(金) | 古切手・ベルマーク等の最終しめ切り |
| 2月10日(金) | 第2回県代表委員会(県庁防災新館)
知事・教育長・県議会議長と語る会 要望書提出
(県庁防災新館・県議会議事堂) |
| 2月27日(木) | 東山梨地区 児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会
(東山梨地区 第2回顧問の会(東山梨教育会館)) |

II 成果と課題（活動報告）

1 地区児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会〔地区代表者会〕（甲州市民文化会館）

代表者会では、今年度の活動目標やとりくみ内容の共有をした。各校での児童会・生徒会活動を充実させ、児生連の場でそれを共有することが東山児生連の活動を活性化させることを確認できた。後半の学習会では、中学生が中心となって「自分たちの理想の学校」というワークショップを行った。各校の会長・副会長が交流をしながら、
「学年や男女関係なく、誰一人取り残さない学校をつくりたい」などの意見が出され、小中の垣根を越えて自分たちの課題について考えることができたので、自校に戻ってから自信をもって活動する様子が見られた。

2 東山梨「子ども・保護者・教職員の会」（勝沼中学校）

分科会では児童会3分科会、生徒会1分科会の4分科会に分かれ、研究討議が行われた。参加した児童生徒自身が、各自に任された係分担をしっかりとこなしながら、学び合う場となった。それぞれの提案校からは、スライドを使って児童会・生徒会活動が発表された。各校とも素晴らしい実践発表であった。また、実践発表をもとに各校の取り組みの様子などの意見交換が活発に行われた。提案校の取り組みを各校で共有し、今後の児童会・生徒会活動に生かしてってもらいたい。全体会では、古切手・ベルマーク回収など例年行っているボランティア活動の意義が共有され、取り組みの提案があった。

【各校からの提案資料】 児童会 A 児童会 B 児童会 C 生徒会



3 第2回県代表委員会 知事・教育長・県議会議長と語る会（県庁防災新館・県議会議事堂）

県代表委員会では、知事・教育長・県議会議長と語る会の内容の検討や、今年度の県児生連の反省を行った。知事・教育長・県議会議長と語る会では、各地区から今年度の活動内容を報告するとともに、県への要望の発表を行った。東山梨地区からは「小中学校のジェンダー平等のさらなる推進」「水素・燃料電池など山梨県の産業について学ぶ機会の確保」の2点を要望するなど、県当局と子どもたちの間で活発な意見交換が行われた。

4 ボランティア活動について

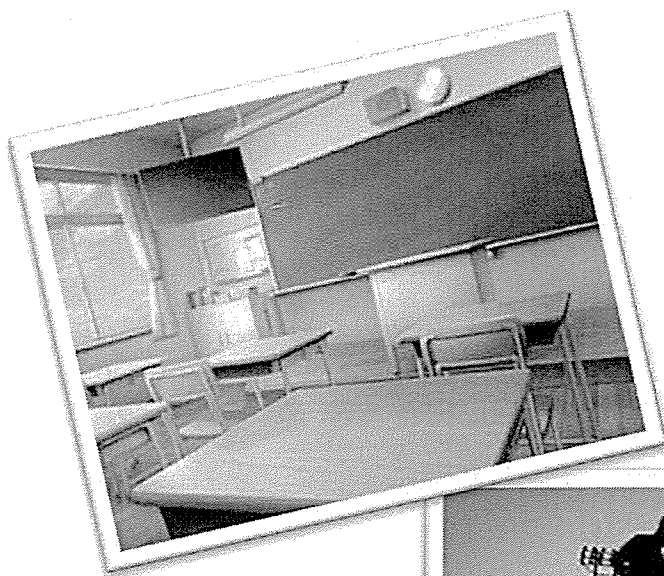
本年度も様々なボランティア活動に各校協力していただき、以下のような成果であった。

- ・ アフリカ救援米 463,75 kg ・ 輸送費募金 257,144 円
- ・ 古切手 22,372kg ・ ベルマーク 2,34 kg

※第1回代表者会で決定

各校の取り組み及びご協力に感謝したい。

（ 児童生徒連絡協議会担当 丹治 群 ）



学 校 經 営 研 究

小学校経営研究会（組織運営）	129
小学校経営研究会（健全育成）	131
小学校経営研究会（国際理解教育）	133
中学校経営研究会（経営課題）	135

学校経営ビジョンの実現や働き方改革の推進に向けた学校組織マネジメント 学校経営ビジョンの実現を図る組織の編成と円滑な運営

I はじめに

近年、学校を取り巻く課題は、複雑化・多様化しており、学校に求められる役割はますます増大している。そのため、学校組織は、そのもてる力を存分に生かせるように効率的な運営を図ることが求められている。

学校のリーダーである校長は、明確な学校経営ビジョンのもと、教育活動の具体的な目標と方策を設定するとともに、目標を実現するための協働体制を構築し、学校の自律的な改革と教育の質的な向上を図っていかなければならない。

また予測不可能な未来社会を生きるための能力を子どもたちに育成するためには、一人一人の子どもに応じたきめ細やかな教科指導や生徒指導の充実が求められており、教職員が子どもたちの指導に専念できる組織づくりも重要となっている。

そこで、本研究会では、学校経営ビジョンの実現を図るための校長のマネジメントとして、昨年度の研究で整理をしてきた「担任を本務へ向ける」、「人事管理面」、「持続可能な学校運営」の3つのマネジメントの視点を基本に、山梨市内の小学校8校からの実践報告を基に、校長の学校組織マネジメントの実践について整理・考察を試みた。

II 研究の概要

1 研究のねらい

各校の実践報告を基に、学校経営ビジョンを実現させるための組織の編成と円滑な運営に向けた校長としてのマネジメントに関する考察を行う。

2 研究計画

(1) 1年次（基礎研究①）

・各校の組織上・運営上の工夫や取組に関する実践報告及びその整理

(2) 2年次（基礎研究②）

・実践報告を基にした校長の組織マネジメントの在り方に関する考察

(3) 3年次（実践研究）

・各校での実践を基に、組織マネジメントに関する成果と課題の整理

3 研究内容

(1) 各校からの実践報告の視点

校長のマネジメントについて、昨年度に整理をした次の3つの視点を基に、実践報告を行った。

【実践報告の視点】

ア 担任を本務へ向けるためのマネジメント

イ 人事管理面等に関するマネジメント

ウ 持続可能な学校運営に関するマネジメント

(2) 各校からの実践報告の主な内容

ア 担任を本務へ向けるためのマネジメント

- ・一部または全教科で 40 分授業の実施
- ・日課の見直しによる事務処理時間の確保
- ・教科担任制の推進
- ・「マンダラート」などの技法を使った教員の日常実践の分析
- ・タスクシェアリングとチームティーチングの有効活用
- ・担任を孤立させない組織での対応，管理職からの明確な指示・対応

イ 人事管理面等に関するマネジメント

- ・スクールサポートスタッフの活用
- ・学生ボランティアの活用
- ・新採用者に対する人材育成，職場環境の適応に関する配慮

ウ 持続可能な学校運営に関するマネジメント

- ・学校運営協議会を活用した地域人材の発掘
- ・外部団体を活用した教科指導の充実
- ・教科担任制の導入等，小中連携の推進
- ・図工等の教科で複式 A・B 年度の教育課程を実施し，担当授業時数を軽減
- ・学校教育目標の明確化，評価のフィードバック
- ・PTA 活動の簡素化とスリム化
- ・公民館と連携した「学校応援団」の創設

III まとめと課題

(1) まとめ

「担任を本務へ向ける」，「持続可能な学校運営」の視点では，日課の見直し，40 分授業の実施，教育課程の工夫，教科担任制の推進など多面的な取組が進められている。また「人事管理」の視点では，外部人材の活用や新採用者に対する職場適応への配慮など，負担軽減や若手の人材育成に関する実践が多く見られた。これらの実践から，校長は次の内容に留意しながら，組織マネジメントに取り組む必要がある。

- ・校長自身が，より多くの人々とのつながりを大切にすること。
- ・地域・保護者に相談をし，支援をしてもらうスタンスをもつこと。
- ・職員に組織や行事を点検する意義や必要性を啓発し，改革の風土を醸成すること。
- ・トップダウンではなく，職員から積極的な改革案を出させ，全体で検討し組織的に推進していくこと。
- ・組織内のコミュニケーションの促進，メンタルヘルスケアを勧めること
- ・市職等の立場が違う教職員に責任を持たせる工夫をすること。
- ・「マンダラート」などの技法を用いた実践の分析により人材育成を進めること。

(2) 課題

各校の校長は，様々な工夫を行い，学校組織力を最大限発揮させることを目標にマネジメントを行っている。しかし，学校組織の自助努力だけでは，解決できない課題も存在する。行政，地域，家庭の理解や協力を得る取組の充実を一層進めていくためには，行政や地域，家庭へのアプローチをどのように進めていくかの視点も加え，さらに研究を進めていく必要がある。

(部長 岡 輝彦)

家庭・地域・関係機関と連携したいじめ防止対策等，健全育成の推進 ～健全育成のための，学校・家庭・地域・関係機関の連携～

I はじめに

甲州市では、「人・自然・ふるさとを愛する甲州教育」をテーマに「人づくり」を基盤とした教育活動を推進している。平成23年10月より「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト委員会」が発足し「学級づくり・集団づくり部会」「授業づくり・授業改善部会」「保護者・地域住民との連携部会」を核に、様々な実践を積み上げてきた。今年度から新たに「甲州市夢を叶える学びのプロジェクト」として立ち上げた。全職員での統一取組とともに、校長は勤務校の実態に合わせた独自の取組をグランドデザインに落とし込み学校経営を行っている。

さて、令和5年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、全国の小学校の暴力行為は108,987件、いじめ件数は732,568件、重大事態も1,306件で過去最高となっている。不登校児童は493,440人で学年が上がるについて増加している。1000人あたりの不登校児童生徒数を見ると山梨県は、全国平均よりも2.1人多い39.2人である。

本分科会では、いじめ・不登校等の未然防止及び早期発見・早期対応等を切り口とし、子どもの健全育成に向けた課題解決のための連携に焦点をあて、実行力のある取組についてさらに研究を深めていきたい。

II 研究の概要

1 研究のねらい

児童生徒の健全育成のための、学校・家庭・地域関係機関との連携の在り方や具体的方策を探ることで、校長の学校経営の立場から事例を通じて研究を深める。

2 研究内容

①研究活動計画

1年次：各校の実践報告と学習会（講師：県SSW）

2年次：前年度の課題に対する実践と学習会（講師：市SC）

3年次：研究のまとめ

1年次の研究を受け、2年次の取組として、「関東甲信越地区小学校長研究協議会」長野大会で提案した大藤小の実践を元に、課題となっている研究の視点（1）（2）（3）について話し合い、実践を伝え合う中でさらに研究を深めていく。

【研究の視点】

(1) 早期発見・早期対応の強化

教育課程や職員体制の見直し、業務改善。一人一人に寄り添う支援や保幼小連携。児童・

保護者の相談窓口。

(2) 連携体制の明確化と共有

連携取り組みのマニュアル化。学校内外の居場所作り。

(3) 専門的知見に基づいた支援の充実

SC や SSW 等の専門職員の配置を拡充。教職員の研修の充実。「地域学校協働本部」構築。

②実践報告 【昨年度の課題について実践】

ア早期発見・早期対応の強化

- ・小さな SOS を見逃さず、早期発見・早期対応を図る。
- ・チェックシートの活用で現状を把握し、職員間で共通認識をもち今後の指導に生かす。
- ・保護者と定期的に面談を行い、児童の様子を把握する。

イ連携体制の明確化と共有

- ・支援委員会や生徒指導委員会を開き、誰がいつどんな支援をするのかを共有する。

ウ専門的知見に基づいた支援の充実

- ・SC や SSW 等の専門職員の配置を拡充する。夏季休業等を利用して教職員の研修の充実を図る。

エ不登校・問題行動に関わる具体的事例

- ・不登校・問題行動・発達障害等の事例報告
適切な機関とつながることが解決の近道となる。

オ学習会より（講師：市 SC）

- ・トラウマ・インフォームドケアについて知ることができた。心の傷をよく理解した上での支援をする。
- ・罰を課すのではなく、できていることを見る等、視点を変えて肯定的な指導をする。
- ・支援者がトラウマの広範囲に及ぶ影響と回復についての知識をもつことが大事。
- ・トラウマの回復には、安心できる大人・家族・友達が不可欠である。

Ⅲ 研究の成果と課題

(1) まとめ

- ・校長は、学校経営ビジョンを家庭や地域に示し協力を得ることにより連携を図る。
- ・歴史・風土等、強みを生かした学校経営を進める。
- ・専門的知見とエビデンスに基づいた支援を確立する。
- ・事案件数に惑わされず解消の視点で取り組む。

(2) 今後の課題

①連携体制の明確化と共有

- ・連携の取組をまとめたマニュアルを各学校で作成・共有する。

②早期発見・早期対応の強化

- ・アンケートや相談窓口の設置などの仕組みを整える
- ・福祉や医療の専門機関でのケアにもつなげる。

（部長 廣瀬 敦子）

グローバル社会の中で様々な人とつながり、ともに生きる子どもを育てる教育の推進

～ 互いの文化の違いを認め合い、広い視野で主体的にコミュニケーションを楽しむ子どもを育成するための国際理解教育の推進 ～

I はじめに

グローバル化が進展する中、身近な所で外国の人々や文化に接する機会が増えており、言語、衣食住に係る文化や生活習慣を体験的に理解する場面も増えている。地球温暖化や感染症、国家間の対立など、地球規模の問題が深刻化し、これらの問題解決には国際的な協力や相互理解が不可欠である。このような国際化の時代を生きる子どもには、世界的な広い視野と、多様な他者と協力していくために必要な資質・能力を身に付けていくことが求められている。

II 研究の概要

1 研究のねらい

グローバル人材の育成を目指す教育課程の編成・実施・評価・改善について、各校の取組やその成果及び課題を把握することを通じて、校長としての在り方を探る。

2 研究内容

(1) 研究活動計画

1 年次：教育課程確認とアンケート検討

2 年次：実践の成果と課題 3 年次：研究のまとめ

(2) 研究2年目

本年度は2年目となり、「校長ファシリテートによる具体的な実践を通して」をサブテーマに、次の4つの視点を重視し研究を進めた。

A 学びや広がりが深まる授業づくり

B 教員の実践力の向上 参加型・実践型の研修を重視

C 直接的な異文化体験の重視 学校間交流の促進

D 外国人児童生徒保護者とともに進める教育の推進

〈国際理解教育の実践例〉

ア English Fun Time

広い視野でコミュニケーションを楽しみ互いの文化の違いを認め合おうとする児童の育成を目的とし、地区5校合同（小4対象）で実施した。また、校長として教職員を育成する観点から、参加型・実践型研修と位置づけ、事前に校長が職員へ目的や重要性についてレクチャーした。

イ 市内統一の取組

甲州市外国語教育推進委員会が中心となり、「ふるさと甲州を英語で話せる児童生徒の育成」を目指している。外国語科の授業を中心に、総合的な学習の時間等で調べた地域学習を活かし、英語で甲州市の説明する学習をしている。また、市内だけでな

く、市外の小学校ともオンライン交流し、発信している。

ウ カリキュラムマネジメント意識した取組

道徳科や総合学習において、自国と他国の歴史や文化の理解や、国際理解教育への興味関心を高めることを目的とし、実際に在籍している外国人保護者を講師として招聘し、食文化について話をしていただいた。外国人保護者から「日本は掃除や給食の準備を児童がしていて驚いた。仕事はみんなで協力して行うことばかりだから、日本の考え方に感動した。」というコメントもあり、他国と日本との違いに関心をもつと同時に、自文化理解が深まった。国際理解教育における校長のリーダーシップの在り方を明らかにしたり、児童の興味関心を高めたりすることを目的とし、体験入学に来た子どもの住む国について、日本と比較しながら全校集会で説明した。

エ アンケート実施（昨年度との比較から顕著なもの）

- ・これからの社会では、世界の人々と協力していく必要があると思いますか。

68.4%（R5 3年）→86.6%（R6 4年）

- ・外国についてもっと知りたいですか。

46.8%（R5 3年）→65.9%（R6 4年）

- ・外国語を勉強することは大切ですか。

70.4%（R5 4年）→90.3%（R6 5年）

Ⅲ まとめと課題

1 成果（明らかになったこと）

- ・参加型研修は若手もベテランも自分事として捉えることが力量アップにつながる。
- ・国際理解を進める中で、自分の住んでいる所や身近なことを知ることは重要である。
- ・多様性の尊重の視点は大事であり、今後ますます重要になってくる。国際理解が体験・交流にとどまることなく、子どもたちが主体的に行動していくための方策を検討することができた。
- ・様々な取組の工夫があり時間の確保等が難しいと思うが、校長のリーダーシップで教育課程に位置づけ、先生方を巻き込んでいくことが肝要である。
- ・アンケート結果から取組の効果を感じる。持続可能な活動を計画していきたい。
- ・校長のリーダーシップを発揮できるよう、確かなねらいや方向性を示していく。

2 課題

（1）カリキュラムマネジメントの重要性

- ・校長のマネジメントにより教職員や子どもたちの意識の変容を促す。
- ・国際理解教育だけでなく、人権教育や平和教育、環境教育とも関連させながら学習を深めていきたい。また、自校の実態に応じた教育課程を工夫していく。

（2）教職員の育成

学習指導や教材開発の方法や習得など参加型・実践型の研修の効果が確認できたので、持続可能な方法で継続していきたい。

（部長 三枝 ゆかり）

中学校経営研究会

多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成

「生徒や保護者、地域の信頼に応えられる教員の育成と研修の在り方」

I はじめに

生徒を取り巻く教育課題は年々複雑化・困難化し、こうした課題への組織的な対応力が求められている。また、大量退職・大量採用の時代を迎え、教職員の年齢構成も大きく変化するとともに、定年延長制度がスタートし、再任用者、定年延長者、中堅ミドル世代、初任者等、キャリアステージにおける人材育成や組織の一員としての役割や使命の自覚など、各教員の資質向上も課題である。

さらに、コロナ禍で急速に整備された1人1台端末の効果的な活用や学校DX化の流れの中で、ICT指導力や高い授業力等、教員一人一人が専門職としての高度な知識・技能をもつとともに、高い倫理観に立ち、使命感あふれる指導力を発揮することが求められている。

こうした状況を踏まえ、確かな指導力を持った教員を育成し、保護者や地域の信頼に応える学校経営は、校長にとって急務である。

II 研究の概要

1 研究のねらい

東山梨支部では研究テーマを「喫緊の課題に対応できる人材や教員育成指標に基づいた人材の育成と研修の在り方」とし、教育課題に対応できる人材育成や研修の在り方を明確にし、学校としての課題対応力を向上させ、保護者や地域から信頼される学校経営を目指すこととした。

2 研究計画

(1) 1年次（令和5年度）

研究テーマをどのように捉え、研究を進めていくかを共通理解し、計画を立て、各校の教育課題や人材育成・研修の課題を明確にした。

(2) 2年次（令和6年度）・・・本年度

ア 教員育成指標に照らした人材育成の実践を学びあう。

イ 地域の信頼に応える上での課題等を明確にし、対応策を探り実践する。

ウ 効果的な人材育成や研修の方法について、研究協議する。

(3) 3年次（令和7年度）

- ア 教員育成指標に基づいた人材育成と研修の充実を図る。
- イ 効果的な課題対応力育成について研究協議し充実を図る。
- ウ 3年間の研究をまとめる。

3 本年度の研究

- (1) 5月14日 テーマ、研究計画の確認
- (2) 6月18日 研修会及び人材育成の様子や課題など研究の方向性について検討
- (3) 7月4日 課題レポートの確認，作成
- (4) 7月31日 課題レポートの作成
- (5) 8月27日 課題レポート提出，各校の実態把握
- (6) 10月22日 各校の研修会や人材育成の課題の共有
- (7) 12月5日 研修会や人材育成の課題の明確化
- (8) 1月16日 研究紀要のまとめ
- (9) 2月20日 次年度に向けての方向性の検討

Ⅲ まとめと課題

1 協議内容

- (1) 育成指標の各ステージにおける人材育成。ICT活用力・指導力の向上（一斉授業からの脱却，子供主体の授業への授業観の転換）。特別支援教育や特別な支援を必要とする生徒への支援体制の充実。
- (2) 学校運営協議会，スクールカウンセラー等，諸機関の専門性を活かした支援体制の構築。校内研修等による校内OJTの充実による組織的な対応力の向上。
- (3) 人事評価に関わる自己観察書や個別面談による適切な指導助言，教員育成指標（活用ガイド）による自立的な成長の促進。

2 今後の課題

研究2年次の本年度は，各校の教育課題や人材育成，研修課題に対しての，具体的取組の情報交換を行い，研究を進めることができた。「教員は学校で育つ」と言われる。経験年数の異なる教員同士がともに支えあいながら日常的に学びあえる環境や研修をさらに充実させ，人材育成に繋げていくかが今後の課題である。

来年度は本研究の最終年度となる。これまでの研究成果を生かし，各校において本支部の研究テーマに迫り，多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成を着実にやっていきたい。

（部長 丹澤一浩）

学 校 運 営 研 究

山梨市学校運営研究会 ……137

甲州市学校運営研究会 ……139

社会に開かれた活力ある学校づくりのための教育課程の工夫 ～探究的・協働的な児童生徒の育成をめざして～

I はじめに

山梨市では、市内全小中学校において「学校運営協議会制度」を導入し「コミュニティ・スクール（CS）〈以下CS〉」の取組を始めている。また昨年度より「社会に開かれた教育課程の実現」に向けた理念として、市教育委員会が提唱し、各校で具現化する地域連携学習「山梨市ECHOES（エコース）学習」（以下ECHOES）を市内全小中学校の教育課程に位置付け、市内にある素材・人材・フィールドを活用した教科横断的・総合的な学習を各校の実情に応じ展開している。

山梨市教頭会では、これまで教頭として組織づくりに携わりながら研究・実践を進めてきたCSの取組と昨年度より始まったECHOESの取組を効果的に融合し、地域社会との連携・協働を、さらに進展させていくための教育課程の編成を市内の小中学校での協力体制のもと進めていきたいと考えた。

そこで、昨年度から3年間の本会の新たな課題別研究のテーマを「社会に開かれた活力ある学校づくりのための教育課程の工夫 ～探究的・協働的な児童生徒の育成をめざして～」と設定し、以下のように進めていくこととした。

II 研究のねらい

CSの取組とECHOESの取組を効果的に融合させた教育課程について、市内各小中学校間の協力体制を組みながら、社会に開かれた活力ある学校づくりのための教育課程を編成することを目的に、① 地域素材・人材・フィールドを活かした地域連携学習の編成、② 市教育委員会と連携した中での各校特色のある教育課程の編成と実施、③ 学校運営協議会（CS）などと連携した地域とともにある学校づくりの3点を主な内容として、3年間の研究を進めている。

III 研究計画

1 1年次

- (1) 研究の方向性の確認、研究テーマの設定、研究内容の検討
- (2) ECHOESを各校で実施
- (3) ECHOESの実施内容の検証

2 2年次（本年度）

- (1) ECHOESの取組の改善
- (2) 学校運営協議会（CS）などの取組と連携した活動の構築
- (3) 学校間でECHOESの取組に関する情報共有（取組事例の収集）

3 3年次

- (1) 取組内容を工夫・改善したECHOESの実施と検証
- (2) 研究のまとめ（取組の成果、今後の課題に関するまとめ など）

IV 研究の概要

1 ECHOES について

市内各小中学校において「市内にある素材・人材・フィールドを活用した教科横断的・総合的な学習を通し、学ぶことの楽しさを味わうとともに、互いの考えや想いに共鳴し合い、共感し合える児童・生徒の育成を図る」ことを目的として展開していく学習である。これを各校の教育課程の中に位置付け、目的達成のために地域素材や人材などを活かしながら取り組み、「社会に開かれた教育課程の実現」に向けて研究を進めている。今年度からは ECHOES の一環として、農業の魅力や食の大切さなどを理解してもらうことを目的とし、市内全 11 校に児童生徒が農業体験学習を行うための「教育ファーム」を設けた。学校内や近くに農場を設け、野菜やコメなどの苗植えや水やりなどの手入れや収穫などを地域の農業体験協力者（管理人）の指導のもと行った。

2 CS について

子供たちの「生きる力」を育むためには、教職員のみならず、保護者や地域住民などの適切な支援を得ながら、学校運営の改善を図っていく必要がある。このため、学校と地域の組織的・継続的な連携を可能とする協議会について、設置の促進と更なる活動の充実が図られた。今日の学校を取り巻く課題に適切に対応するためには、保護者や地域住民などとのさらなる連携・協働体制を構築し、その協力を得ることが不可欠である。そして、それらの協力・支援活動が適切に行われるためには、その活動を担う保護者や地域住民などが、当該学校の校長の学校運営のビジョンや運営の現状、児童生徒が抱える課題などを的確に把握することが重要である。

V 研究の成果と今後の課題

1 成果 CS, ECHOES 各校の現状の把握と成果と課題の共有

ECHOES では、昨年度は 1 年目の取組であったが各校で教育課程に位置付け実施をすることができた。また、各校の現状、成果や課題を共有することで、今後の各校での教育課程の改善に向けて参考となった。成果があった取組は各校で実態に応じて取り入れるなどしている。CS についても、数年前から市教育委員会主催で、各校の校長、教頭、運営協議会の会長、副会長が参集する、学校運営協議会研修会を実施し、情報交換などを行っており、成果があった取組については各校の教育課程編成の参考にしている。また CS, ECHOES の成果だけでなく課題点についても再検討し、それを各校で共有し、さらに改善していくことで、各校の教育課程の編成などに生かしていきたい。

2 課題 教育課程への位置づけと人材等の確保

保護者や地域と連携した活動を仕組んでいくには、教育課程へ適切に配置することや、各活動を地域にフィードバックをすることで、ともに進めていくことが重要である。また、新たな魅力ある人材・素材・フィールドなどの発掘、さらなる協力体制・持続可能な活動の構築についても、学校運営協議会を核として、より地域の方とも連携をして、考えていく必要がある。

（課題別研究部長 山宮武徳）

人・自然・ふるさとを愛する甲州教育の推進

～各校の実践を踏まえて～

I はじめに

本テーマを設定し、3年計画の2年次の研究となった。今年度は11月13日(木)・14日(金)に関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会が甲府市で開催された。第1課題教育課程「教育目標・教育理念」分科会において、111の参加者へ甲州市教頭研究会で研究を進めてきた内容を発表し、グループ協議の中で多くの意見をいただくことができた。

II 研究のねらい

甲州市小中学校では、甲州市教育委員会と連携し、「人づくり」を基盤とした教育活動を推進し、基本理念を全職員で共有し、協働的な取組を行っている。今年度は、各校でより効果的な実践とするために、教頭としてどのような役割を果たすべきかを実践しながら研究している。甲州市内のすべての小中学校が目標・理念・実践を共有して、同じ方向に進むことで、甲州教育をさらに推進できると考え、以下の3点を研究のねらいとしている。

- 1 「甲州市基本目標」の具現化に向けた各校の取組の整理〔令和5年度〕
- 2 各校における教頭の役割の明確化と効果的な実践〔令和6年度〕
- 3 好事例を市内で共有〔令和7年度〕

III 研究内容

基本理念・目標を受け、重点施策として次の6つの基本方針がある。それぞれの基本方針について教頭の役割を明確化し、実践を行い共有した。

〔施策項目1：新しい時代を生き抜く資質・能力の育成〕

- ・塩山北中学校「家庭学習スタンバイ」

〔施策項目2：生命や人権を尊重する豊かな心の育成〕

- ・菱山小学校「環境教育・平和教育の推進」
- ・松里中学校「人権教育-いのちの授業-」

〔施策項目3：健康で安全に生活する力を育む健やかな体の育成〕

- ・井尻小学校「体力向上と運動習慣の確立」
- ・塩山北中学校「全校一斉アップ・強歩大会」

〔施策項目4：自立と社会参加・貢献を実現する教育の推進〕

- ・大藤小学校「大藤絵本くらぶ」
- ・神金小学校「学校林自然学習会」
- ・玉宮小学校「自然学習：玉宮水神池自然公園」
- ・松里小学校地域との協働「有価物回収」
- ・祝小学校「祝っ子サポーター」
- ・東雲小学校「菊栽培・ブドウ栽培体験」
- ・大和小学校「栖雲寺座禅会」
- ・塩山中中学校校外学習「甲州自慢」
- ・勝沼中学校「農業体験」

[施策項目 5 : 家庭や地域・社会と連携・協働した教育活動の展開]

- ・塩山北小学校「北辰スクールガード隊」 ・奥野田小学校「地域とともにある学校」
- ・勝沼小学校「勝小サポーター（勝小愛） ・勝沼中学校「地域の伝統的な祭典」

[施策項目 6 : 質の高い教育を支える教育環境の整備と教職員の育成]

- ・塩山南小学校・塩山中学校「リーディング DX スクールの取組」

教頭として、学校と地域を繋ぎ、学校運営を円滑に進めるための中核的な役割を担っている。具体的な役割としては以下の内容が挙げられる。

- ・学校と地域との連携：地域・行政機関等と連携を図り、学校と地域が一体となって子どもたちの教育を進めるための基盤を築く。
- ・学校運営の推進：予算管理、施設管理など、学校運営に関わる幅広い業務を行う。
- ・教職員の指導・育成：教職員を支援し、教育の質向上に貢献する。
- ・教育課程の開発：教育課程の改善・開発に携わり、生徒の成長を促す。
- ・学校行事の企画・運営：企画・運営し、生徒の学びを深める機会を提供する。
- ・危機管理：学校における様々な危機状況に対応し、安全な学校環境を確保する。
- ・広報活動：学校の教育活動や成果を地域に発信し、理解を求める。

IV 研究のまとめと今後の課題

各校の取り組みを共有し、自校の取り組みを見直すことができた。学校運営において、教頭としてどのように関わっていくべきか、必要な視点について確認できた。昨年度の研究に加えて「教頭としての関り」の部分の深めることができた。具体的には、以下の点が挙げられる。

1 成果

- ・働き方改革や公務 DX 等、各校で情報を共有し、先進校等の取り組みを知ること
で自校へ活かすことができた。
- ・CS における教頭としての役割は、繋ぎ役だけでなく、教員の業務を簡略化し、教
諭が取り組みやすい方向へ導くことが重要であると学ぶことができた。
- ・自身のスキルアップにつながった。また、それをもとに様々なアイデアが浮かび、
より良い学校づくりを自分なりに実践することができた。
- ・各学校の特色ある取り組みから、その準備と工夫について学ぶことができた。

2 課題

- ・各校の状況に合わせた働き方改革の推進には、更なる情報収集と研究が必要であ
る。
- ・働き方改革では、市内の協働取り組みが必要になってくる。
- ・働き方改革の視点から、持続可能な取り組みとするための方策を検討していき
たい。
- ・教頭としての関りを明確にした各校の発表はできたが、より効果的な実践にして
いくための方策を考えていく必要がある。

(研究部長 桐原 洋)

報 告 書

全国教頭研究大会 | 41

関東甲信越地区教頭研究大会 | 42

内地留学研修報告 | 43

第64回 全国公立学校教頭会研究大会高知大会（ハイブリット大会）報告

大会期日 令和6年7月31日（水）～8月1日（木）

研究主題 「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」

参加分科会 第1B分科会「教育課程に関する課題」（オンライン参加）

〈提言1〉「地域の特性を生かした魅力ある教育活動を目指して」

－小中連携教育を推進するための教頭の関わりを通して－

提言者 福岡県 行橋市立仲津小学校・（前）みやこ町立伊良原中学校 服部雅之教頭

「小中一貫教育を推進する上で共通する取組」「学びや育ちを支える教育課程の作成・実施」を図る上で、地域の特色とカリキュラム作りから小中のねらいを共有した交流や職員同士の協働を円滑に進めるための教頭としての役割や関わり方・つなぎ方等について実践をもとに整理・検証した提言であった。

グループ討議（オンライン）では、「地域の特性を生かした小中連携教育を組織的に進めていくための副校長・教頭の役割」を討議の柱とし、提言内容をもとに各県・各地域・各校の取組の様子などの情報交換が行われた。「小中の教頭や担当が集まって打合せをしている」「小中の数や立地条件も関係する」

「教員同士だけでなく子ども同士（中学生から小学生へ）のプレゼン交流の場がある」「地域の力（公民館・CS等）を介しての交流の場がある」「オンライン交流も利用している」などの意見が出され、県や地域・学校によって環境や状況は違うが、それぞれの教育現場において様々な取組や工夫が進められている様子がうかがえた。

指導助言では、「小中の壁」を低くするために情報量格差をなくすことや情報共有を密にすること、地域資源やマンパワーを活用していくことが肝要であるとの話があった。

〈提言2〉「魅力ある学校づくりに向けて教育課程の編成・実践評価」

－教職員の協働的な学び（授業づくり）及び児童への関わりを通して－

提言者 高知県 いの町立伊野小学校 萩野真美教頭

あらゆる教育場面において全教職員が自分事となるよう“チーム”として取り組むことで、一人一人の負担感を軽減しながら教育効果を高め、児童や教職員にとって魅力ある持続可能な学校の仕組みや組織を構築していく上での、教頭の役割やかかわり方を明らかにするための提言であった。

グループ討議（オンライン）では、「今日的な課題（学力向上・授業改善・個別最適な支援等）に、持続可能な組織を構築する副校長・教頭の関わり方」を討議の柱とし、提言内容をもとに、各県・各地域・各校の取組の様子などの情報交換が行われた。「業務・担当分担を的確に行うことが重要である」

「持続可能な取組にするには全員が全体的に納得して進めることが大切である」「県教委・市町村教委とのかかわりや連携が必要なこともある」「帯時間や隙間時間を有効に使いたい」「教員の授業力向上や初任者など若手の育成（OJT）を進めたい」などの意見が出され、どの県や地域・学校においても幅広い視点から協働的に今日的な課題に取り組んでいる様子がうかがえた。

指導助言では、副校長・教頭の役割は取組を可視化・システム化すること。働き方改革の視点で全体を俯瞰し、職員の負担感を減らし自主的にストレス少なく仕事ができる環境をつくっていくことが肝要である。持続可能でウェルビーイングな職場環境を構築してほしいとの話があった。

（課題別研究部長 堀井 勝彦）

「人・自然・ふるさとを愛する甲州教育の推進」

～学校の実態をふまえて～

I はじめに

令和6年の11月14日（木）と15日（金）の2日間、甲府市を会場にして「第65回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会」が開催された。初日は開会行事や日本の登山家野口健氏による「ネパールの活動から学んだこと」と題した記念講演が行われた。関東甲信越地区から各学校の教頭が集まり、充実した研究会となった。2日目には分科会が各会場で実施された。東山梨地区を代表して、塩山中学校の桐原洋教頭先生が「人・自然・ふるさとを愛する甲州教育の推進～学校の実態をふまえて～」と題して発表を行った。

II 発表の内容と当日の様子

当日は以下の6点を桐原教頭先生が発表した。各校の具体的な取組を挙げて発表した。

- ①「新しい時代を生き抜く資質・能力の育成」塩山北中学校「学習スタンバイ」
- ②「生命や人権を尊重する豊かな心の育成」松里中学校「人権教育ーいのちの授業ー」
- ③「健康で安全に生活する力を育む健やかな体の育成」塩山北中学校「全校一斉アップ、強歩大会」
- ④「自立と社会参加・貢献を実現する教育の推進」塩山中学校「甲州自慢」
- ⑤「家庭や地域・社会と連携・協働した教育活動の展開」勝沼中学校「地域の伝統的な祭典」
- ⑥「質の高い教育を支える教育環境の整備と教職員の育成」塩山中学校「リーディングDXスクールの取組」

III グループ協議の内容

当日は以下の2点で「グループ協議の柱立て」が行われた。①教育理念を具現化するための教頭の役割。②子どもの資質・能力を育むための教育施策への取組。その後のグループ協議では次のような意見が出された。「スクラップすることが必要なので、新しく増やすということがないようにしたい。今までの取組をシフトチェンジしていく考え方が大切」「家庭学習について、宿題をなくすことに学校全体で取り組むことが大切である。教頭の関わりとして、担任への指導がある。担任の力量に差がある中でも粘り強く指導をしていきたい」「地域行事は、その地域に歴史があるとなくすことが難しい。学校は募集のみを担当し、地域が行事を担うようにしたい。地域と学校の役割の分担化を進めていきたい」。その後、指名されたグループが全体に向けて発表を行った。

IV 指導助言

グループ協議が終了した後、山梨県教頭会常任助言者渡辺昌哉氏と山梨県教育庁義務教育課課長補佐田邊靖博氏から指導助言が行われた。その中で「甲州市では教頭会が協力して各校の取組を進めている様子が発表から見られてよい」「甲州市の取組でよいと感じたのは、市教委と学校が連携しながら、市内すべての学校が生徒の学力向上などに取り組んでいることである」との言葉をいただいた。さらに「行政と学校現場が目指す教育のデザインは必ずしも一致していない。両者の理念や目標は共有しつつ、学校の規模や地域の実情を考慮したい。そして、学校で取組を進める際は『学校教育目標』を大事にしてほしい」との指導をいただいた。

V まとめとして

発表者の桐原教頭先生を中心に、東山梨地区の教頭が各校の取組をもとにして発表を実施することができた。関東甲信越地区の教頭先生方と情報交換をするなど貴重な経験をすることもできた。この研究会で学んだことを自校の学校運営に生かしていきたい。

（勝沼中学校 田辺 秀樹）

研修テーマ「児童が安心して自己開示できる学級づくり」

I 研究の内容

本研究のテーマである自己開示とは、自分の思いを言葉で表現することである。子どもたちを見てみると、社会状況や家族の在り方、SNS等の普及により自分の思いを言語化することに苦手意識を感じている子が多くいる。実際、言葉で表現できず相手を傷つけたり物にあたったりする子を何人も見てきた。力で訴えるのではなく、言葉で表現するためには環境を整えていくことが必要だと考えた。そこで、自己開示できる学級や環境を整えるための教師の関わり方や支援、子どもの背景を見取る手法やポジティブ行動支援に基づく生徒指導についても研究を行った。

II 研究の成果

① 自己開示できる学級づくりについて

自己開示は仲間づくりにおいても重要である。まずは教師が積極的に行い、どんな人物かを知ることによって安心感を与え、教師と子どもが繋がり子どもたち同士も繋げる。つまり、教師の積極的な自己開示が子どもたちの自己開示にも繋がる。自己開示は自分の思いを言語化することであるが、子どもにとっては難しい。研究では言葉にこだわりを持ち、一言でも発せられるような関係・環境づくりに焦点を当てた。力で感情を表現するのは、成育歴だけでなく特性や家庭環境など様々な背景があることが分かった。それを教師が理解するだけでなく、背景に沿ったアプローチをすることで信頼関係が築けるだけでなく、言葉で表現するきっかけにもなる。また、SSTやSGEなどを用いて、言葉で表現することの楽しさを体感させていくことも重要である。

② ポジティブ行動支援（PBS）について

PBSは、当事者のQOLを向上や価値があると考え成果に直結する行動をポジティブに支援する枠組みである。応用行動分析学に基づくABC理論を用いて行動に焦点を当て、全ての児童生徒にアプローチすることでポジティブな感情を高めるだけでなく、問題行動が減るというエビデンスが報告されている。この考えは、生徒指導提要で提示されている重層的支援構造と類似しており、生徒指導に用いていくことができる。PBSを活用することで、生徒指導における三機能が向上していくことが考えられ、子どもたちのQOLが高まるだけでなくスクールワイドな指導もでき、学校全体のポジティブ感情や生徒指導能力が高まっていくと考えられる。

III 研究の課題

様々な視点で個を見ることやPBSの理論について知見を広げることができた。今後実践する中で、個人や学校にとって必要な支援を考え全体に提案し、PBSを広げていくことが課題である。

（塩山南小学校 小林千恵美）

あ と が き

令和6年3月に「主体的に学び 他者と協働し 豊かな未来を拓く やまなしの人づくり ～誰もが教育の機会にアクセスできるやまなし～」を基本理念とした「山梨県教育振興基本計画」が策定されました。グローバル化や多様性が進行し、家庭環境や地域社会が大きく変化する中、子供たちが抱える困難も多様化・複雑化しています。しかし、どのような境遇や経済状況にあっても、誰もが夢や希望の実現に邁進できる教育を、山梨県では目指しています。

各学校では子供たちが安心して学べる学級・学校づくりを土台に、「令和の日本型学校教育」が目指す、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実の実現に向けた研究が行われています。東山梨地区全体を見ても、「何を学ぶか」だけでなく、「何ができるようになるか」に視点をおきながら、これまでの一斉授業から子供主体の授業への転換を図り、教員が伴走者として子供たちの学びを支援する実践が多く見られるようになりました。学びを子供たちに委ねることは、決して子供任せにすることではありません。最初は上手くいかないこともあるかもしれません。このやり方で良いのかと、自問自答をすることもあるかもしれません。しかし社会全体が大きく変化している中、未来を生きる子供たちに必要な力も確実に変わってきているのです。これまでの教育方法やカリキュラムが見直され、新たな教育のあり方が模索される中で、我々が行ってきた研究は非常に重要な意味をもっています。

「東山梨教育研究」は昭和38年の初刊以来、本年度で63号を数えます。これまでも各学校・各研究会では、多くの先輩方が築き上げてきた実践とその成果に基づき、その時々社会背景や地域の現状を踏まえながら、目の前の子供たちに必要な力を見据えた教育研究を進めてきました。本誌に収められた研究成果は、教育の質を向上させるための貴重な資料であり、その成果を広く共有することで、東山梨の教育の発展に寄与するものであると確信しております。

末筆ながら、本誌の発刊にあたり、ご多用の折に玉稿を賜りました山梨市教育委員会教育長様並びに東山梨教育協議会会長様をはじめ、貴重な原稿を寄せられた皆様、発行にご協力いただきました皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。また、山梨・甲州両市教育委員会には財政の面で大きなご支援をいただきました。深く感謝申し上げます。なお、今号の表紙は日下部小学校1年 内田陽也さんの作品「ぶどうがり」です。ありがとうございました。

【編集実行委員会】

山梨市教育委員会教育長	嶋崎 修
東山梨教育協議会会長	久保田英樹
甲州市教育委員会教育長	小林 俊彦
峡東教育事務所所長	中村 英彦
峡東教育事務所指導主事	岩下 和子
山梨市教育委員会教育監	小串 吾郎
山梨市教育委員会指導主事	内藤 健
甲州市教育委員会指導主事	那須 栄樹
甲州市教育委員会指導主事	堀井 ますみ
東山梨教育協議会事務局次長	日野原和貴
東山梨教育協議会研究推進委員長	若月敬二郎
山梨支会研究推進委員長	村田 裕紀
甲州支会研究推進委員長	市川 安紀

発行日	令和7年4月1日
発行責任者	東山梨教育研究編集実行委員会
編集責任者	東山梨教育研究編集実行委員会 事務局
印刷所	昭和堂印刷

東山梨教育環境研究

2024 年度

東山梨教育協議会

東山梨教育環境研究特別委員会

も く じ

I	児童・生徒数と教職員の定数	
1	児童・生徒数及び教職員等の配置状況	1
2	教職員年齢別・男女別分布状況（県費職員）	2
3	東山梨地区 市別・学校別在籍数及び学級予定数	3
II	教育行財政及び教育環境の実態	
1	教育環境実態調査の調査項目について（解説・留意事項等）	4
2	教育環境の実態調査	6
III	子どもの生活実態に関する調査	12
IV	教職員の健康と労働	
1	多忙感に関する調査結果	21
2	年休に関する調査結果	24
3	授業時数に関する調査結果	28
	研究を終えて	29

I 児童・生徒数と教職員の定数

1 児童・生徒数及び教職員等の配置状況【2024年5月1日現在】 ※「欠員12月」は、2024年12月31日現在

項目 校名	児童 生徒 数	学級数				教職員等配置状況														備考	
		通常	特 支	分 校	合 計	校 長	教 頭	主 幹 教 諭	教 諭	養 教 諭	栄 養 教 諭	事 務	市 単 教 諭	司 書	調 理	用 務	欠 員 5 月	欠 員 1 2 月	○→市単職員(数字は人数)②③など ●→民間委託職員(数字は人数)④⑤⑥など ※→兼務職員の配置校組み合わせ ケ→県費で兼務 ⑦→市費で兼務 栄教→栄養教諭 栄職→学校栄養職員 栄士→栄養士 ◆は学習指導等(コロナ加配)		
加納岩小	317	13	4	0	17	1	1	0	22	1	1	1	0	①	0	①	0	0	※ケ英語専科(本務校：八幡小) ※ケ初任研指導(本務校：日下部小、後屋敷小、笛川小) ※ケ栄教(本務校：日川小、日下部小、給食センター) 県非常勤(アクティブ1、通級指導1、初任研後補充2) ○特別支援教育支援員④ ◆学指④ ◆スガ④ ◆ALT④		
日下部小	365	16	7	0	23	1	1	0	30	1	ケ	1	0	①	0	①	0	1	※栄士1(ケ本務校：加納岩小) ※英語専科(本務校：ケ 八幡小・岩手小) ※通級指導4 ※専科1、5 ※ 県非常勤①(不通) ◆ケ①(本務校：ALT 八幡小) ※初任研1(本務校：加納岩小) ◆特支⑤ ※(初任研 栄 教) ◆スガ①		
後屋敷小	163	7	3	0	10	1	1	0	10	1	ケ	1	0	②	0	①	1	1	○特別支援教育支援員④ ※⑤栄養教諭(本務校：南中、日川小、山梨小) ※ケ初任研指導(本務校：加納岩小、日下部小、笛川小) 初任研後補充 非常勤(特別支援教育加配)0.5		
日川小	139	6	2	0	8	1	1	0	9	1	ケ	1	0	①	0	①	0	0	アクティブ加配(0.5)2 県非常勤講師(理科専科0.5)1 特別支援員③ ※栄教ケ(加納岩 給食センター) ◆学指① ◆スガ①		
山梨小	195	6	3	0	9	1	1	0	13	1	ケ	1	0	1	0	①	0	0	アクティブ加配(0.5)3 市特別支援員④ ◆スガ① ※栄教(山梨南中) ※英語専科(日下部小・笛川小) 非常勤講師3		
八幡小	115	6	3	0	9	1	1	0	10	1	②	1	0	①	0	①	0	0.5	※英語専科ケ(加納岩小) ※県非常勤(算数専科)0.5 ※栄養士⑤(給食センター) 特支支援員④ ◆学支① ◆スガ①		
岩手小	27	3	2	0	5	1	1	0	5	1	②	1	②	②	0	①	0	0	※英語専科ケ(日下部小) ※栄士⑤(給食センター) ※司書⑤(八幡小) ○特支支援員①		
笛川小	135	11	16	0	135	1	1	0	13	1	0	1	0	①	0	①	0	0	※英語専科④(山梨小) ※ALT④(本務校：笛川中) ※通級指導1.5(笛川中巡回指導) ※初任研拠点校指導教 員ケ(本務：加納岩小、日下部小、後屋敷小) ※栄教士⑤(給食センター) 特支支援員② ◆学支① ◆スガ2		
山梨南中	323	10	3	0	13	1	1	0	24	1	1	1	0	1	0	①	0	0	○市単の特別支援教育支援員④ ※教諭ではない。 ○市単の配属員① ○市単のALT① ◆スガ①		
山梨北中	372	12	4	0	16	1	1	1	28	1	0	2	0	①	0	①	0	0	○市単担任職員(特別支援員)②・栄養士・給食センター 県費負担非常勤講師1		
笛川中	70	3	2	0	5	1	1	0	9	1	②	1	0	①	0	①	0	0	県費非常勤講師4 ○特別支援教育支援員(市単)2		
山梨市合計	2221	201	49	0	250	11	11	1	173	11	2	12	0	2	0	0	1	2.5			
塩山南小	348	15	4	0	19	1	1	0	25	1	1	2	①	①	0	②	0	0	※栄教1(給食センター 塩山北小 玉宮小) 初任研後補充2 ※英語専科①(奥野田小) ◆学支④ ◆スガ① 用務員⑥(シルバー人材、2日交替)		
塩山北小	105	6	2	0	8	1	1	0	9	1	ケ	1	0	①	0	②	0.5	0.5	◆学指2 ◆スガ①		
奥野田小	112	6	2	0	8	1	1	0	9	1	ケ	1	①	①	0	②	0	0	◆学指2		
大澤小	37	5	1	0	6	1	1	0	6	1	ケ	1	①	ケ	0	②	0	0.5	※栄教ケ(給食センター) ※司書ケ(井尻小) ※市英語専科教員①(神金小) ◆模範学級支援員① ◆学習支援員① ◆学指支援員① ◆初任研指導教諭①◆小学校専科指導加配非常勤講師④ ◆公立小学校非常勤講師①(8/28より)		
神金小	29	4	1	0	5	1	1	0	5	1	0	1	0	ケ	0	①	0	0	複式学級解消支援教員2名 司書(松里小本務) 用務員 市会計年度職員		
玉宮小	24	4	0	0	4	1	1	0	4	1	ケ	1	②	②	0	②	0	0	○※市外国語専科①(神金小)○複式学級解消支援教員② ○※司書①(塩山北小) ※栄教ケ(塩山南小) ◆用務員 ②		
松里小	111	6	2	0	8	1	1	0	10	1	0	1	②	1	0	②	0	0	理科専科教諭 ○学指② ○県費非常勤講師1 司書①(神金小との兼務)		
井尻小	70	6	3	0	9	1	1	0	10	1	②	1	0	①	0	②	0	0	栄教士(給食センター) 英語専科ケ(藤沼小学校) 司書① 用務員⑥(シルバー人材・2日号の交代制) ◆学指1		
藤沼小	129	6	2	0	8	1	1	0	11	1	ケ	1	0	ケ	②	①	0	0	英語専科教諭 ◆学指2 ◆スガ① ○県費非常勤講師2 ALT① 司書①(塩山中との兼務) 栄養教諭ケ(東雲小との兼務)		
祝小	78	6	2	0	8	1	1	0	9	1	②	1	0	ケ	②	②	0	0	◆学指① ◆スガ① ○外国語専科教諭①②(藤沼小) 専科指導非常勤講師① 専科教員0.5		
東雲小	108	6	2	0	8	1	1	0	10	1	1	1	0	②	②	②	0	0	◆学支2名 ◆スガ① 司書①(大和小と兼務)		
菱山小	44	5	3	0	8	1	1	0	9	1	②	1	①	ケ	②	①	0	0	専科指導非常勤講師① 外国語専科ケ		
大和小	37	4	2	0	6	1	1	0	6	1	②	1	②	②	0	②	0	0	※英語専科ケ(藤沼小) ※栄教士⑤(給食センター) ※司書①(東雲小) ○模範学級学習支援員② ◆用務員2(シルバー人材交替)		
塩山中	348	11	3	0	14	1	1	1	25	1	1	1	0	①	0	②	1	0	県費非常勤講師① 栄教1(奥野田小 塩山北中 松里中) ◆学指2 ◆スガ①		
塩山北中	27	3	3	0	6	1	1	0	10	1	ケ	1	0	②	0	②	0	0	県費非常勤講師3 ◆学指① ◆スガ①		
松里中	51	3	2	0	5	1	1	0	9	1	ケ	1	0	①	0	②	0	0	栄教ケ<本務校：塩山中> ①司書 ②用務員<市シルバー人材センター> ◆学指① ◆スガ①		
藤沼中	224	8	2	0	10	1	1	0	16	1	②	1	0	1	0	①	0	0	県費非常勤講師2 ◆学指2 ◆スガ① ALT①		
甲州市合計	1882	104	36	0	140	17	17	1	183	17	3	18	0	2	0	0	1.5	1			

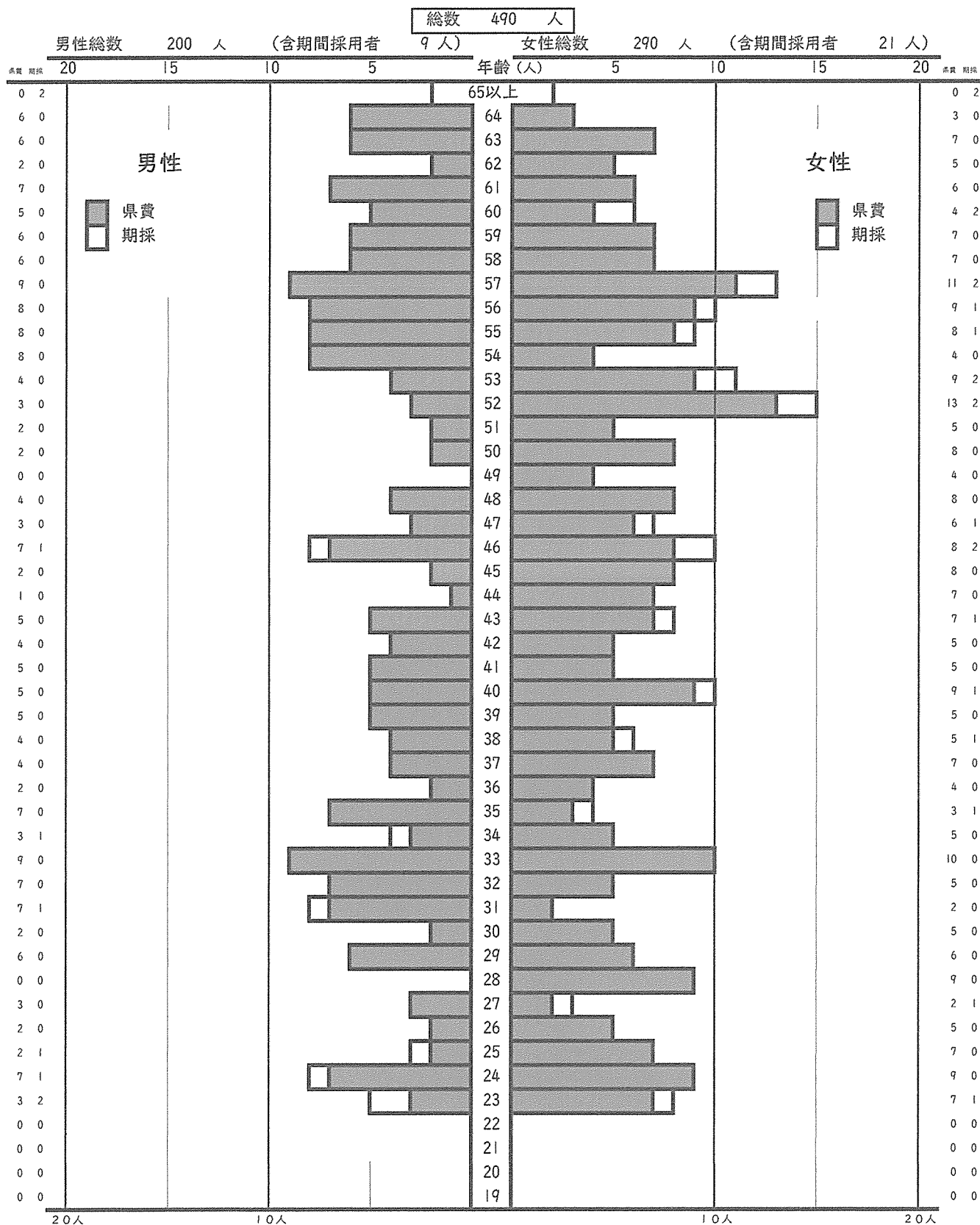
2 教職員年齢別・男女別分布状況 <2024年度>

(県費教職員：校長・教頭・主幹教諭・教諭・養護教諭・栄養教諭・学校栄養職員・事務職員)

・期間採用者数は外数、62歳以上は再任用者数

・充て、専従、傷病、在外等研修、育児休業者等を含む

・年齢は2025年3月31日時点【2024年12月調べ】



3 東山梨地区 市別・学校別在籍数及び学級予定数 【2024年12月調べ】

※小学校は35人学級として、中学校は40人学級として算出、特別支援学級は除く

種 別	年 度	2025年度			2026年度			2027年度			2028年度		
	項 目 校 名	入 学 予 定 者 数	在 籍 予 定 者 数	学 級 数	入 学 予 定 者 数	在 籍 予 定 者 数	学 級 数	入 学 予 定 者 数	在 籍 予 定 者 数	学 級 数	入 学 予 定 者 数	在 籍 予 定 者 数	学 級 数
小 学 校	加 納 岩 小	63	342	12	50	339	12	49	331	12	45	311	12
	日 下 部 小	50	363	12	53	359	12	53	348	12	54	333	12
	後 屋 敷 小	24	163	7	37	170	8	13	145	7	25	143	7
	日 川 小	21	133	6	20	138	6	28	149	6	29	149	6
	山 梨 小	21	180	6	30	173	6	22	160	6	16	146	6
	八 幡 小	20	109	6	18	109	6	24	108	6	13	100	6
	岩 手 小	8	31	3	2	27	4	1	23	3	6	23	4
	笛 川 小	18	133	6	15	113	6	10	104	6	11	96	6
	塩 山 南 小	56	344	12	63	351	12	53	345	12	48	329	12
	塩 山 北 小	8	96	8	12	89	8	16	91	8	13	86	8
	奥 野 田 小	12	107	8	15	94	8	16	91	8	12	87	8
	大 藤 小	7	37	4	7	35	4	4	33	4	9	37	4
	神 金 小	4	29	6	6	28	5	4	26	5	1	20	5
	玉 宮 小	3	22	4	4	23	4	2	23	4	4	22	4
	松 里 小	12	106	8	12	96	8	9	92	8	16	90	8
	井 尻 小	9	67	6	8	61	6	12	52	6	7	49	6
	勝 沼 小	22	128	8	7	112	8	10	99	8	16	94	8
	祝 小	9	66	8	4	61	8	5	47	7	12	49	6
	東 雲 小	8	97	8	9	90	8	7	73	8	17	75	8
	菱 山 小	7	46	8	7	47	7	6	44	7	5	40	7
	大 和 小	8	41	4	4	37	5	2	30	4	5	30	4
	小 学 校 合 計	390	2640	150	383	2552	151	346	2414	147	364	2309	147
中 学 校	山 梨 南 中	104	326	9	111	323	9	108	323	9	110	329	9
	山 梨 北 中	105	353	9	105	329	9	110	320	9	134	349	10
	笛 川 中	20	67	3	35	79	3	19	74	3	21	75	3
	塩 山 中	139	419	11	122	433	11	105	427	11	100	420	11
	塩 山 北 中												
	松 里 中	26	44	3	30	69	3	34	90	3	34	94	3
	勝 沼 中	67	209	6	62	203	6	85	214	7	61	208	7
	中 学 校 合 計	461	1418	41	465	1436	41	461	1448	42	460	1475	43
市 別	山梨市小学校	225	1454	58	225	1428	60	200	1368	58	199	1301	59
	甲州市小学校	165	1186	92	158	1124	91	146	1046	89	165	1008	88
	合 計	390	2640	150	383	2552	151	346	2414	147	364	2309	147
	山梨市中学校	229	746	21	251	731	21	237	717	21	265	753	22
	甲州市中学校	232	672	20	214	705	20	224	731	21	195	722	21
	合 計	461	1418	41	465	1436	41	461	1448	42	460	1475	43

Ⅱ 教育行財政及び教育環境の実態

教育環境実態調査の調査項目について（解説・留意事項等）

○ ICT 環境

文科省「令和 6 年度学校の ICT 環境整備に係る地方財政措置」において、以下の通り ICT 環境整備目標値が示されている。

- *学習者用端末 3 クラス分に 1 クラス分程度整備
- *指導者用端末 授業を担当する教師 1 人 1 台
- *大型提示装置・実物投影機 100%整備（普通教室 1 台 特別教室用として 6 台）
- *インターネット及び無線 LAN 100%整備
- *統合型校務支援システム 100%整備
- *ICT 支援員 4 校に 1 人配置
- *上記のほか、学習用ツール、予備用学習者用端末、充電保管庫、学習用サーバ、校務用サーバ、校務用端末やセキュリティに関するソフトウェアについても整備

- ・ ICT 支援員とは、授業や研修、校務において、教員と相談したり依頼を受けたりしながら業務を行う専門職員。
- ・ 図書館システムの学校独立型とは、学校単独で市内と連携していないもの。市内連携型とは、市内学校や図書館と連携しているもの。
- ・ 指導者用デジタル教科書、学習者用デジタル教科書は、教科ごと全学年分あれば「○」、全学年はないが一部ある場合は「△」、どの学年分もない場合は「×」。その他の場合は他の欄に「有」。セット教材に含まれているものも対象とする。
- ・ 電子機器の整備状況は、所有している機器の台数を記入。
- ・ 電子機器の整備状況の前年比較欄は、前年度より増加は「○」、減少は「▼」、維持(増減なし)は「ー」。
- ・ 本調査において、大型テレビとは 50 インチ以上の大きさのものとする。

【施設設備面】

○ 防災対応 ガラスの状況

ガラスの事故は、重大事故につながる可能性が高い。学校施設は、児童生徒が学校生活を送る場であると同時に、非常災害時には住民の避難場所としても使用されるため、ガラス破損事故への対策が必要である。

ガラスの防災対策には、下表のような方法がある。

ガラス品種	安全性能
飛散防止フィルム	・破片が飛散しにくい
強化ガラス	・破損しにくい ・破片が鋭利でなく、しかも小粒である
網入り板ガラス	・火災や火の粉の侵入を防ぐ

○ 空調設備

児童生徒の良好な学習環境を維持し、適切な教育活動を実施するため、普通教室及び特別教室等に空調設備を整備し、健康管理に配慮する必要がある。

○ 屋外施設

水泳授業は、外部施設を利用し実施している学校や、他校の施設を利用している学校もある。施設の維持・管理や薬品代の予算も高額であることから、他市や他校の状況を自校と比較することができる。

○ 新 JIS 規格児童生徒用机イス

教科書や教材の大型化（A 判化など）に対応できるよう、机面寸法を拡大し、多様な大きさを確保できるよう、新 JIS 規格の机イスを整備することが望ましい。

○ 照明の LED 化

照明の LED 化が推進されている。全て LED 化されている場合「○」、一部 LED 化されている場合「△」、LED 化されていない場合「×」。

【 危機管理対策 】

○ 校内緊急通報システム

不審者の侵入防止だけではなく、万が一侵入された場合に校内各教室等への連絡を迅速に行うための通報システムを導入することが望ましい。

○ 電子メールによる情報通報システム

緊急事態等が発生した際は、保護者等に迅速に伝達することが求められる。そのためには、緊急時の連絡先リストや情報伝達網を日頃から整備しておくことが大切である。

○ 敷地周辺フェンス等設置・侵入者用監視カメラ

学校施設の防犯性を確保するため、門・囲障の設置や防犯監視システムの導入等により、物理的かつ視覚的にも守るべき範囲を明確化し、不審者の侵入を防ぐ必要がある。

○ 災害時備蓄食料

地震等大規模な災害が発生した場合、保護者の引き取りが困難な児童生徒が生じることが想定される。こうした事態に備えるために食料品の備蓄が必要である。

災害時の備蓄に望ましい飲料水・食料品等

	飲料水	食料品
発災～3 日後	1 日 3 リットル（ペットボトルは賞味期限が 2 年近くあるので保存しやすい）	包装を開けてすぐ食べられるもの（ビスケット・カンパン・チョコ・あめなど）
～約 1 週間後（電気が回復）	給水を受けるための容器（ポリタンクなど清潔でふたのできるもの）	レトルト食品、缶詰等（使い切りで、ゴミの出ないもの）

【 図書 】

○文部科学省基準蔵書数（学校蔵書数・充足率は、12 月 1 日現在の数を記入）

小学校

学級数	蔵 書 冊 数
1	2,400
2	3,000
3～6	$3,000 + 520 \times (\text{学級数} - 2)$
7～12	$5,080 + 480 \times (\text{学級数} - 6)$
13～18	$7,960 + 400 \times (\text{学級数} - 12)$
19～30	$10,360 + 200 \times (\text{学級数} - 18)$
31～	$12,760 + 120 \times (\text{学級数} - 30)$

中学校

学級数	蔵 書 冊 数
1～2	4,800
3～6	$4,800 + 640 \times (\text{学級数} - 2)$
7～12	$7,360 + 560 \times (\text{学級数} - 6)$
13～18	$10,720 + 480 \times (\text{学級数} - 12)$
19～30	$13,600 + 320 \times (\text{学級数} - 18)$
31～	$17,440 + 160 \times (\text{学級数} - 30)$

※特別支援学級含む学級数

【 理振 】

○理振基準金額

小学校	11,630,000 円
-----	--------------

小学校：1 組 10,000 円以上のものが対象

中学校	21,525,000 円
-----	--------------

中学校：1 組 20,000 円以上のものが対象

教育環境の実態調査

調査項目 学校名		I C T 環 境												
		ICT 支援員	貸出用 Wi-Fi ルーター	図書館 システム	指導者用デジタル教科書					学習者用デジタル教科書				
					音楽	保健 体育	図工 美術	技術 家庭	他	国語	算数 数学	理科	社会	英語
山梨市	加納岩小	○（外部委託）	△（機器のみ貸出）	○（学校独立型）	○	○	○	○	有	×	5・6年(国)	×	×	5・6年(国)
	日下部小				×	×	×	×	有		5・6年(国)			
	後屋敷小				○	○	○	○	有		5・6年(国)			
	日川小				○	○	○	○	有		5・6年(市)			
	山梨小				○	○	○	○	有		5・6年(国)			
	八幡小				○	○	○	○	有		5・6年(市)			
	岩手小				○	○	○	○	有		5・6年(市)			
	笛川小				○	○	○	○	有		5・6年(市)			
	山梨南中				○	○	○	○			全学年(市)			全学年(国)
	山梨北中				×	×	○	○			全学年(国)			
	笛川中				×	○	×	○			全学年(市)			
甲州市	塩山南小	○（市教委配置）	○（市教委貸出）	○（学校独立型）	○	○	○	○	有	×	1～4年(国) 5・6年(市)	×	×	5・6年(国)
	塩山北小			×	○	×	×	×		×	5・6年(市)	×	×	
	奥野田小			×	×	○	×	×		×	5・6年(市)	×	×	
	大藤小			×	○	○	○	○		×	×	×	×	
	神金小			×	○	○	○	○		×	×	×	×	
	玉宮小			×	○	○	○	○		×	×	×	×	
	松里小			×	×	×	×	×		×	5・6年(国)	×	○	
	井尻小			×	○	○	○	○		×	×	×	×	
	勝沼小			×	○	○	○	○		×	×	×	○	
	祝小			×	○	○	○	○		×	×	×	×	
	東雲小			×	×	×	×	×		×	5・6年(市)	×	×	
	菱山小			×	○	○	○	○		×	×	5・6年(市)	×	
	大和小			×	○	○	×	×		×	×	×	×	
	塩山中			○（学校独立型）	○	×	○	○		○	○	○	○	全学年(国)
	塩山北中			×	○	×	×	×		×	×	×	×	
	松里中			×	○	○	○	○		×	×	×	×	
	勝沼中			○（学校独立型）	○	○	○	○		×	○	×	○	全学年(国)

※「指導者用デジタル教科書」5教科は整備済

※GIGAスクールにより一人一台端末及び無線LAN全校完備

調査項目 学校名		I C T 環 境								
		電子機器の整備状況（台）								
		大型 テレビ	前 年 比 較	大型 モニター	前 年 比 較	実物 投影機	前 年 比 較	プロジェ クター	前 年 比 較	その他の機器（台）
山梨市	加納岩小	17	▼	24	○	7	－	3	－	
	日下部小	0	－	20	○	6	－	4	－	大型モニター(通級一台含む)
	後屋敷小	0	－	9	－	3	－	2	－	
	日川小	0	－	10	－	2	▼	2	－	
	山梨小	0	－	12	－	3	－	2	－	
	八幡小	0	－	6	▼	3	－	3	－	
	岩手小	0	－	6	－	3	－	5	－	
	笛川小	0	－	9	○	2	－	3	－	
	山梨南中	0	－	12	－	4	－	6	－	
	山梨北中	0	－	28	○	6	－	4	－	
	笛川中	0	－	12	○	1	－	3	－	
甲州市	塩山南小	17	○	5	－	8	－	1	－	Apple TV(1)
	塩山北小	5	－	6	－	1	－	1	－	
	奥野田小	8	－	0	－	4	○	2	－	Chromecast(8)
	大藤小	8	－	0	－	9	－	2	－	Apple TV(6)
	神金小	7	－	0	－	3	－	1	－	Apple TV(5)、Chromecast(8)
	玉宮小	9	－	0	－	2	－	2	－	Apple TV(6)
	松里小	7	－	0	－	1	－	2	－	Apple TV(4)
	井尻小	6	－	2	－	6	－	2	－	Apple TV(6)
	勝沼小	7	○	7	－	10	－	2	－	
	祝小	4	－	5	－	5	－	1	－	Chromecast(8)
	東雲小	7	－	0	－	1	－	2	－	
	菱山小	3	－	4	－	2	－	2	－	Chromecast(6)
	大和小	9	－	0	－	6	－	2	－	Chromecast(9)
	塩山中	9	－	7	－	2	－	8	－	iPad(1)、Chromecast(18)
	塩山北中	5	－	3	－	0	▼	2	－	Apple TV(1)、Chromecast(5)
	松里中	9	－	0	－	2	○	3	－	Apple TV(2)
勝沼中	11	－	5	－	1	－	3	－	Apple TV(10)、Chromecast(19)	

調査項目 学校名		施設設備面			
		防災対応 ガラスの状況			
		教室・廊下	体育館	プール	その他
山梨市	加納岩小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム）	全校舎飛散防止対応済
	日下部小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム・網入）	
	後屋敷小	○（強化・フィルム）	○（フィルム）	○（フィルム）	
	日川小	○（強化・フィルム）	部分（強化・網入）	○（フィルム）	
	山梨小	○（強化・フィルム）	○（強化）	○（フィルム）	
	八幡小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム）	
	岩手小	○（強化・フィルム・網入）	○（強化・フィルム・網入）	部分（強化）	プレハブ倉庫以外飛散防止対応済
	笛川小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム・網入）	全校舎飛散防止対応済
	山梨南中	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	×	プール以外飛散防止対応済
	山梨北中	○（強化・フィルム・網入）	○（強化）	×	プール・プラットホーム以外 飛散防止対応済
	笛川中	○（フィルム）	○（強化・フィルム・網入）	施設なし	全校舎飛散防止対応済
甲州市	塩山南小	部分（強化・網入）	○（強化）	×	給食配膳室・トイレ（網入・一部） 渡廊下（網入）
	塩山北小	部分（網入）	○（強化）	×	校舎玄関（網入）給食配膳室（強化）
	奥野田小	×	×	×	児童用玄関・エレベーター脇窓（強化）
	大藤小	×	部分（強化・網入）	×	保健室一部（強化）児童玄関横（網入）
	神金小	○（強化）	×	×	
	玉宮小	×	○（強化）	×	校舎内一部（網入）
	松里小	部分（網入）	○（強化）	×	本館玄関（網入）
	井尻小	部分（強化・網入）	○（強化）	×	校舎玄関（網入）
	勝沼小	○（強化）	×	×	玄関・トイレ（網入）
	祝小	×	部分（フィルム）	×	職員室フィルム
	東雲小	○（強化）	×	×	
	菱山小	×	×	×	正面玄関網入・廊下一部網入・体育館一部網入
	大和小	部分（強化）	○（強化）	×	正面玄関網入・廊下一部網入・体育館一部網入
	塩山中	部分（強化・フィルム・網入）	○（強化）	部分（網入）	玄関・昇降口・奥階段・教室ベランダ出入口・図書室・南館出入口・保健室
	塩山北中	部分（強化・網入）	○（強化）	×	校舎玄関（網入）
	松里中	部分（強化・網入）	×	×	校舎玄関（網入）
	勝沼中	○（強化）	部分（強化）	施設なし	校舎玄関（強化）

調査項目 学校名		施設設備面											
		空調設備											その他
		職員室	校長室	保健室	図書室	会議室	音楽室	理科室	図工室	家庭科室	普通教室	学級教室	
山梨市	加納岩小							○	○	○			配膳室・他校舎内全教室
	日下部小							○	○	○			配膳室・他校舎内全教室
	後屋敷小							○	○	○			配膳室・他校舎内全教室
	日川小							○	○	○			配膳室・他校舎内全教室
	山梨小							○	○	○			配膳室・他校舎内全教室
	八幡小		○	○	○	○	○	○	○	○			配膳室・他校舎内全教室
	岩手小							×	×	×			
	笛川小							○	○	○			配膳室・他校舎内全教室
	山梨南中							○	○	○			体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
	山梨北中							○	○	○			体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
	笛川中							○	○	○			体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
甲州市	塩山南小		○	○	○	×	×	×	×	×			
	塩山北小		×	○	×	○	×	×	×	×			多目的室
	奥野田小	○	×	○	○	△	×	×	×	×	○	○	
	大藤小		○	○	×	○	×	×	×	×			
	神金小		○	×	×	△	×	×	×	×			保健室空調故障
	玉宮小		×	○	×	×	×	×	×	×			相談室
	松里小		×	○	×	×	×	×	×	×			多目的室・小会議室
	井尻小		×	○	×	×	×	×	×	×			保管庫
	勝沼小		○	○	○	○	×	×	×	×			給食室・調理員控室
	祝小		×	○	×	○	×	×	×	×			調理員控室
	東雲小		×	○	○	○	×	×	×	×			
	菱山小		×	○	×	△	×	×	△	×			給食室・調理員控室
	大和小		×	○	×	△	×	×	×	×			ランチルーム・相談室
	塩山中		○	○	○	○	○	○	○	○			木工室・多目的室・相談室(1・2)・給湯室
	塩山北中		○	○	×	×	×	×	×	×			相談室(A・B)・多目的室
	松里中		○	○	×	×	×	×	×	×			相談室・サポートルーム
	勝沼中		○	○	○	×	○	○	○	×			多目的室・調理室

調査項目 学校名		施 設 設 備 面						危機管理対策				
		屋外設備		新JIS規格児童生徒用机 12（設置学年を記入）		照明LED化		校内 緊急 通報 システム	電子メールによる 情報通報システム		敷地 周囲 フェンス 等設置	侵入者 用監視 カメラ
		校庭 散水 施設	プール授業の 実施状況	新JIS 規格	天板のみ 交換・テンパ'ネ	校 舎	体 育 館		市教委 システム	その他 システム (学校単位)		
山梨市	加納岩小	○	自校のプールを使用	○3 ～ 6 年	1・2年	○		○	×		○	×
	日下部小		外部の施設を使用		1・2年			○			○	×
	後屋敷小		外部の施設を使用		1・2年			×			○	×
	日川小		自校のプールを使用		1・2年			×			○	×
	山梨小		外部の施設を使用		1・2年			×			部分	○
	八幡小		外部の施設を使用		1・2年			×			○	×
	岩手小		外部の施設を使用		1・2年			×			○	×
	笛川小		自校のプールを使用		1・2年			○			○	×
	山梨南中		外部の施設を使用	○全 学年				×			○	×
	山梨北中		外部の施設を使用					×			○	×
	笛川中		外部の施設を使用					×			○	×
甲州市	塩山南小	○	自校のプールを使用	全校新JIS規格設置		△	○	×	甲州市安心安全ネット	学校安心・安全メール	部分	○
	塩山北小	○	自校のプールを使用			△	×					×
	奥野田小	○	自校のプールを使用			×	○					×
	大藤小	○	外部の施設を使用			△	○					×
	神金小	○	自校のプールを使用			△	△					×
	玉宮小	○	自校のプールを使用			△	△					×
	松里小	○	外部の施設を使用			×	○					×
	井尻小	○	自校のプールを使用			△	×					×
	勝沼小	○	自校のプールを使用			△	△					×
	祝小	○	自校のプールを使用			×	○					×
	東雲小	○	自校のプールを使用			×	×					×
	菱山小	○	自校のプールを使用			×	×					×
	大和小	×	自校のプールを使用			△	△					×
	塩山中	○	他校のプールを使用			○	○					×
	塩山北中	○	自校のプールを使用			△	○					×
	松里中	○	自校のプールを使用			×	○					○
	勝沼中	○	外部の施設を使用			○	△					×

調査項目 学校名		危機管理対策				図書				理振		
		災害時備蓄食料				図書費当初 予算額 (公費のみ) (千円)	文部科学省 基準蔵書数 (冊)	学校蔵書数 (12月1日 現在) (冊)	学校蔵 書充足 率 (12 月1日現 在)	基準金額 (千円)	前年度末 の現有額 (千円)	前年度 末の現 有率 (%)
		公費		保護 者負 担	主な物品 名							
		学校 配当 予算	他									
山梨市	加納岩小	×	市教委より帰宅困難児用飲料水・カンパン（缶）配布 給食センターより災害用アルファ化米・飲料水配布	×		1,030	9,960	10,984	110%	11,630	4,091	35%
	日下部小	×		×		1,157	11,360	12,290	108%	11,630	5,059	43%
	後屋敷小	×		×		645	7,000	8,902	127%	11,630	4,704	40%
	日川小	×		×		564	6,040	8,628	143%	11,630	4,667	40%
	山梨小	○		×	ライスクッキー	679	6,520	8,588	132%	11,630	4,552	39%
	八幡小	×		×		516	6,520	8,224	126%	11,630	2,719	23%
	岩手小	×		×		345	4,560	6,873	151%	11,630	4,215	36%
	笛川小	×		×		558	7,480	8,834	118%	11,630	2,592	22%
	山梨南中	○		○	各家庭判断	1,074	12,160	14,653	121%	21,525	5,303	25%
	山梨北中	×		×		1,142	12,640	15,038	119%	21,525	14,762	69%
	笛川中	×		×		485	6,720	9,298	138%	21,525	12,314	57%
甲州市	塩山南小	×	×	×		900	10,560	16,589	157%	11,630	3,686	32%
	塩山北小			×		430	6,040	7,764	129%	11,630	3,530	30%
	奥野田小			○	飲料水	400	6,040	9,929	164%	11,630	3,387	29%
	大藤小			○	飲料水・カンパン	280	5,080	7,070	139%	11,630	4,822	41%
	神金小			○	飲料水	280	4,560	6,573	144%	11,630	2,186	19%
	玉宮小			×		280	5,080	6,322	124%	11,630	2,919	25%
	松里小			×		430	6,040	7,735	128%	11,630	3,430	29%
	井尻小			○	飲料水・焼菓子	380	6,520	8,318	128%	11,630	3,152	27%
	勝沼小			×		480	6,040	8,978	149%	11,630	2,919	25%
	祝小			○	飲料水・焼菓子	380	6,040	8,299	137%	11,630	3,189	27%
	東雲小			×		430	6,040	8,262	137%	11,630	3,228	28%
	菱山小			×		225	5,560	7,164	129%	11,630	2,363	20%
	大和小			○	飲料水・カンパン	280	5,080	6,845	135%	11,630	2,048	18%
	塩山中			×		850	11,680	15,460	132%	21,525	15,304	71%
	塩山北中			×		250	7,360	7,128	97%	21,525	3,285	15%
	松里中			×		330	7,360	7,984	108%	21,525	12,114	56%
	勝沼中			×		640	9,600	10,974	114%	21,525	10,885	51%

Ⅲ 子どもの生活実態に関する調査

1 調査のねらい

社会の変化が激しい時代における様々な教育問題を背景として、ここ数年、教育の根幹をなす家庭教育のあり方に視点をおいて調査を行ってきた。今年度は、子どもを対象に、

- (1) 家庭での基本的な生活習慣の様子
- (2) 子どもの心配や相談等
- (3) パソコンの有無や活用の様子
- (4) 自分の携帯電話やスマートフォン所持の様子
- (5) 休日の過ごし方

などについて調査した。

昨年度とほぼ同様の調査を行うことで、子どもの意識や行動・生活環境の実態や変化を知り、それらを地域・家庭・学校の連携や子どもの成長に役立てることができればと思う。

2 調査期間

2024年12月6日（金）から12月18日（水）まで

3 調査対象

東山梨地区内抽出校（小学校5校、中学校4校）

- ・児童（小学3年生・小学6年生）
- ・生徒（中学2年生）

4 調査方法

google forms（グーグル・フォーム）使用

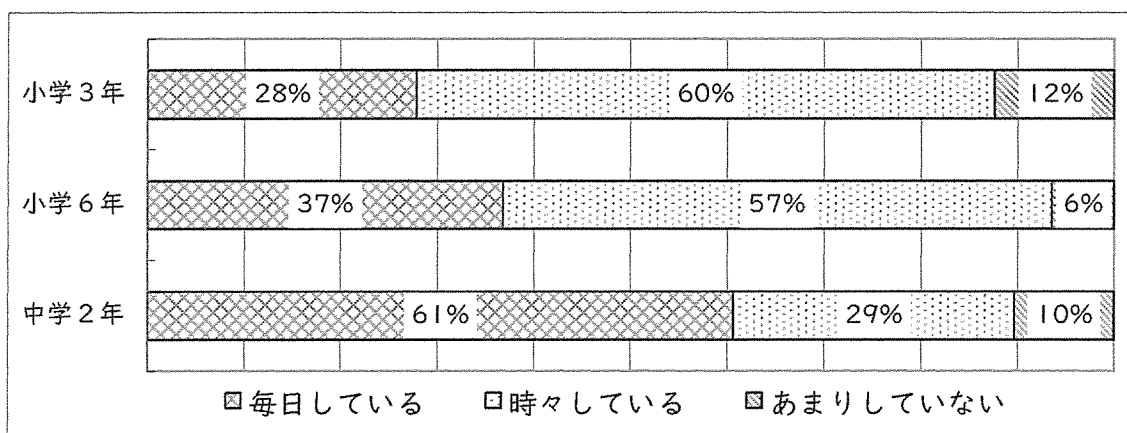
5 回答数

小学校3年の児童 97人
小学校6年の児童 154人
中学校2年の生徒 153人

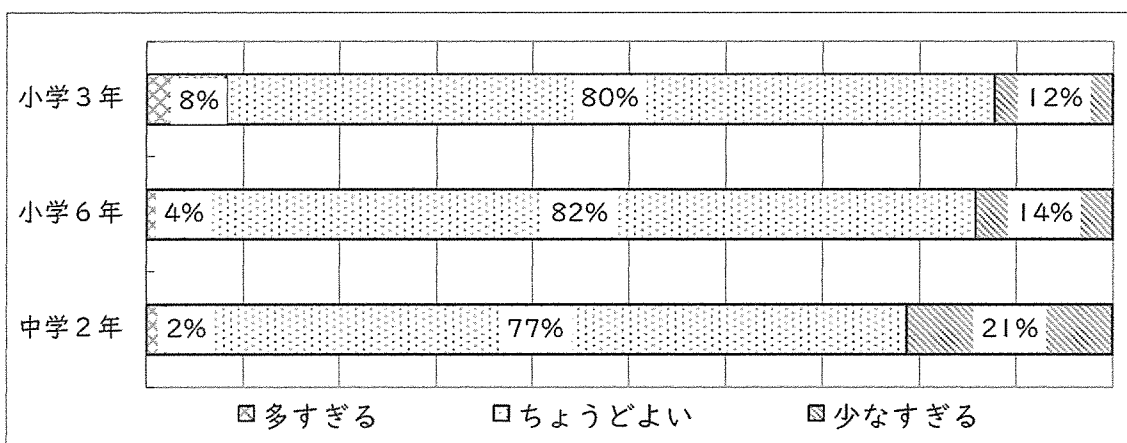
6 その他

- ・グラフ上の数値は割合を表す。
- ・理由等の記述内容をまとめて示す。

1 あなたは、家族の一員として、家のお手伝いをしていますか。



2 あなたは、今しているお手伝いについて、どう思いますか。



3 お手伝いについて、あなたの考えを書いてください。

小学3年

肯定的意見

家族の一員として当たりまえだと思う・掃除などきれいになったら気持ちがいい・家族のためにお手伝いをしている

中間的意見

草取り掃除をやりたい・気楽にできていいと思っている

否定的意見

面倒くさい・大変だと思う

小学6年

肯定的意見

自立するためにもなると思う・お手伝いをすることで、家の人の負担を減らすことができていいと思う・これからも、もっと家の人のお手伝いをしていきたいと思う・お手伝いをすることでお母さんがとても喜んでいたので頑張りたいと思った

中間的意見

もうちょっと減らしてほしい・時間がかかるからあまり時間がかからないものにしてほしい・暇だからお手伝いをしている・少し面倒くさいところと楽しいところがある

否定的意見

面倒くさい・疲れてくる

中学2年

肯定的意見

手伝いをすることで、家族の負担が減ると思うからいい・将来大人になった時のためになるし、負担がかからないちょうどよい量をすれば良いと思う・手伝いはとてもいいことで自身の積極性や自主性を高めることができる・今お手伝いをしてなければ将来自分が家事ができていないと思うのでお手伝いはとてもいいことだと思う

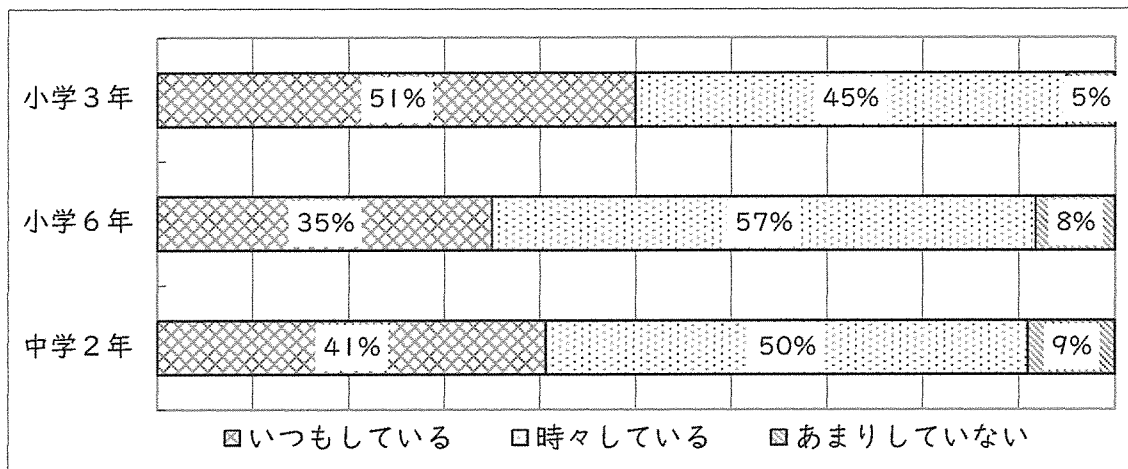
中間的意見

もう少し時間があったら自分ができる手伝いはしたい・あまり手伝いをしていないので手伝うようにしたい

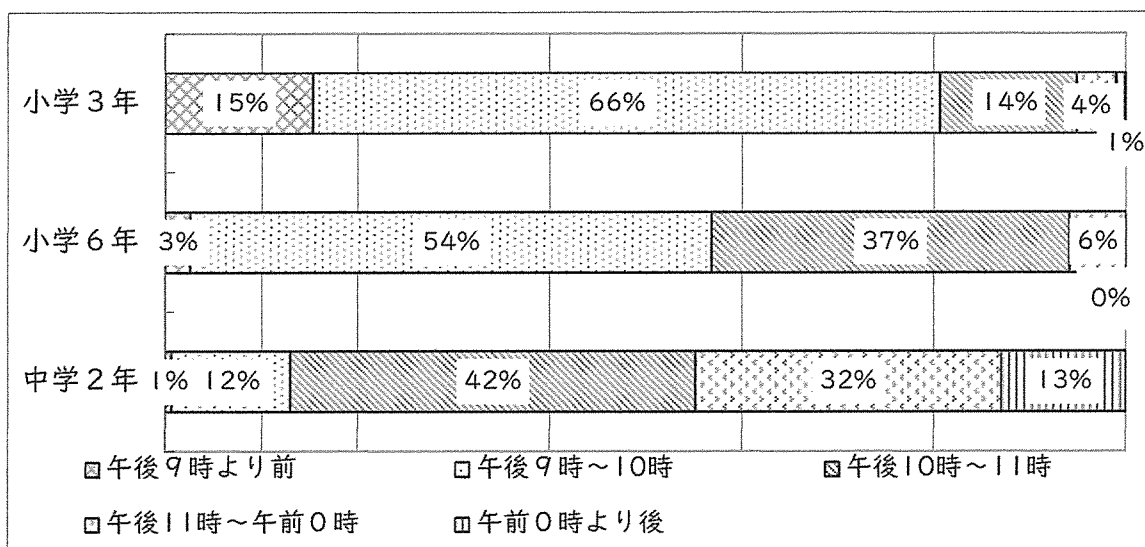
否定的意見

やる気がでない・疲れる

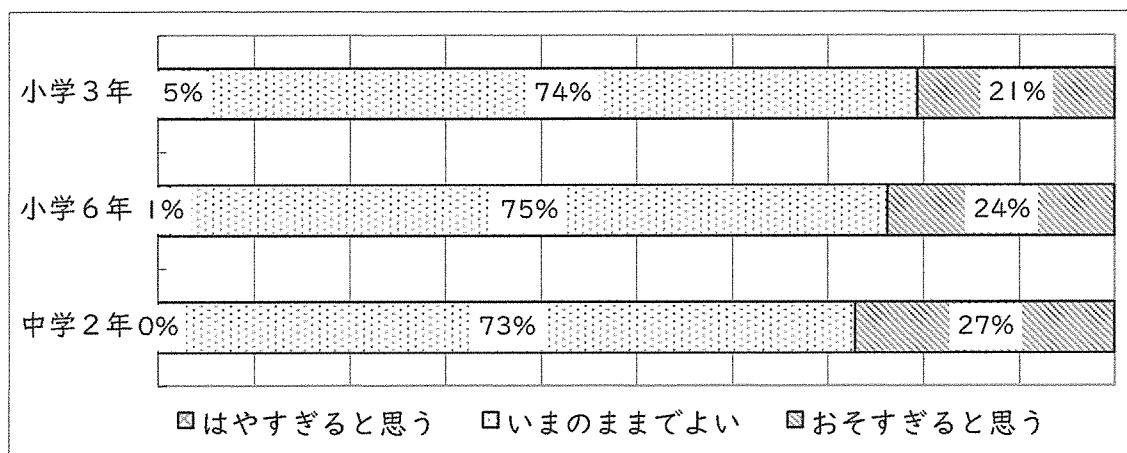
4 身の周りのこと（お手伝いではなく）で、自分でできそうなことは自分でしていますか。



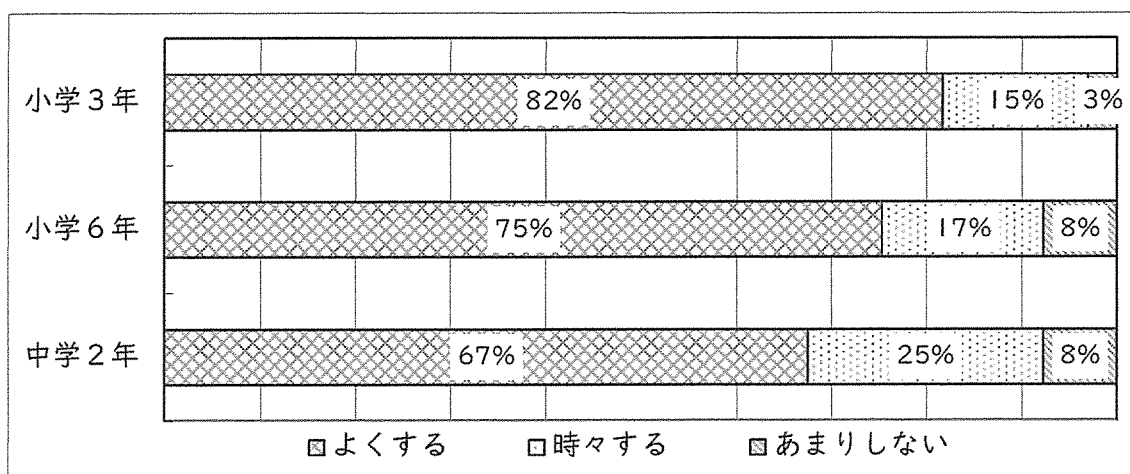
5 ふつうの日は、何時ごろ寝ますか。



6 あなたの寝る時刻について、どう思いますか。



7 あなたは、学校の様子や友だちのこと、家族のことなどについて、家の人とよく話をしますか。



小学3年

家族とあまり話さないから・喋りたくないから・恥ずかしいから・しゃべるのがめんどくさいから

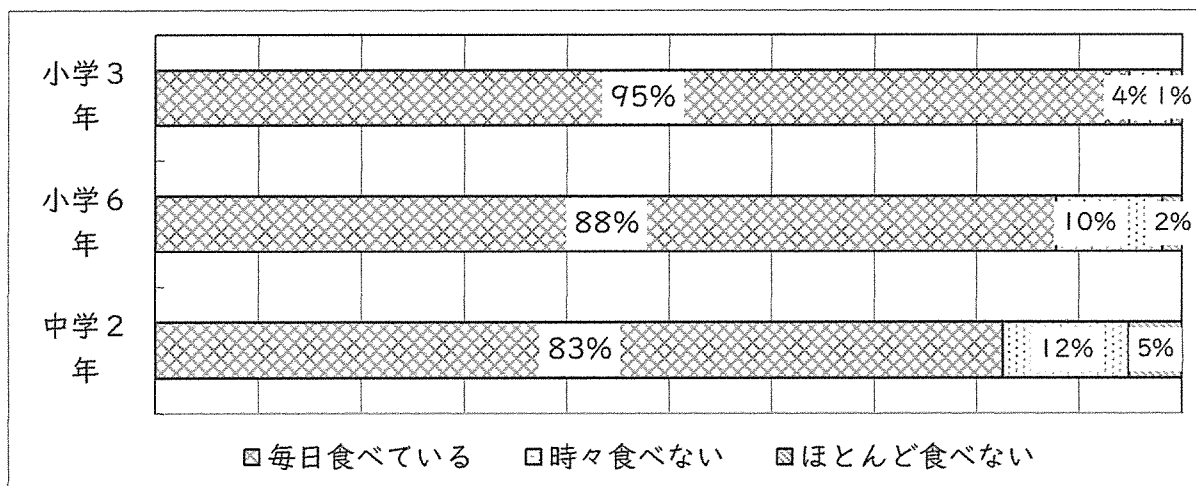
小学6年

話すほどのことではないから・別に困っていることがないから・家族が帰ってくるのが遅いから・お父さんやお母さんが忙しいから・習い事とかで話すときがあまりない・あまり、家のことを言うと、親などが嫌になるかもしれないから、あまり言わないようにしている

中学2年

一部しか話さない・なんとなく・大事な連絡以外は、別に意味のないことだと思うから・学校についてはあまり会話をしないから・話す必要がないから・そのような話題が出てくることがすくない・話すことがない・習い事で家族が揃う時間帯が少い・話すことがない

8 あなたは、ふだん朝食を食べますか。



小学3年

休みの日はお昼くらいに起きるときがあるから・起きるのが遅い日や食べたくない日・食欲がないから・食べる暇がないときがあるから

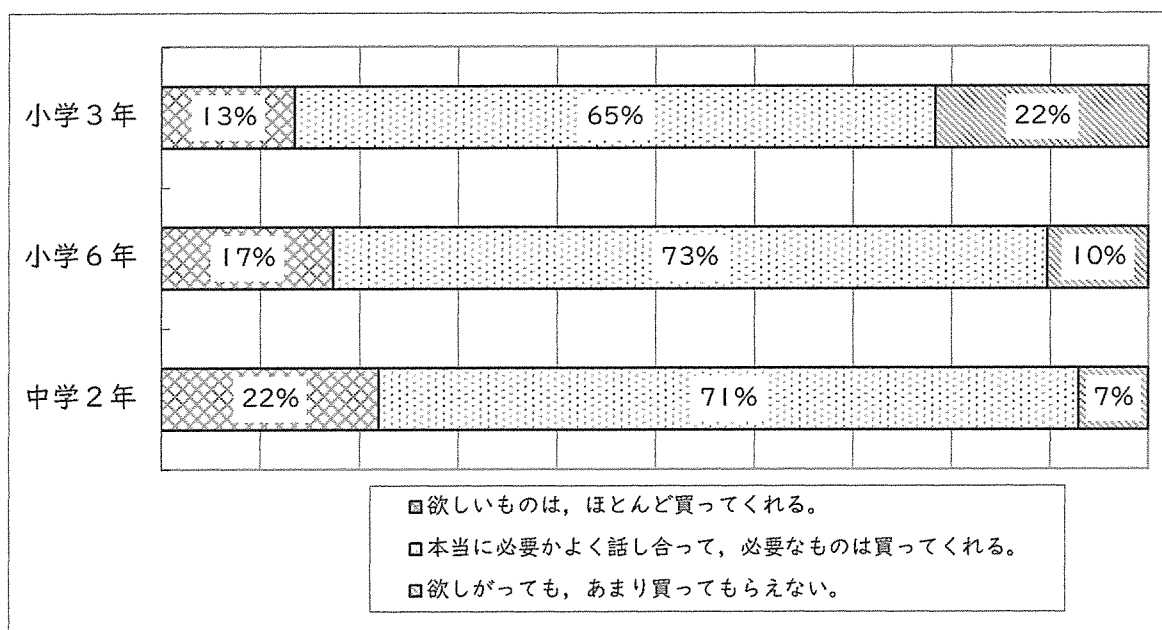
小学6年

寝坊してしまう・朝時間がない・めんどくさい・朝は食欲がないから・時間がない時があるから・登校班の集合時間が間に合わないときに食べない・お腹が空いていな時間がないから

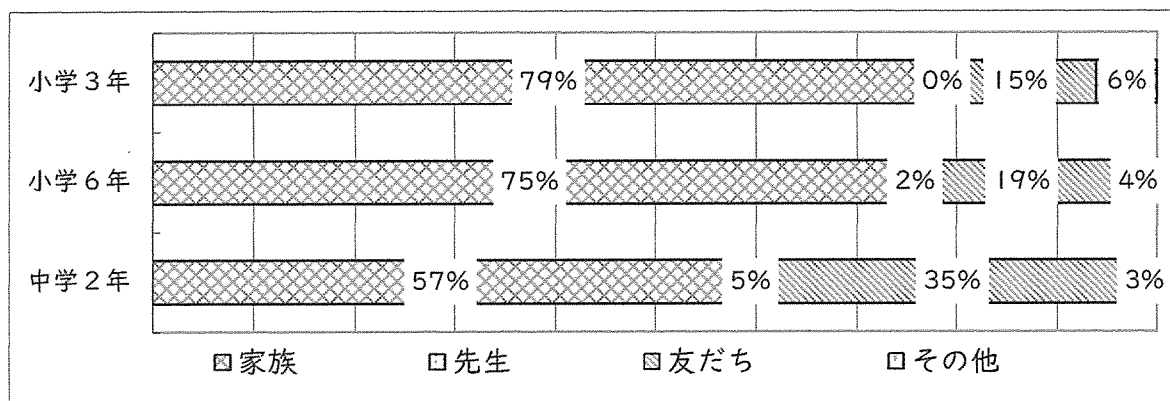
中学2年

忙しいから・朝ご飯はいつも車で食べているのですが、たまにお母さんが送りの時は弟もいるので食べている暇があまりないときがある・寝坊するから・朝は食欲がないから・時間がないし、お腹がすかない・土日は食べないから

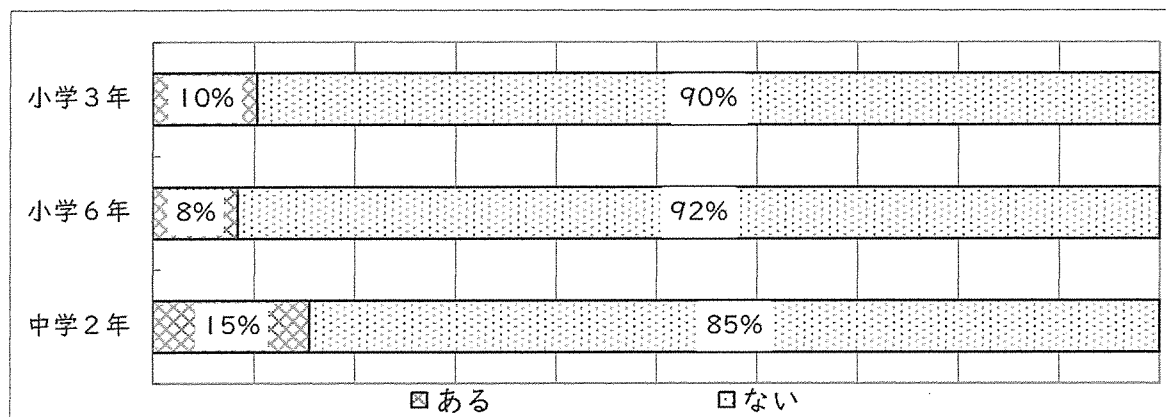
9 あなたは欲しいものがあるとき、家の人はどのようにしてくれますか。



10 あなたは、何かこまったことがあったとき、主にだれに相談しますか。



11 あなたは、今心配なことや悩みごとがありますか。



◎「ある」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

学校の友達との関係・クラスで悪い言葉を使う人がいる・自分の意見を言いたくても言えないのが悩み事

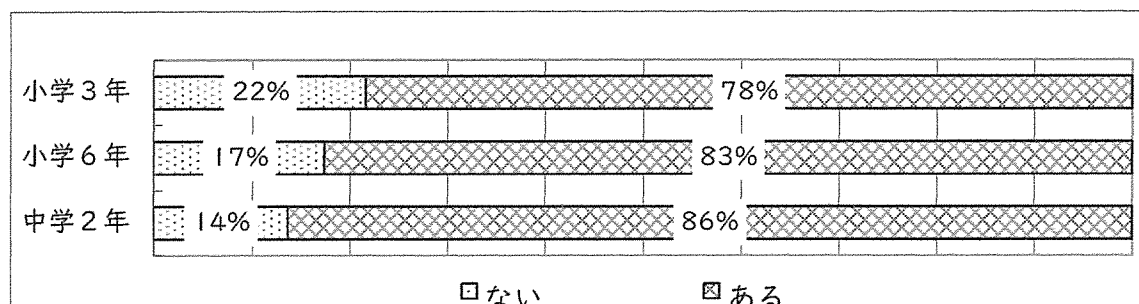
小学6年

調子が上がらない・悪口を言われる・怪我をいっぱいしてしまうこと・絵がうまくかけなくて悩んでいる・人間関係・塾のテストの偏差値・習い事の大会で演技が完ぺきにできるか・今の自分は、頭が悪いからゆめを叶えることができるのか・友達との接し方、中学で新しい友達ができるか不安・先生のこと・進路のこと

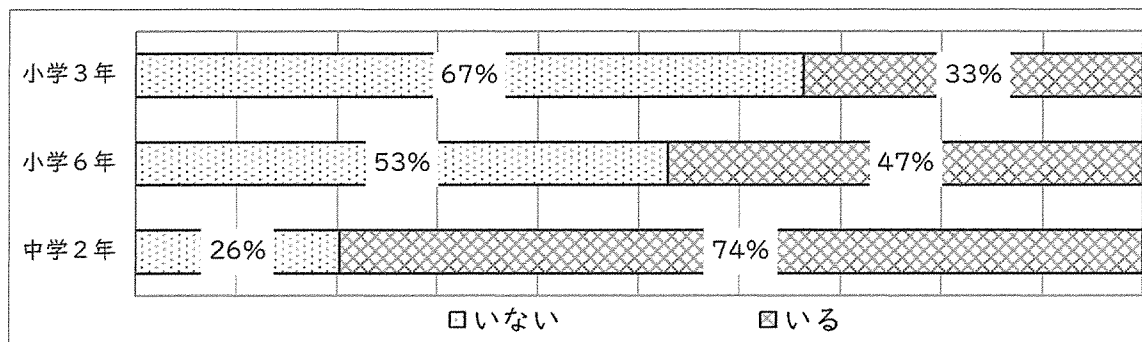
中学2年

進路・三年生になり学校を作っていくことへの不安、生徒会演説・健康面・勉強がついていけない・新生徒会としてしっかりとできるかどうか・自分以外の家族の仲が最近悪くなってきている・恋愛と勉強と部活の両立・三年生になった時のクラスのメンバー・受験・スマホを持っていないてみんなの話についていけない・勉強の仕方・部活・学校があまり楽しくない・両親の仲が悪い、精神的な不安が多い、友達に嫌われるのが怖い、体力がない、お母さんが心配

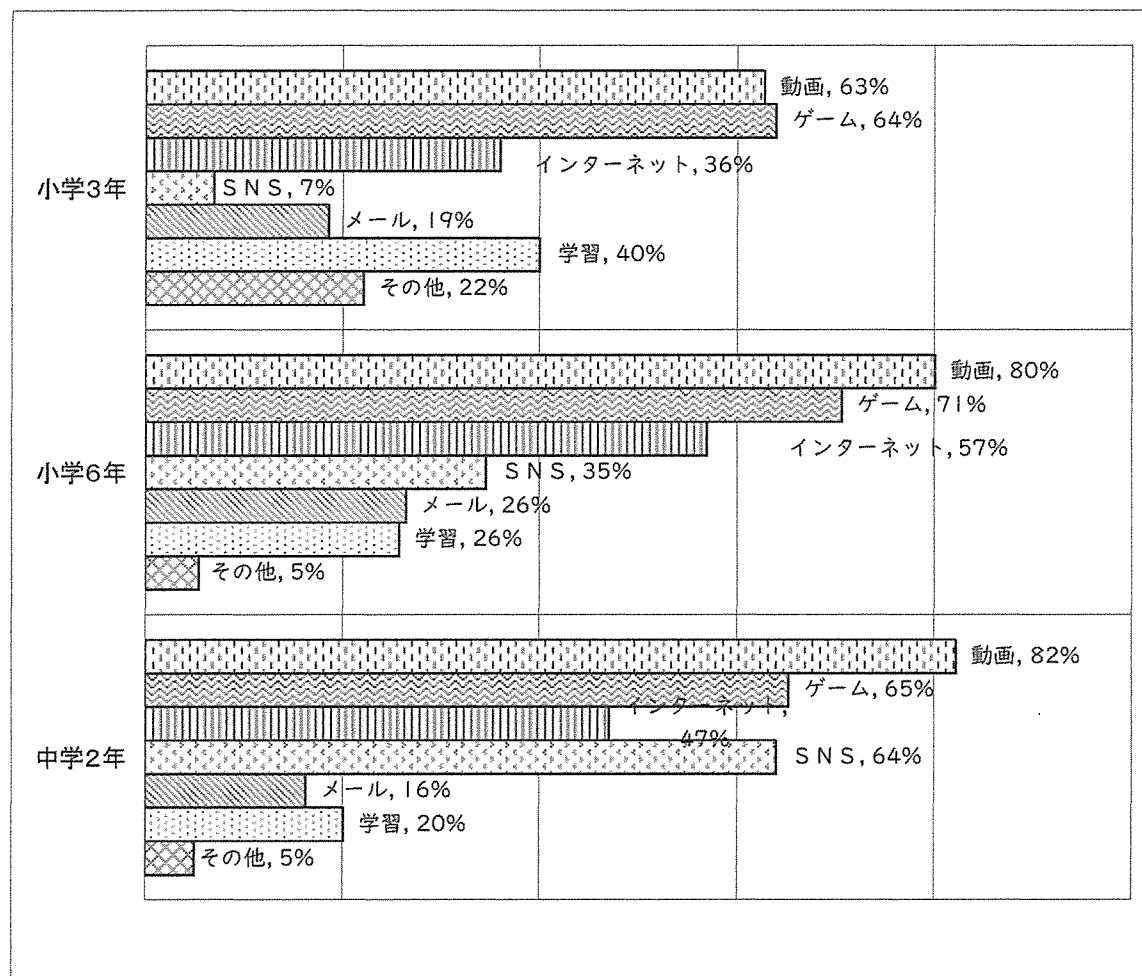
12 あなたの家には、パソコンやタブレットがありますか。



13 あなたは、自分の携帯電話またはスマートフォンを持っていますか。



14 あなたは、家のパソコン・タブレットやスマートフォン・携帯電話をどんなことに使っていますか。(3つまで)



◎「その他」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

絵をかく・タイピング・カメラ・動画で分からなかった問題を見て学ぶ・音楽を聞く・電話・スイッチ・調べ物

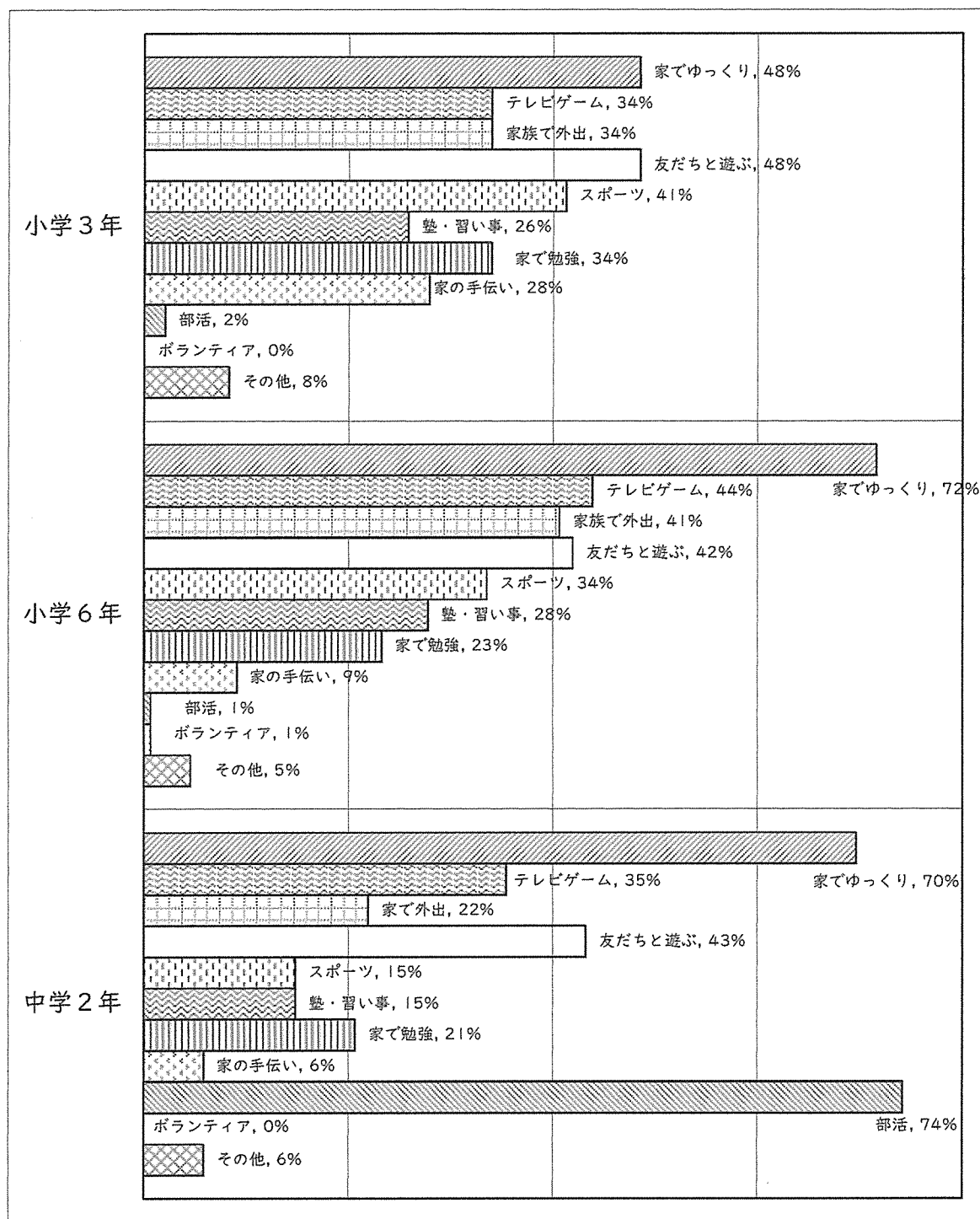
小学6年

絵を描くアプリ、音楽・オンラインショップで買い物・目覚まし・電話・写真とか編集アプリ・小説

中学2年

プログラミング・音楽を聞く・漫画・絵を描く、メモをする・仕事・予定管理・キッズケータイで電話のみ・インスタ

15 あなたは、土曜日・日曜日・祝日には、何をしていますか。



◎「その他」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

工作・電話・親戚のの家にいく・宿題をする・姉妹で遊ぶ・テレビ・オンラインゲーム・部屋とかの掃除

小学6年

タブレットで動画を見ている・絵を描く・テレビ・テレビなどを見てゆっくりする・イベントの手伝い・ペットの魚の水槽掃除・Youtuber

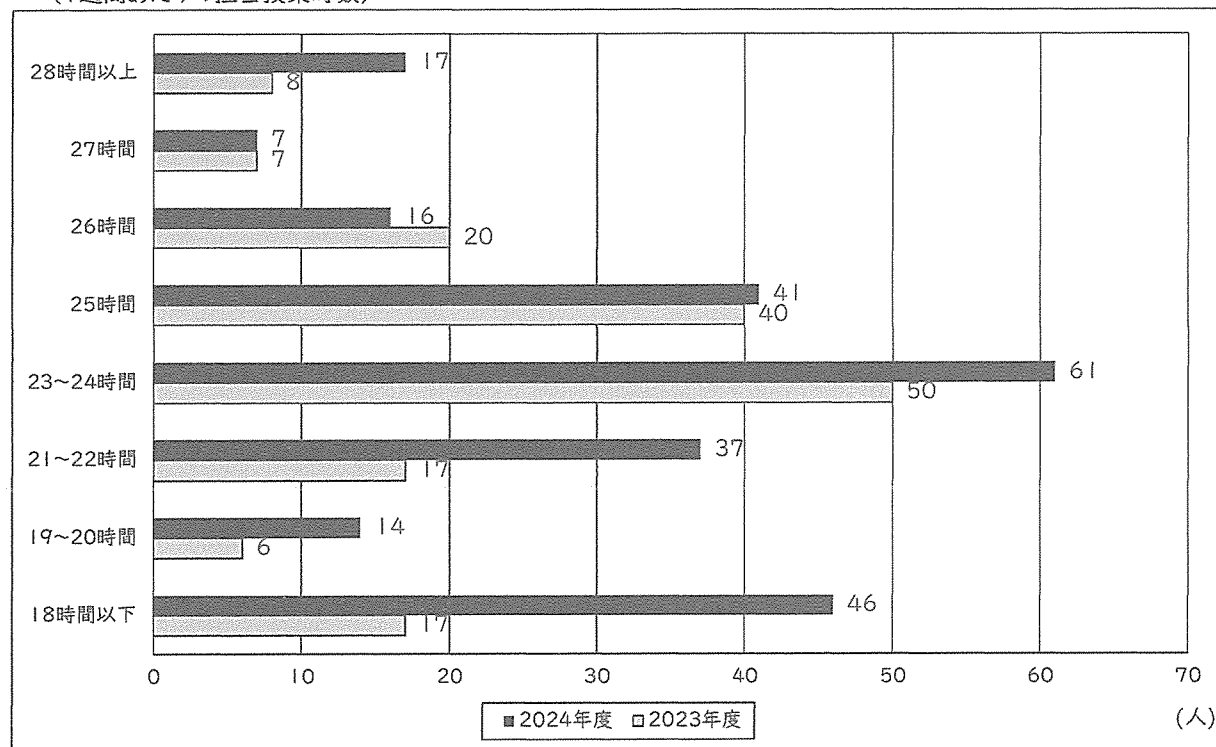
中学2年

プログラミング・スマホ・クラブチームの練習か、試合・睡眠・ゲーム・動画を見る

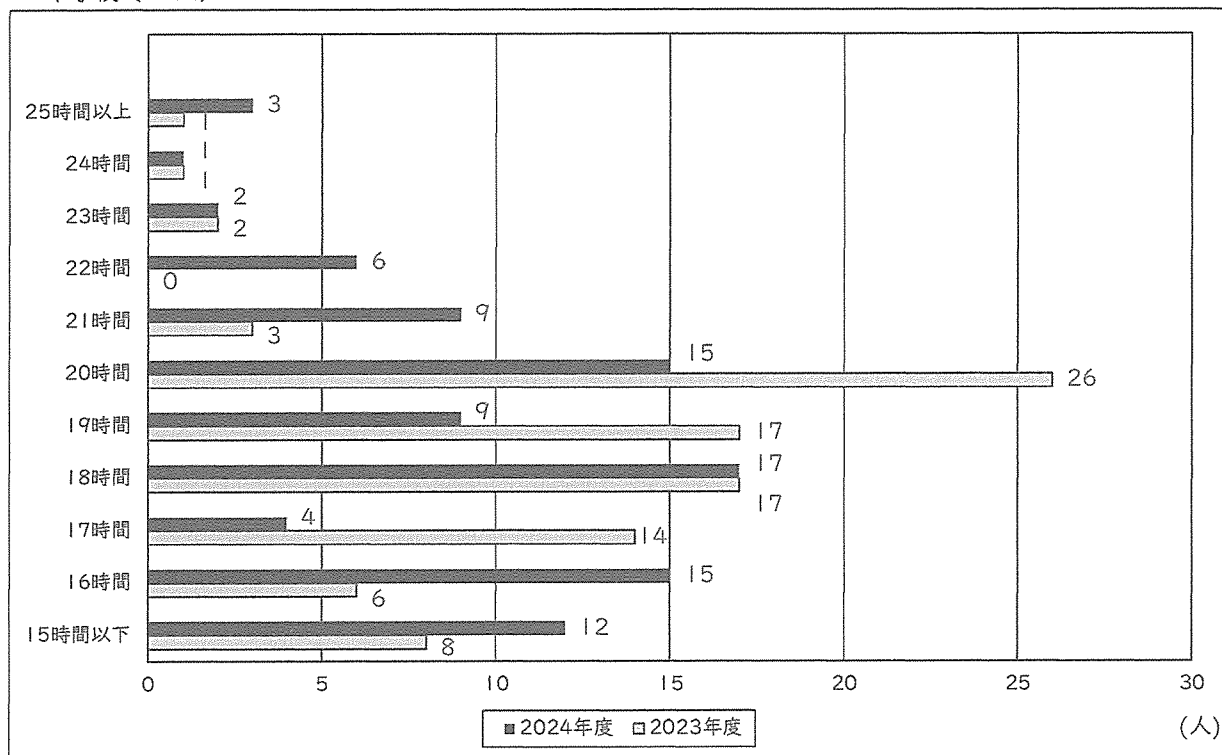
Ⅳ 教職員の健康と労働

調査年月 2024年12月
調査対象 東山梨全授業担当者
回答数 333人

Ⅰ 週担当授業時数 (1週間あたりの担当授業時数)



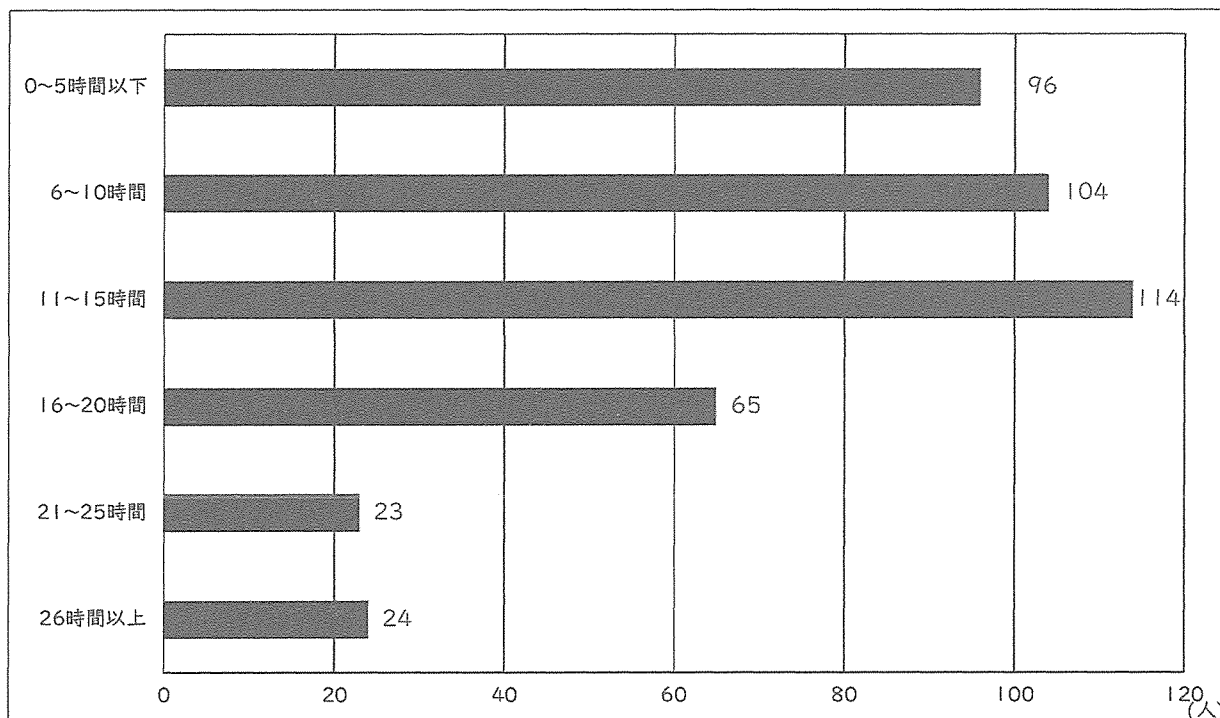
中学校 (94人)



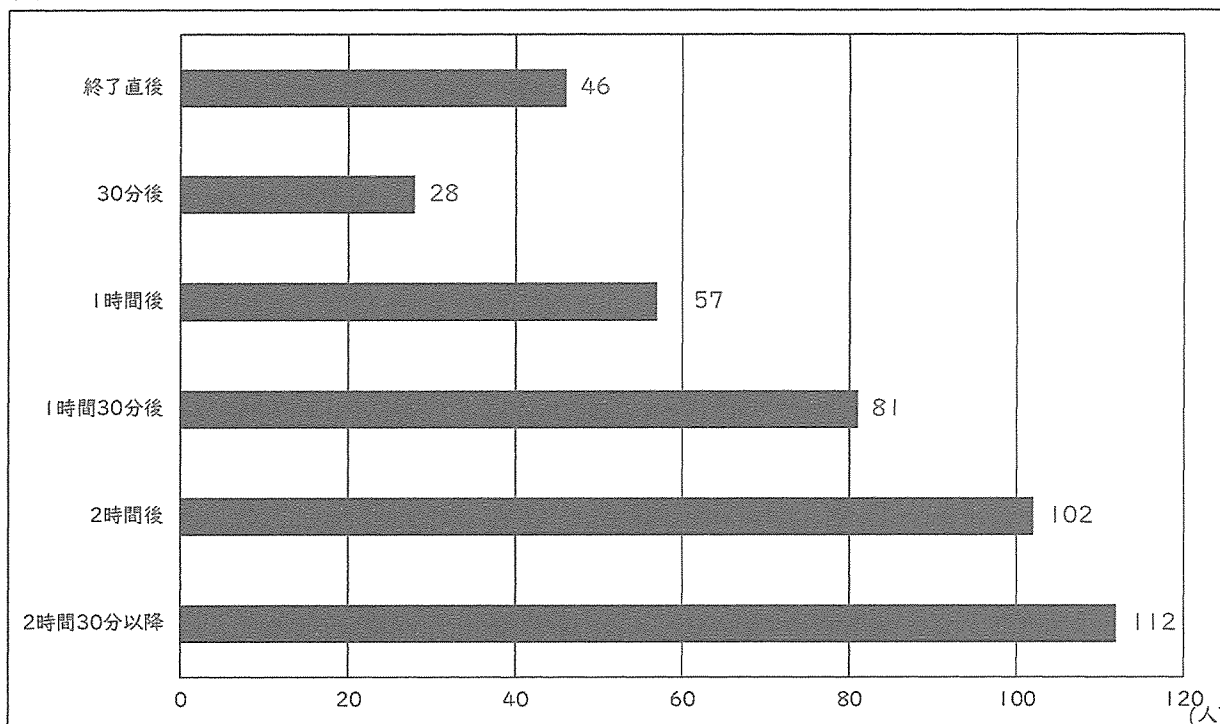
2 勤務時間外の仕事について

調査年月 2024年12月
調査対象 東山梨全教職員
回答数 426人

(1) 勤務時間外の仕事時間(1週間あたり)(1つのみで回答)

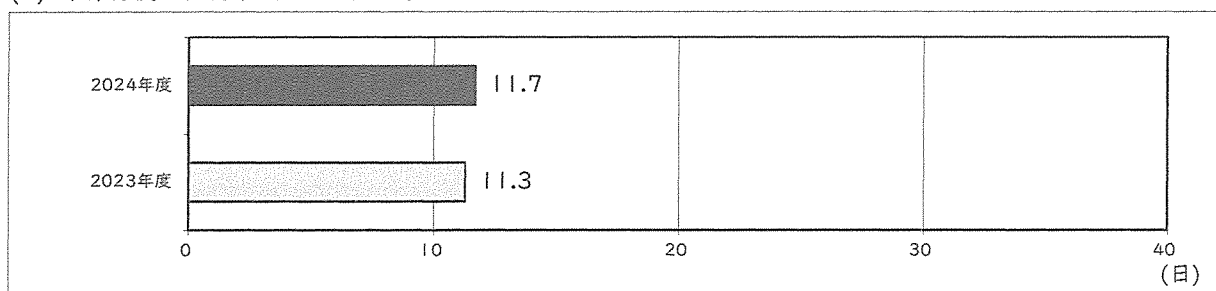


(2) 勤務時間終了後の退校時間(1つのみで回答)

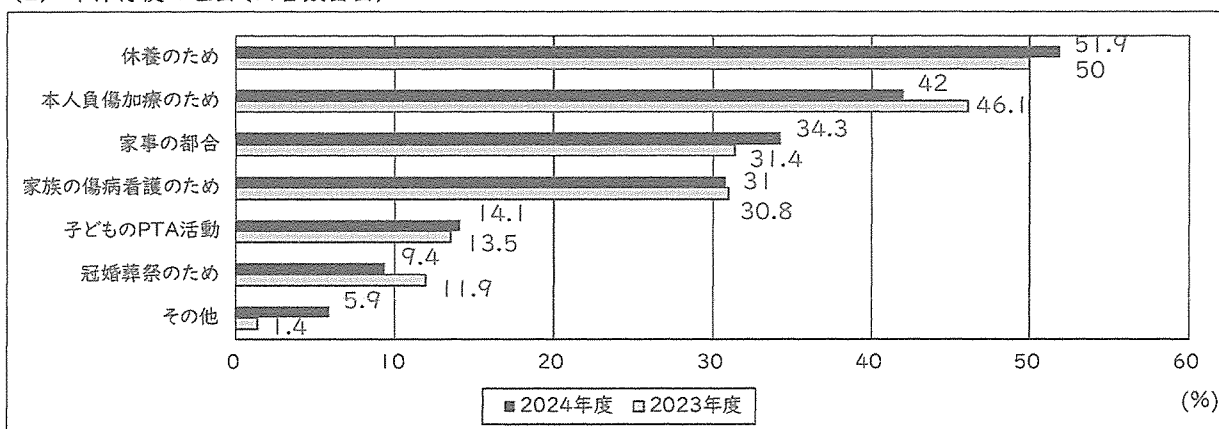


3 年休行使について

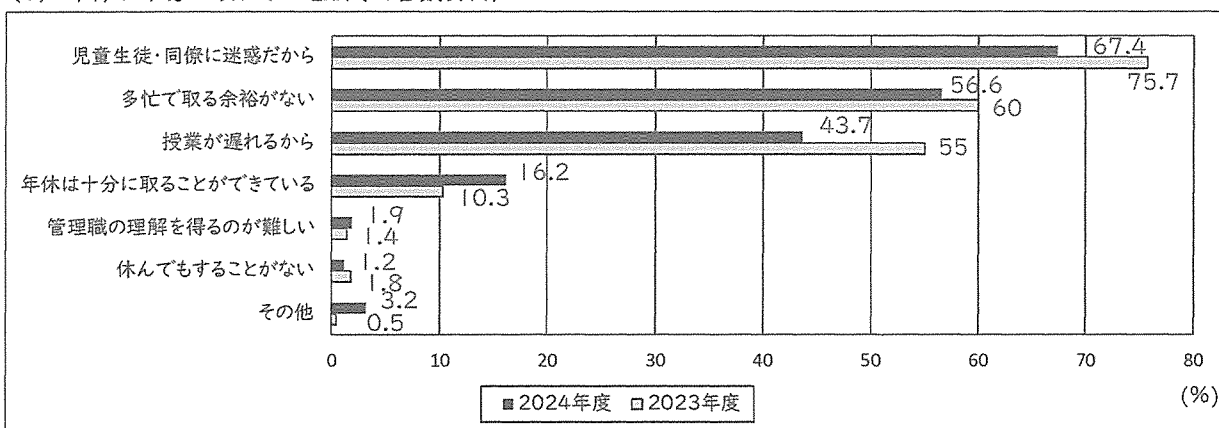
(1) 年休行使の状況(1月～12月まで)



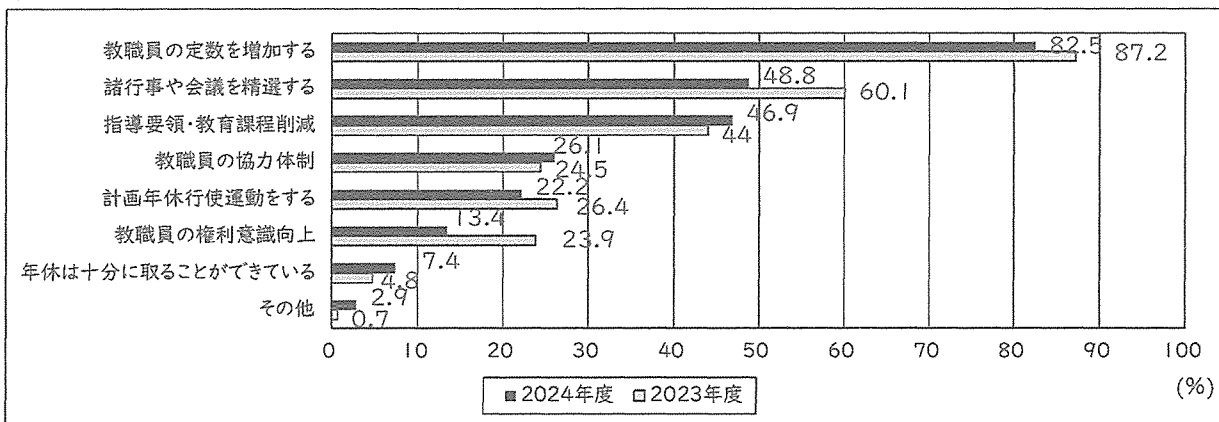
(2) 年休行使の理由(回答数自由)



(3) 年休が十分に取れない理由(回答数自由)

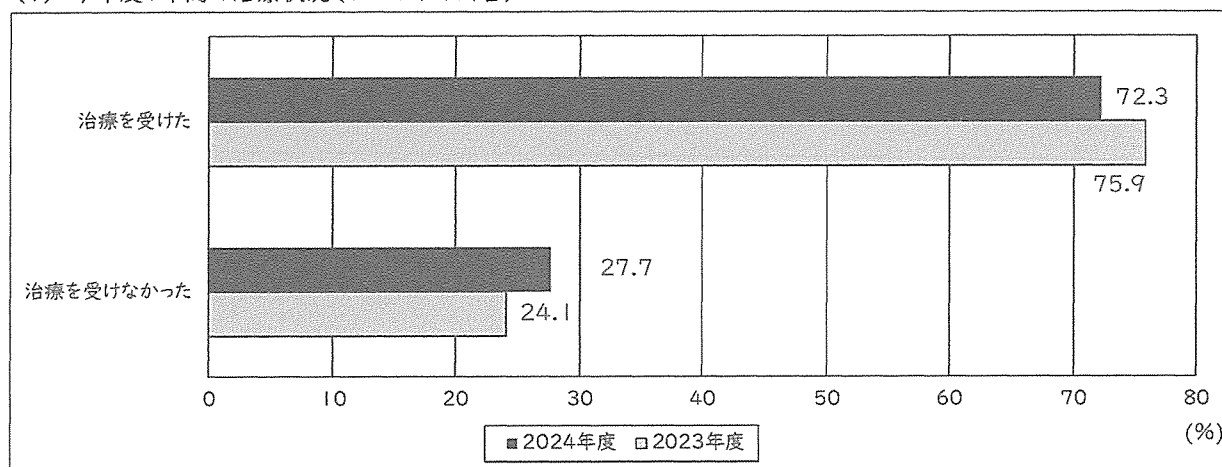


(4) 年休をもっと行使する方法(回答数自由)

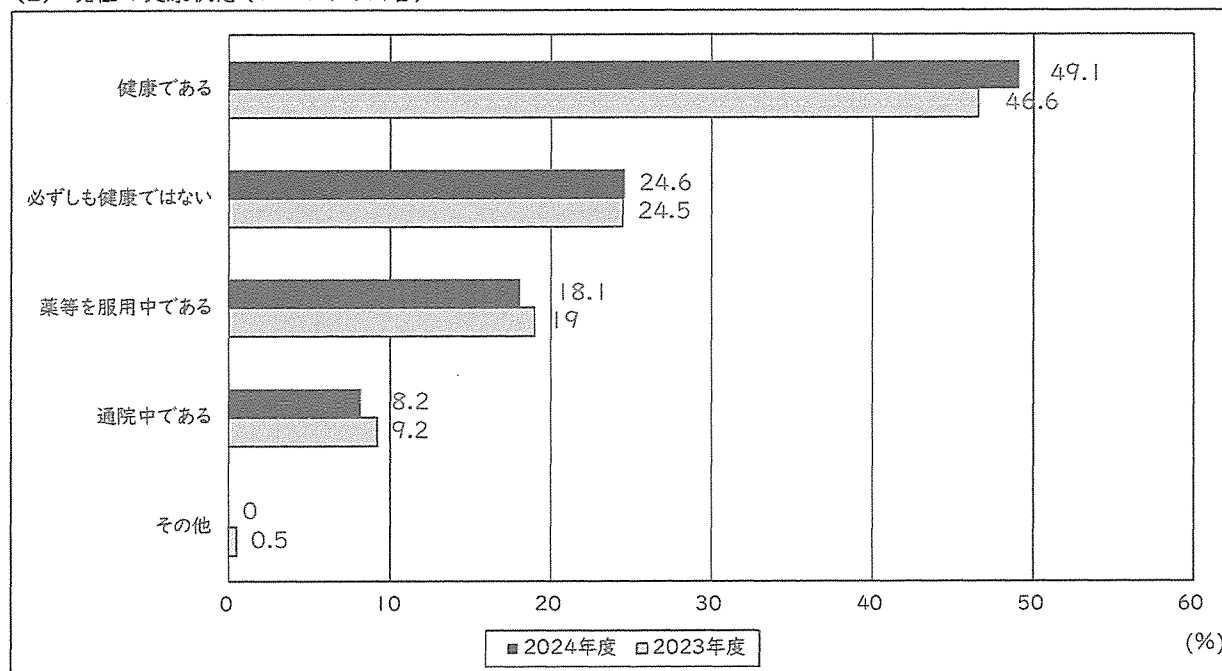


4 教職員の健康状態について

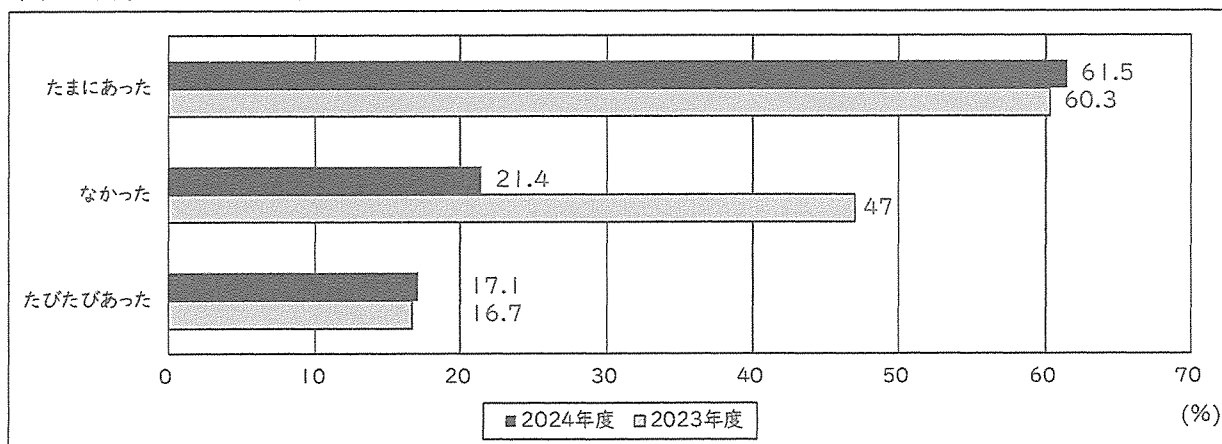
(1) 今年度1年間の治療状況(1つのみで回答)



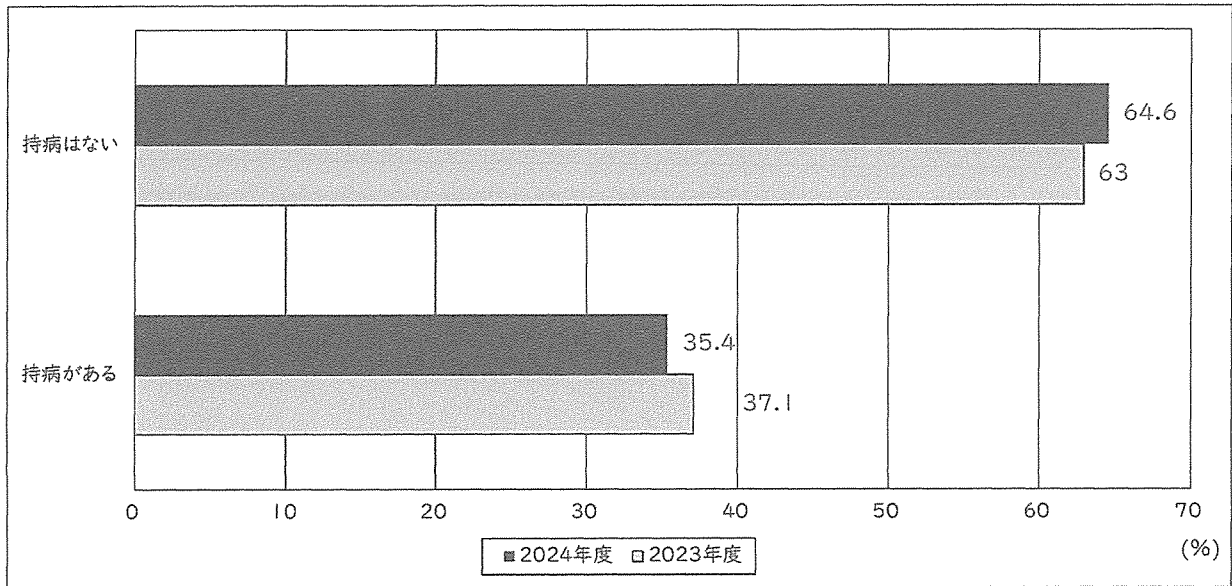
(2) 現在の健康状態(1つのみで回答)



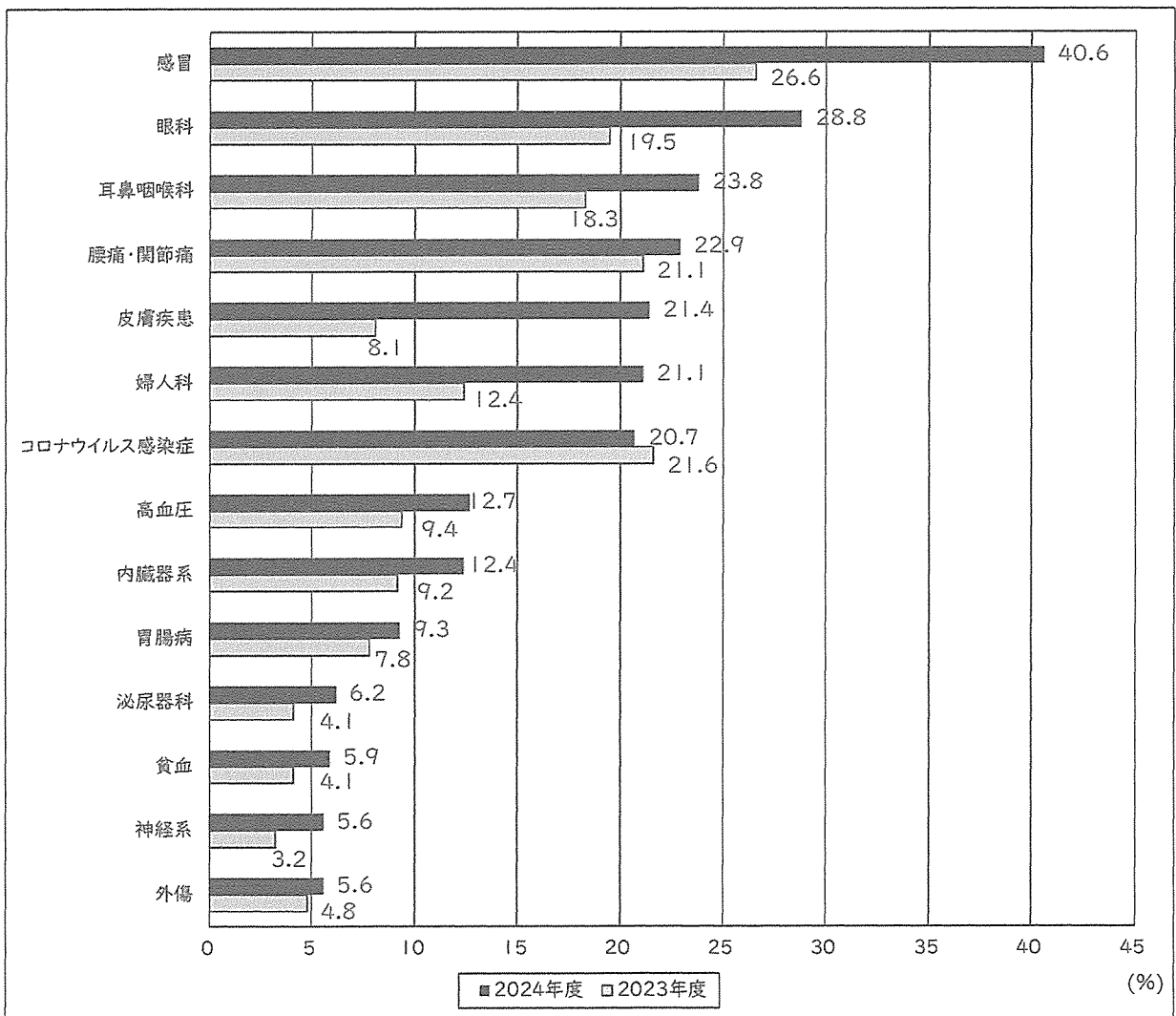
(3) 不健康での勤務状況(1つのみで回答)



(4) 現在持病の有無(1つのみで回答)



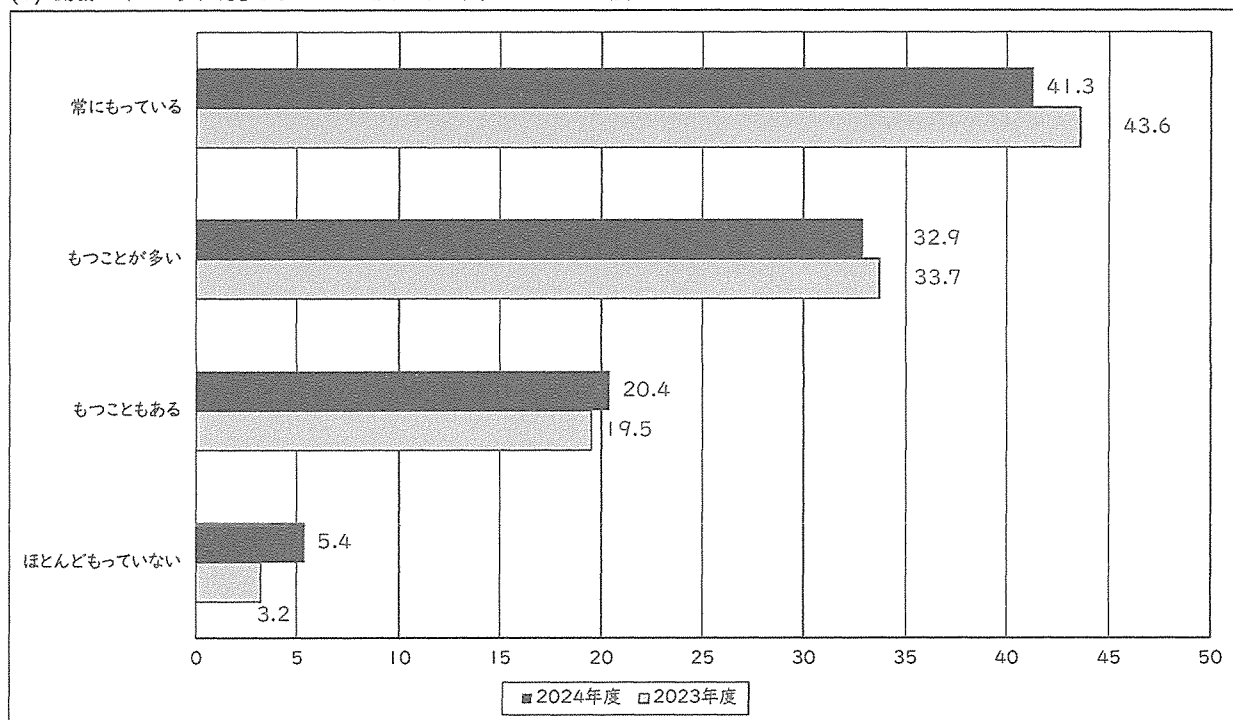
(5) 治療を受けた主な疾病(回答数自由)



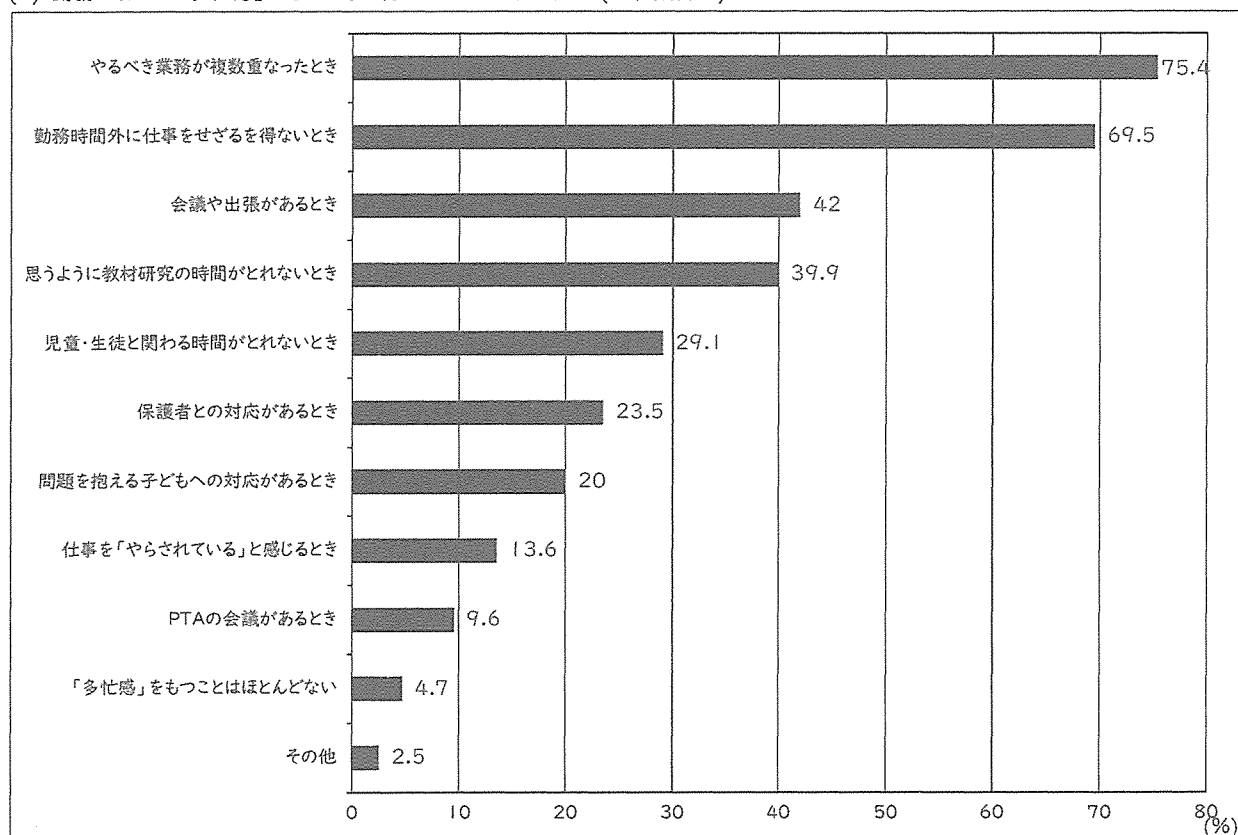
5 多忙感に関する調査結果

調査年月 2024年12月
調査対象 東山梨全教職員
回答数 426人

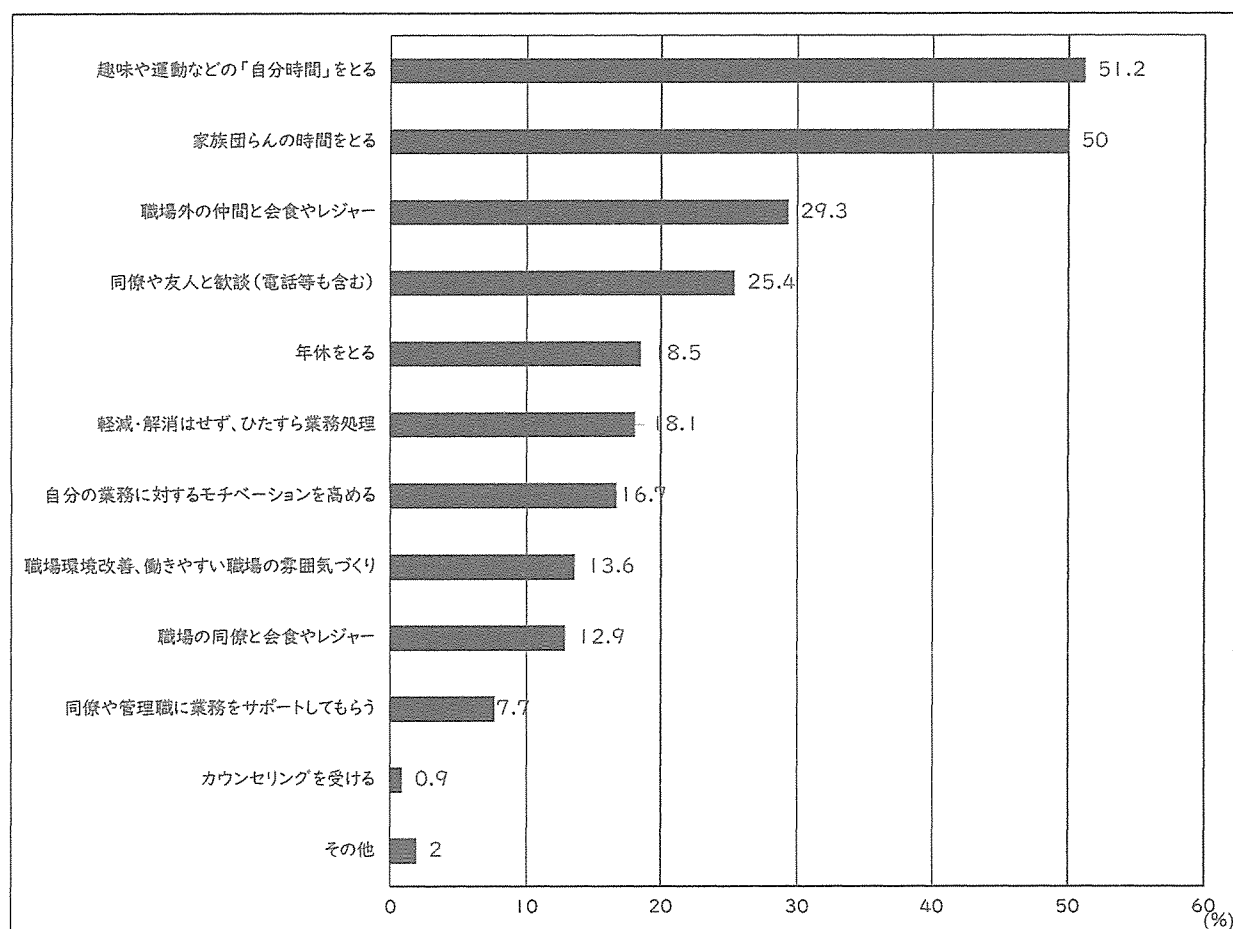
(1) 勤務の中に「多忙感」をもつことがありますか。(1つのみで回答)



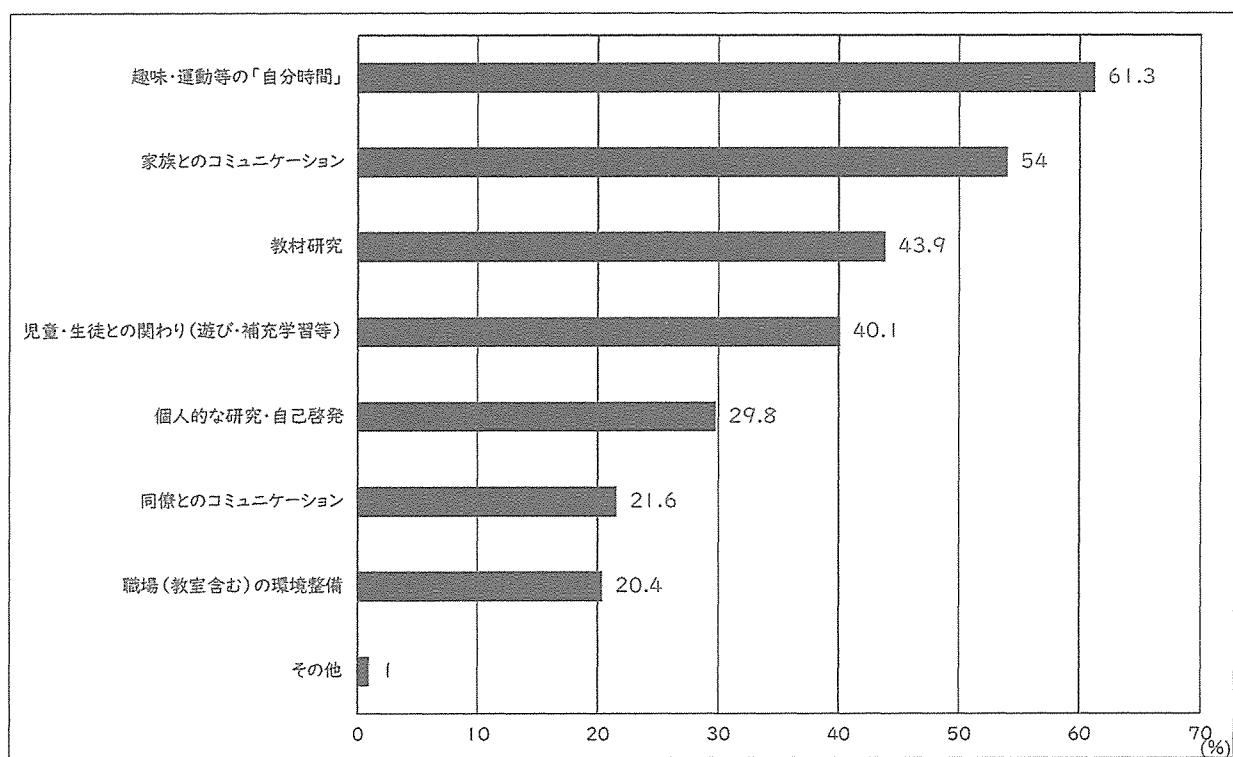
(2) 勤務において「多忙感」をもつときは、主にどんなときですか (回答数自由)



(3) どのようにして「多忙感」を軽減あるいは解消していますか（回答数自由）



(4) 「多忙感」が解消されたら、その分充実させたいことは何ですか（回答数自由）



※その他の項目

5-(2) 多忙感をもつときは主にどんなときですか (回答数自由)

- ・ 空き時間がなく、授業が入っているとき。
- ・ 校務分掌が多い。一部の教員に負担が偏っている。
- ・ 授業の準備ができるのは16:30以降。パソコンは得意な方だが、ICTの活用で負担は増えている。
- ・ 1～3学年の専門外の教科を通級で教えるとき。
- ・ 特支で1人に付きっ切りとなりトイレにもなかなか行けないが、多忙過ぎて崩壊しているというわけではない。他の一般クラスの教師たちと比較すべきではないと考える。
- ・ 行事が続いて行事以外の業務が滞るとき。
- ・ 本校の養護教諭は一人職のため、校外学習の引率に行くとき代替を頼むが、その前後で引き継ぎや申し送り、代替の方ができなかった仕事の処理。また、学校行事における事前指導や事前準備がとても大変だと感じる。
- ・ 内容が重複する調査回答。
- ・ 仕事を決定するのに、時間がかかりなかなか決まらないとき。

5-(3) あなたの多忙感を軽減・解消する方法は何ですか (回答数自由)

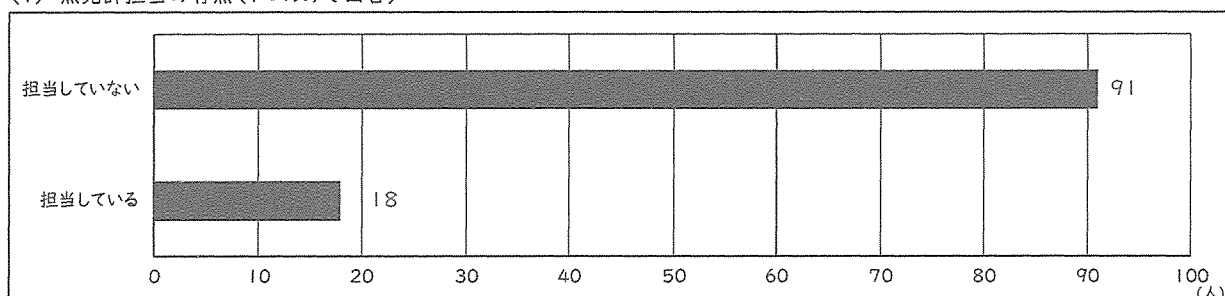
- ・ 学校から離れて、ものづくりやゲーム、歓談をする。
- ・ 軽減していない。
- ・ DX化を考える。
- ・ 睡眠時間を増やして体力の回復に努める。
- ・ 優先順位を決めて全て頑張ろうとしない。

5-(4) 多忙感が解消されたら、その充実させたいことは何ですか (回答数自由)

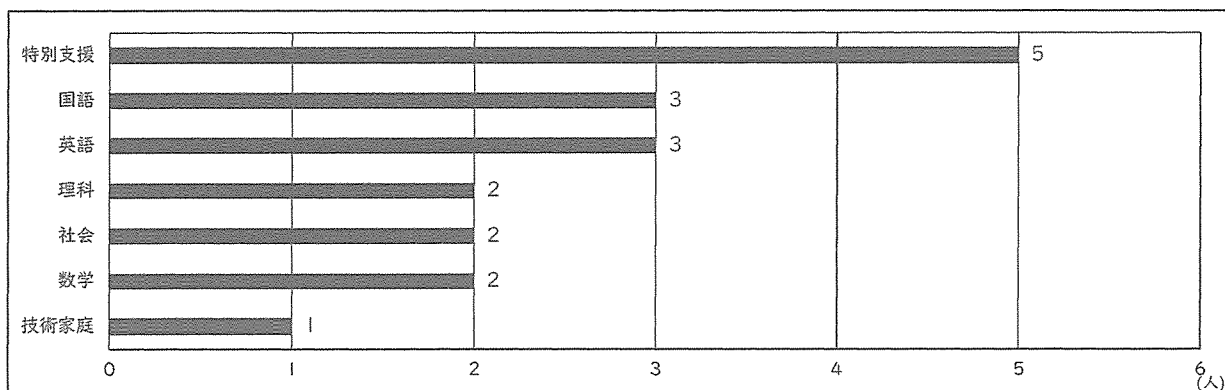
- ・ 家事をする。
- ・ ゆっくりと身体と心を休ませたい。
- ・ 多忙感を感じない。

6 中学校の無免許担当について

(1) 無免許担当の有無(1つのみで回答)



(2) 無免許担当教科の状況(1つのみで回答)



教育環境研究特別委員会

研 究 を 終 え て

地球温暖化による猛暑日の増加や、各所で甚大な被害をもたらしている数々の災害は、人間の些細な力では、抗うことのできない自然の脅威を改めて感じさせます。

このような中、東山梨の各小中学校では、従前のものに様々な工夫をしながら児童生徒の教育活動の充実を図ってまいりました。今年度も東山梨の小中学校における教育環境の研究にあたり、各市教育委員会事務局の皆様をはじめ、多くの教職員の皆様にご協力をいただき、資料収集のための調査を実施することができました。

調査内容につきましては、これまでの調査研究を継続するとともに、今日の教育活動の状況をより明確に読み取ることができるよう、配慮しました。

本調査の結果からは、児童生徒を取り巻く教育環境や生活環境、教職員の勤務の状況等を読み取ることができます。また、長年に渡り教育環境の改善や課題解決に取り組まれてきた成果や教育に携わる方々の努力と工夫も感じることができます。

しかしながら、児童生徒及び教職員をとりまく教育環境には、まだまだ取り組まなければならない課題が残されていることから、本調査研究が今後の東山梨教育充実のための一助となることを期待しております。

結びに、この調査研究をまとめるにあたり、ご協力をいただきました多くの関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

2024 年度 教育環境研究特別委員会 委員長 清水誠治

2024 年度 教育環境研究特別委員会 委員名簿

○ 校 長 会	清 水 誠 治	(後屋敷小)
	古 屋 雅 章	(加納岩小)
	山 田 浩	(東雲小)
	平 山 剛	(祝小)
○ 教 頭 会	藤 原 祐 喜	(笛川中)
	萩 原 修	(神金小)
	田 邊 珠 紀	(塩山南小)
○ 事 務 職 員	雨 宮 美 沙	(八幡小)
	坪 竜 太 朗	(山梨南中)
	七 海 めぐみ	(塩山北小)
	池 田 はるな	(大和小)
○ 職場の民主化	三 澤 瞬	(日下部小)
	岡 村 澄 人	(東雲小)
○ 事 務 局	広 瀬 竜 太	(笛川中)
	保 坂 洋 仁	(勝沼小)